



9784309017945



1920095016009

ISBN4-309-01794-0

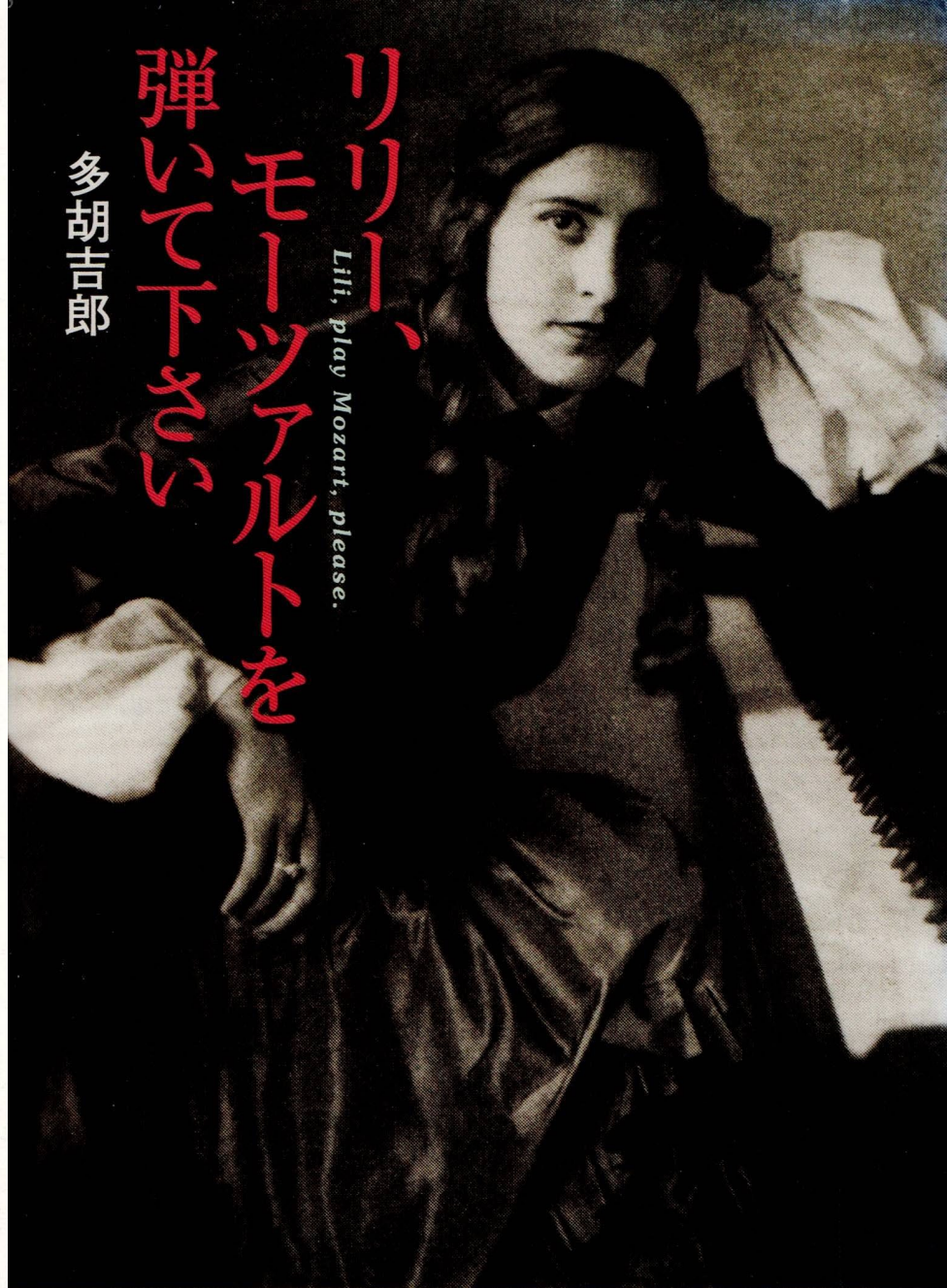
C0095 ¥1600E

定価 本体1600円(税別)

*Lili,
play Mozart,
please.*

リリィ、
モーツァルトを
弾いて下さい
多胡吉郎

Lili, play Mozart, please.



河出書房新社



リリー、
Lili, play Mozart, please.

モーツァルトを
弾いて下さい

多胡吉郎

第一章 地下室の尋問 7

第二章 ハンガリーの奔馬 26

第三章 桜の国 48

第四章 最後の楽園 66

第五章 治部隊 おさむ 82

第六章 ニロム放送局 100

第七章 ハ短調協奏曲 120

第八章 慈善演奏会 137

第九章 生き地獄 170

第十章 ピアノ 190

第十一章 抑留所長 211

第十二章 鳩の家 244

第十三章 モーツァルトふたたび 268

エピローグ 285

あとがき 291

主要参考文献 302

リリー、モーツァルトを弾いて下さい

Lili, play Mozart, please.

第一章 地下室の尋問

抑揚のない低い男の声が、コンクリート壁に仕切られた狭い部屋に響いた。石造りの洋館の地下にある取調室は、街中にあることを忘れさせるくらい、外界からは遮断された世界だった。

ベチャと呼ばれる独特の人力車の往来や、果物や魚を商う物売りの声など、溢れる光の下にジャカルタの街を賑わす生活の音は、薄暗いこの地下室には届いてこない。

粗い壁が四囲を塞ぎ、中央に机と椅子が置かれた以外、花や植物はおろか、飾りや置物などは何もない。人を問い詰め、力ずくでも口を割らせる非情の場に徹して、いつさいの和みは排除されていた。

高い天井の端の小さな明かり窓を除けば、通気のための窓さえもない。部屋には噓せ返るような熱帯の暑気が澱んでいたが、男の声は氷のように冷たく、死そのもののように無表情だった。

背筋に貼りつく恐怖を感じながら、どのような心の持ち主ならこうした声が出せるのか、リリーは訝しく思った。

歌曲にしてもオペラにしても、彼女の知る「声」とは、あまりにもかけ離れている。人間の声を持つぬくもり、表情や色合いというものが全く感じられない。

憲兵と男は名乗ったが、情け容赦もなく、追及と締め上げのみに徹していると、人の声もこのように潤いを失い、石のように固まってしまふのだろうか。

もちろん、日本語で尋問する男が何を尋ねているのか、通訳が英語に訳すまで、リリーには具体的な意味は分かるはずもなかった。だが、どす黒い、冷酷な意志に貫かれた男の言葉は、具体的な意味を知る前から、刀で切りつけたようにリリーを怖気づかせた。

「名前は？」

声の調子が機械的であると同様、尋ねる内容も、判で押したものが繰り返される。昨日も、一昨日も、同じように尋問は始まり、執拗に同じ質問が続くのだった。

机を挟んでリリーと向き合うカーキ色の軍服に身を包んだ男が、上半身を真っ直ぐに伸ばし、自身の前立てた刀の柄の先に両手を当てたポーズも昨日までと同じなら、背後に控える通訳と書記の恰好や位置も、芝居のように変わらない。

男は赤字を染め抜いた腕章を腕に巻いていた。その赤い文字が、「憲兵」であることは、リリーにも予想がつく。「Kempetai」の名は、現地の西洋人社会でも、恐怖とともに浸透しつつあった。

だが、自分が何故、このようなところに連行され、執拗な尋問を受けなければいけないのか、リリーには見当がつかなかった。

「名前は何かという？」

分かりきったことでも、こちらの口を割らせることが必要らしい。その妙に儀式めいた段取りを、リ

リーは馬鹿らしく思う。ふと、おかしくさえ感じる。

リリーの口元が皮肉に緩む。憲兵は、尋問相手の顔に浮かんたわずかな感情の発露が気に食わぬと見え、声を強めて再度質問に及ぶ。

「名前は何かと、訊いている」

リリーは、ようやく重い口を開く。

「リリー・クラウス」

「仕事は？」

「ピアニスト」

詰問が、一瞬止まった。リリーとしては真実を答えているだけなのだが、憲兵は明らかに納得していない。

「もう一度訊く。何の仕事をしている？」

「私はピアニストです。生まれてこの方、ピアノを弾くことだけを生き甲斐としてきました。ピアニストという以外、答えようがありません……」

そう、私はリリー・クラウス。世界に知られた女流ピアニスト。故郷のブダペストに学んだ時から神童と言われ、二十二歳でウィーン音楽院の教授となった。コンサート・ピアニストとしても、世界のステージで演奏する。一九三六年には、初めて日本も訪ねた。東京を始め、各地での熱狂的な歓迎は、今も忘れられない。

ここジャワに来たのも、もちろん、ピアノを弾くためだ。バタヴィアと呼ばれた首都ジャカルタでも、高原の町バンドンでも、演奏会を開いた。

この先、オーストラリア、ニュージーランドを周って演奏旅行を続け、アメリカでコンサートをするはずだった。ところが、日本と米英の間に戦争が始まり、オランダ領だったジャワにも日本軍が押し寄せ、そのまま留め置かれることになってしまった……。

「ピアノはお前の隠れ蓑だろう。ピアニストの仮面の下で、何をしていた？」

憲兵は、語気を荒げた。

だが、リリーにはその意味が解しかねた。ピアノを弾く以外、自分が他の活動に足を突っ込むなど、あり得ないことだ。そのような誤解を与えるようなことなど、あるはずもなかった。

「質問の意味が、理解できません。私はピアニストです。ピアノを弾くことが、私の生きる道なのです。それ以外のことなど、身に覚えもありません」

「しらばっくれて、それで通ると思うのか！」

憲兵は、荒々しくこぶしで机を叩いた。脅しだと分かっている、目の前で暴力的な行為に出られると、リリーは理屈抜きに身がすくんだ。

「そう、確にお前はピアニストだ。だが、それは人前で見せる表の顔にすぎない。もうひとつの、隠れた顔があるはずだ。我々は、そちらの顔の方を見極める必要がある。誰の指示を受けて、ジャワで活動が続いている？ どのような機関や組織の命を受けて、隠密の行動をしている？」

昨日も一昨日も、ここで尋問は膠着してしまった。憲兵は、リリーの与り^{あきか}知らないことで、自分を疑っている。何が問題とされているのか、彼女には想像もつかない。

戦時下という、自由が制限された異常事態のなかでも、リリーは日本人たちと協力してやってきたつもりだった。少なくとも、自分を信頼する日本人を裏切るような行為をした覚えなどない。

彼らもまた、自分がピアノを弾くことを望んだではないか。聴く人が誰であれ、自分のピアノ演奏を望む人がいる限り、リリーは懸命に音楽を送り届けてきたのだ。

「私はピアニストです。表も裏もありません。そのことは、日本の当局もご存知のではありませんか。ジャワ統治の最高責任者である軍司令官にお会いしたこともあります。日本統治下であってもピアニストとして活動することを、認めて下さいました」

一年ほど前、今村均軍司令官と面談した時の模様を、リリーは思い出した。軍司令部への出頭を言い渡されて、緊張と不安に胸を塞ぎながら出かけたのだった。

破竹の勢いでオランダ軍を駆逐し、ジャワを占領して統治する日本軍の最高責任者との会見である。

どれほど強面の武人かと思いきや、現われた人物は、軍服こそ着ているものの、小柄で、温和な表情を崩さず、僧侶^{こいもて}のような雰囲気^{こいもて}を湛えていた。

今村軍司令官は、穏やかな、しかし確固たる口調で語った。

戦争が終わらぬ限りジャワからの出国はかなわないが、音楽活動には制限を設けない。ただ、演奏活動を保証する代わりに、条件をひとつ呑んでほしい。時には、オランダ旧政府の関係者やその家族が収容された抑留所で、慈善公演をしてもらいたい。抑留者にも慰問は必要だ……。

懐の広い発言は、予想もしないものだった。自分の身がどうなることか、極度に緊張を募らせていたこともあって、リリーには天の恵みのようにすら感じられた。

「今村閣下は、昨年十一月にはすでにラバウルに転進されている。閣下のもとでの占領当初の政策には、軍内部にも甘すぎるとの声があった。もはや時代が違うのだ。大東亜共栄圏建設のため、日本軍は断固とした方針で占領を遂行する。我々を甘く見てはいけない」

憲兵が、軍政の最高責任者だった人への批判を口にしたので、リリーは驚いた。

時代は、自分の予想もしなかった深刻な方向へ急転回しているのかもしれない。憲兵の言葉は、暴言や脅し以上に、底知れぬ恐ろしさを秘めていた。

一九四二年三月に、日本軍によるジャワの占領が始まって、すでに一年三カ月あまりが過ぎていた。確かにこの半年ほどで、ジャワの雰囲気はいぶんと変わった。

占領と同時に捕虜として収監された旧オランダ政庁関係者や軍人を除けば、初めは一般西洋人の暮らしは比較的自由が許されていた。街中の往来に支障もなく、教会に行ったり、買い物をしたり、外出は自由だった。

厳しい占領政策が敷かれたシンガポールと違って、ジャワの軍政が緩やかであるのは、西洋人には胸を撫で下ろすような気持ちで甘受されていたし、当の日本人も、穏やかさのなかの融和を謳歌しているようにも見受けられた。

それが、一九四二年も残り少なくなった頃から、西洋人のなかでもオランダ人や英米人など敵性外国人に対する風当たりが、日に日に厳しくなっていた。居住区域が指定、制限されるようになり、民間人も順次、抑留されていた。抑留所は男女別で、家族であっても、別々の暮らしを余儀なくされた。

身の回りのオランダ人やイギリス人の友人や知り合いが、櫛の歯が欠けるように姿を消していくのは、リリーにしても身を切られるほどに辛かった。だが、自分自身と家族の身の安全については、つゆほども疑ったことがなかった。

今村軍司令官のお墨付きだけではない。軍当局の管理下にある放送局で、日本人の依頼を受けて、定期的にラジオの演奏を続けているのだ。指揮者の飯田を始め、関係する日本人のなかには、今では個人

としても友人のように思う人たちもいる。

そのような開かれた態度が、一部のオランダ人の間で白眼視されていることを、リリーは知らないではなかった。しかし、自分はピアニストだ。演奏を聴く聴衆がいれば、時と所を選ばず鍵盤に向かうだろう。音楽は、国や民族など、狭い枠に囚われるべきものではないのだ。

モーツァルトを思うがよい。その音楽は、全ての命あるものへの恩寵だ。モーツァルトがドイツ語を話す人間だけに与えられた宝であるなど言えば、当のモーツァルト自身がたちどころに反論するだろう。

——僕の音楽は、人を愛する心と同じだ。ドイツ人だろうがイギリス人だろうが、フランス人にオランダ人、トルコ人、日本人、ジャワ人だって、愛する気持ちに変わりはない。僕の音楽も、あらゆる人種、全ての人間に等しく愛されるべきものさ。音楽にはね、国境なんてないんだよ——。

対立と憎しみに満ちたこんな時代だからこそ、私はいつも以上に気持ちを強く持って、ピアノを弾かなければならない。美しい音楽を聴けば、人の心にもハーモニーが広がっていくはずだ。そのためならば、どこで、誰を前にしてもピアノを弾く……。

それが、リリー・クラウスだ。モーツァルト弾きとして、世界中のファンから愛されるピアニストの信念なのだ……。

「甘くすれば、お前らは必ずつけあがる。日本の統治に反抗し、外部勢力に呼応して謀略に加担する不屈き者も出てくる。その蛆虫どもを、憲兵隊がいち早く殲滅する。すでに何件かの逆行行為が、我々の手で摘発された。お前の場合にも、尻尾をつかむまで、追及の手を緩めることはない。女だからといって、容赦はしない。ピアニストであることなど、我々には何の価値もない。日本人は、生きるか死ぬか

の戦争をしているのだ」

憲兵は恫喝^{どうかく}を交えつつ、相変わらず、ありもしない罪の追及に蛇蝎^{だかつ}のような言葉を投げつけてくる。だが、音楽について、モーツァルトについてリリーが思いをめぐらせていると、敵意を剥き出しにした男の言葉が虚ろに遠のいていく気がする。暗黒の恐怖が薄らぎ、胸にかすかに明かりが灯るように感じる。

その小さな明かりの穂を大切に両手で囲い、護っていくならば、この煉獄の試練を耐え抜く勇気が湧き起こってくるかもしれない……。リリーは憲兵隊の獄舎に入れられて以来、初めて、ほのかに生きる力を感じることができるようになった。

どこからともなく、モーツァルトの曲が浮かんでくる。春を感じさせる澄明なメロディー……。「ロンドニ長調（K四八五）」。リリーが、よくアンコールで演奏する曲だ。音楽に合わせて、リリーの指が自然に動き始める。

敵意が澱^{おり}をなす暗い地下室に、穢^{けが}れを知らぬ童心そのもののような、明るく澄みきった快活のモーツァルトが鳴る……。

それは、なんとも不思議な感覚だった。自分の置かれた環境に、これほど、不釣り合いなものはない。だが一方では、地獄の底のようなこの場所にこそ、天を翔^かけるようなその音楽は最も必要とされている。日蝕の闇が晴れて太陽が顔を出したように、恐怖と死の影に覆われた取調室に、にわかに命の光が輝き出す。朝日を浴びて花が次々と咲く姿を、リリーは思い浮かべた。

するとその時、高い小さな窓から、澱んだ空気を縫って、これまでになく強い天日^{てんじつ}が射し込んできた。天から降ってきたようなその光を、何がしかの啓示を受けるように、リリーは仰ぎ見た。

モーツァルトが、いっばいに鳴り響いている……。

「ロンドニ長調」のメロディーとともに、リリーの想いは、数日前、ジャカルタのコンサート・ホールで開かれた演奏会へと誘われる。

軍当局の許可を得て執り行なわれた慈善コンサートを、リリーはシューベルトを始め、モーツァルトに渡し、ベートーヴェンで締めた。

時局柄、会場には、西洋人よりも日本人の方が目立った。軍服姿の男たちも少なくなかった。

戦闘のための服装をした人々の存在は、音楽の場に馴染まぬようにリリーは感じた。あからさまに言えば、それは人殺しのための制服なのだ。自分の身柄をジャワに留めさせただけでなく、友人や知己の自由を奪い、抑留所へ連行している人たちのもののなのだ。

でも、とリリーは思い返す。なかには、奥田のような、罪のない兵隊だっている……。

いつもニコニコとして、音楽のことしか頭にない。丸刈りの頭を掻きながら、音楽を教えてください、と、リリーに頼んできた。初来日の日比谷公会堂で演奏を聴いて以来、ずっとリリーを慕い続けてきたのだと、恥ずかしそうに述べた。

週に一度のレッスンで、モーツァルトの連弾用ソナタと一緒に合わせた時には、「まるでオーケストラだ」と、顔いっぱいには歓喜を溢れさせていた。モーツァルトが見たらきっと喜ぶような、邪気のない、晴れ晴れとした笑顔だった。

その後、スラバヤに配置換えになってしまったので、コンサート会場にはいるはずもなかったが、かなうことなら、奥田にも演奏を聴いてもらいたかった……。

演奏会場には、飯田の姿もあった。作曲家で、ジャカルタ放送管弦楽団の指揮者を務める。リリーの音楽があるところ、どこにでも飯田が現われる。

いつだったか、貴方はもはやジャワでのパートナーのようだとリリーが言ったら、飯田は顔を赤らめながら、日比谷で貴女のモーツァルトを聴いて音楽の道に行く確信が持てた、それ以来の熱心なファンなのだと告白した。

飯田の隣りには、放送局の洋楽ディレクター、青木の姿も見えた。やはり、初来日の演奏を聴き、東京のスタジオからのラジオ放送にも立ち会ったと述べた。

曲が終わる、嵐のような拍手が起きるたびに、飯田も青木も、あれでは手が痛くなるだろうというほど、熱烈に拍手をした。

最後のベートーヴェンが終わると、飯田が、拍手をしながらしきりと合図を送ってきた。口を大きく開け、懸命に何かを伝えようとしている。

飯田が何を言いたいか、リリーにはすぐに分かった。自分と音楽をやる段になると、飯田はいつだって同じことを繰り返す。

「リリー、モーツァルトを弾いて下さい」――。

放送局の特別番組に、オーケストラとの共演で何か協奏曲をやるうという話になった時にも、飯田は同じ言葉を述べた。

飯田のリクエストに従って、リリーは彼の指揮で、モーツァルトの「ピアノ協奏曲第二十四番 ハ短調（K四九二）」を弾いたのだった。

慈善演奏会のアンコールにも、迷うことなく、モーツァルトを選んだ。

ふたたび鍵盤に向かったリリーの指から、「ロンドニ長調」が溢れ出した……。

いきなり、どんという、砲弾が至近距離で炸裂したような音がして、リリーは我に返った。

目の前の机を、憲兵が刀を振り下ろして力任せに叩いたのだ。

夢見る気分はいっぺんで醒めた。モーツァルトの音楽は、暴力によって粉砕された。

「貴様、何を考えている。憲兵を舐めるんじゃない！」

罵声とともに、憲兵はリリーの胸倉をつかんだ。

恐怖が全身を貫いた。がくがくと膝が震えた。

憲兵はその姿勢のまま、震えおののくリリーを鋭く睨みつけた。しばらくして、ようやく手を離し、元通りの無表情を取り戻して、話の穂を継いだ。

「お前の髪は黒い。目の色も、黒に近い。西洋人には珍しい。何故だ？」

恐怖に縮んだ膝元から、力が抜けていく気がした。

それは、昨日まではなかった詰問だった。明らかに、尋問は人種問題を問う方向に進もうとしている。濡れたような黒い瞳も、腰まで届くほどに長く伸ばした黒髪も、若い頃からのリリーの自慢だった。

その美しさを讀えながら、近づいて来る男たちは少なくなかった。

平和の時なら、魅力として称賛を浴びるものが、今は疑惑を呼ぶ対象と化す。美しいものが、次々に否定され、蹂躪^{じゅうろう}される時代なのだ。

「私はハンガリーの生まれです。もともと、ユーラシアの騎馬民族が西に移動して出来た国の人間です。黒い髪も目も、あの国では珍しくありません」

「それだけかな？」

「……………」

「西洋人の顔つきをしながら、お前のように黒い髪と目をした連中を、我々は知っている。国を持たぬそいつらは、英米に紛れ込み、世界を股にかけて陰謀をめぐらせている。大日本帝国にとって、こいつらは、見えざる敵だ。何を言われているのか、お前は分かっているだろう」

嫌味たっぷりに憲兵がほめかすのが、ユダヤ人のことであることは明らかだった。

ヨーロッパに吹き荒れるユダヤ人への暴虐の嵐が、日本の手を介して、ジャワにまで波及してきたのだらうか。リリーは、世界地図が黒々と隙間なく塗り潰されてしまう幻覚を得て、慄然とした。

リリーの夫、オットー・マンデルはオーストリア生まれのユダヤ人だった。ナチス・ドイツによるユダヤ人弾圧のせいで、リリーたち家族はウィーンを去り、その後はイタリアからも追い出されたのだ。イギリスを経由して、その後世界を渡り歩くことになったのも、この問題に起因していた。

リリー本人はブダペストの貧しい家の生まれで、父はチェコからの流れ者であり、いろいろな血管が混ざり合っていた。そのなかにはユダヤの血もあったが、当人としては、狭い意味でのユダヤ人という意識はなかった。何代も遡れば、ロマ、いわゆるジプシーの血も引いているらしかった。

ナチスの喜ぶような純血でないことは言うまでもないが、ハンガリーやオーストリアなど、中央ヨーロッパでは、そのようなことは日常的によく見られることだった。

そもそも、人間の個性を、人種や血統という過去の記録を引っ張り出して目くじらを立てるようなやり方に、リリーは我慢がならないのだ。

「私は、ユダヤ人ではありません。でも、もしユダヤ人だったとしても、そのことで問われなければな

らないような理由を見出すことなどできません」

「生意気言うんじゃない。問う問わないは、こつちで決めることだ」

憲兵は、そういきり立つと、ふたたび荒々しく机を叩いた。

暴力が目の前で振るわれるごとに、リリーは恐怖に縮み上がった。いつかあの暴力にまともに晒され、拷問に遭うのではないかという懸念が、おぞましさを伴って身体の底から突き上げた。

憲兵隊の地下監房に収監されて以来、取調室から洩れ聞こえてくる悲鳴や呻き声を、何度耳にしたか分からない。そのたびに、身の毛のよだつ思いがして、耳を覆った。ほしい情報を得るためならば、憲兵が手段を選ばないことは明白だった。

「お前の夫は、ユダヤ人だな」

いよいよ来たと、リリーは思った。

ユダヤ人問題が、尋問の核心なのだらうか。だとしたら、夫は大丈夫だらうか。自分が何らかの疑いの対象になっているとばかり思ってきたが、彼らの真の狙いは、ユダヤ人である夫だったのだらうか。

「夫はただの学者です。おとなしい、徒党を組むことの苦手な人です。陰謀とか、何か企みに加担できるような人ではありません」

「そうかな……」

憲兵の答えに含みがあったので、リリーの不安は昂じた。

「なるほど、学者には違いない。妙な英語の本を、ドイツ語に翻訳しているからな。ヒトラー総統に楯突く問題の書だ。虫も殺さぬ、おとなしいだけの男というわけではなさそうだ」

驚きが続いた。そんなことまで、彼らは知り尽くしている。

憲兵が語ったのは、イギリスのSF作家、H・G・ウェルズが書いた「The Shape of Things to Come（来るべき世界の物語）」というヒトラーを揶揄した小説を、マンデルがドイツ語に訳したことを言っているのだ。「透明人間」や「タイムマシン」で知られるウェルズは、二十年来のマンデルの友人だった。

リリーは、全身から血の気が退く思いがした。

「夫が翻訳を手がけた多くの本のなかに、そのような書が含まれていたことは事実です。でも、それは陰謀などというものとは違います。夫は、学究肌の、罪のない人です。今は、どこにいるんです？」

「お前の逮捕に続いて、マンデルも収監した。この憲兵隊の別室で、独自に尋問が続けている」

予想もしない事実だった。夫も逮捕されて、同じ憲兵隊の監房にいる……。

咄嗟に、リリーは叫んだ。

「夫を釈放して下さい。夫は無実です。学問と教養はありますが、行動の人ではありません。疑われるようなことなど、何ひとつあるはずありません」

なりふり構わず懇願する女の姿を見下したように、憲兵は卑しい笑いを口元に浮かべて言った。

「世界のピアニストも、やはりただの女ということか。安心するがいい。亭主の逮捕は、おまけのようなものだ。小物だよ、マンデルという男は。間違えてはいけない。我々の狙いは、リリー・クラウス、あくまでもお前にあるのだ」

ふたたび混沌の淵に突き落とされる気がした。ユダヤ人問題が問われながら、彼らのターゲットはやはりリリーなのだという。

新たな不安が頭をもたげてきた。バンドンの家に残してきた二人の子供たち、ルースとマイケルはどうしているだろう……。

自分が逮捕されても、夫と三人で、何とかやっていると思っていたのだ。だが、父親までもいなくなってしまうと、子供たちだけでどのように暮らしていけるだろう。両親の消息を、知らされたのだろうか。知らされたなら、憲兵隊に逮捕、収監されたと聞いて、どのようなショックを受けているだろう。疑念が疑念を呼び、渦をなして膨らんでいく。

憲兵は、明らかに自分を疑っている。だが、リリーには、日本軍に叛旗を翻すような行動をとった覚えなど、まるでないのだ。

陰謀、謀略……憲兵の使う用語が、いかにもことさらに、おどろおどろしく響く。それは、自分とは別の世界に棲む情念がとぐろを巻くものであった。怒りや憎しみなど、刺々しい感情のざわつきを濾過した後でなければ、モーツァルトなど弾けるはずもない。

私はピアニストだ。自分が弾く音楽によって、人々の心が少しでも和み、安らぎを得、生きとし生けるものの命を尊ぶ精神を育むことができるよう願ってきたのだ。

ウィーンでも、ロンドンでも、東京でも、ジャワでも、それは変わらない。ジャワがオランダに属すると、日本に占領されようと、ピアニストとして生きる自分の姿勢には変化などないのだ。

それでありながら、憲兵は疑惑に固執する。己の思い描く禍々しい蜘蛛の巣の中心に、何が何でもリリーを嵌め込もうとする。

いったい全体、何が疑われているのだ。自分の行動のどこに、彼らの疑惑を呼び、執拗な追及の触手を伸ばさせる落ち度があったのか……。

その時、茫漠とした疑念の広がりの中ほどに、一点の染みのように影が射し、次第に核となって浮かび上がってくるのを、リリーは感じた。ひょっとしてという想いが、顕微鏡を覗いたように、にわかに

拡大してくる。

婦女子が収容されたチデン抑留所で慰問演奏をした時のことだった。演奏の後、感激した抑留者たちが握手を求めて駆け寄って来た。

野の花を摘んだ花束を渡す者もいたが、何人かは、看守の目を盗んで、リリーの手に小さく折り畳んだ紙をねじ込んだ。

それらは、いまだに収容されずにいる家族や知人に宛てた私信だった。ひとたび抑留所に入れられれば、外との通信は基本的には許されない。愛する者とのままならぬ連絡を、彼女らは必死の思いでリリーに託したのだった。なかには、書信とともに金を包んだものもあった。

リリーは、後日、可能な限り、それらの書信を宛先の人々に届けた。夫マンデルにも、手伝ってもらった。

ピアニストということで、自分が抑留を免れているのだとすれば、不幸な収容者のためにそのぐらいのことをするのは、当然のように思われた。

愛する者からの予期せぬ消息に接して感涙に噎^{むせ}ぶ人たちを前に、リリーはしばしばもらい泣きした。そして、このような殺伐とした時代に、ささやかながら人の心と心をつなぐ役を果たせたことを、喜びとも慰みとも感じたのだった。

だが、それだけのことだ。書信に目を通したものもあるが、中身を逐一調べたわけでもないし、便りを届けた後に、受取人と交際を続けたこともない。当局に隠れての行為ではあったが、陰謀と呼ばれるような筋合いのものではないはずだ。

当局がそうした自分の行動に気づいたのなら、何を措^おいてもまずは注意を与えてくるだろう。いきな

り憲兵隊に連行し、自白を強要するような乱暴に及ぶには、自分の行為はあまりの「軽罪」ではないか。だが、もし、仲介した便りのなかに、日本軍にとって不都合な秘密事項が含まれていたとしたら……。ともに涙を流し、善行をしたように思っていた自分は、あまりにも無邪気で、うぶにすぎるだろうか。いや、それでも、自分の目の前で人々が見せた涙が空涙であるなどと、リリーは決して思うことができない。そう考えることすら、冒瀆のように感じてしまう。

疑念の渦は、出口の見えないまま膨らみ続けた。もつれ合った疑惑の糸は、どこまで行っても解けることがなかった。

どうすれば、この危機を乗り越えることができるのか。容疑が晴れて、家族と再会できる日は、いつなのか……。

「お前の所持している身分証明書について訊かせてもらおう」

憲兵が、また詰問の方向を変えてきた。

「ハンガリー生まれのお前と、オーストリア人の夫が、ともにイギリス外務省が発行した身分証明書を携行している。妙ではないか。しかも、イギリス国籍というわけでもない。暫定的に身分を保証する仮の書類だ。極めて特殊な形と言わざるを得ない」

黒々と塗られた世界地図を、ふたたびリリーは思い浮かべた。

ナチスの登場によって、自分らはヨーロッパを追われた。安住の地を求めて、ウィーンからイタリアへ移り、イギリスに逃れ、ニュージラランドへ渡ることになった。英連邦に属するニュージラランドなら、国籍が取得できると聞かされたからだ。その道中に必要となる証明書を、イギリス政府は暫定的

に発行してくれたのだった。

地球を半周するようなコンサート・ツアーに出たのも、そのためだ。自分たちは、安全な棲家求めて世界を彷徨^{さまよ}い歩く、根無し草なのだ。そして、ジャワまで来たところで、日本軍の進駐という新たな戦局に巻き込まれてしまった……。

「ピアニストという隠れ蓑の下で、お前は大きな使命を託されて旅を続けている。世界を股にかけた活躍の陰で、お前はその秘めたる目的に奉仕している。そしてこのジャワでは、日本に協力すると見せかけながら、陰謀に加担し、密かに日本による統治の転覆を狙っているのだ。我々は騙^{だま}されない。お前は、国際ユダヤ機関によって送り込まれたスパイだ！」

憲兵の話は、調査に基づく事実と、猜疑心が生んだ虚偽とが絡み合って、とんでもない妄想を作り上げていた。事実誤認を指摘するのはたやすいが、凝り固まった心に真実を信じ込ませるのは容易でないに違いなかった。

「何もかも、洗いざらい白状してしまうことだ。お前の態度如何^{いかん}によつては、マンデルは帰してやつてもよい。お前自身だつて、早く出たいだろう。だが、いつまでもしらを切るようなら、お前ばかりでなく、亭主まで痛い目に遭うことになるぞ」

最後は、またしても恫喝だった。

全く、毒蛇のような男だ。飯田や奥田など、心優しい日本人が話すのと同じ日本語を喋っているとは、とても考えられない。同じ日本人でありながら、どうしてこうも人間が違うのだろうか。

「時間はたっぷりある。逐一話してもらおう。生い立ちからこれまでの歩み、世界を周ってジャワに來た経緯、そしてここで何をしていたのか。オランダ時代から日本の占領後の今日に至るまで、その行動

をつぶさに語ってもらいたい」

国際ユダヤ機関だの、スパイだのという言いがかりには辟易^{へきえき}したが、ただ黙秘を続けるわけにもいかなかった。夫まで拘束されている。自分が頑なな態度を貫けば、彼らは間違はなく夫に危害を加えることだろう。

リリーは、溜め息をついて、力なく肩を落とした。

その仕種^{しぐさ}の意味するものを、憲兵は見逃さなかった。間髪を入れずに、駒をひとつ先に進めた。

「さあ、生い立ちから、始めてもらおうか」

仮面のように無表情の憲兵の顔が、いまや死神のように見えた。

リリーは、うな垂れたまま、声を沈めて話し始めた。

「一九〇三年の三月四日、私は、ハンガリーのブダペストに生まれました。母はハンガリー人ですが、父はもともとチェコの出身です……」

ヨーロッパの懐深くに育まれたリリーの半生が、訥々^{とつとつ}と語られていく。憲兵の後ろに控える書記が、慌しくペンを走らせた。

コンクリート壁に仕切られた暑気の澁む取調室に、リリーの虚ろな声が響く。

そのわずか前、明かり取りの天窓から眩い光が射し込んだかに見えた地下室は、ふたたび死を思わせる暗さに閉ざされた。

光とともに聞こえていたモーツァルトは、もはやどこにも鳴ってはいなかった。

第二章 ハンガリーの奔馬

勾配のきつい斜面を、鉄の車体が力強く登っていく。

重力を撥ね退け、幹を這い上がるカブト虫のように急斜面を登るさまは、いかにも逞しい。真つ直ぐに、意志を持つ生き物のように突き進む姿は、美しくさえ感じる。そのままぐいぐいと乗客を運んで上へ上へと登りつめ、やがては空の果てにまで届きそうな勢いだ。

フニクラ（ケーブルカー）は、川岸近くの広場を発って、せり上がるブダの丘の頂きまで、山腹を一気に駆け上がる。丘の上には王宮があり、建造を命じた国王の名を冠した名利マーチャーシュ教会が聳える。

斜面を登るにつれて、眼下に街並みが開けてくる。ゆったりと流れるドナウの川面、その向こうには、ペストの町……。乗客は皆、鳥にでもなったように、自分らの住まう町を見下ろす。

その客のなかに、輝くばかりのうら若い女性がいた。

窓から吹き込む風に、長い黒髪が靡く。黒い瞳はきらきらと輝き、少女から女へと移る多感さを窺わ

せて、その表情はたゆまず変化した。

一九二〇年夏——、十七歳のリリー・クラウスである。

花が咲いたような、とは、この人のためにある形容であつたろう。肌は抜けるように白かったが、黒い髪と瞳がエキゾチックな輝きを添え、古代オリエントの宝石を思わせる強烈な印象を与えた。

匂い立つようなその美貌に、すれ違う人々は、必ず振り返つた。ヨーロッパの東の端に位置し、東西の文明の交差点のようなこの町にはいかにもふさわしい、底深さを秘めた美しさであつた。

町の人間は、人生の大事な折に、しばしばブダの丘に登る。広々とした美しい景色に接して、人々は結婚の誓いを立てたり、赤ん坊の誕生を寿いだり、入学や卒業を祝したりする。

リリーもまた、人生の大事な節目に立っていた。

九年間通つた音楽アカデミーを、このたび卒業したのである。ハンガリー随一のこの名門音楽院に、リリーは八歳という異例の若さで入学を許され、首席で卒業したのだった。

そしてまもなく、さらなるピアノの研鑽のため、音楽の都ウィーンへ移ろうとしていた。故郷への別れの挨拶のつもりで、リリーはブダの丘にやって来たのである。

山頂駅でフニクラを降り、リリーは王宮前の展望台に向かった。海辺に近づく時のように、風がにわか強く寄せてくる。乱れ髪が激しく揺れる。やがて、目の前に豁然と町が開けた。

ハンガリーの首都、ドナウの真珠と呼ばれる美しい町、ブダペスト——。

広々とした景色の中心には、ドナウが青い水を湛えて左右に延びている。真下に延びる優雅な吊り橋「鎖橋」を始め、いくつかの橋が川を跨いでブダとペストの二つの地区をつなぐ。

対岸にひとときわ壮麗な姿を見せるのは国会議事堂である。その奥には薔（ひめ）き合うペストの町が広がり、

数多^{あまた}の教会の塔がマツチ棒を立てたようにその頭を覗かせる。

町の広がり、その彼方には、遙かにハンガリー平原が続く。そこでは自由の風が吹き、野生の奔馬がたてがみを揺らせて大地を駆けるのだ。遠く平原から通ってくるその風を、リリーは胸いっぱい吸い込んだ。

十九世紀後半から二十世紀の初頭にかけて、ブダペストは、文字通り「真珠」の輝きを放っていた。ヨーロッパにその名を轟かしたオーストリア・ハンガリー二重帝国の、ウィーンと並ぶ都であったことから、マジャールの伝統にハプスブルクの栄華と権勢が加わり、芳醇の香りを醸し出した。

リリーは、町の眺望を追うようにして、王宮前の展望台から、漁夫の砦へと足を向けた。漁夫の砦は、ブダの丘の縁に沿って続く白い石の回廊で、マジャールの各部族を表すという七つの円塔が、円錐形の屋根を載いて処々に立つ。ドナウと街並みの眺望を楽しみながら、逍遙するにはもってこいの場所だった。

別離を前にして眺めるためであろうか、町は多くの思い出を語りかけてくる。生まれて以来、リリーは十七年の歳月を、この美しい町に過ごしてきたのだ。

石の回廊の一角で、ヴァイオリンやアコーディオンを手にした辻音楽師のグループが、流行り唄を弾いていた。その音を聴いた途端、リリーの想いはたちまち五歳の時の思い出へと誘^{いざな}われた。

母とともに、少女のリリーは街角の辻音楽を聴いていた。聴くだけではなかった。音楽に合わせて足踏みをし、腰を揺らし、手を振って踊った。

刃物研ぎの手仕事で暮らす貧しい家に生まれたので、音楽的な環境に恵まれたわけではなかったが、

リリーは幼い時から人一倍音楽が好きだった。音楽を聴くと、ひとりでに身体が動いた。誰に習ったわけでもなく、リズムをとり、踊り出した。

貧乏に加えて、家では親同士の諍いが絶えず、少女のリリーはそのたびに心を痛めた。だが、音楽に合わせて踊っていると、憂さを忘れた。活き活きとした自分を感じ、快活な気分を満たされた。

その時も、リリーはいつもと同じように、辻音楽師の演奏に、身体を動かしていた。誰に見せるためでもなかったが、リリーは音楽を感じるままに、その場で踊った。

小さな少女が音楽に合わせて一心不乱に踊る様子を、通りがかりのひとりの女性が食い入るように見つめていた。悲劇を演じさせれば右に出る者がいないと言われたハンガリーの女優、ユスカイ・マリであった。

しばらくの間、踊る少女を注視した後で、マリはリリーの母親に声をかけた。

「この子は、きっと不世出の天才ダンサーになります。必ず、その道に進ませなさい」

その言葉に、リリーは天にも昇るほどの気分になった。踊りが好きで堪^たらなかったもので、漠然とではあったが、将来はその道に進みたいと夢見ていたのである。

自分の素質を見抜いてくれた女性がどのような人か、リリーは知る由もなかったが、心強い応援を得て、ねだるような眼差しで母親を見た。

「せっかくのお言葉ですが、この子を踊り子にするつもりはありません」

期待した母の返事は、寸分の迷いすら窺^{うかが}わせない決然たる拒否であった。夢を否定されてリリーは失望したが、やがて新たな希望の光を見出す。ピアノである。

踊りの道に進ませることに同意しなかった母だが、リリーの音楽に感応する能力とリズム感のよさ

には、ずいぶん前から気がついていてた。誰の目にも明らかかなほど、天賦の才は煌^{きらめ}いていたのである。多少は音楽の素養があった母は、貧しさのなかにも金を工面してピアノを買い与えた。

こうして、リリーが六歳の時に、ピアノとの出会いがもたらされた。

安手のピアノは鍵盤が固く、力任せに打鍵すると、ブリキを叩くような音がした。それでも、最初にピアノに触れたその日から、リリーは夢中になった。

普通の子供がする遊びのいっさいをやめて、ピアノの前に坐り続けた。童謡であれ、流行り唄であれ、知っている限りの歌のメロディーを、ピアノで奏で続けた。

「私、何だってピアノでできるわ。どんな歌でも歌える気がする。まるでヒバリになったようよ」

興奮を抑えきれずに、リリーは母に語った。娘の音楽への天分を見抜いたと思っていた母も、そのあまりの激しい没入ぶりには驚かざるを得なかった。

ひとたびピアノと出会うや、上達は早かった。瞬く間に、ピアノはリリーの身体の一部となった。

ハンガリー中から音楽の道を目指す精鋭たちが集まるブダペスト音楽アカデミーは、通常では十四歳から入学が許可される。だが、リリーは八歳でこの音楽院の門をくぐった。

母親に手を引かれて、リリーは音楽アカデミーの試験会場に向かった。試験を受けるなかで、リリーだけが足がペダルに届かなかった。

それでも、足を宙に浮かせながら弾いた音楽は瑞々しい感性に溢れ、審査に当たった教授陣を唸らせた。

ブダペスト音楽アカデミーは、もともと一八七五年に、ピアノの鬼才フランツ・リストによって創設

された。天才ピアニストの威光が轟く音楽院であれば、音楽を学ぶ生徒のなかでも、とりわけピアノの道を志す者にとつては、誉れとも誇りとも感じられるところだった。

リリーもまた、名門に学ぶ榮譽を感じた。だが、何よりも大きな喜びと感じたのは、そこでは音楽の才能が全てということだった。

貴族や政治家の子弟であろうと、どここの馬の骨かも分からない貧しい家の出身であろうと、ひとたびピアノに向かえば、問われるのは演奏だけである。音楽が凡庸であれば、家柄や身分など、何の助けにもならない。活き活きとした演奏なら、あくまで独立した個人として称揚される。

「学校はどう？」

入学して数カ月がたった頃、母はリリーに尋ねた。母としては、先生やクラスメイトのこと、授業の様子など、ごく一般的な関心から訊いたつもりだった。だが、リリーの返事は母の予想を遥かに超えていた。

「お母さん、音楽って面白いわ。世の中に幅をきかす理屈や物差しなんて、音楽には関係ないのね。私は学校でそのことを初めて知ったの。ピアノを演奏している時だけは、金持ちも貧乏人もない。そんな差は意味をなさないのよ。でも、演奏がちゃんとしているかどうか、そこにはまやかしなどあり得ない。私はね、その嘘のないところが大好きなの」

音楽によって、リリーは自由へのパスポートを得た。音楽は壁を越え、垣を払うものだと、少女は本能的に理解した。音楽という美神を前に、人は皆平等なのだと、納得した。

音楽アカデミーは、充実した教育内容を誇っていた。教授陣のなかには、コダーイやバルトークなど、ハンガリーの民族的なものを活かしながら、西洋音楽の第一線に新しい時代を開く才能豊かな作曲家が

いた。

リリーはこの二人の偉大な音楽家から、直接薫陶を受けた。とりわけ、ピアノの名医でもあったバルトークからは、多くのものを学んだ。

バルトークは、深く考え、言葉少なに語る人だった。インドの導師グールのような人だと、聞きかじりの知識を頼りに、リリーはそう思った。

レッスンのスタイルも独特で、テクニックを語らず、こう弾けというような強制的な指導もいっさいしなかった。

リリーが何がしかの曲のパートを弾くと、バルトークは聴いていた時と同じく腕組みをしたまま、静かに尋ねるのだった。

「本当に、曲を理解したと言えますか。どういう風に弾くべきか、とことん考えましたか？」

リリーが答えあぐねていると、穏やかな声は続いた。

「一音一音には、必ず情緒や感情の意味があります。その意味をつかむことが音楽の生命を生み、活き活きとした音の流れを溢れさせるのです」

不思議なことに、深い光を湛えた叡智の瞳でそう語られると、おのずと音楽へのアプローチが変わってくる。どうしろと言われたわけではないのだが、次のレッスンまでには、曲想の理解がまるで違ってくるのだ。

音楽への理解が深くに達し、真に自分らしい表現で弾くことができた時には、師は微笑だけを返してくる。あくまでも自主性が重んじられ、個性が尊重された。

個性の煌きにおいてリリーが他の生徒の追隨を許さぬことを、バルトークは早くから見抜いていた。

リリーは、バルトークのレッスンを愛した。

時には、バルトーク自身の曲を教わることもあったが、それは何ものにも代えがたい至福の時だった。師にも自分にも流れる平原を駆ける奔馬の血が沸き立つのを覚えながら、リリーは弾むようにピアノを弾いた。

バルトークの薫育を受けて、リリーの音楽性はすくすくと伸びていった。

実父が音楽と無縁の職人だったことも手伝って、この二十二歳年上の師は、リリーにとって音楽の父そのものとなった。

音楽アカデミーに通うリリーには、誰にも明かすことのない秘密があった。

学校から十五分ほど北に行った市民公園の一角を占める動物園に、足を運ぶようになったことだった。ブダペストの動物園は、一八六六年の開設になる世界で最も古いもののひとつだが、一九一一年、リリーが音楽アカデミーに入学した年に規模を拡大して、リニユーアル・オープンをした。インドの寺の形をしたエレファント・ハウスなど、アールヌーボー様式で造られた建物や施設の中に、世界中から動物を集めて、訪れる人々の目を愉しませた。

八歳で入学した頃から、十七歳で卒業するまで、リリーは音楽アカデミーへの行き帰りに、連日、動物園を訪ねた。季節や天候にかかわらず、まさに日課として立ち寄るのである。

訪ねるのは、いつもひとりだった。クラスメイトにも、母親にも、師のバルトークにさえ明かさなかった。動物とともに過ごす時間は、ピアノばかり弾いている少女が秘めた、もうひとつの自己の世界だった。

入学したての頃は、動物園に来るのは慰謝を得るためだった。珍しい動物を見、呼吸をとにもするような近さで生きものに接していると、心が安らいだ。アカデミーでは年上の生徒ばかりに囲まれて、ピアノを弾く時以外は落ち着かなかった。

だが、長じても、動物園行きの日課は変わらなかった。むしろ、動物への執着は一段と激しくなった。この世に生を受け、やがて死んでいくものとして、共感を覚えた。命あるもの同士、血が通い、響き合うような気持の高まりを感じた。一般の客のように距離を置いて見るだけではなく、なるべく近くに寄って、その命の鼓動を確かめたかった。動物の匂いや、肌や毛に触れた時に掌から伝わってくるぬくもりに、陶酔感すら覚えた。

動物といくと、身体の中に眠っている野性が沸き立ち、噴き上がるのを感じた。血が燃え立つ炎のようなその情念が音楽にも通じることを、リリーは本能的に知っていた。

偶然にも、リリーと名づけられた狼がいた。少女のリリーは、ことのほかこの狼を可愛がった。

ある日、飼育係の目を盗んで、リリーは檻の中に忍び入り、自分の「姉妹」のような狼に近寄った。

「リリーはよい子ね。リリーは、リリーのお友だち……」

そう言いながら、リリーは狼の頭を軽く叩き、ふさふさの毛並みを撫でて、手ずからピーナッツを与えた。

その様子を見た飼育係は、すわ惨事かと慌てたが、不思議なことに、狼のリリーは少女のリリーにされるがままに任せ、おとなしくしていた。

ある時には、動物園で生まれたライオンの仔が可愛くてたまらず、飼育係の息子に頼み込んで、檻の中に入れてもらった。

だが、母ライオンの檻との境にある戸がたまたま開いていたため、リリーの倍以上はあろうかという大きな母ライオンが、境の戸を押し開け、のっそりと隣りの檻の方へと移ってきた。

「危ない！」

近くにいた飼育係は、必死の思いで母ライオンを追い立て、元の檻に戻した。

リリーはその間、じっと檻の中に立っていた。母ライオンが近づいてきても、悲鳴をあげるでも、逃げ出すでもなかった。

「大丈夫かい？ 怖かったろう」

普通の子なら、恐怖のあまり、泣き出して当然であった。だが、リリーは平然としていた。「仔どもたちとお友だちになれば、そのお母さんとだって仲良しになれるわ」

リリーは、母ライオンにも近づくことができたことを、喜んでいるかのようにであった。飼育係は、少女の認識の甘さを指摘し、危険性を論じたが、その「勇氣」には、感心せざるを得なかった。

動物は美しいと、リリーはいつも思った。

余計なものを纏まとっていない。狡猾な知恵や策略とは、いっさい無縁なのだ。自然の摂理のままに、天に与えられた己の力を精一杯発揮して、存分に生きている。

時には、動物たちの性の営みを見かけることもあった。雌雄が求め合い、つまみ合う姿に、リリーは感動した。それは、命の自然な発露だった。かけらほどの嘘もない、真つ正直そのものの世界だった。

ピアノを弾くにも、あのように自然に、命のエネルギーに導かれ、その力が動き、流れるままに音楽を溢れさせたいと、リリーは願った。

動物への愛着を抱く一方で、生け花など、草花を切って飾ることは嫌った。それは、植物にとって死

を意味する。美のためとはいえ、リリーには、人間による傲慢としか映らなかった。

リリーの動物園通いを生んだ一因には、家庭不和もあった。

もともと肌合いの違う同士が一緒になった両親は、日のたつにつれ、争いやいざこざが絶えず、取り返しのつかない不仲に陥った。父は、家庭にいるより、外で憂さを晴らすことが多くなった。母は、年を重ねるとともに、ヒステリーがひどくなった。

アカデミーで音楽の才能を磨き、めきめきと頭角を現わしていくリリーには、もはや両親の住まいは腰を落ち着かせることのできる場所ではなかった。

町で評判になるほどのリリーの活躍に、母は、いずれ娘は自分のもとから離れ、遠くへと旅立つて行くであろうと予感した。自分らとは違う世界に住む人になる気がした。

ほどなく訪れるであろうその別れを、母は淋しく感じたが、リリーにはそうした後ろ向きの考えは見られなかった。物心ついた時から、リリーは自立心旺盛で、ひたすら前を向いて駆けることに懸命であった。

「私の中には、ハンガリーの奔馬が棲んでいるの。自由の風を受けて、ひた走るのよ。野を越え、山を越えて、どこまでも駆けて行くの」

将来の道について母が尋ねた時、リリーはそう答えて、憚ることを知らなかった。母は、二度と同じ質問をすることはなかった。

ブダペストの音楽アカデミーの卒業が近づくと、リリーはウィーンの音楽院に進むことを決めた。

リリー自身の希望するところではあったが、周りの誰の目から見ても当然すぎるほどに当然の選択だった。進路の決定に関して、家族は関わりようもなかった。

旅立ちを前にブダの丘に登った日、リリーはその前に動物園にも寄って来た。

十年近く通いつめた場所であれば、やはり感慨はひとしおであった。「事件」のあった狼やライオンだけでなく、名残りを惜しむような気持で様々な動物を見て回った。

自分が飛び立とうとしているからだろうか、リリーにはこの日、動物が檻の中に閉じ込められていることが気になって仕方なかった。できることなら、全ての動物を檻から出して、自然のなかに解放してやりたいと思った。

自分がこの町で檻に入れられていたとは思いたくなかった。だが、これ以上この町に留まるとしたら、それは檻に変わると思われた。翼を得て、自分は飛ばなければならぬ。ヒバリのように、空の高みに舞って、命の限り歌うのだ……。

ブダの丘からの眺望は、いつまでも見飽きなかった。美しい町だと、リリーは改めて思った。

ドナウを左に遡れば、スロヴァキアを経て、ウィーンに至る。逆に右手に下れば、バルカンの国々を経て黒海に至る。その先には、トルコが控え、遠くアジアが広がっている。

ブダペストは、広く世界に通じている。この町に生まれ育った自分が、広い世界に飛び立って行くのが、リリーには至極当然のように思えるのだった。

翌日、リリーはブダペストの東駅からウィーン行きの列車に乗った。この先、短い里帰りを除いて、二度と故郷に戻って暮らすことはなかった。

ウィーンへと、リリーは旅立つ。

それは、生涯にわたる永遠の旅の始まりであった。その旅はまた、世界のどこへ行っても、国の瓦解、

喪失という憂き目に遭う宿命の旅でもあった。

すでに二年前、一九一八年に、第一次大戦の敗北によって、栄光のオーストリア^{II}ハンガリー二重帝国は潰えた。

一九二〇年にハンガリーは独立した国となったものの、多くの領土を失い、三百五十万人ものマジャール人が国外に残された。オーストリアでは、皇帝が退位して共和国となり、長いハプスブルクの歴史に幕が下ろされた。

十九世紀的な世界の版図が崩れ、新たな枠組みに向けて動き出していた。新生ヨーロッパはいかにも不安定で、この先どこに向かうのか、杳として先は見えなかった。

二十世紀がもたらす新たな胎動のなかを、十七歳のリリーは、はちきれんばかりの希望に胸を膨らませながら、旅立って行ったのだった。

*

*

古い、衰えたとはいえ、ウィーンはやはり不朽の輝きを放つ音楽の都だった。

町の住人となったその日から、リリーはたちまち、先日までハプスブルクの王城の地であったこの古都が気に入ってしまった。町の抱える文化の厚みが、ブダペストに較べると、桁違いに大きく、深い。

モーツァルト、ベートーヴェン、シューベルト、ブラームス……音楽史にきら星のように輝く巨匠たちが暮らし、活躍してきた町なのである。ベートーヴェンが住んだ家であるとか、シューベルトが通った酒場など、その手の故事来歴を誇らしげに刻む場所^{シュトラッセ}は数限りない。

おのほりさんの例に洩れず、環状通りのリング通り^{シュトラッセ}を行く市電に乗って町を回りながら、リリーは

気持の高ぶりを抑えることができなかった。

ケルトンナー通りとの角に建つオペラ座は、ブダペストのアンドラーシ通りに建つものと兄弟のように外観が似ているが、重厚感に満ちたその威容を見れば、どちらが兄であるかは自明であった。

リング通りからカールス教会寄りに入った一角に建つ楽友協会は、世界に誇るオーケストラ、ウィーン・フィルハーモニーの根拠地である。金色に輝く大ホールいっばいに鳴るオーケストラの、ピロイドの光沢に輝く弦の美しさと、管楽器の温かい響きに、リリーはいっぺんで魅了された。

リリーは、音楽の都の明日の担い手たちを養成するウィーン音楽院のマスタークラスで学んだ。

ただでさえ女学生は珍しく、関心を集めずにはいられなかったが、リリーは人一倍、学内の注目を浴びる存在だった。

エキゾテックな美貌に加え、個性が際立っている。容姿だけでなく、ピアノ演奏がまた並外れて個性的だった。

彼女にしか弾けない独特の流儀でありながら、作り物の感じがしない。エネルギーな情熱の迸るま泉のように溢れる音楽は、この上なく自然で、天衣無縫の伸びやかさが珠玉の輝きを与えていた。理詰めのアプローチの対極にある直感的な音楽なのだが、彼女自身の命の深い部分で鳴っているため、活き活きとして説得力に富んでいるのだ。

劇的な曲調で知られるショパンの「幻想曲 へ短調」を弾いた時であった。

リリーは長い髪をアップにまとめ、何本ものヘアピンで留めていたのだが、あまりの渾身の情熱と力で弾いたため、演奏の途中から一本一本ヘアピンが飛び散り、最後には全てヘアピンが抜けて、髪はだらりと下がり、鬼神のようになった。

演奏を目の当たりにした人々は、圧倒され、半ば呆れながらも、一様の感慨に打たれた。

「これぞ、ロマンティック音楽の極致だ」――。

ハンガリー生まれの、野性味豊かな女学生が湛える一風変わった存在感は、その抜きん出た才能とともにたちまち評判となった。

「リリーには、不思議なカリスマがある」

教授陣も、同窓生も、等しく認める場所だった。

実際、音楽の都でのリリーの躍進ぶりは著しかった。通常は三年を要するマスタークラスを、一年で修了した。一九二五年には、二十二歳という若さでウィーン音楽院ピアノ科の教授に就任した。しばしば教え子の方が年上だったが、美しくもう若い女性教授は、人気の的だった。

音楽院に入学した翌年からは、ピアニストとして演奏活動のスタートも切った。ソリストとしてのリサイタルやオーケストラとの共演など、演奏活動は地元オーストリアばかりでなく、オランダ、ドイツ、イギリスと、ヨーロッパ中に広がっていった。

一九二〇年代のリリーは、まさに飛ぶ鳥を落とす勢いだった。常に活動の場を広げ、レパートリーを増やし、音楽を深めた。

音楽の都は、リリーにとって出会いの町でもあった。

モーツァルトの真の魅力を知ったのも、ウィーンだった。名指揮者ワインガルトナーのタクトで、「交響曲第四十一番ジュピター」を聴いたことで、リリーは一気にモーツァルトに開眼した。

無論、それまでもいくつかのピアノ曲はさらっていたが、その真価に気づいているとは言いがたか

った。やはり、モーツァルトが活躍し、その音楽を血肉として育み続けてきたこの町に暮らし、音楽の都ならではの名演奏に接したことで、モーツァルトが我が物として迫ってくるようになったのであった。「この美しさに、平気などいられないわ」

リリーは、「ジュピター交響曲」によって得た感動を、誰彼となく熱く話して回った。

ベートーヴェン至上主義が席捲した十九世紀の気分を受け継いで、モーツァルトを軽く見るような風潮がまだ強く残るなか、リリーの感性のアンテナは、明らかに時代の先端を向いていた。

「モーツァルトの音楽には、芯のようなものがあるのよ。単に口当たりのよいだけの音楽ではないわ。喜びも哀しみも知り尽くした人間の精神が、骨のように音楽に宿っている。モーツァルトは、生きることを音楽で表現できた天才だわ」――。

後に、世界一のモーツァルト弾きと呼ばれるようになるリリーだが、そこに至る道は、この時に決定した。

生涯の伴侶となるオットー・マンデルとの出会いも、ウィーンが舞台であった。

マンデルは一八八九年生まれのユダヤ系オーストリア人で、哲学博士であったが、文学や神学に造詣が深く、大変な芸術信奉者であった。イギリスの作家H・G・ウェルズと親しく、彼の著作の多くをドイツ語に翻訳している。一方では、鉱山技師のような仕事もしていたが、生き馬の目を抜くビジネスマンというよりは、多分に芸術のバトロンのような気分の濃厚な自由人だった。

二人が知り合ったのは、一九二八年――。マンデルは、弟に連れられて、ウィーンでのリリーのコンサートを訪ねた。開演の時間に遅れてしまい、どのような奏者が弾くのか事前の知識もないまま、ドア

の外に立って、洩れ聞こえてくるピアノの音に聴き入った。

初めマンデルは、その激しく雄弁な演奏から、弾いているのはてつきり男のピアニストであると思ひ込んでいた。素晴らしい演奏への賛嘆は、幕間にドアが開いて、拍手に応えるステージ上のピアニストを見た途端、異性への愛となって噴き上がった。

実は、マンデルは既婚者であった。イギリスでのビジネスを通して知り合った英国人女性との間に、三人の子供がいた。リリーのコンサートを訪ねたのは、弟のフェリックスがリリーに熱を上げ、兄を誘ったというのが裏の事情だった。

だが、聴衆の喝采を浴びてピアノの脇に立つ、黒のシフォン・ベルベットのドレスに身を包み、長い黒髪を編んで腰まで垂らした美神を一目見たその瞬間から、マンデルの人生はリリーに尽くすことを旨とするものに転化してしまった。

夫であり、マネージャーであり、おそらくいくぶんかは父の代わりでもあるという役割を、マンデルはその後三十年あまり、死の年まで続けることになる。

フェリックス・マンデルにはいくら言い寄られても愛を感じなかったリリーだったが、ヤギ鬚を伸ばした年上のオットーには愛を募らせた。何よりもマンデルの知識と教養、そして温かく自分を見守ってくれる包容力にリリーは惹かれた。

音楽には天性の閃きと直感でぶつかっていくリリーだったが、人生の伴侶には知を求めた。野性味が身上の天衣無縫の女は、教養や礼節を弁えた成熟した紳士を必要としていた。

リリーはマンデルを、「ディッキ」と呼んだ。独裁者を意味する「ディクテーター」を愛称化した呼び名だった。自分を支え、保護してくれる賢くも逞しい人に、リリーは憧れたのである。

一九三〇年の夏には長女ルースが誕生。その年の秋には、マンデルの離婚を待って、晴れて二人は結婚した。

盛んな音楽活動を繰り広げているリリーだったが、妊娠や出産を躊躇うような気持はかけらもなかった。生きものである女として、新たな命を宿し、誕生させることは、何にも増して祝すべきことなのであった。ブダペストの動物園に通いつめた少女の生物や命に対する共感、ピアニストとなっても一向に変わらなかった。

結婚と出産の年、リリーは音楽的にも大きな財産を手にする。当代随一と言われたピアノの巨匠アルトゥール・シュナーベルに師事することとなったのだ。

少年時代、晩年のブラームスから「将来が末恐ろしい」と才能を絶賛されたこのオーストリアのピアニストは、当時故国を離れ、ベルリンに居を構えていた。

第一次大戦後のドイツは、「ワイマール時代」と呼ばれる共和制の時代を迎えていたが、インフレと政治不安に悩みながらも、自由闊達な文化の華を咲かせた。ベルリンはウィーンに代わる新しい音楽の都として、才能ある音楽家たちを集めていた。

シュナーベルは、ベルリンのピアノ界の頂点に立つ巨星であった。ベートーヴェンのピアノ・ソナタ全集の校訂を行ない、所謂シュナーベル版を世に問うなど、単なる演奏家を超え、音楽を極めた大家として世に認められていた。

リリーの演奏を聴いたシュナーベルは、

「これほどの歓びを持ってピアノを弾く人を見たことがない」

と感想を洩らした。粗削りながら、輝く生命力を漲らせたその音楽と、情熱を剥き出しにして全身で弾くリリーに興味を持ったのである。

プロのピアニストとしてキャリアを重ねながら、リリーはシュナーベルのもとで研鑽を積んだ。原典の楽譜を重んじ、作曲家の意図を正しくつかむことの大切さを、シュナーベルは説いた。数年後には、この高名のピアニストは、

「自分の後継者は、リリー・クラウスしかない」

とまで語るようになる。ブダペスト時代のバルトークに加えて、シュナーベルはリリーにとって生涯のピアノの師となった。

シュナーベルはユダヤ系であった。新興音楽都市ベルリンには、作曲家のシェーンベルク、指揮者のワルターやクレンペラーなど、ユダヤ系の音楽家たちが広く活躍し、才能を競い合っていた。だが、ほかならぬそのベルリンから、ユダヤ人を恐怖に陥れる時代の暗雲が湧き起こり、やがてヨーロッパ中を覆っていくことになる。

シュナーベルに師事してベルリンとの縁の出来たその年――、それはまた、ユダヤ系の夫マンデルと結婚した年でもあったが、ドイツの総選挙でナチスが百七議席を獲得して大量進出を果たした。二年後には第二党となり、翌一九三三年にはついにナチスは政権党となり、ヒトラー首相が誕生する。

マンデルは、危険を回避するため、一九三二年には、北イタリアのコモ湖畔の町メナッジオに近いロヴェーノ村に居を移した。碧水を湛えた湖の彼方にアルプスの山並みを望む瀟洒な四階建ての家で、リリーにマンデル、娘のルース、そして一九三一年に生まれた息子のマイケルの四人家族による新たな生活が始まった。

ナチスの反ユダヤ政策によって、ユダヤ系の音楽家たちは次々にドイツを追われた。皮肉にも、このことが、リリーの音楽活動に新たな幕を開くことになる。ポーランド生まれのユダヤ系ヴァイオリニスト、シモン・ゴールドベルクとの出会いである。

ゴールドベルクは一九〇九年の生まれで、若くしてドイツに出、十六歳でドレスデン・フィルハーモニーのコンサートマスターとなり、巨匠フルトヴェングラーに請われて、二十歳の時に史上最年少でベルリン・フィルハーモニーのコンサートマスターに就任したという天才ヴァイオリニストであった。

ナチス政権誕生によって一九三四年にはベルリンを去ったが、コモ湖畔のトレメッツォにあったシュナーベルの別荘で、リリーに引き合わされた。シュナーベルはゴールドベルクの音楽性を高く買っており、ベルリンを追われたこの逸材と自分の後継者と頼む愛弟子を組ませることを思いついたのだった。

音楽史に名を残すクラウス・ゴールドベルクの黄金のデュオは、こうして産声をあげた。

彼らがレパートリーの中心に据えたのは、モーツァルトとベートーヴェンであった。一九三四年の十二月に行なわれるデビュー演奏会に向けて、リリーはゴールドベルクを自宅に招き、家族同様に暮らしながら、半年近くを練習に費やすことにした。

「シモン、私と貴方で、新しいモーツァルトを演奏したいわ」

「うん、十九世紀的な過剰のロマンティズムを排して、二十世紀にふさわしい活き活きとしたモーツァルト像を打ち立てたいものだね」

ゴールドベルクの語った「二十世紀」という言葉が、リリーはこのほか気に入った。

名匠ワインガルトナーの指揮で「ジュピター交響曲」を聴いて以来、リリーは、モーツァルトという福音を世に伝える使徒として生きたいと願うようになった。今、ゴールドベルクという言葉聴きながら、

それは、モーツァルトを二十世紀に蘇らせることにほかならないことを悟ったのだった。

自分の熱い想いを、同じ感性の土俵で受け止め、言葉としても、きちんと膨らませてくれる……知性に溢れ、協調性に富むゴールドベルクを、自分にふさわしい頼もしきパートナーとして、リリーは仰ぎ見た。

ゴールドベルクは静かに微笑を返すばかりだった。気品に満ちたその温和な笑顔を、リリーは美しいと思った。

いよいよ、練習が始まった。

後に彼らのトレードマークともなるモーツァルトのヴァイオリン・ソナタのなかから、まずは「ハ長調ソナタ（K二九六）」を合わせた。

モーツァルトのヴァイオリン・ソナタは、ヴァイオリン伴奏付きのピアノ・ソナタとも言われるほどに、ピアノが主導権を握っている。また、ゴールドベルクはオーケストラや室内楽の経験が豊富なので、相手に寄り添い、その美点に合わせて自分を表現することに長けている。曲が始まるや、音楽を牽引するのがリリーであることは、たちどころに明らかになった。

「ハ長調ソナタ」は、春の野をスキップするような曇りない快活さに溢れている。リリーのピアノは、弾むように、時に前のめりになるくらい早足で颯爽と駆けて行く。

ゴールドベルクは、弾き始めてはどなくして、自分の信じるテンポに較べると、いささか速すぎるように感じた。曲の細部の微妙なニュアンスの変化に、充分な色付けができない怖れがある。ピアノの音も、ほとんどペダルを使わない硬めの粒だった音なので、モーツァルトらしい優雅さや気品が醸し出せるか、不安を感じた。ところどころ、驚くくらいに粗っぽい表現のまま、先を急ぐところもある。

だが、しばらくの間、疾駆するリリーに遅れないようついて行くと、ゴールドベルクは不思議な快感が体内に広がり、その渦の中に身も心も浸して、小躍りしている自分を感じた。子供のように、音楽に合わせて身体を揺らさずにはられない自分がいるのである。

戸惑いや違和感が退き、大胆な試みに自ら参加しているような、小気味よさが突き上げてくる。

リリーの呼吸と、自分の呼吸がひとつになって、これまで気がつかなかったモーツァルトが蘇生されてくる。リリーのイニシアティブでこそ生まれたモーツァルト像なのだが、これはこれで、なんとも新鮮で、瑞々しく、魅力的だった。

オーケストラのメンバーとは異なる、ソリストとしてのリリーのカリスマ性を、ゴールドベルクは認めないわけにはいかなかった。そのカリスマ性は、共演者を従わせ、巻き込まずにはいられないのだが、巻き込まれた方では、逆らいがたい魅力のように感じて、かえって陶然となってしまうのだ。

迸る情熱を溢れさせてピアノに向かうリリーの姿には、一点の迷いもない。真っ直ぐに、渾身のエネルギーを込めて弾く音楽は、彼女の命そのものだった。

風が吹き抜けた。大地を疾駆する自由と野性の風。その風を身体いっぱいを受けて、リリーのモーツァルトは突き進んで行く。

ゴールドベルクは、その風とともに受け、並び走る歓びに身を震わせながら、確信せざるを得なかった。

「ハンガリーの奔馬だ。大地を駆ける奔馬がここにいる」――。

第三章 桜の国

「シモン、シモン！ こっちよ。早く、来て」

ヒバリの囀りのような、高く明るい声が路上にはじけた。日本語ではないその声に、周囲の日本人たちは一斉に振り向く。

声をかけられた男が女の方に歩み寄る、そのわずかな時間が待ちきれないと見え、女は自ら動いて男の手を取り、半ば強引に、関心の的へと連行する。腕を引かれた男の方も、目尻を緩ませて、まんざらでもなさそうだ。

女性上位を地で行く、いかにも外国人らしいカップルだが、睦まじいその姿に、仲のよい新婚夫婦だと見て取った通行人も多かった。

その背後から、もう一組の男女がつき従って行く。こちらは、先の「新婚」組に比べると明らかに年上で、ヤギ鬚の中年男と地味目の女の間に熱い磁力は見られず、おそらくは、新婚旅行に日本を訪れた若い友人夫妻を案内する先輩とその妻かと思われた。

事情を知らなければ、二組の男女は、誰の目にも、そのように映った。だが実際には、声をかけた女とヤギ鬚の男が、そしてシモンと呼ばれた男と地味目の女が、互いに夫婦なのであった。

リリー・クラウスとオットー・マンデル。そして、シモン・ゴールドベルクとマリア夫人。

マンデルはリリーより十四歳年長だが、リリーの印象が若く派手な分、見た目から言うところの差は二十を下らないように見えた。ゴールドベルクの槽糠^{そうこう}の妻マリアは、夫より八歳ほど年長で、リリーよりも二歳年上になる。

年齢からしても、カップルの相手を誤解してしまうのは仕方のないところなのだが、ことさらにそうした印象を与えてしまうのは、リリーとゴールドベルクの間で漂う、侵しがたい親密感のためだった。

リリーが強引にゴールドベルクを引っ張って行った先は、土産物屋のショーウィンドウであった。

紫の花にしなう藤の枝を担いだ娘が、笠を被って踊る日本人形が飾られている。その着物にも、全体に花模様^{はなもよう}が散らしてある。春爛漫の華やかさが、優美な動きに品よく収まっていた。

「どう、シモン、素敵じゃなくって。春のヴィーナスよ」

そう語るリリーの瞳が、きらきらと輝いている。

感動にしろ、発見にしろ、何か心を動かされることがあると、リリーはすぐにもゴールドベルクに語らずにはいられなかった。

感動をともしにする、音楽のパートナーなのだ。心をひとつにするようであれば、デュオの演奏などできっこない。ひとつでも多くの感動をとみに積み、心の琴線を響き合わせるような緊密な一体感のなかから、息の合った、燃えるような二重奏を導き出したいのだ。

「日本のポッティチェリかな。春を祝う踊りだろう。カリニッシマ！」

イタリア語で「可愛い」の最上級を口にしたゴールドベルクに、リリーは満ち足りた思いでウィンクを送る。出会い頭の感動を「パートナー」と共有できると、リリーは初めて夫の姿を探した。

「デイッキー、見て。この人形、とても気に入ったわ。部屋に飾りたいの」

購入の意志が決まって、財布の元締めに声がかかるようなものだが、マンデルはそれを承知で、微笑みながらリリーのわがままを許す。

日本に来て以来、練習や演奏会の合間に、こうした買い物が増えている。マリア夫人は、呆れたように両手を広げ、天を仰いだ。

一九三六年（昭和十一年）三月、東京――。

リリーがゴールドベルクとデュオを組んで、一年半近くがたっていた。三四年末のオランダ・ハーグでのお披露目コンサートの大成功の後、二人はたちまち欧州音楽界のトップ・アーティストの座を射止めた。

ゴールドベルクがユダヤ人であるため、二人の演奏はドイツでは許されないのだが、それでも一年ほどの間に、ヨーロッパ中で百二十五回もの演奏会を開いた。とにかく大変な人気で、どこに行っても歓迎と絶賛の嵐だった。

演奏会だけでなく、レコードもベストセラーとなった。

ナチスの登場以来、ヨーロッパは影を擁し、不安を抱えていたが、その暗雲を払い除けるように、二人は颯爽と音楽界に登場し、時代の寵児となったのだった。

ヨーロッパでの成功の勢いを駆って、一九三六年にはワールド・ツアーが組まれた。遠くは日本とオ

ランダ領東インド（蘭印）まで、地球を半周するロング・ツアーが敢行された。

初来日となる日本での滞在は、三月半ば過ぎから六週間に及んだ。東京を中心に、京都、大阪、神戸など、関西にも足を伸ばして、多くの演奏会を組んだ。

長い船旅の果てに、この極東の国に足を踏み入れたその日から、リリーは大の日本虜人となってしまった。持ち前の積極性は、どこに行っても、その土地の風俗や文化に関心を示すが常であったが、日本への入れ込みようは、いつもの程度を遥かに超えていた。

リリーにとって、日本は、何よりもまず、美に溢れたお伽の国であった。

寺院や庭園の意匠は語るに及ばず、生活の細々したところに立ち現われる調度品や道具の類いが、得も言わずに美しい。

食事が出されるたびに、リリーは箸をつける前に溜め息が出た。繊細な味もさることながら、盛りつけの色彩感や器の妙が、目を瞠ならせるのだ。長い伝統に育まれ、洗練された独特の美に、リリーは素直な感動を禁じ得なかった。

女性の着物姿もまた、美しさの極致だった。艶やかな着物に身を包んだ女性が街を歩いていると、花が翼を得て、一陣の風に地面からふわりと飛び立とうとしているかのように感じた。見ているこちらまで、軽やかに気分が浮き立ってきた。

ジャポニズムを愛でる欧米人は少なくない。夢のような美の国として日本を崇め、その虜になった人々たちを、リリーも何人か知っていた。ウィーン世紀末美術の巨匠、クリムトの絵にも、至るところに日本的モチーフがちりばめられている。

だが、自分が感じる日本へのときめきは、もう少し存在の奥深いところから湧き立ってくるもののよ

うに思われた。見知らぬもののなかに、郷愁を募らせるような興奮なのである。やはり、自分の中に流れるオリエントの血が騒ぐのだと、リリーは感じてならなかった。

黒い髪と黒い瞳に囲まれているだけで、気持が弾んでくる。それは、地球の反対側に長く眠っていたもうひとつの故郷に投げ込まれたような感覚なのだ。

日本人もまた、リリーの容貌に対する親近感を、しばしば指摘した。しかも、この国の人々は、恋人が親しい友に語るような優しく詩的な表現で、それを口にするのだ。

「リリーさんの瞳は、私たちと同じ黒ですね。長い髪も、私たちと同じ色。日本では、艶のある美しい髪を、カラスの羽に喩える独特の表現があります。リリーさんの髪も、カラスの濡れ羽色ですね」

こう言われると、それだけでリリーは有頂天になった。同じく黒髪をしたゴールドベルクに、特別に大きなウイंकを送った。

ドイツでは、アーリア人至上主義が掲げられ、金髪碧眼（きんぱしやくがん）でなければ、白い目が向けられる。ユダヤ人は蔑まれ、財産を奪われた上、ゲットーに押し込められている。

だが、日本では、ユダヤ人ということなど、全く気にされない。マジヤールだろうが、ジブシーだろうが、特別視などはされない。むしろ、黒髪、黒い目ということで、親近感を寄せられる。

日本人は名前を呼ぶ時、姓を先に、名を後からにすると聞いた。これは、ハンガリーと同じだった。

「リリー・クラウス」は、ハンガリーでは「クラウス・リリー」が正しい順だ。これも嬉しい驚きだった。ユーラシアの平原に馬を駆っていた騎馬民族の記憶が、蘇るようだった。その大地の広がり、西に自分生まれ、東の果てにこの日本がある……。

そして、リリーの日本最良を決定的にしたのが、桜だった。可愛らしいお伽の国への賛仰は、この花

の美しさによって、完璧の域にまで高められた。

日本に到着した頃には、枝先に蕾を膨らませていた桜は、リリーらの演奏会が回を重ねるにつれて、次々と花を開いていった。日比谷公会堂のある日比谷公園を始め、どこに行っても、桜の花がリリーたちを迎え、旅路に彩りを添えてくれた。

白に近い薄桃色の花は、ヨーロッパでリリーが馴染むリンゴやナシの花に較べると、はかなげで、繊細な美に思えた。処女雪のように清楚で、汚れない抒情を湛えている。時には、清潔がすぎて凄絶なほど、一途でひたむきに見えることもある。

バラの花のように、人工的に栽培される花とは違い、あくまでも野の花の素朴さを保っている。切り花に飾り、花瓶に活ける花ではあるまい。野を離れて、化粧の似合う花ではないのだ。

だが、それでいながら、桜の花は己に与えられた命を、懸命に生きている。一朝、嵐が来ればはかなく吹き飛ばされてしまう運命なのだが、それまでは迷うことなく、必死に咲ききって、怯むところがない。

雲を被せたように、木を桜花一色に覆い尽くす勢いを持ちながら、どれほどか豪華に咲き揃っても、決して慎ましさを失わない。静謐で、謙虚なたたずまいに端座する。着物の日本女性は桜の花によく似合うと、リリーは思った。

ふと、その桜の美が、モーツァルトの音楽にも一脈通じるような気がした。モーツァルトは燃え立つ火だ。人間の深い悲しみから喜びまで、無限の広さで音楽に表現している。だが、感情の最も激しい高ぶりのなかでさえ、あくまでも謙虚なのだ。それは、モーツァルトの音楽が、王侯貴族や雇い主に仕える次元ではなく、神に奉仕するような没我の境地から生まれているからだろう。

「シモン、桜の花は、モーツァルトに似ていませんか？」

旅の日を重ねて、この手のリリーの思い込みに、ゴールドベルクはだいたい慣らされてきた。相変わらず、直感的な閃きは図抜けて素晴らしい。多少独断的でも、その閃きを貫き通すところに、リリーのリリーらしさが輝くのだ。

「猛るところがないとは、何と心を安らかにするのでしょう。この花は、平和の象徴だわ。そこが、モーツァルトに似ているのよ」

リリーは微笑みながら、ゴールドベルクにウィンクを送る。ゴールドベルクは、黙って微笑みとともに肯き返す。

*

*

だが、実際には、日本は平和のユートピアなどではなかった。桜は、近年にない厳しさを見つめながら、冬から春に蕾を膨らませてきたのだった。

リリーが来日する直前、日本中を震撼させる大事件が起きていた。陸軍の青年将校たちによるクーデター、二・二六事件である。

予定通りの演奏会の開催を危うくするかもしれないなかったその事件について、リリーは、日本滞在中、かれこれと面倒を見てくれた大田黒元雄との話のなかで知った。

大田黒は、四十代半ばになる音楽評論家だが、単なる一評論家を超えて、日本の音楽界に指導的な力を持っていた。若くしてロンドン大学に留学しただけあって英語は達者で、日本にストラヴィンスキーとドビュッシーを紹介したのは自分だというのが、ひとつ自慢であった。

「もともと、私が留学していたのは英国でしたからね、『Debussy』を『デビュッシー』と英語読みのまま紹介してしまった。後から、フランスでは『ドビュッシー』ですと指摘されて、赤っ恥をかきました」

大田黒は豪快に笑った。

マンデルは、ロンドンにも詳しく、イギリスに知人も多いので、大田黒と馬が合った。リリーのマネージャー役としても、大田黒と話す機会は多かった。

「何もかも、自分風にしてしまうのが、英国の流儀だ。ヘンデルはハンデル。メンデルスゾーンはメンデルスーンとなる。もともと、さすがに『モザールト』と呼ぶ人だけは見たことがないがね……。だが、物差しを自分らの尺度で固定していたのではダメだ。これからは、東西の融合を考えなければならぬ。西洋人はこの点、もっと目を開かなければいけない。リリーも私も、日本の発展には驚いた。音楽の世界でも、もはや日本を抜きに、世界は語れないよ」

後半は、訪問国へのリップ・サーヴィスのような響きもあった。だが、それを聴く大田黒の表情は、にわかに曇ってしまった。

「これからの日本は、音楽のできる環境が続いていくかどうか、不安です。実は、つい最近、この町で大変な事件が起きたのです。雪の日でした。春の訪れの前に、東京ではよく大雪が降ります。その大雪について、陸軍の青年将校たちがクーデターを起こしました。東京は恐怖と混乱に陥ったのです。クラウス・ゴールドベルクの演奏会が予定通り開けるかと、ずいぶん気を揉みましたよ」

大田黒は、事件の概要を説明した。

二月二十六日未明、陸軍の青年将校たちが千五百名ほどの兵を率いて決起。首相官邸、警視庁などを

襲撃し、内大臣斎藤実、大蔵大臣高橋是清、教育総監渡辺錠太郎らを殺害、国家改造と軍の改革を掲げて、首相官邸や国会のある永田町一帯を占拠した。各所にバリケードが築かれ、交通も遮断されるなど、東京の都市機能は麻痺した。

政府は翌日には戒厳令を公布、二十九日には天皇の命により無血で鎮定されたが、一時は陸軍同士が睨み合い、内戦のおそれすらあった。

「東京で戒厳令など、一九二三年の大震災以来のことです。今回は、自然災害ではなく、軍内部の対立によって惨事が起きました。全ては人間が引き起こしたのです」

「マーシャル・ロー（戒厳令）」という言葉に、リリーは膝が震えた。不気味に重なり合う軍靴の音が、地鳴りのように響いてきた。

自分らの政治信条を貫くためなら、問答無用で人を殺してもいいという論理は、リリーにはどうしても理解ができない。ドイツが発火点となって、世界の禍々しい動きが、遠く日本にも飛び火したのだろうか。夢のようなお伽の国に、美しい桜の国に、これほど似合わないこともないではないか……。

「事件は一応の解決を見ましたが、今後、軍はますます政治に嘴を挟んでくることでしょう。自分のような自由主義者は、生きにくいことになります。音楽にとっても、厳しい冬の時代となるに違いありません」

大田黒によれば、この四月には、ドイツからピアニストのケンプが来日する。無論、ピアノの力量の方は申し分なく、期待も大きいのだが、ナチス・ドイツ政府の肝いりで実現した招聘なので、会場には、日章旗にハーゲンクロイツが並んで飾られるだろうとのことだ。すでに、派手な前宣伝が行なわれており、「生粋のナチス音楽家の来日」という謳い文句さえあるという。

「だからね、私は貴女方を、より応援したくなるんですよ。音楽に政治が介入するなんて、邪道です。ナチスが旗を振るモーツァルトなんて、筋違いもいいところだ。クラウスとゴールドベルクは、演奏同様、存在自体が爽やかそのものなのです！」

大田黒の「応援」が、リリーには嬉しかった。音楽評論を生業なりわいとしていても、単に演奏の良し悪しを評するのではなく、音楽の本質を理解する強い味方がいるように思った。リリーは、感謝を込めて大田黒に言葉を返した。

「冬の後には、必ず春が訪れます。恐ろしい雪の嵐が去って、日本は、桜の咲く平和の春を迎えたのであります。ありませんか。そう祈らずには、いられません……」

春の日を受けて静々と咲く桜の花が、リリーには、なおさら愛しく、惜しむべき宝のように感じられてならなかった。

*

*

東京での演奏会は、八夜に及んだ。

三月二十三日の演奏会を皮切りに、日比谷公会堂で五夜にわたって様々なプログラムが披露されたほか、青山の日本青年館では、ベートーヴェンのヴァイオリン・ソナタの全曲演奏が三夜にわたって行なわれた。

日比谷の初日は、近衛秀麿が指揮する中央交響楽団の応援を得て、ゴールドベルクが弾くベートーヴェンの「ヴァイオリン協奏曲」、リリー・クラウスによるモーツァルトの「ピアノ協奏曲第九番 ジュノム（K二七二）」と、それぞれをソリストとする協奏曲で華やかに幕を開けた後、二人の共演によるベ-

トーヴェンの「クロイツェル・ソナタ」で締め括った。

二十五日の第二夜以降は、二人だけのステージとなったが、ここでも、二重奏だけでなく、互いのソロ演奏も交えた構成をとった。あくまでも独立したソリスト同士のデュオなのだということを強調する演出であった。

もともと、ソリストとして単独でステージに立つとなると、人気はどうしてもリリーに傾きがちであった。輝くばかりの美貌であるし、彼女の持つ生来の華麗な雰囲気は、日本の聴衆にもストリートに受け入れられた。どの演奏会でも、リリーの放つ圧倒的な魅力がステージを支配した。

日本の聴衆は、これまでに演奏したどの国の聴衆とも違っていった。

拍手に熱狂するでもない。いつまでも拍手をやめないのでもない。初めのうち、リリーは自分らの演奏が気に入られていないのではないかと、気に病んだほどだった。しかし、演奏会が進むにつれ、日本の聴衆ならではの音楽の受容の仕方があることが、おのずと分かってきた。

演奏の間は、咳ひとつないほどの静寂が客席を支配する。まるで電流が生じたかのように、聴衆は、情熱的な、活き活きとした沈黙のなかで、じつと音楽に耳を傾ける。だが、プログラムが進むにつれて、緊張の熱気を帯びた電流は、客席から逆流して奏者の魂の中心に触れてくる。

電流は次第に白熱し、やがて、聴衆と奏者、また楽器と音楽が一体となり、離すことができない大きなひとつの生命体となる。この瞬間こそが、音楽芸術が成就する奇跡の時であり、恩寵の至福の時なのだ。

リリーは演奏家として、日本で初めて知るエクスタシーに興奮した。この点は、ゴールドベルクも同じだった。演奏が終わって、互いに顔を見合うと、いつになく頬が高潮していた。

桜の花びらが、客席にもステージにも、吹雪のように降りしきる幻をリリーは見た。日本の聴衆と自分をつなぐ、幸福の花の舞であった。

リリーとゴールドベルクは、二重奏のレパートリーとして、ヘンデルからドビュッシーまで、幅広い曲目を用意したが、中心はモーツァルトとベートーヴェンであった。より正確に言うところ、いくぶん、後者に傾いた曲の並びであった。

だが、日本の聴衆の反応は、圧倒的にモーツァルトに分があった。「ハ長調ソナタ（K296）」を始めとするモーツァルトのヴァイオリン・ソナタがプログラムに登場し始めるや、クラウス・ゴールドベルクの人気は一気に爆発した。

「あのように素晴らしいモーツァルトは聴いたことがない」

「クラウス・ゴールドベルクの演奏によって、初めてモーツァルトの天才を知った」

「生命力に溢れた感動のモーツァルトは、一生忘れられない」

そうした賛辞の数々が、リリーの耳にも届いた。

実際、日本の聴衆の二人のモーツァルト演奏に対する賞賛は、ほとんど「事件」の様相すら帯びていた。その感動は、この先長く、日本の音楽ファンの間に語り草となった。

それは、青春の輝きのように、あまりにも潑刺としていた。ロマンティックな情緒に流し込んだ古いモーツァルトではなく、二十世紀の生きたモーツァルトに、日本人は初めて触れたのだった。眩しいまでの生の輝き。躍動し、闊歩する生命感。二人のモーツァルトは、特に生のただ中にある若者たちの圧倒的な支持を得た。

アンコールに、モーツァルトを望む声も多かった。日本人は世界で最もモーツァルトを愛する人たちなのかもしれないと、リリーは思うことさえあった。二十世紀のモーツァルトを伝えるのが自分の使命だと信じてきたが、この国で自分の撒いた種の大きさに、我ながら驚くほどであった。

「シモン、モーツァルトが生前、この国のことを知っていたらねえ……。必ず、興味を持ったはずよ」
「『魔笛』の主人公タミーノ王子の衣装は、『日本の狩衣かりぎぬのような恰好』となっているらしいよ。まるっきり知らなかったということではなさそうだね」

「『トルコ行進曲』を作った人よ。異文化やオリエンタリズム世界に、興味津々なの。子供のような好奇心に溢れた人だったのだから、当然よね」

「うん、『ヴァイオリン協奏曲第五番』でも、トルコ風のテーマが登場する。やはり、モーツァルトの目が爛々と輝いているのが見えるよ」

「彼が生きていたら、この国を放っておかなかったに違いはないわ。ひよっとしたら、『トルコ行進曲』ならぬ『日本行進曲』を作曲していたかもしれないわ。十八世紀のトルコが、二十世紀の今は、日本なのだから」

自分たちと同じように、船に乗って日本を訪ねるモーツァルトを想像するのは、ちよつと愉快だった。着物の似合う日本のお嬢さんに、すぐにもカンツォネッタを作曲して、笑顔でプレゼントするのはないだろうか。

日本をテーマに、オペラだって作曲したかもしれない。「後宮からの誘拐」という、トルコを舞台にしたオペラだってあるの……。――

「私はね、文明の交差点のようなところに生まれたの。だから、こういうことには敏感なのよ。モーツ

ァルトは、ヨーロッパ中を旅して周った人だったでしょう。だから、人種や国境を超えて、音楽の愛を信じられたのだから……」

ハンガリー生まれの黒髪に黒い瞳の女と、同じように黒い髪と目を持ち、ヨーロッパでは異人種として排斥されるユダヤの男は、遙かな旅路の果ての日本で、強く肯き合った。

リリーはまた、桜の花の美しい国で、モーツァルトを弾く自分の天分を改めて確認することになった。だが、モーツァルトが旅をすることで国を超えた愛を音楽で謳い得たように、その使徒を任ずる自分もまた、長い旅を宿命づけられていることに、リリーはまだ充分には気づいていなかった。

六週間は、瞬く間に過ぎた。

各地での演奏会だけでなく、愛宕山にあった日本放送協会（NHK）のスタジオでも、リリーとゴールドベルクはラジオ放送用に演奏した。二日に分けて、ベートーヴェンの「ヴァイオリン・ソナタ第九番クロイツェル」と、ヒンデミットの「ヴァイオリン・ソナタ」を弾いた。

日本コロムビアでは、レコードの録音もした。ベートーヴェンの「ヴァイオリン・ソナタ第五番スプリング」と「第六番」であった。「スプリング・ソナタ」を、リリーは桜の花を想って弾いた。

二人の巻き起こした熱い興奮と旋風は、滞在中、どこに行っても、衰えることはなかった。

直前に起きた二・二六事件の衝撃が癒えず、漠とした不安の覆うなか、人々は、リリーたちの演奏によって、厚い雲間から射し込む光を仰ぐように、自由の風に触れたのだった。翌一九三七年には、蘆溝橋事件をきっかけに日中戦争が始まり、日本は後戻りのきかない泥沼に足を突っ込んでいくことになる。リリーらの演奏は、暗い時代を前にした、最後の春の輝きだったのである。

それはまた、音楽の価値そのものを高めることとなった。

音楽とは、これほどに素晴らしいものなのか……。文学や哲学などと同等に、音楽が人間の魂に語りかけ、深い感動を贈り、熱いヒューマニズムで心を満たしてくれるものであることを、日本の聴衆は、クラウス・ゴールドベルクのデュオによって、洗礼を受けるかのように知らされたのである。

リリーは、去った。

各地で目を楽しませてくれた桜の思い出と、日本人の温かいホスピタリティと、その音楽への真摯な態度と、モーツアルトへの愛と……、それらの好印象を抱えて、リリーは日本を後にした。

帰路の船に積み込んだ多くの荷物のなかには、土産に買った藤娘の日本人形も、大切にしまわれていた。

*

*

一九三六年の夏の終わり、半年を超す長い旅を終えて、リリー夫妻は北イタリアの家に帰宅した。メナッジオの駅まで出向いた娘のルースと息子マイケルは、列車から降り立った両親を見るなり、飛ぶように駆け寄って抱きついた。

コモ湖は、万年雪を冠ったアルプスの山並みを映しながら、いつに変わらぬ静けさに碧い水を湛えていた。光も空気も、世の中の騒々しさからは無縁に、澄みきっていた。爽やかな空気を、リリーは胸いっぱい吸った。

平和な別天地で、リリーは久しぶりに我が家の安らぎを実感した。朝に夕に練習をするグランド・ピアノの下で、五歳になるマイケルが、母の演奏を聴きながら積み木細工で遊んだ。

それは、ごくありふれた、いくらでも繰り返される日々に見えた。生の瞬間を鋭く捉え、魂を揺さぶる芸術の永遠がある一方で、このように、日々の暮らしたゆたう何気ない時間の流れもまた永遠なのだろうと、リリーには思われた。

だが、時代はそのような永遠を、許してはくれなかった。

その年の十一月に、日独防共協定締結のニュースが聞こえてきた。日本は、ヒトラー・ドイツの側に、大きく一步を歩み出した。

ピアノの部屋に飾った日本人形を眺めながら、リリーはその国の春を思った。平和の象徴のように感じた桜の花が、荒れ狂う嵐に無残に散らされ、軍靴に踏みにじられる幻影に襲われた。

翌一九三七年には、日独伊防共協定が締結され、枢軸国の結束が強化された。

世界の雑音もここまでは届かないと思っていたアルプス山麓のコモ湖にも、じわじわと暗雲が忍び寄っていた。

透き通った湖水には、波の揺らぎを通して、水と戯れるマスの幼魚の姿がいくらかでも見られる。ある時、いつものようにリリーが湖畔を散歩していると、不意に巨大な魚の影が幼魚を呑み込むようによぎった。その不気味な黒い影に何かの予兆を感じて、リリーは怯えた。

一九三八年三月、ナチス・ドイツは、オーストリアを併合した。ハプスブルク帝国の崩壊から二十年、オーストリアはふたたび亡国の憂き目に遭った。「アンシユロス」と呼ばれるこの合邦によって、音楽の都はナチスに屈した。

ワルターなど、ベルリンから逃れてウィーンで活動が続けていたユダヤ人音楽家が、町を追われた。

ユダヤ系の作家や文化人のなかには、自ら命を絶つ者も出た。

そして、同年十月、ついにイタリアでも、ドイツの意を受けて反ユダヤ政策が遂行されていく。オーストリア併合後もドイツ国籍への変更を拒否したマンデル一家は、追放が決まった。しかも、その通知はいかにも性急に、情け容赦なく行なわれた。二十四時間以内の強制退去が言い渡されたのである。

その時、マンデルはベルリンに残る財産を最終的に処分するため、密かに現地に赴いていた。リリーは、一家の長を欠いたまま、天から降ってきたようなこの危機に対処しなければならなかった。

家族の衣類と自分のステージ衣装を、片っ端からトランクに放り込んだ。別のトランクには、バッハやハイドンの初版本楽譜や、写真版のモーツァルト書簡集を入れた。いずれも、音楽家としてリリーが宝とするものであった。マンデルの著書も、初版に限って、全て詰めた。アルバムの写真も収めた。

ぎゅうぎゅうに詰めた数個のトランクを抱え、子供たちの手を引き、リリーはメナッジオの駅から夜汽車に乗った。夜逃げ同然にして、リリーは愛するコモ湖畔の家を離れねばならなかった。

二台のコンサート用グラランド・ピアノ、三千冊の書籍、楽譜、家具、調度品など、多くの物が主を失った湖畔の家に残された。ピアノの近くに置かれていた日本人形も、そのままに置き去られ、二度とリリーの手には戻らなかった。

示し合わせたパリのホテルでマンデルと再会した時、さすがの気丈な女も、夫の胸に顔を埋めてさめざめと泣いた。抱き合う両親に寄り添った二人の子供たちの頬にも、涙が伝わった。

意を決したように、マンデルは家族に告げた。

「ロンドンに行こう。友人のH・G・ウェルズのツテを頼って、英国籍を取得できるよう、外務省にかけ合ってもらおうのだ」――。

追われた者の旅は、どこに落ち着き先があるのか、旅路の果てはなかなか見えなかった。

第四章 最後の楽園

船は、ゆつくりと港に近づいた。海面の彼方には緑の大地が朝日に輝き、濃い木々の間に見え隠れする商館の赤レンガの屋根が、眩い光を返していた。

船が減速すると、風が止み、熱帯特有の湿った暑気が肌に絡みついた。それまでは勢いよく翻っていた赤、白、青のオランダ国旗が、げんなりと垂れた。潮の香りに加え、どこからともなく、花や果物の甘さに香辛料のきいた食べ物の脂臭さが混ざった、濃密な匂いが漂ってくる。

一九四〇年四月十一日午前八時——。オランダ船ヨハン・ファン・オルデンバーンフェルト号は、アムステルダムを発ってから一カ月に及ぶ長い航海の果てに、ジャワ島の表玄関、バタヴィア港に着岸しようとしていた。

リリーは甲板の上に立って、間近に迫ったバタヴィアの景色を眺めていた。傍らには夫のマンデル、娘のルース、息子のマイケルが一緒だった。

この町は初めてではない。四年前、日本からの帰路に立ち寄り、公演をしたことがある。コロナアル

様式の赤レンガの商館が、目に懐かしい。

だが、この四年の間に、世界も自分も、ずいぶんと変わってしまった。

一九三九年三月、ナチス・ドイツはチェコスロヴァキアに侵入、瞬く間に占領して、チェコという国は地図上からなくなってしまった。同年九月には、ドイツはポーランドに進撃。これを受けて英、仏はドイツに対し宣戦布告、第二次世界大戦が始まった。

前回の訪問時には、このような形でバタヴィアを再訪することになるとは、予想もしていなかった。その後、リリーたちはイタリアの家を追われ、ロンドンに移って、ふたたび地球を半周する長旅に出ることになったのだった。

戦乱のヨーロッパを逃れて来た乗客たちが多いためだろうか、船が錨を下ろし、バタヴィア到着が船内放送で告げられると、各所から拍手が起きた。だが、拍手をともしする気には、リリーはともなれなかった。自分らにとって、ここはまだ旅の途中の寄港地で、約束の地ではないのだ……。

リリーは、マンデルの手を取って、固く握りしめた。マンデルも握り返してきた。

夫の胸中也複雑なはずであった。イタリアを追放されて、ロンドン行きを決意した時、マンデルの描いた青写真には、このような流浪は描かれていなかったに違いない。

ウエルズは、友人として親身になってくれた。ヒトララーを揶揄した彼の小説「The Shape of Things to Come (来るべき世界の物語)」をマンデルが独訳したことが、ナチスに悪い印象を与えたことは間違いないので、その意味でも、同情してくれたようだった。

ウエルズは知人の政府高官として、ウォルター・ナッシュ卿を紹介した。英連邦に属するニュージランドの経済・植民担当大臣という肩書きを持つ政治家である。

ナツシュ卿は自分の管轄下にあるニュージーランドでなら、国籍の取得を保証すると約束した。ただ、正規の旅券発行はニュージーランド現地でなければできないので、一度はかの地に赴いてほしいと要請した。

リリーとマンデルは、謝意を呈するしかなかった。ナツシュ卿は、その間の渡航に便利なようにと、外務省に身分証明書を発行するようかけ合ってくれた。所持者の身分と英国市民権の権利を、英国外務省が暫定的に保証するものであった。

「戦時下の欧州をしばらく離れるのも、悪くないでしょう。ワールド・ツアーにでも出るつもりで……」

別れ際に、ナツシュ卿は握手をしながら笑顔でそう述べた。

すぐニュージーランドに旅立つわけにもいかなかった。イギリスを始めベルギー、オランダ、スカンジナビアなど、契約済みのコンサートをこなすのに一年ほどかかった。その合間には、積極的にレコードの録音もこなした。

マンデルは、ナツシュ卿の冗談を真に受けたように、ニュージーランドへの旅をワールド・ツアーとすべく、道中の各所で演奏会を組み、スケジュールを調整した。

ジャワなどオランダ領東インドに四カ月、オーストラリアに二カ月滞在して、その後「約束の地」ニュージーランドに向かう。そこで国籍と旅券を取得後、アメリカに渡って、ピエール・モントゥー指揮のサンフランシスコ交響楽団の演奏会でアメリカ・デビューを果たす。さらにカナダを回って、ヨーロッパに一九四一年の秋には戻る――。この間、世界各地で予定されるコンサートの数は、五十ほどにのぼった。

一九四〇年三月十三日、こうしたシナリオのもとに、リリーは家族とともにアムステルダムから船出したのである。

*

*

ジャワは、一般に「蘭印」（蘭領印度）と呼ばれたオランダ領東インドの中心となる島である。マレー諸島、ニューギニア島西部など、フィリピンとオーストラリアの間の海域に、赤道を跨いで広がる群島の一部を、オランダは三百年以上にわたって領有し、植民地経営をしてきた。現在のインドネシアに相当する地域である。

バタヴィアは、ジャカルタのオランダ時代の呼称で、ジャワの中心地であるとともに、蘭印全体に及ぶ植民地支配の拠点であった。港界限には商館や倉庫が軒を連ね、運河にはオランダ風の跳ね橋が架かり、総督府などの庁舎には白亜の西洋建築が威容を誇った。

ジャワに入ったリリー一家は、喧騒のバタヴィアを避けて、そこから東南に二百キロほど行ったバンドンに落ち着いた。

バンドンは、ジャワのバリとも、花の都とも言われたところで、山に囲まれた静かな高原の町であった。標高が七百メートルを超すため、涼風が通い、しのぎやすい。

町の北郊、タンクバン・ブラフ山の裾野の緑豊かな台地に、オランダ人、イギリス人など、多くの西洋人が潇洒な屋敷を構えており、リリーもそこに家を借りた。火炎樹や酸果樹などの並木が緑陰を作り、ブーゲンビリア、ハイビスカス、アラマンダなど原色の鮮やかな花々が妍を競った。

休む間もなく、リリーの音楽活動は再開された。ジャワ到着の二週間後には、バンドンで初のコンサ

ートが開かれた。また、月に一度は汽車で半日をかけてバタヴィアに出、ニロムと呼ばれた放送局でラジオ放送用に演奏した。時には、ジャワ島からスンダ海峡を越え、スマトラ島でリサイタルを開くこともあった。

ほどなくして、ゴールドベルクも MARIA 夫人とともにバレスティナ経由でジャワに入り、やはりバンドンに落ち着いた。彼もまた、オーストラリアを経て、アメリカへ移ることを考えていた。

ゴールドベルクが合流したことで、リリーの演奏活動には、ピアノ・ソロのリサイタルだけでなく、ヴァイオリンとの二重奏も復活した。四カ月を予定していたジャワ滞在は、たちまち延長せざるを得なくなった。

六年にわたって続いてきたクラウス・ゴールドベルクのデュオであったが、彼との仲も少しずつ変化を遂げてきていた。二人一緒の演奏だと、どうしてもリリーが印象的に勝ってしまうので、ゴールドベルクは意識してソリストとしての活躍の場を広げていった。

一九三八年には、リリーよりも早く、アメリカ・デビュを果たした。ニューヨーク、カーネギー・ホールを始めとする全米各地での独奏会は絶賛を博した。

翌三九年には故国ポーランドでワルシャワ・フィルの演奏会に登場、この時はヴァイオリン演奏だけでなく、指揮も手がけた。ナチスによる侵攻が行なわれる前の、ポーランドの音楽界にとっては最後の輝きとなる出来事であった。困難に満ちた時代、ユダヤ人として、ゴールドベルクもまた宿命の旅を続けていた。

モーツァルトの演奏をめぐっても、ゴールドベルクが自分とは違う形で弾きたがっていることを、リリーは気がついていった。十九世紀的なロマン主義の旧弊からモーツァルトを解放し、二十世紀にふさわ

しい演奏を打ち立てたいという点では齟齬^{そご}はないのだが、リリーが、生き急いだ作曲者の人生に合わせるように駆け足で直進しようとするのに対し、ゴールドベルクはもう少しゆっくりめのテンポで、気品に溢れた演奏を志向した。

それでも、二人の共演は続いた。ナチス・ドイツが世界に勢力を拡大するにつれ、演奏を許される場所が狭められていく。リリーにとってもゴールドベルクにとっても、黄金のデュオと呼ばれた二重奏は大切な音楽活動の柱であった。

思えば、一九三六年の日本公演の頃が、ゴールドベルクとの親密の絶頂期であった。デュオの演奏は続いていても、音楽ばかりでなく、見るもの触れるもの、何もかも感動を共有したいという熱の激しさは、リリーの心から退いてきていた。

MARIA 夫人の嫉妬も、疎遠を生む一因であった。あまりに息の合った演奏に、実は二人は結婚しているとの噂が立った。リリーとの公演旅行が続くと、MARIA 夫人は気が休まらなかった。

同じバンドンに暮らしても、ゴールドベルクとの間に、私生活上の頻繁な往来はなかった。移りゆく時を否応なく感じて、リリーは淋しく思った。

追いかけるように、時はさらなる暗雲を運んできた。

リリーのジャワ到着から一カ月後、一九四〇年五月十日に、ヒトラーはオランダに攻め入り、たちまち占領した。ジャワなどのオランダ領東インドは、本国を失ってしまったのである。オランダ国旗は南洋の植民地にはなおも翻っていたが、ヨーロッパでは、ロンドンに出来た亡命政府のような特殊な場所を除けば、掲揚されるところがなくなった。

チャルダ・ファン・スタルケンボルフ蘭印総督は、ただちに東インド全土に戒厳令を敷いた。「戒厳令」の言葉に、リリーは四年前に東京で聞いた時のおぞましさを思い出した。

だが、民間の防衛組織が整備されたり、都市部に防空壕が掘られたりはしたものの、「戒厳令」の名が嘘のように、けだるい午睡のなかにあるような南国の日常は変わらなかった。ヨーロッパの戦火は拡大する一方だったが、どこか対岸の火事を見るような虚ろな気分が、社会全体に澱んでいた。

これが植民地というものだろうか――。リリーは、不思議なものを見るような目で、社会と人々を眺めた。

この人たちは、客なのか主なのか。遥かにオランダから訪ね来たことを考えれば客人なのだが、支配者として現地人に君臨するさまは、主人の振る舞いであつた。どうやら、この二つの顔の間を揺れ動いているのが、植民地に生きる者の宿命らしい。

永遠に地に足の着いていないところがあるのだが、当人たちは、落ち着きのなさを深酒に紛らすような態度に終始するばかりで、そのいびつさを自覚できていない。実際のところ、遙かな海原の果てに、何百年と虚栄の市をやってきたようなものであらうに……。

道徳や社会通念をめぐっても、植民地の人間は、多くが旧弊な考えに浸かったままだった。リリーがズボン穿ただけで、ジャワで初めてズボン穿いた女などと、ことさらに言い立てられてしまう。リリーの開かれた性格は、旧態依然の植民地社会ではしばしば浮くことになった。

リリーの目はまた、被支配者の現地人（インドネシア人）にも向けられた。

支配者の母国の崩壊という政局の大変化にも、あらかたの人が無関心のように見えた。独立への気運が一気に高まる感じがないのが、不思議であつた。

植民地という巨大な機構のなかに何百年と組み込まれているうちに、あたかも家畜が飼ひ馴らされるように、角が取れてしまうのだろうか。あるいは、騒擾や諍いなど、時事に絡む世事のゴタゴタを避け、悠久の時に生きる鷹揚な哲学を身に着けたのだろうか。

市場には活気が溢れ、男も女も素朴な笑顔が魅力的なだけに、リリーは人々の胸中が気になった。リリーはインドネシア語を習い始めた。地方の文化や芸能について、知識を深めた。衣装も、ジャワ更紗などの現地の風俗を好んで着た。異文化に対する持ち前の積極性が、鎌首をもたげるように現われてきた。

もともと編み込んだ黒髪を長く垂らしていたリリーは、そういう恰好になると、ジプシーの踊り子のようなムードを漂わせた。何世代にもわたって住み着いた、混血児のようにも見えた。

会話力が上達すると、リリーは誰彼となく現地人に話しかけた。それは、召使に用事を言いつけるためではなく、同じ人間として接するためだったが、植民地の主を気取る西洋人に共通する態度ではなかった。

社会的な名士なので、バタヴィアでもバンドンでも社交界からは引っぱりだこだったが、そのような集まりにも、しばしば黒髪にハイビスカスの花を飾り、ジャワ風の装いで出かけて行つた。時候の挨拶などには、オランダ人相手でも、敢えてインドネシア語の単語を交えて話した。

世界的ビアニストが臨席すると聞いて集まった人たちは、会場に紛れ込んだ粗野な「混血児」の存在に顔をしかめたが、その人がリリーだと知って、その破天荒さに仰天した。

「芸術家というのは、変わっているわね」

変人の印象を口にするだけなら、ましな方だった。

「まるでインディアンか、ジプシーだわ」

眉をひそめる声も耳に入ってきた。時には、「野蠻人」と、露骨な非難を口にする者まで現われた。

会場にピアノがあれば、それがグランド・ピアノであろうとアップライトであろうと、リリーは積極的に弾いた。「野蠻人」の手から、宝石のような音楽が溢れ出すと、皆、信じられないものを見るような目つきで黙り込んだ。

オランダの植民地経営は、他のヨーロッパ諸国の投資家たちにも門を開いていたので、ジャワには非オランダ系の西洋人も多数居住していた。その中心は伝統的にイギリス人だったが、プランテーション経営などで羽振りのよい暮らしを送る者も少なくなかった。

英国政府発行の身分証明書をもらってきた関係で、リリーはこの方面の集まりに顔を出す機会もあったが、イギリス流儀のアフタヌーン・ティーのホーム・パーティーも、決して心地よいものではなかった。

本国同様、紅茶とともにスコーンやサンドイッチが供され、ウェッジウッドの花柄の茶器が氣品を醸し出しているのだが、キングス・イングリッシュの滑らかな舌が演出する優雅な装いの陰に、しばしばスノビズムが強烈な臭いを発するのを、リリーは感じてならなかった。

世界的名声を持つピアニストと席を同じくすることを、彼らは強く望んだ。音楽通を自称して、一家言あるような口をきく者が多い。だが、リリーが彼らの常識や伝統の枠を外れる言動に出た途端、一樣に鼻白む。

さるホーム・パーティーのこと。主人のたつての頼みで、リリーは二十世紀のモーツァルトについ

て解説させられた。ロマン主義とは異なる、新即物主義の流れに与する演奏について、リリーは実際に弾き較べをしながら、簡単に講じた。ウィーンの音楽院で教鞭を執った若い日々を思い出した。

ちょうどそこに、屋敷で使われているジャワ人の召使が、茶を替えに現われた。リリーは、その青年にも声をかけた。

「あなたはと思う？ どちらの弾き方が気に入って？」

その質問を、リリーはまず英語で行ない、インドネシア語でも繰り返した。

召使の青年は、質問の意味は理解したようだったが、返事をしようとはしなかった。自分に許された領分を越えることを恐れるかのように、主人の顔色を窺い、不明瞭な微笑を顔に浮かべたまま、早々に引っ込んでしまった。

主人を始め、多くの人々の表情が曇った。「インディアン」、「ジプシー」――、その囁きを聞いたように思った。

その場はそれで収まったが、家に帰る道すがら、同行の婦人がこのことを蒸し返した。

「貴女はこの土地のやり方にまだ慣れていないわ。召使にあんなこと尋ねる必要など、なくってよ」

婦人の言葉に、嫌味はなかった。インドに十年、ジャワに十五年を暮らすという婦人であつたが、善意に発した親切心を剥き出しにして、妹を諭す姉のように語った。

「現地人はね、給仕をしたり、荷物を運んだり、私たちの言う通りに動き、私たちに尽くすことだけ学べばそれでいいのよ。自分で何かを考え、判断するようなことを教育する必要などないわ。そんなことを強要しては、むしろ可哀想よ。あの人たちには、あの人たちの幸せのレベルというものがあるの。所詮は黄色人種なのですもの。文明というものには、無縁の輩やからなのよ。モーツァルトなんて、分かるは

ずもないわ」

途中までは我慢して聞いていたが、モーツァルトまで登場させられたことで、リリーの怒りは爆発した。

「黄色人種にモーツァルトが分からないなんて、そんなことは絶対にありません。日本を見て下さい。あの国には、音楽を愛する人たちがたくさんいます。私の演奏は、日本で大歓迎されました。日本の聴衆は音楽への熱意に溢れ、ヨーロッパ人以上に真剣です」

婦人の歩みが止まった。ドイツと組み、英米との対立を深める日本を称揚するリリーの態度は、まるで敵に通じる者のように思われた。

「貴女という人は、本当に恐ろしい……」

ジャワの西洋人社会で、リリーが最も親しく好誼を交わしたのは、意外にも、植民地支配の頂点に立つチャルダ・ファン・スタルケンボルフ総督の夫人、クリステーンであった。アメリカ生まれのユダヤ人で、根っからの植民地育ちでないため、考え方がフランクで、リリーとは気が合った。

「リリー」「クリステーン」と、それぞれファーストネームで呼び合う仲であったが、二人だけで会う機会を作っては、互いに胸の内を語り合った。

バタヴィアから六十キロほど南に下ると、ボイテンゾルフ（ボゴール）という町に、有名な植物園がある。百エーカー近い広さを持つこの大植物園の隣りには、蘭印総督の官邸が建っていた。二人は、官邸での人目を避けて、よくこの植物園を散歩した。

園内は、熱帯植物の宝庫であった。天まで届きそうなカナリア樹の鬱蒼とした並木道、ヴィクトリ

ア・レギアと呼ばれる大蓮の池など、一步園内に入るや、敷地全体を埋める圧倒的な緑と、その間を埋めて艶然と咲き揃う原色の花に、万華鏡の中にも迷い込んだような気にさせられる。

噎せ返るような樹木や花々の発する匂いは、紛れもなく生きものの放つ体臭であった。リリーはブダペストの動物園で嗅いだ獣の匂いを思い出し、沸き立つ思いを蘇らせた。毎日動物園に通った少女の頃の思い出を、興奮とともにクリステーンに語った。

総督夫人は、少女のリリーがそのまま背が伸びて、隣りに立つように感じた。

「私も、よくひとりで植物を見て回るの。熱帯の植物は、命が盛んだわ。疲れた時など、私はこの植物からエネルギーをもらうの。楽園のように見えて、精神が疲れることは、この社会では少なくないものだもの」

リリーは思いきって、先日のティー・パーティーでの「事件」を話した。

「クリステーン。私には、どうしてもこの西洋人たちに馴染めないとところがあるの。みんなは私を妙な色目で見えるばかりよ。でも、私は自分より、あの人たちが変わっていると思えてならない」

繁茂する草の群の中に、一輪の鮮やかな真紅の花が、すつと立っていた。クリステーンが触れた手を離すと、花はバネのように花弁を反らし、溜め込んだ朝露が飛沫となって散った。

「よそ者だから見えてくることだってあるわ。私は結婚しても、アメリカ籍のままなの。多分、このオランダ人たちと同じになるのに、抵抗があるのね。アメリカは、植民地から脱して独立を果たした国よ。夫の立場はそれとして、丸ごと植民地主義に染まることなどできないわ」

「総督夫人の貴女に言うのがおかしいことは承知しているつもりよ。でも、西洋が何百年もアジアを支配してきたのは、間違っていないくて？　いくらなんでも、二十世紀も半ば近くになって、昔通りにはやっ

ていられないのではなくって?」

総督夫人は、少しの間、沈黙した。芸術家の真つ正直さが、政治家の妻には眩しかった。

「リリー、アメリカに行きなさいよ。貴女なら、あの自由の国が気に入るわ。この東インドを楽園のように言う人もいる。確かに、自然は素晴らしい。食べ物も美味^{おい}しい。でも、現地人を顎で使い、その上に成り立っている社会に首まで浸かっていると、何かが麻痺してくるの。イギリスは、中国にアヘンを売りつけてぼろ儲けをした。アヘン中毒になったのは中国人だけど、アヘンを売ったイギリス人の方も、中毒になっていたのよ……」

そう言うと、クリスティーンはことさらに明るく声の調子を変え、リリーの手を取って、今にも駆け出しそうな勢いで促した。

「この先に、ヒトデカズラの大木があるの。オオコウモリが棲みついていて、昼にはたくさん枝にぶら下がっているのよ。動物好きの貴女なら、間違いなく気に入るわ!」

*

*

社交界から離れたかった。人の世の煩わしさから、逃れたかった。

今は世の中が病気なのだ。戦争が終わるまで、病に蝕まれた世界に背を向けてはいられないだろうか。生命の交響楽のようなこの南のパラダイスで、ひたすら音楽と向き合い、濃縮酸素を吸うようにして、命の輝きを磨き上げることはできないだろうか……

リリーは、しばらく公演を休み、充電期間を取ることに決めた。ジャワ島のすぐ東に位置するバリ島に移って、練習に打ち込むことにした。レパトリーを増やすにもよい機会だと、前向きに解釈した。

思い立ったら行動に移すのが、リリーの流儀である。マンデルや子供たちを説き伏せ、一九四一年の夏の終わりには、バリ島東部のソジャンという山あいの村に移転してしまった。

バリは、地上の楽園とも、最後の楽園とも呼ばれる島である。

ジャワが回教の地であるのに対し、ここではヒンズー教が信奉される。古来、祭りや芸能の盛んなところで、連日連夜、どこかの村で祭りが行なわれ、音楽や踊りが披露される。面作りなどの工芸や影絵芝居も盛んで、島の人々は皆、何がしかの芸術に関わっている。

近代文明に汚染されることなく、島には昔のままの自然と暮らしが生きていた。女たちは腰巻姿で、上半身は裸だった。その姿のまま、食料品や寺への奉納物を頭上に載せて、腰を揺らして歩いた。

リリーたち家族は、棕櫚の葉で屋根を葺いたバンガロー風の家を借りた。窓は始終開け放たれ、嵐でも来ない限り、閉て切られることはなかった。その窓からは、庭に咲き乱れるブルーゲンビアの花や、樹木の繁茂する蒼い山並みが見渡せた。家のすぐ裏には、豊かな水を湛えた川が音を立てて流れていた。室内には、籐で編んだ涼しげな家具が置かれていた。電気は通じておらず、夜には椰子油の燭で灯りをとった。未開の暮らしたが、粗い道を越え、苦勞してグラランド・ピアノとグラモフォンのレコード・プレーヤーが運び込まれた。

リリーの野性は、バリ島で全開となった。

サロンと呼ばれる腰巻に、申し訳程度の薄布を胸に巻いた姿で、何時間もピアノに向かった。サンダルすらも履かず、家の内外を問わず裸足で通した。

練習に疲れると、裏の川で泳いだ。人目がなければ、島の娘たちに倣い、裸で水に入った。魚になったように裸身で水を切っていると、ヨーロッパの戦乱やバタヴィアの社交界のことなど、吹き飛んでし

まった。

天の真上からこぼれ落ちてくる強烈な陽射しを、リリーは愛した。昼下がりのまどろみに、不安を忘れた。野鳥の囀りに和して歌い、香辛料のきいた料理に舌鼓を打ち、椰子やマンゴスティンなどの果物を手づかみで食べた。

夜になると、どこかの寺で行なわれる祭りを見学に行った。娘たちの踊るレゴン、仮面をつけた闘いの踊りバロンなど、祭りにつきものの民族舞踊に、恍惚として見入った。

ケチャックという、半裸の男たちがサル軍団に模した歌と踊りは、呪術的な原始の声と動作が圧巻のエネルギーの渦となって迫り、不思議な法悦に誘った。

「これは、パリのオラトリオだわ」

興奮に駆られて、リリーはマンデルに感想を洩らした。

観劇するだけでなく、ルースとマイケルには、村一番の老師についてバリ・ダンスを習わせた。伝統の芸を幼い頃から磨き上げてきた老師がどのように我が子を教えるのか、芸術の奥義を知る何かをつかむことができるような気がして、リリーは稽古に立ち会った。

時には、老師を家に呼んで、特別に踊ってもらうこともあった。踊り手の命がその肉体を離れて、神話や物語の生きものと一体化し、永遠の命となって輝き出すさまを、奇跡を目の当たりにするようにして凝視した。

その没我と恍惚の境地は、ピアノ演奏とも無縁でなはずだった。

モーツァルトを弾く時にも、このように無我の境地に立って、音楽そのものに没入できないだろうか。自分という演奏家の肉体を超えて、モーツァルトの精神と一体になる。あるいは、作曲者をも超えて、

音楽の美神に帰依する。さらには、音楽ということすら超えて、生きとし生けるものの、大いなる命の環に連なるような祈りへと昇華させる……。

宇宙の命に響けとばかりに、リリーはピアノを弾いた。「ジュピター交響曲」のレコードを、音の限りにかけた。荘厳な神殿を思わせる曲が、開け放たれた窓を通して熱帯の村に響き渡り、谷を埋めて蒼山に響き渡った。

そこは、地球の果てのような小さな山あいの村であった。しかし、リリーの胸は、この世の全ての命と溶け合って、無限の宇宙に解放された。大自然のただ中に身を伸ばし、緑の息吹をいっぱい吸って、野性に満ちた太初のエネルギーを自分の命に注入した。

対立も、争いも、支配も、文明社会が生む軋轢やしがらみのいっさいは、芥子粒けしりゅうのようなものでしかなかった。地球という星と呼吸をひとつにし、大きな生命の連環のなかに生きることの確かさを、リリーは活き活きと実感した。

かつてないほどの充実感をもって、リリーは日々を過ごした。最後の楽園の至福を、心ゆくまで感じていた。

数カ月があつと言う間に過ぎた。

ある日、町に買出しに行っていたマンデルが、血相を変えて戻って来た。

「大変だ。日本がハワイの真珠湾を奇襲攻撃した。日本とアメリカは戦争に突入した。太平洋も、戦場になる……」

最後の楽園が、文字通り最後になってしまったことを、リリーは知ったのだった。

第五章 治部隊おさむ

一九三七年、日本が蘆溝橋事件をきっかけに始めた中国との戦争は、いつ終息するとも知れぬ泥沼に陥っていった。

日本軍の中国侵攻を快く思わぬアメリカは、対日輸出削減という経済制裁に出たが、石油を始めとする工業用原料の大部分をアメリカに依存していた日本は、窮余の策として南方の資源に目をつけた。

蘭印＝オランダ領東インドは石油や鉱物資源が豊富で、初め日本政府は平和的な買い付けの交渉を試みるが、英米に与するオランダ植民地政府は日本提案を拒否して交渉は決裂、その後日本はフランス領インドシナに進駐、南方への触手を露わにする。

南方進出に当たって日本が掲げたスローガンは、大東亜共栄圏というものであった。アジア諸国を支配する欧米勢力を駆逐して、日本を盟主に満州、中国、東南アジア諸民族の共存共栄を謳った。

一九四一年十二月八日、真珠湾攻撃によってアメリカとの戦争が始まるや、戦線はただちに南方にも拡大した。一九四二年一月のマニラ占領に続き、二月には英領のシンガポールを陥落、破竹の勢いに乗

って、日本軍は蘭印を目指した。

ジャワへの攻撃は、治部隊おさむの通称を持つ、今村均中将率いる南方軍・第十六軍によって行なわれた。六万の兵が、巡洋艦や駆逐艦に護衛された五十四隻の大輸送船団によって、インドシナ半島カムラン湾を経て、南シナ海からジャワ海へと下っていった。

治部隊には、軍人ではない、百二十人もの文化人、メディア関係者たちも参加していた。宣伝班と呼ばれる人たちで、ジャワ占領を見越して、文学、絵画、演劇、映画、音楽など、各界から選抜され、現地で文化工作に当たることになっていた。

宣伝班という発想はドイツを視察訪問した山下奉文中将がゲッペルス宣伝相きか麾下の「P・K隊（宣伝中隊）」から学んだとされるが、日中戦争に従軍して国民的関心と呼んだペン部隊を発展させたものでもあった。

ジャワ派遣の宣伝班は、陸軍きつての文化将校と言われた町田敬二中佐を班長に、作家の武田麟太郎、詩人の大木惇夫、評論家の大宅壮一、漫談の松井翠声、「フクちゃん」の漫画家・横山隆一など、多彩なメンバーが顔を揃えた。これらの人々は、召集令状の「赤紙」に対し、「白紙」と言われた徴用令状によって召集されたのであった。

ジャワ島攻撃が挙行されたのは、一九四二年三月一日未明。治部隊の主力部隊は、ジャワ島西北端に位置するバンタム湾に集結し、ここから上陸作戦を敢行した。

主力部隊と行動をとにした宣伝班の多くが、佐倉丸という輸送船に乗っていた。佐倉丸はもともと日本郵船の所蔵になる輸送船であったが、軍の使用するところとなって、高射砲六門、対空機銃八門が備え付けられた。輸送船団の最後尾につき、バンタム湾の一番外側に停泊した。

嵐の前の静けさが、夜の海を覆った。宣伝班の一員、英文学者で作家の阿部知二は、歴史を目撃するような厳肅な気持で、甲板に立って海原を見つめていた。宣伝班の何人かが、緊張を高めながら甲板に立ち尽くした。生死を分ける戦いを前に、皆、無言だった。

作曲家の飯田信夫もそのひとりだった。勇ましさを歌う軍歌はいくつもあるが、実戦を前にしたこの肝に染み透るような静けさを音楽にした者はいないと、奇妙な考えが浮かんだ。

宣伝班に付き添う兵隊のなかには、オルガニストの奥田耕天がいた。宣伝班が召集される数カ月前に応召し、兵士となった奥田一等兵も、やはり落ち着かない様子で、全身に緊張を漲らせていた。

午前〇時半、上陸作戦は開始された。第一次上陸部隊が大小の発動艇に移乗し、闇をついて陸を目指した。

日本軍を迎え撃つのは、オランダに米英豪を加えた守備隊である。アメリカとオランダの巡洋艦二隻が、日本艦隊との間に砲撃戦を開始した。夜の闇に十字砲火が炸裂、爆雷が轟き、海面から水柱が上がった。

空からも轟音が響く。敵機の落とす照明弾が、花火のような原色の光に海原を照らす。佐倉丸の高射砲が激しく火を吐いた。だが、佐倉丸はやがて二発の魚雷を受け、衝撃に揺れた後、大きく傾き出した。宣伝班の面々は、水没し始めた船を後に、次々と海に飛び込んだ。阿部も飯田も、迷わず飛び込んだ。彼らを護衛する兵士が続いた。奥田も洋上の人となった。

重油にまみれた海を、彼らは長い間漂流した。やがて、驟雨が降り出した。砲声はなおも轟き、雨脚に煙る海原の彼方に、艦船の炎上する火柱が見えた。

バタヴィア沖海戦と言われるこの戦いによって、佐倉丸は沈没、今村均司令官が乗る龍城丸など三隻

が大破した。今村司令官も海に投げ出された。百名ほどの戦死者は出たものの、戦い全体としては圧倒的な日本軍の勝利に終わった。米艦ヒューストンと豪艦パースは撃沈された。

漂流者がそれぞれ舟艇に引き揚げられ、やがて陸に向かった頃には、雨も上がり、夜も白々と明け染めてきた。

珊瑚礁の瀬を越え、椰子の林が続く白浜に濡れた服のまま上陸して、阿部も飯田も、ようやく生きていることを実感することができた。ジャワを訪れたのが、ほかでもない戦争のためだということを、改めて思い知らされた。宣伝班の者の姿を確認すると、言葉もなく握手を交わした。奥田一等兵も無事であった。

波に洗われる白浜は、不思議なくらいに静かだった。朝の異国の浜辺に、よく通る鳥の鳴き声が響き渡っていた。

ジャワ島攻略は、少なくとも三カ月はかかると言われていた。

だが、緒戦のバタヴィア沖海戦から、オランダ軍の無条件降伏まで、わずかに九日を要しただけであった。その間、戦闘らしい戦闘もないまま、日本軍は侵攻を続けていった。

進軍する際には、民族旗「メラ・プティ」を立てた軍用トラックにスピーカーを載せ、蘭印政府に禁じられていた民族歌「インドネシア・ラヤ」のレコードを大音響でかけながら進んだ。自分らが「解放軍」であることを誇示する演出である。

レコードは、日本のインドネシア留学生たちに合唱させて録音してきたものだった。宣伝班は、ジャワ上陸と同時に、早くも民衆宣撫の役割を果たしたのである。

沿道には、日本軍を歓迎する人たちの群が出来た。長いオランダの支配を脱し、自分らの国が出来そうな欲びに、人々は顔を輝かせていた。

インドネシアには、「ジョヨボヨの予言」と呼ばれる古くからの言い伝えがある。自分らは長く外国の支配を受けるが、やがて東方より黄色い肌の人たちがやって来る。彼らは、トウモロコシが実るまでの間（約三カ月）滞在し、自分らを救った後、去って行く……。

この古い伝説に日本軍の進攻を重ねて、歓呼する人たちも多かった。民衆の熱烈な歓迎に接して、日本兵も宣伝班の面々も、一様に胸を熱くした。予想外に早いオランダの降伏は、敵軍の欠陥とやる気のなさに起因したには違いないが、現地民衆がオランダを支持しなかったことも大きな一助となったのは明白であった。

オランダ領東インドは降伏し、日本軍の手による軍政が始まった。

バタヴィアの総督官邸に、オランダ国旗に代わって日章旗が掲げられた。その前に広がる国王広場は、旧名に復してガンビル広場と改称された。

オランダ語が公用語から消え、インドネシア語が採用された。獄につながれていた民族主義者のスカルノやハッタは釈放され、二十万人にのぼる蘭印軍人や政庁官吏は、業務引継ぎに要する一部の者を除いて、全て捕虜として収監された。

軍政の頂点に立つ今村均司令官は、仁の武将として知られた。武断的施政が貫かれたシンガポールとは違い、ジャワでは融和的な政策が掲げられた。

オランダ人など、敵性民間人に関しても、とりあえずは居住地の指定と日本軍への忠誠の宣誓が義務づけられるだけで、強制収容は免れた。

その措置に対し、生温い^{なまぬる}と批判する声も軍中央にはあったが、今村は泰然としていた。強圧的手段に出ずとも、ジャワ軍政の順調な運びと治安のよさが、彼の自信の裏づけだった。

宣伝班は本部を旧英国領事館に置き、各分野において班員たちは忙しく仕事を始めた。

新聞、放送、映画、演劇、音楽、美術、日本語教育など、炎暑のなかを、班員たちは積極的に動き回った。

アジア解放の大義は、彼らを惹きつけてやまなかった。軍政当初のこの時期、ジャワ民衆のために兄として尽くすことに、いささかの疑問もあるようには見えなかった。

もっとも、国旗の掲揚は日の丸だけとされるなど、独立を志向する民族旗「メラ・プティ」や民族歌「インドネシア・ラヤ」は、ほどなくして禁じられてしまった。

宣伝班班長町田敬二中佐すら、この禁止措置には地団太を踏んだ。日本で大量にプレスしてきたレコードが、無駄になってしまった。言うまでもなく、インドネシア民衆は失望した。

*

*

バタヴィアの軍司令部には、二百人がたの軍人たちが軍政の牽引役として勤めていたが、なかに六人将校当番と言われる兵士がいた。将校のお世話役、ありていに言えばお茶汲みである。いずれも兵隊の恰好はしているが、戦場に猛勇を奮う武人にはとても見えない。

宣伝班とともに重油の浮く海を漂流し、ジャワ入りを果たした奥田耕天一等兵も、その将校当番兵のひとつだった。牧師の家に生まれ育ち、人を殺めたりすることから最も遠い性格の奥田には、自他ともに認めるふさわしい職務だった。

青山学院大学で神学を修めた後に、東京音楽学校で音楽を専門的に勉強した奥田は、卒業後は日本バツハ同好会に属し、日本では数少ないオルガニストとなった。

三十四歳になるのだが、小柄で童顔なこともあって、まだ二十代にしか見えない。将校当番などやっていればなおさら、居丈高な軍人のなかには奥田を小間使いのように軽くあしらう者もいて、その彼が日本を代表するオルガニストであることなど、周囲の誰にも知られてはいなかった。

軍政当初の慌しさのなか、奥田もあれこれと用事を言いつけられるままに、司令部の廊下を駆けるように行き来した。バンタム湾上陸以来、雨にぬかるむ道を休みなく行軍を続け、バタヴィア入城後も、不休の日々が続いていたが、疲れを感じることはなかった。

ジャワ解放の熱気は司令部に満ち、将校当番の兵ですら、新時代の夜明けに立ち会う興奮に胸を震わせていたのである。

半月がそのように過ぎた頃であった。奥田は上官の頼みを受けて、身の回りの雑貨や嗜好品など、いくつかの品物を買いに使いに遣らされた。

炎天下のバタヴィアの街を、奥田はひとり、必要な品を求めて歩き回った。他の兵士と一緒に行動するのではなく、単独で街を逍遙するのは初めてであった。

ある店で、覚えてたのインドネシア語を使っていくらかと訊くと、日本の兵隊と見たジャワ人の商人が、好意を露わにして値引きしてくれた。

佐倉丸から夜の海に投げ込まれた時には、生きた心地もしなかったが、その恐怖も薄らいでいくように思った。苦勞も、これなら報われる。自分らは、よいことをしたのだ……。

買い揃えた品物を両手に抱え、司令部への帰路を急いだ。

街の様子を確かめながらいくつもの角を折れて歩いて行くと、目の前に背の高い教会堂が現われた。石造りの、ずいぶんと古そうな教会である。キリスト教の受容が浅い日本では、これほど年代を経た教会堂は存在しない。

吸い込まれるように、奥田は教会堂の中へと歩を進めた。重い扉の内側には、誰も人の姿はなかった。外から見た以上に、内部はゆったりとし、丈も高かった。静寂の支配するなか、黴臭い空気が堆積し、ステンド・グラスを通して、南国の強い陽射しが眩い虹色の光をたゆたわせている。

プロテスタントの教会らしく、祭壇には十字架がかかるだけで、宗教画やイエス像はなかったが、その質朴さにむしろ、時を重ねてきた人々の信仰心が威厳を醸し出していた。

堂内の中央で、奥田の歩みは止まった。

応召して以来、教会を訪れる機会などなかった。それ以前に、西洋を訪れたこともない。偶然に迷い込んだこの世界は、奥田にとって、珍しくもあり、懐かしくもある奇妙な場所だった。

その時であった。

スコールが天から降るように、いきなりパイプオルガンの大音響が鳴り出し、堂内に満ち溢れた。祭壇の反対側、教会堂の入口の上方に設えられた大型のオルガンを、僧服のオルガニストが弾き始めたのだった。

曲はバッハのコラールであった。自分も日本では弾いたことのある曲だが、響きの厚みがまるで違った。小川しか知らぬ者が海に出たように、奥田はその音の洪水のなかに溺れた。

回教の国ジャワで、それは予想もしていなかった体験だった。

膝ががくがくと震え、そのまま床に坐り込んだ。涙が滂沱として溢れ、頬を伝ってぼたぼたと床に落

ちた。熱い感動が胸を浸しているのだが、その感動の正体が何なのか、自分でも訳が分からなかった。アジア解放も、ジャワ商人の笑顔も、この感動には無縁だった。何かとんでもなく高く大きなところから人間の心に舞い降りてきて魂をつかみ込む、そうしたものが存在の根底を揺さぶってやまないのだ。鬼畜米英だ、大東亜共栄圏だと、勇ましいスローガンに塗り籠められた日々を送ってきたが、その全くの蚊帳の外から、自分の心の最も乾き、欲していた部分に、突如としてオルガンの音が激流となって押し寄せてきたのだった。

その時、自分は一兵卒ではないと、奥田は感じた。日本人ですらないのかもしれない。自分は、ひとりの人間なのだ、それ以上でもそれ以下でもない、止まらぬ涙のなかに、奥田はそう確信した。

*

*

熱帯とはいえ、夜の海に長時間浸かったのと、その後の行軍の無理がたたって、もともと身体の強くない阿部知二は、バタヴィア入城後、連日発熱を繰り返した。

高校在学中、胸を患い一年間の休学を余儀なくされた経験があるので、三十八歳になる今でも、熱が続くと再発が気になる。しかし、宣伝班の連中が皆忙しく働いているのに、自分だけ寝ているわけにもいかない。重い身体に鞭を当て、阿部は宣伝班員として働き始めた。

阿部に与えられた仕事は、バタヴィアにある蘭印時代の書籍、文書の調査であった。本屋から本屋、また図書館へと、どのような本があるかを見て回った。

その結果、ジャワにはオランダの書籍だけでなく、英米の本が大量に持ち込まれていたことを知った。アメリカのベストセラー小説は、オランダ語に訳されるまでもなく、英語のまま出回っていた。なかに

は日本への敵愾心を露骨に煽るものもあった。

蘭印は、オランダの植民地という以上に、英米の世界戦略に呑み込まれているように見えた。阿部は、「敵性図書に関する報告書」というレポートに、それらの事情をまとめた。

阿部は東京帝国大学英文科の卒業である。「冬の宿」などの小説や「主知的文学論」などの評論によって作家として世に認められているが、英文学者としても研究や翻訳の仕事を続けてきた。英語は、我が身の一部のように、慣れ親しんだ言葉だった。

一生の仕事として英語や英文学を選んだ人間が、鬼畜米英を掲げる戦争に参加し、その前線で、検閲官のように英書に目を光らせる。皮肉な気がした。

宣伝班のなかに、「徴用」ではなく「懲用」だと軽口を叩く者がいたが、自分の場合も、英語に親しんできたことに対して復讐を受けているように感じないでもなかった。

バタヴィア入城直後、宣伝班の面々は、本部を設置した旧英国領事館に隣接するホテル・パヴィリオに泊まっていたが、やがて各々があてがわれるようになり、阿部は作家の北原武夫とともにクブ・シリィ通りにある住居に移った。

こぢんまりとした家だったが、そこはつい先日まで、蘭印副総督ファン・モークが住まいとしていたところだった。庭には大王椰子の木が立ち並び、珍しい異国の鳥が朝夕に鳴き交わした。

阿部が驚いたのは、レコードと本のコレクションであった。クラシック音楽のレコードが、部屋の隅に山のようバツハからモーツァルト、ベートーヴェンなど、クラシック音楽のレコードが、部屋の隅に山のよう積み重ねられている。

本棚の方を見れば、ゲートル、シラー、トルストイ、ドストエフスキー、ヴェルレーヌ、スタンダール、

キーツ、ハーディなど、英仏独露、あらゆる西洋の文学書が所狭しと並んでいた。新渡戸稲造など日本人の著書の英訳本まである。個人の図書室としては、後にも先にも、阿部はこれほどのものを見たことがなかった。

英語に「Library」という言葉がある。普通「図書館」と訳されるが、もとは貴族の館に設えられていた書庫、書斎のことである。まさに、自分が立つその場所が、「Library」の伝統を引く場所であることを、阿部は悟った。

ファン・モークその人は、近年の危機に乗じてにわかに頭角を現わし、蘭印のチャールズなどとメディアにおだてられて、副総督に成り上がった政治家である。しかも、降伏時のどさくさに紛れて、妻子を置いて高飛びしてしまったという曲者である。その胡散臭い人物にして、このような「Library」を所蔵していた。

そこに積み込まれているのは、ファン・モーク個人の趣味を超えた、西洋人の教養というものである。オランダという枠を超えた、ヨーロッパ文化の厚みとも言える。総督官邸を始め、バタヴィア中心街の堂々たる西洋建築には動揺することのなかった阿部だったが、このファン・モーク邸の「Library」には、心底衝撃を受けた。

蔵書のなかには、阿部が十代の頃から、あるいは邦訳で、あるいは英書によって愛読してきたものが何冊もあった。敵将である人物と自分が人生のある時期に同じ書を読み、同じような感動に胸を熱くした——それを思うと、阿部は戸惑いを覚えた。意識が攪拌され、落ち着かなかった。

子供部屋に入ると、ついさっきまでそこで子供のはしゃぎ声がしていたかのように、汽車のおもちゃが放置されていた。レールの上の客車が、半ば線路を外れて傾いている。まるで、戸惑いに揺れる自分

のようだと、阿部は思った。

歴代東インド会社の資料が眠る、古文書館を訪ねた時のことであった。末期東インド会社史を専攻するという係員が出て来て、貴方は「Kangakusha」かと尋ねてきた。それが、彼の知る唯一の日本語だという。

「蘭学者」——日本ではもはや使われなくなった言葉に、阿部は、時計の針が反対に回り、何百年もの時が一気に逆流する不思議な感覚に襲われた。長崎出島のオランダ商館に引きずり込まれたような気がした。

眠れる獅子を起こしたかのように、身体の中に長く息をひそめていたものが、頭をもたげてきた。それは、江戸時代を通し、三世紀にもわたって続いた日蘭関係の歴史の重みであった。ドゥフやブロンホフといったオランダ人学者と、日本の学者たちとの、数限りない邂逅と交誼の営々たる蓄積であった。その大いなる遺産を前に、阿部は目眩のする思いがした。ふたたび戸惑いが襲い、足元がぐらついた。発熱は、なかなかやまなかった。体調が戻り、調子のよい日が続いても、しばらくすると熱がぶり返した。

発熱が、具体的な病はそれとして、自分の存在の奥深いところから生じていることを、阿部は認めざるを得なかった。変調を強いるものが確かにこの地にはあり、その影響で感性が異様な熱を帯び、妖しく発光するのだ。

それは、不協和音に軋み立つ叫びのようなものであったかもしれない。夏の夜、白熱灯に群がる蛾の乱舞にも似て、自分の心には、ざわめき立てる狂おしさがあるのだ。

精神の「発熱」は、極彩色に輝く南国の陶然の世界にも感応した。

ミモザ、カンナ、フランジパニ、ブーゲンビリア、アラマンダ……楽園を思わせる熱帯の花々は咲き乱れ、官能的なほどに匂い立つ。その麻薬のような蠱惑に、全てを忘れて感嘆したい誘惑を抑えがたく感じた。

トリスタンが媚薬を飲み乾し、イゾルデと死をも厭わぬ恋に命を燃えつくしたように、夕映えの黄金の輝きに染まり、柔らかな風が運ぶ甘い囁きに、身を委ねてしまいたい……。

時には、しこたま痛飲した。住み込みの給仕から、ファン・モークは貴方ほど飲めなかったと、妙な褒められ方をした。紅灯の巷に梯子をすることもあった。

そして、全てを超克し、調和に導く魔法の呪文のように、阿部は、真摯であらねばならない、と誓った。

文学者の良心が導き出した救いなき救い、解決なき解決ではあったが、呪文に縋る^{すが}ように、阿部はその信念を繰り返し自分に言い聞かせた。

まずは、インドネシア人に対して、真摯でなければならぬ。

日本軍が新たな支配者として彼らを押さえつけ、驕り高ぶるようなら、オランダの弊を塗り替えるだけになる。彼らは日本軍を歓迎した。ならば一層、日本人は彼らに対し、誠実慎重を尽くさねばならない。

また、オランダの知の業績に対しても、真摯でなければならない。

ボイテンゾルフ（ボゴール）の植物学者など、篤実な研究を続けてきたオランダ人学者が収容所に囚われている現実に対処すべく、阿部はその監禁リストを持つて今村軍司令官にかけ合った。

今村の答えは、簡潔だった。

「学術研究のため文化財の保護は必要である。戦争の仕方にも新しい精神の誕生があつていい」——。

何人かのオランダ人学者が釈放され、日本統治下でも研究を続けるようになった。阿部の勇気ある「善行」の噂は、現地のオランダ人社会にも広まった。

しかし、阿部の発熱は、その後もなお、たびたび続いたのであった。

*

*

宣伝班の音楽に関わるメンバーのうち、最高実力者は飯田信夫だった。

山田耕柁門下の作曲家であり、特に一九四〇年に発表した国民歌謡「隣組」が大ヒットして以来、国民的な人気を博する存在となっていた。

「とん とん とんからりと 隣組——」

戦時色の強まる世相にあつて、明るく健やかなメロディーを紡ぎ出す飯田の才能は、ジャワでも期待されていた。

文学者が阿部のほかに、武田麟太郎や北原武夫など、名の通った大物が何人もいたのに対して、音楽方面では、唯一飯田だけが巨星であつた。その分、ひとりでごさねばならない仕事は多かった。

音楽、とりわけ歌は、民衆宣撫を考える時、誰もがすぐに思い至る手段である。軍の要請を受けて、飯田はジャワ占領からひと月もたたぬうちに、新時代にふさわしい歌を発表した。

「インドネシア万歳」——。作詩はジャワ経験が豊富で、インドネシア語に堪能な市来龍夫が担当した。親しみやすいメロディーによってインドネシア人の愛国心や団結心を涵養し、大東亜共栄圏のスローガンを理解させ、日本とインドネシアの融和に尽くすことは、ジャワ軍政を通して続いた飯田の仕事で

あった。

半年ほど後になるが、両国民族融和の歌「八重汐」が、今村軍司令官の発案に基づき広く一般公募によって作られた際にも、音楽は飯田の肝いりで完成された。この歌は、「南方唱和の歌」という副題を付されて大がかりに発表、宣伝され、そのための映画まで作成されたほどであった。

飯田のもうひとつの仕事は、放送であった。

蘭印時代、ジャワでは「NIZROM（ニロム＝オランダ領東インド放送会社）」がラジオ放送を流していたが、日本軍による占領とともに接收され、宣伝班が管理することとなった。実際の運営は、放送の経験が豊富な飯田の手に委ねられた。

本局であるバタヴィア放送局はガンビル広場に面し、宣伝班本部とも近かった。飯田は、毎日この放送局に通うようになった。

放送局にはフィリップス製の近代的な放送機器が並んでいた。演奏室は、冷房付きであった。もつとも、別途設けられた現地人用の演奏室の方は、狭い上に設備も粗末で、冷房もなかった。

ニロム放送局の責任者は、接収と同時に収容所送りとなったが、技術職員はそのまま残され、日本から応援が来るまでは彼らの手を借りながら、日々放送を出し続けた。

宣撫工作を使命とする都合上、放送はニュースなどの報道番組が軸となり、それらは、軍司令部の意向が露骨に反映されることになったが、娯楽として音楽と伝統芸能は放送が許されていた。飯田は、この音楽放送を直接手がけることになった。

音楽番組には、ガムラン音楽などジャワ伝来のものや、日本の軍歌や愛国歌の紹介に加えて、洋楽があった。西洋音楽は、ドイツ、イタリアなど同盟国の音楽に限られ、英米などの敵性音楽は排除された。

エルガーやガーシユインはご法度だが、モーツァルトもベートーヴェンも安泰であった。

オランダ時代、ニロム・バタヴィア放送局には、専属のオーケストラがあった。日本軍の占領によって、いったんは解散されていたが、飯田は、新たに専属のオーケストラを組織することを決め、公募した。

日本軍による占領後、オランダ人や西洋人の多くが生活の目処^{めど}を失っていたので、経済的にも、また身分もそこで保証、保護されるのであれば、希望者がはいはずはなかった。結果的には、以前のメンバーを中心に、オランダ人、ロシア人など四十人あまりのオーケストラが編成された。

バタヴィア放送管弦楽団が、こうして飯田の手兵となった。

飯田はもともとコントラバスを学び、音楽の道に入った。師の山田耕筈はたびたび、新交響楽団などの指揮台に立ち、多くの曲のタクトを振ったが、飯田自身は作曲家として名は上がっても、自作の曲を稀に指揮することを除けば、そうした機会にはほとんど恵まれなかった。

ある意味では、「隣組」などの国民歌謡の才能に突出していたことが、飯田を「正道」から遠ざけていた。時代と社会は、国民歌謡の作曲を要請してやまなかったのである。飯田はそうした要請に応じて、「朝だ元気で」「アジヤの力」など、国民が広く口ずさむ歌を作り続けた。

映画音楽の作曲は、国民歌謡では埋めることのできないものを満たしてくれる仕事だった。東宝映画の専属作曲家として、この六年あまりで二十五本もの映画作品の音楽を手がけてきた。主題歌の作曲もあれば、映像に合わせて音楽をつける劇番の仕事もあった。

結婚も、映画がきっかけだった。飯田は女優の夏川静江（静枝と改称するのは戦後）と恋に落ち、妻としたが、夏川の主演する「百万人の合唱」（一九三五）、「女性新装」（一九四一）で音楽を担当するなど、銀

幕での縁が私生活にも実を結んだ形となった。娘かほるの誕生の報せを、ジャワに向かう途中、台湾で聞いたばかりである。

十九世紀の作曲家が歌劇場でした仕事を、二十世紀の作曲家は銀幕にぶつけるのだという自負はあった。だが、劇番の仕事は、オーケストラ用に作曲し、録音時には指揮もするものの、楽器編成など小規模の場合が多く、手間隙かけてというわけにはいかなかった。そこで物を言うのは職人技であって、純粹な芸術性はどうしても二の次となった。

それがいきなり、四十人のオーケストラを自由に使える指揮者になったのである。飯田は喜び、有頂天になった。

オーケストラとの初顔合わせの時には、さすがに緊張した。西洋人ばかり四十人が楽器を手に集まり、指揮台に立つ自分の指示を待っている。

飯田は、彼らを相手に初めてタクトを振る曲として、ヴェルディのオペラ「椿姫」の代表的場面をオーケストラ用に編曲した「椿姫幻想曲」のスコアを用意した。以前、ビクターが「家庭名曲アルバム全集」というSPレコード集を出した時に、中央交響楽団を相手にこの曲を振り、録音した経験があるからだった。

歌劇の冒頭と同じく、霧のもやのような静かな弦の囁きから曲は始まり、やがて「乾杯の歌」の旋律でフルオーケストラの華麗なアンサンブルに達する。

演奏が始まってすぐに、飯田は日本で経験したオーケストラとはレベルが桁違いに異なることを知った。

響きがまるで違う。弦の艶^{つや}、張り、管の膨らみ、ふくよかさなど、本場で鍛え上げられた個々の音楽

性が、重なり、響き合って、見事なハーモニーをなしている。タクトを振りながら、飯田は唸った。

ラジオ放送での通常の出演に加え、月に二回ほどは、放送管弦楽団の公開演奏会を行なうことを、飯田はその場で決めた。

ベートーヴェンの交響曲をやる。合唱つきの「第九」は無理でも、「英雄」も「運命」も「田園」も、このオケならびでできる。ハイドンも、モーツァルトも、もちろんOKだ……。

まるで、ウィーンカベルリンにでも留学したかのように、飯田は興奮した。

このジャワで、自分は音楽の王道を歩むのだ。三十八歳にして、「隣組」の作曲家はふたたび音楽家として正統の道に回帰する……。

飯田は武者震いを禁じ得なかった。

リハーサルを終え、胸の火照りを抑えながら、これからの方針を楽団員に説明した。

そこに、宣伝班班長の町田敬二が近寄って来た。

「飯田君、ビッグニュースだ。我々ほとんどない宝物を手になっただぞ。かのリリー・クラウスが、ジャワに残留している。君、彼女との共演も夢ではないのだ！」

第六章 ニロム放送局

久しぶりに見る、バタヴィアの町だった。

溢れる陽射しが、官舎の屋根にも民家の^{ひさし}にも撥ねている。物売りや客引きの声、自動車や馬車の音が、南国の都市らしい独特の喧騒を立てている。

あちこちに翻る日章旗や、日本語とインドネシア語で書かれたスローガンを除けば、街の光や音は、少しも変わらない。戦火の傷跡が見られないことに、リリーは少しホッとした。少なくとも、その町は自分の知るバタヴィアだった。

だが、郷愁に浸る余裕などなかった。不安と緊張が胸を締めつけている。隣りに坐る夫のマンデルも、同じに違いない。リリーの手を握る彼の掌が汗ばんでいた。

リリー夫妻を乗せた車が向かうのは、ジャワ軍政のヘッドクォーター、軍司令部だった。バンドンの自宅に兵士の迎えが来て、汽車の中でもずっと見張りがついていた。そして今、バタヴィアの町を走る軍用車に、二人は有無を言わずに乗せられているのだった。

召喚状が届いたのは、つい昨日のことだ。破竹の勢いでジャワに進駐した軍隊のやることだから、何事にも迅速をモットーとするのだろうか。だが無論、迅速を強いられる方は、たまったものではない。「マダム・クラウス、どうです、バタヴィアの町も明るくなつたでしょう。インドネシア人は我々を歓迎して迎えました。植民地支配は終わり、新たな夜明けが訪れたのです」

自分らをバタヴィアの駅まで出迎えた男は、宣伝班班長の町田と名乗った。一応は敬意をもって接してくれているが、腹の底は読めなかった。

日本の占領とともに収監された旧政府関係者はさておき、バンドンに暮らす西洋人で、わざわざバタヴィアの軍司令部まで召喚された例など、聞いたことがない。誰が、どういう理由で自分を呼ぶ必要があるのか、リリーには見当もつかなかった。

今にして思えば、何故、バリになぞ留まって、早く出国してしまわなかったのかと、悔やまれてならない。最後の楽園にいれば、世の中の馬鹿騒ぎから逃れられると思っていたが、地球を席捲する黒い魔手は、予想もなかった方向から攻め寄せてきたのだった。

真珠湾攻撃の報に接して以後、バンドンに戻り、出国の手立てを探ったのだったが、すでに海路は危ないとのことで、結局逃げ場を失ってしまった。自分だけでない、ジャワに滞在していたほとんどの西洋人が、同じように出国の機会を逸してしまったのだった。

車はやがて、国王広場の横に出た。広場の外観は変わらないが、名前はガンビル広場に改められたと、町田が説明した。ほどなくして、車は軍司令部の前で停まった。

車を降りる段になって、町田は初めて自分らを召喚した相手を打ち明けた。

「長旅ご苦労様でした。今から、ジャワ軍政の最高責任者、今村軍司令官に謁見いたします」

軍司令部には、軍服を着た兵士ばかりが詰めていた。皆、きびきびと行動している。ジャワを九日間で攻め落とした軍隊の兵士たちである。その総指揮官となれば、全身を鎧で固めたような、取りつく島のない強面の男に違いないと思われた。

控え室で待たされるわずかの間に、リリーとマンデルは昨日以来、何度も話し合ったことを手短かに確認した。

リリーは、枢軸側であるハンガリー国のピアニストである。マンデルは、ドイツに与するオーストリアの人間であり、ユダヤ人であることは、決して自ら名乗らない。また、イギリス政府の世話になって身分証明書を発行してもらったこと、そしてこの後はニュージーランドに行つて国籍を取得する予定であることなどは、いっさい口にしない……。

ほどなく町田がふたたび顔を出し、リリー夫妻は司令官室に招き入れられた。

大きな執務机を回り込むようにして、こちらに歩み寄るひとりの男がいた。背の小さな、小太りの、温和な表情を湛えたこの男が、自分らを召喚した当の相手だとは、握手の手を差し伸べられるまで、気がつかなかった。強面で偉丈夫の軍人という予想したイメージからは、あまりにかけ離れていて、ちょっとおかしくなるほどだった。かつて京都の寺で見た達磨像のようだと、リリーは思った。

「音楽に関しては門外漢ですが、世界中で演奏をなさっている大変に著名な方だと伺っています。六年前には、日本でも公演されたとか。戦争とはいえ、ジャワから出られなくなってしまったことに、同情を禁じ得ません」

予想外のソフトな切り出しに、思わずリリーはマンデルと目を合わせた。夫も、相手の真意が見えずに、面食らっている。

リリーが日本での思い出をいくつか語ると、軍司令官は肯いて、微笑んだ。そして、通訳がいるにもかかわらず、ゆっくりとした英語で、じかに話しかけてきた。

「私は昔、駐在武官としてロンドンにいたことがあります。二十五年近くも前のことです。ロンドンでも、公演はなさいましたでしょうね」

話がロンドンに及び、リリーは緊張した。演奏活動に限って、事実を答えた。

「何度か公演していますが、ウイグモア・ホールでのリサイタルが多いですね」

「ウイグモア・ホール……どこになりますか？」

「繁華街のオックスフォード・ストリートのすぐ北です。ピアノ演奏にはふさわしい小ホールがあります」

「オックスフォード・ストリート……懐かしいですな。散歩や買い物に、よく歩きましたよ」

今村は、そう言つて、しばらく思い出に耽るように目を細めた。

「ところで……、ご主人はどうしてオーストリアからドイツの国籍に変えておられないのですか。オーストリアはドイツと合併し、ひとつの国になったはずですが」

質問が核心部分に触れてきた。召喚の真の理由は、これに違いなかった。自分らが「敵性」であると断定されたら、どのような恐ろしい目に遭うか知れたものではない。

マンデルは、汗を拭った。努めて狼狽を隠そうとするのだが、本人がそう努力すればするほど、かえって緊張が表に出てしまう。

「私は第一次大戦にはオーストリア軍の兵士として出征し、ドイツ軍とともに戦いました。ベルリンで仕事をしていたこともありますし、ドイツには友人も多いのです。しかし、ドイツ国籍に変えていない

のは、それは、その……、自分はヒトラー総統が嫌いだからであります！」

リリーは、我が耳を疑った。開いた口が塞がらない思いだった。よりによって、最も避けるべき扉を、夫は自ら開けてしまった。やはり、いざという時になると、この人は嘘のつけない学者なのだ……。

目を丸くしたのは、今村も同じだった。広い額に汗を滲ませている目の前の中年男を、改めてしげしげと眺めた。

馬鹿正直、というのはこのことだったろう。日本がドイツと軍事同盟を結び、英米と戦争をしているその渦中に、盟邦の最高指導者の悪口を、日本軍の代表に向かって公言したのだ。小賢しく立ち回る人間なら、最後の最後まで口を割らぬであらう胸の内を、この男は初対面の自分に開陳してしまった。

底抜けのおかしさが込み上げてきた。誰憚ることなく、^か呵々大笑したい衝動に襲われた。次の瞬間、抑えていた感情が爆発したように、今村は腹をゆすって笑い出した。

軍司令官の意外な反応に、リリーとマンデルは驚き、その顔を見た。

「いや、失敬、失敬。あまりに愉快だね。実は、私も個人的には、ヒトラーのやり方が好きでないのです。マンデル博士、ではお尋ねしよう。ヒトラーのどこが嫌いですか？」

ユダヤ人への虐待については直接触れずに、マンデルはもう少し概括的にその政策を批判した。

「自国民も、周辺国も、何もかも力ずくで押さえつけようとする態度は、納得できません。一時的にはそれで通るかもしれませんが、最後には敵を増やすことになりましょう。国の舵取りをする者は、もう少し寛容と博愛の精神を持つてほしいものだと思います」

「ほう……」

仁の武將は、ふたたび目を丸くした。日頃の自分の信念と、明らかに相通ずる内容だった。ひよっと

すると、芸術家や学者は、どこか軍人に似ているのかもしれない。少なくとも、商売人に感じる違和感
は、この人たちにはない。

「戦^{いくさ}とは、力と力のぶつかり合いです。一見、力が全てのように見えますが、それだけでは信は得られない。勝つてなお、身を慎むところがなければ、足元から崩れ落ちることになります。我が軍の將兵にも、常に言い聞かせていることです。そうですか、あなた方は、ヒトラーが嫌いですか……」

ふたたび、今村はひとしきり愉快そうに笑った。

「ご安心下さい。日本軍政下においても、あなた方の音楽活動は自由です。ジャワから出ることは、戦争終了まで待っていただかなければならないが、島内では自由な演奏活動を保証します。どうぞ、その名演奏で人々をお慰め下さい。音楽を聴く者が、博士のおっしゃる『寛容と博愛の精神』に少しでも近づけることができるよう、ご尽力下さい。島内の移動に関しては、軍司令部から通行許可証を発行させましょう」

胸に重くのしかかっていた不安は、一掃された。

リリーの胸は弾んだ。踊り出したいくらいだった。その人が日本人でなく、軍司令官でもなかったなら、そのまま抱きついて、頬にキスの嵐を浴びせたいほどだった。

マンデルも、放心したように、顔を強張^{こわば}らしていた緊張をほどこしている。

今村は言葉を続けた。

「ひとつだけお願いがあります。抑留された西洋人のために、慈善演奏会で弾いていただきたい。戦争なので、彼らをこれまで通りしておくわけにはいかないが、それでも、慰安は必要です。文化や芸術に触れることで、単調な抑留生活を楽しめる力も湧いてくるに違いありません」

「お願い」が、自由と安全を得る「条件」であつても構わなかった。自分のピアノ演奏で慰めを得たり、勇気を得たりする人がいるなら、どのような場所、機会にでも鍵盤に向かうだろう。

リリーは、躊躇うことなく、快諾の旨を今村に告げた。

軍司令部を出、ふたたび町田の案内で車に乗った。向かう先は、ニロム放送局だと告げられた。

国王広場（ガンビル広場）を反対側に回り込んだ先なので、歩いても訳ないのだが、車が用意された。さきほどまでは囚人護送車のように思われた黒塗りの乗用車が、今は自分らへの敬意の現われのように感じられた。

町田は明らかに興奮していた。

「やはり、軍司令官に直接お会いしたのは、正解でした。今村さんなら、きつとお分かりいただけると信じていたのです。途中に何人も人を介していたのでは、こうはいきません。それにしてもご主人、ヒトラー総統の話が出た時には、正直言つて肝を潰しましたぞ。その件は、今後はどうぞ内密に願います」

ニロム放送局は、オランダ時代とほとんど変わりがなかった。「ニロム」とは「オランダ領東インド放送会社」の略称であるから、その名が日本時代にも続くのはおかしいのだが、通称として、日本人たちは従来通りの名で呼んでいた。

なかには、顔馴染みのオランダ人のスタッフもいた。ボスは日本人に替わってしまったても、現場のスタッフたちが、無事に仕事を続けている姿を見るのは、嬉しいことだった。

そういう旧知のスタッフに会うと、リリーは喜びも露わに駆け寄つて、その頬にキスの挨拶をした。

躊躇いのない、あつけらかんとした振る舞いに、キスをされた方が周囲の日本人の視線を気にしておどおどするほどだった。

リリーは、町田からひとりの日本人を紹介された。

宣伝班に属する作曲家で、放送業務の監督も任されている。また、放送管弦楽団の指揮も行なうという。名前を、飯田信夫といった。

「お目にかかれて光栄です。日比谷公会堂で貴女の演奏を聴いて以来の、熱心なファンのひとりです」
南の国に、桜の花が舞った……。

春爛漫の東京の演奏会を、リリーは思い出した。熱気に満ちた聴衆のなかのひとりが、突如として戦時下のジャワに立ち現われたのだ。リリーは、時と場所を自由に操る魔法にでもかけられたような気がした。

飯田は、日本人にしては背が高く、痩身だった。四十近いはずだが、こざっぱりとしたなりに、青年の気風を漂わせていた。リリーは、初対面ながら、この音楽家に好感を持った。

「マダム・クラウス、お願いがあります。私どものラジオ放送のために、演奏していただけないでしょうか。ご同意いただければ、定期的な番組枠を確保したく思います。ジャワにこれだけのピアニストがいる。その価値を、すべからず島民に知らせたいのです。インドネシア人にも、日本人にも、残留西洋人にもです。戦時下の世にも、文化の香りを届けたい。人々の心に、潤いを与えたいのです」

真摯な申し出に聞こえた。真つ直ぐに、こちらの目を見ながら語られたその言葉には、嘘がないように思えた。だが、リリーはすぐには応じなかった。

「少し、考えさせて下さい。バンドンの家からだ、通うだけで半日はかかります。夫にも相談せねば」

なりません。少しの間、夫と二人だけにさせていただけませんか」

リリーは、一時間後に戻る約束をして、マンデルとともに外に出た。放送局の前に広がるガンビル広場に入り、木陰に腰をおろした。

「貴方はどう思ってた？ 日本軍が仕切る放送局での演奏は、街でリサイタルを開くのととは違うことくらい、私にも分かってよ。こういう情勢下に、日本と関わりを深くするのは危険かしら？」

「断れば断つたで、立場は悪くなるだろう。今の情勢を考えれば、多少の協力をする方が、身のためだとは言える。だが、オランダ人やイギリス人のなかには、ラジオ出演を快く思わない連中が出てくるだろうね」

広場では、子供たちが風揚げをしていた。丸や四角の風が高く青空に翻るさまは長閑^{のどか}そのもので、とても同じ空の下で殺し合いが行なわれていることなど、信じられなかった。皆インドネシアの子供のようだったが、鳥や蝶の絵が描かれた風のなかには、日章旗を描いたものもあった。

「リリー、君が昔から日本最良なのは知っている。今日会った日本人も、個々人として見れば、東京や大阪で会った人たちと同じ感じを受ける。だが、そういう人ばかりではないことも頭に入れておかねばならない。今は戦争中なのだ」

「確かに私は日本が好きなのでしょう。ジャワから出られなくなってしまったのは日本軍のせいだけだけど、その日本軍にさえ、恐怖と同時に、何がしかの期待だってないではないの。オランダやイギリスのやり方と違う、新しい未来が開ければいいって、そう願う気持はあるわ……」

リリーは、そこでいったん口を噤^{しむ}んだ。風揚げの子供たちのはしゃぎ声が、風に乘^のって聞こえてきた。土地の少年たちの具体的な言葉までは聞き取れなかったが、遊ぶ子供の声には、何国語ということを超

えて、音楽のような世界共通の響きがあるように思われた。

「私が今考えているのは、日本人に頼まれたから弾こうか、というようなこととは違うの。頼まれるのも、聴いてもらうのも、何人^{なんにん}なんて、関係ないのよ……」

マンデルには、リリーの言おうとしていることが、次第に察せられてきた。

「君は、抑留者のために弾くことに同意した。もちろん、同情や慈善という気持も強いだろう。しかし、それ以上に、君は弾きたいのだと思った。君の演奏を欲する人々がいれば、君は弾きたいのだ、違うかね？」

「私はピアノストよ。私の音楽を望む聴衆がいれば、いつだって私はピアノを弾きたい。これ以上、シンブルなことはないわ。ピアノストはピアノを弾くのが天命なの。鳥が歌を歌うのと、同じよ」

そう言っ、リリーは改めて夫の顔を見つめた。

穏やかな慈愛に満ちた表情が、自分の結論への同意を語っている。もつとも、もしリリーの結論が正反対のものであっても、この優しき夫は同様の眼差しを向けるに違いない……。

リリーは、月に三度、放送局での演奏のためにバタヴィアまで出向くようになった。出演を週後半にしてもいい、週末はそのままバタヴィアに滞在して、週明けとともにバンドンに戻るような生活が続いた。常にマンデルが一緒であった。

出演する番組は毎回三十分の枠であった。モーツアルト、ベートーヴェン、シューベルトなど、リリーは、ウィーン古典派の音楽を中心にプログラムを組んだ。敵国である米英の音楽家の曲は避けるように言われたが、リリー本来のレパートリーからすれば、何の問題もなかった。

飯田の対応は、丁重のひと言に尽きた。リリーの演奏を放送する責任者として番組送出を監督するのはもとより、楽譜の確保から、マンデルの注文に応じた書籍の手配、また出演後の饗応など、リリー夫妻の面倒を事細かに見た。

自分の管轄する音楽番組のなかで、リリーが図抜けた存在であることは、誰よりも飯田自身が承知していた。ある意味では、音楽という分野を超え、日本の治める新生ジャワ全体にとってさえ、宝のような輝ける星であった。

だが、そうした義務感や使命感を超えて、飯田は個人としても、リリーと一緒に時間を心底楽しんでいた。音楽上の知識を教わることもあったし、快調でエネルギッシュな性格は、隣りにいるだけでそのオーラに染められ、不思議な充実感に満たされるのだった。

世界の檜舞台で活躍する音楽家とは、このようなものかと、飯田は感心することしきりであった。と同時に、戦争がきっかけとなって、このような大芸術家と親交を結ぶことになったことを、奇妙な縁だと感じるのだった。

黒髪に黒い瞳ということもあって、時にはリリーがまるで日本人のように身近に思えることもあった。人懐っこく、愛想のよい人柄に、長年の知己かと錯覚することさえあった。そうした感情が胸に湧くたびに、飯田はおかしさを堪えながら、我が身の僥倖を噛みしめた。

バンドンのリリーの家にも、打ち合わせの名目で、再三再四出かけた。家族団欒のなかに身を置くと、飯田は戦争や時局ということを忘れた。そして、自分の努力や精進によって、この稀代のピアノリストのジャワ生活が、少しでも愉快な、いや、せめてなるべく耐えやすいものとなることができるよう、祈るような気持になるのだった。

ラジオの放送番組がどれほどリスナーに親しまれたかはともかく、リリーの演奏は熱心な聴衆を生んだ。ほかでもない、宣伝班の主だった文化人たちが、演奏のある日になると放送局に集まり、スタジオの隅でリリーのピアノに耳を傾けるようになったのである。

それは、まるでサロン・コンサートのような雰囲気だった。作家や詩人、画家など、職業はまちまちであったが、皆、音楽に対する態度は、真剣そのものだった。リリーは、水を打ったような静けさのなかに熱気を秘めた日本の聴衆を思い出した。

リリーの演奏に集まる文化人のなかには、阿部知二もいた。同宿の作家北原武夫とともに、その日になるとニロムに通うのを愉しみた。

阿部は特に音楽に詳しいわけではなかった。しかし、リリーの演奏を聴いていると、自分らの置かれた状況を忘れて、純粹な感動に誘い込まれるのを覚えた。一心にピアノに向かうリリーの姿に、惚れ惚れする思いがした。戦争など、どこの話かと感じられた。芸術の功德とは、こうしたものなのだと考えさせられた。

リリーの演奏に集まる宣伝班の面々は、皆同じ気持に違いなかった。与えられた業務には身を挺して当たっているが、精神的な渇きを覚えて仕方がないのだ。リリーの生演奏だけが、その渇きを癒す文化的な潤いだった。

阿部は、リリー夫妻に紹介された。宣伝班のなかでも英語力はぴか一なので、集まった日本人を代表して阿部が話すような形にもなった。ともに茶を飲みに行くこともあった。音楽に関してだと話は長く続かなかったが、文学や哲学の話となれば、阿部も知識は豊富だった。おのずから、リリーとより、マ

ンデルと話し合う時間が長くなった。

阿部にとって、マンデルは初めてじかに接する西洋の教養人だった。かつて師事したことがあるというフランスの哲学者ジャック・マリタンの話などを聞くと、ヨーロッパの大学に留学しているような気になった。阿部が英文学者だと知ると、マンデルは喜び、作家のH・G・ウェルズは長年の友人であり、彼の作品のほとんどをドイツ語に翻訳したと述べた。いつかは阿部自身の手で日本語にも翻訳してほしいと、社交辞令も加えてマンデルは微笑んだ。

その微笑みを、快く阿部は感じた。礼節の形としても、美しいと思った。リリーの奏でるピアノの和音のような、澄んだ心地がした。イギリスだ、ドイツだという国を超えた、西洋の教養そのもののように見えた。

阿部はモダニスト文学の旗手として文壇に登場した。二十世紀作家として、現代の空気を呼吸し、世界の作家が抱える問題意識を同時代的に共有するという自負を持ってきた。畳の部屋に暮らし、和食を摂ってはいても、コスモポリタンとしての自覚があった。

ジャワとの邂逅は、阿部にとって、まだ見ぬ西洋を幻視するものであった。だがそこが本物の西洋ではなく、自分がそこに存在するのは西洋を否定するためであるから、足元はいかにも覚束なかった。

リリー夫妻との交際は、阿部本来のコスモポリタンの意識を満たすものであった。崩れかけていた作家の脊髄を、ふたたび真っ直ぐに矯正するものであった。阿部は、ジャワに来て初めて、心に調和を得るように思った。

互いに打ち解けてくると、リリーは阿部に対して、忌憚なく胸の内を明かした。

「この戦争は、いったいいつまで続くのでしょうか」

「私たちの暮らしは、この先さらに悪くなり、追い詰められていくのでしょうか……」

そうした質問を受けると、阿部は同情心を掻き立てられはしても、何も具体的な返事はできなかった。不甲斐なくあったが、無責任にその場凌ぎの気休めを口にする愚劣さは避けたかった。

「そうね、貴方も、何も言えないわね……」

リリーの眼差しが遠く虚ろになるのが、阿部には悲しかった。そういう場になると、決まってマンデルがユーモア交じりに話題を変え、明るい雰囲気を保てるように努めた。この男の西洋的な教養に、阿部は救われる思いがした。

*

*

軍司令部で将校当番をしていた奥田耕天一等兵に、ふたたび宣伝班での勤務が言い渡された。ジャワ占領から一カ月半ほどがたった四月末であった。宣伝班が接収した放送局に、兵士として泊りがけで詰めることとなった。

着任してしばらく後のこと、廊下を歩いていると、スタジオの方から素晴らしいピアノの音が聞こえてきた。副調整室に回って覗くと、女性ピアノリストがひとりで練習をしていた。初めは後姿しか見えなかったが、横顔が見える位置にまで移動して、驚いた。

放心したように立ち尽くす日本の兵士を見て、オランダ人技術者のデ・フリースが声をかけてきた。「リリー・クラウスという、世界的なピアノリストだ。オランダ時代にも、よくここで弾いていたのさ。また戻ってきたわけだ」

名前を聞くまでもなかった。ひと目見た瞬間から、その人が誰であるかはすぐに分かった。

日比谷公会堂で聴いたのは六年前になるが、その感動は忘れたことがない。あれほど潑刺とした音楽は、その後も聴いたためしがない。その輝かしい響きが、兵士として戦地に赴いた自分の目の前で鳴っている……。

奥田は、リリーが放送局を訪れるのを待ち望むようになった。練習であれ、本番の演奏であれ、彼女のピアノが聞こえてくれば、近くに寄って離れぬようになった。

リリーが次回の放送に予定するハイドンのソナタをさらっている時であった。リリーは暗譜で弾き、マンデルはピアノから少し離れたところに坐って、膝に置いた譜面を追っていた。横長の、皮革紙で表装された古そうなその楽譜を、奥田も背後に立って、覗き込みながら演奏を聴いていた。

楽譜を窺う兵士の存在に気づいて、マンデルは後ろを振り向いて言った。
「銅版の、貴重本だよ。ハイドンのピアノ・ソナタが全三冊に収めてある。リリーの誕生プレゼントに、私が買ったものさ」

楽譜について説明している間に、マンデルはリリーがどこを弾いているのか、見失ってしまった。すかさず、奥田が譜面を指さした。

「ここです、マンデル博士」

マンデルは驚愕した。日本軍の一兵卒に、これほど音楽を知る者がいるとは、考えたこともなかった。連中は、銃の扱いと突撃の仕方しか興味がないと思っていた。

練習が終わると、マンデルは早速、兵士の音楽の知識についてリリーに語った。奥田は、自分がもともと神学を学んだこと、初来日のリリーの演奏を聴いて感動し、音楽を学び直したこと、その後は教会オルガニストの道に進んだことなどを、手短かに話した。

リリーは興味を持って、奥田の話聞いた。手品師の魔術が、桜の国の演奏会からふたたび聴衆のひたりを目の前に引き出してきたのだ。

「手を見せて下さい」

リリーにそう言われて、奥田は両手を差し出した。小柄な身体なので、女性のリリーに較べても、大きな手ではない。しばらくの間、奥田の手を取って吟味した後、リリーは悠然と言った。

「何か、弾いてみて下さい」

命令口調ではないのだが、有無を言わせぬ力があつた。

促されるままに奥田はピアノに向かい、バッハの「平均率曲集」第一巻から二長調の「プレリユードとフーガ」を弾き始めた。放送局詰めとなつてから、夜になるとそつとピアノの練習を続けているので、鍵盤に触れるのが久しぶりということではなかった。曲の冒頭から右手に速い四連音符が続き、左手はオクターブを跨いで飛び移る動きが続くので、指がもつれたり音を外したりすることがないよう、細心の注意をもって弾いた。

三分ほどの短い曲が終わった。奥田はミスがなかったのとあえずホッとしたが、審判を仰ぐようにリリーの言葉を待った。

「音楽には天国か地獄しかありません。でも貴方の演奏には、そのどちらもありません。それと、歌が圧倒的に足りない。歌のない音楽は音楽ではありません」

「しかし、これはロマン派ではなく、バッハですから……」

「歌がないとは、魂がないということです。魂のないバッハがあり得ますか。譜面通りに手が動いているだけなら、音楽を演奏しているとは言えません。でも、貴方の演奏には、ひとつよいところがありま

した。慎ましかで、敬虔な祈りに満ちている。この心は大事です」

奥田は、思わず肯いた。

「私は、演奏上の細かいテクニックを教えることはしません。ただ、音楽をどう感じ、どのように表現すべきか、この点については教えることができます。私自身、バルトークやシュナーベルからそのように教わりました。どうです、それでもよければ、私のレッスンを受けますか？」

思いもよらない言葉だった。天から降ってきた僥倖に、奥田は飛び上がらんばかりに驚き、喜んだ。

「お、願います。ピアノから発声法まで、何でも教えて下さい」

「では、そうしましょう。週に一度、放送の終わった後に、二時間ほどここでレッスンをします。手始めに、このバッハからさらっていきましょう」

喜びに輝いていた奥田の顔に、やがて影が射した。どれほど嬉しくとも、具体的なこととなれば、避けては通れない問題があった。

「お申し出は、とてもありがたいと思います。でも、週ごとにレッスンを受けるのは難しいかと思っています。私は一介の兵士としてジャワにいます。恥ずかしながら、持ち合わせがないのです。一度や二度ならともかく、毎週のレッスン料となると、とてもお支払いできません……」

リリーはじつと奥田を見た。童顔の兵士に、音楽への真剣な思い以外、何も邪気がないのは明らかであった。ふと、ブダペストの路上で踊っていた貧しい少女の姿が脳裏をよぎった。

「私は貴方に音楽を教えたいのです。日本の兵隊さん相手にビジネスをする気など、はなからありません」――。

こうして、リリーにとって、初めての日本人の弟子が生まれた。その弟子はいつも兵隊の恰好のまま、

レッスンを受けた。

初めてのレッスンの時、リリーは鍵盤に置く手と指の形を、厳しく指導した。しかし、もっぱら演奏の表現について語るのを常とした。奥田に弾かせながら横に立ち、時に指揮をするように、また身振りや手振りを交えて、歌いながら教えるのだった。

奥田の演奏が気に入らないと、「ノー、ノー」と驚くほどの大きな叫び声をあげた。弾き直したニュアンスが気に入ると、顔を輝かせながら「イエス、イエス」と、こぶしを空に握りしめて絶句する。二時間みっちりこの調子でレッスンを続けるので、ついていく奥田も必死だったが、リリー自身も汗だくであった。

これほど真剣で、パワフルな指導者に、奥田は出会ったことがなかった。エネルギー的なレッスンそのものが、もはや芸術のレベルに達していた。これだけのパワーを秘めた人から溢れ出る音楽だからこそ、その演奏は多くの人の胸を打つに違いないと奥田は確信した。

奥田へのレッスンは、宣伝班や放送局でも有名になった。著名な音楽家によるレッスンとはどのようなものか、見学に訪れる者も現われた。皆、一様にリリーのパワーに圧倒された。「神がかりだね」と、揶揄する者までいた。

飯田は、できる限り奥田のレッスンに立ち会った。直接レッスンを受けるわけではなくとも、リリーと奥田のやり取りが自分にとっても大変な勉強になるからだ。二人の邪魔にならぬよう距離を置きながら、しかしリリーの指導の一言一句を聞き洩らさぬよう神経を集中させた。

放送局のスタッフや宣伝班の面々は、リリーを「マダム・クラウス」と呼んだが、奥田は「マダム・リリー・クラウス」とか、日本語の敬称をつけて「リリー・クラウスさん」と、必ずフルネームで呼ん

だ。

「オクダは、純粋な尊敬のあまり、リリー・クラウスという神聖な称号を穢すわけにはいかないのだらう」

マンデルは、哲学者らしく分析して言った。敬意のなせる業にしても、ところ構わずフルネームで繰り返し呼ばれるのは、リリーにはくすぐったかった。レッスンも数回続き、慣れ親しんだ頃に、リリーはこの件を奥田に正した。

「貴方と私は、もうお友だちでしょう。敬称を外して、リリーと呼んでもらって構わないのよ」

奥田は「友だち」と言われて、目を丸くし、頬を赤く染めた。そして、大きく肯いた。

以後、奥田の口から、敬称は外れた。だが、「リリー・クラウス」とフルネームのままだった。前にも増して憚るところなく、いつ、どこでも「リリー・クラウス、リリー・クラウス」とその名を繰り返した。マンデルは微笑むばかりだった。

レッスンは、パツハの「平均率」を終えて、シューベルトの「四手のためのワルツ」に、そしてモーツアルトの「四手のためのピアノ・ソナタ」の連弾へと移った。

世界を代表するモーツアルト弾きと、その曲をひとつピアノで連弾することは、至福そのものだった。連弾は、そのテンポからしてリリーの主導で始まるのだが、モーツアルトとなれば、奥田の演奏への注文にも一段と熱が入った。

「ダメダメ、そんな生温い弾き方では、モーツアルトじゃないわ。絹の半ズボンを穿いて、カツラをかぶった、可愛いロココ調の人形のように扱いたいのなら、それもよいでしょう。でも、私の信じるモーツアルトは、乗馬用のズボンとブーツを穿いた、男らしい男よ。血も涙もある、生きている人間なの。」

ハイドンにはピアノの似合う素朴な愉快がある。ベートーヴェンには巨大な爆発がある。モーツアルトには、息もつかない感じで馬を走らせる疾駆する精神があるのよ！」

スタジオは別天地であった。そこが戦地であることも、自分が兵士であることも、奥田はレッスンの間だけは忘れた。

「リリー、戦争が終わったら、オクダをウィーンに連れて行こう」

マンデルの提案にリリーは肯き、奥田も、ふと明日か明後日にでもそのようなことが実現しそうな気になった。

だが、戦争がいつ、どのような形で終わるのか、その具体的なイメージは、全く奥田の頭に浮かばなかった。

第七章 ハ短調協奏曲

日本の文化人との親交は続いた。リリーのラジオ出演は月三回から四回に増え、毎週末、バタヴィアに出ることになった。

時には、放送局だけでなく、ホテルなどでミニ・コンサートを催すこともあった。聴衆は残留西洋人と日本人の半々であったが、次第に日本人が増えてくるのは仕方がなかった。軍服姿も目立った。

日本軍の管理下にあるラジオ放送にリリーがしばしば登場することを、よく思わない西洋人もいた。

日本軍に利用されていると、嘆き、心配する人がいた。さらに進んで、「利敵行為」だと指弾するオランダ人やイギリス人もいた。

リリーの耳にもそうした声が聞こえてきたが、意に介さぬように努めた。自分はピアニストだ、聴衆がいる限りどこでも弾く、という強い意識があった。それに、国同士の対立はともかく、日本人を前にピアノを弾くことが「利敵行為」になるとは、リリーにはどうしても思えないのだった。

それでも、日本人をよく思わない人たちの気持は分からぬではなかった。リリー自身の身の回りでも、

状況は少しずつ、しかし確実に悪い方向に変わりつつあった。

初めは旧蘭印政府の官吏や軍人に限られていた収容所への拘束が、次第に政庁と取引のあった商人などにも拡大していった。男ばかりではなかった。夫を収監された妻やその子のなかには、民間人抑留所に拘引されていくケースが出てきた。

バンドンの住宅街でも、昨日までは夫のいない家を健気に守っていたオランダ人やイギリス人の家族が、ある日突然、姿を消してしまうことがあった。主の意志に反して空き家にさせられた家は、物悲しく、恨み言を溜めているように見えた。

リリーの家の前には、オランダ時代の学校が建っていた。日本のジャワ占領後、学校は解散され、日本軍が兵舎として使用するところとなったが、門前には常に哨兵が立った。兵舎を外敵の侵入から守るというより、不断に街を監視し、その動きを窺っているように見えた。

いつからともなく、住宅街を監視兵がうろつくようにもなった。ドイツのゲシュタポに当たる「ケンペイ」という秘密警察だと噂されていた。正体の分からぬ「目」の存在に、住民たちは怯えた。

音楽活動を政治に結びつけて立ち回るような姿勢はリリーには無縁なのだが、さすがにマネージャー役のマンデルには、身の保全のためにも日本の当局にある程度の協力をしていた方が妥当だという考えがあった。ラジオ出演の回数が増えたことは、その意味では歓迎してしかるべきことに思われた。

リリーのバタヴィア訪問を待ちかねるかのように、日本の知己たちの方から訪ねて来ることもあった。バンドン方面まで足を運ぶ用件が来ると、彼らはいつもリリー夫妻に声をかけた。リリーに会うために、用件をこしらえているのだと思えることさえあった。一見打ち解けにくいのが、心を許すと徹底して親愛の情を見せるのは、日本人に共通したメンタリティーのようにリリーには思えた。

飯田信夫も、阿部知二も、そのようにして、何度かバンドン詣でを繰り返した。移動だけで半日はかかるので、泊りがけの「出張」であった。宣伝班の仲間や知人が一緒のこともあった。奥田だけは、兵役に服しているのでバタヴィアから離れるわけにはいかなかった。

「バンドンは景色も美しいし、気候も涼しくていい。バタヴィアは暑くてたまりません」

口を揃えたように、皆、そう言い訳をした。しかし、高原の町に来るのが避暑のためばかりでないことは、リリーにも分かる気がした。

バタヴィアを離れて、軍政の現実を忘れ、芸術と文化の仙境に浸りたいのだ。勝利者の顔をしてはいるが、この人たちにも、人には言えない「渇き」がある。リリーは、放送局の演奏を聴く彼らの態度から、そのことを感じ取っていた。

その時も、阿部は他の用件を重ねて、バンドンを訪れていた。数日間の滞在であったが、到着の翌日、マンデルが阿部のホテルまで、ひとりで訪ねて来た。折り入って、頼みがあるという。

バタヴィアの大学に通っていた友人の娘が、オーストラリアに逃亡した両親に合流できずに残留し、生活に困っている。どこか、タイピストにでも雇ってもらえないかという相談であった。

よくよく聞いてみると、娘の親は旧蘭印政府の高官であった。阿部が拘束されたオランダ人科学者を救った話を、マンデルはどこかで聞きつけたのだろうが、政府高官の娘となれば、事は慎重を要するようには思われた。

阿部は、バンドンの科学博物館の管理をする理学士の知人に娘の処遇を相談することにした。青山の日本青年館でリリーの初来日の演奏を聴いたという音楽好きであった。

二日後、世話になるその知人と、もうひとり、やはり音楽好きの知り合いの中尉を連れて、阿部はリリー夫妻の家を訪れた。それまでバンドンで何度か夫妻に会うことはあっても、自宅にまで訪ねて行くのは初めてのことであった。

西洋人と街で自由に会うことはもとより、その家庭に出入りするものは、なおも用心すべき行為であった。市の北郊のリリー夫妻の自宅に着いたのはすでに日が暮れた後であったが、哨兵の目を盗むように、夜陰に乗じて屋敷に入った。

リリーは、スペイン風の黒いイブニング・ドレスの出で立ちで、阿部らを迎えた。黒い髪に黒い瞳、そして黒いドレスが、灯りに映えて、匂い立つような美しさを放った。家に入った途端、外界の緊張は吹き飛んだ。そこは笑顔が反射し合い、笑い声が^{こだま}する別世界だった。

リリーから、夫妻の二人の子供、ルースとマイケルが紹介された。そのほかに、リリー一家を支えているらしい華僑の親子がいた。また、現地人の給仕の男が二人いて、茶菓子や果物、冷たい飲料が次々と出された。

しばらくは、阿部とマンデルの間に、いつものように文学談義が続いた。スタンダールからトルストイにまで、話は縦横に飛んだ。トルストイから話が宗教に及んだ時、マンデルが、戦争が終わったら一緒にインドに行かないかと言いつ出した。

「現在のような世界的混乱は、ヨーロッパ思想だけではどうにもならないことを示している。カルカッタの大学なら、英語で仏教哲学の文献に触れることができるので、自分はそので何年か勉強してみたい。どうです、阿部さんも一緒にして、東西を止揚する平和の道を探りませんか」

曖昧な返事で阿部はお茶を濁したが、浮世離れの学者然とした物言い、この「別世界」でならふさ

わしく聞こえた。

音楽好きの知人らは、もっぱらリリーとの話に興じていた。リリーの口から語られる、欧州音楽界を代表する演奏家たちの逸話に、興味津々の面持ちで耳を傾けた。

そこに、問題のオランダ娘が扉を開けて入って来た。二十歳^{はたち}前の、気品ある娘だったが、陰気を押し込めたように寡黙だった。阿部の目には、華やかな「別世界」に立ち現われた、現実の影そのもののようを感じられた。

「自分の研究室で働いてもらいましょう」

理学士の知人は、学者の実直さできっぱりと言った。阿部とマンデルは、ともに描いたシナリオが功を奏したことを確認して、無言で肯き合った。娘は礼を言ったが、興奮する風もなく、やがて退出した。後は余興になった。

まずは、シェークスピアの「真夏の夜の夢」の一節を、マンデルと子供たちが演じた。次に、マイケル少年が、付け髭にレインコート姿で、ヒトラーの真似をして見せた。阿部も知人たちも無邪気に笑ったが、知人のひとりは軍人でもあり、阿部は少々肝を冷やした。真向かいの兵舎から週番士官か何かがこの場を覗きに来たなら、大変なことになるに違いなかった。

「今度は、私の仕切りでご披露しましょう」

リリーの指示で、ガムランを奏する民族楽器が運び込まれた。と、さきほどから給仕に当たっていた二人の男が、床に腰を下ろし、威厳ある面持ちで楽器を鳴らし始めた。

「実はこの人たちはバリの人で、踊りの名人なんです。うちに逗留しながら、娘たちに踊りを教えます」

リリーの説明に続いて、ルースと華僑の娘が二人してバリの装束で現われ、楽器に合わせて踊り始めた。髪に花を挿し、扇をかざしながら、妖しく身をくねらせる。

踊りそのものは、バリの本場ものには比べようもなかったが、リリーが瞳を輝かせて踊りを見つめるさまを、阿部は興味深く見た。モーツァルト弾きとして世に知られたピアノリストの貪欲な感性には、東西の差やジャンルの溝などは、何ら障害とはならぬものらしかった。

阿部がバリで見聞した踊り手たちの神がかり的な恍惚の熱情について話すと、リリーはたちまち膝を乗り出してきた。

「私がピアノを弾く時にも、同じようにトランス状態になっているのです。アベさんが小説を書く時も、同じようではありませんの？」

目をくると回して語るその物言いが、少女のように愛くるしかった。

それは、放送局で見せるリリー・クラウスの顔とは明らかに違う、ひとりの女としてのリリーの姿だった。家族の愛、夫のいたわりに護られながら、わがままな子供のように活き活きと上気した様子が、黒いシックな服に映えて、リリーをことさら美しく見せた。阿部は、その美しさに酔った。愉しい晩だった。

友人同士の気の置けない親しみに和んだ。学者同士の信義に、実を感じた。人ひとり、窮状を救えたことも気を清々しくさせた。

いつになく気分を昂揚させて、阿部は連れとともにリリーの家を出た。

高原の町の夜気を肌感じると同時に、「別世界」の輝きは飛散し、たちまち軍政の現実に引き戻された。阿部は、哨兵の目を盗み、脱兎のように街路樹の陰へと駆け出して行った。

走る阿部の胸に、切なさが込み上げた。背後に残してきた世界に後ろ髪を引かれる思いがした。光沢に輝くりりりの黒い服を粗相して汚してしまったような、ほろ苦さが突き上げてきた。

阿部のリリー宅訪問は、この時が最初で最後になった。

身体が弱く、体調不良の続いた阿部は、東部ジャワの山間保養地セレクトタに二カ月あまりの療養生活を送り、結局は一九四二年の末には帰国することになった。

徴用としてジャワに赴いた宣伝班のメンバーは、阿部のほかにも大江賢次、北原武夫など、一年たらずで任期を果たし、帰国する者が相次いだ。

ジャワ軍政も、占領直後の初期段階を経て機構整備が進み、八月には中央政府として軍政監部が設置された。宣伝班も軍政監部の下に、十月には宣伝部として改組された。旧ニロム放送局は、軍政監部の外局に当たるジャワ放送管理局として位置づけられた。

こうした流れに沿って、十二月には首都バタヴィアが、本来の呼称であるジャカルタと正式に改名された。

軍政の整備は、自由な雰囲気になった初期の輝きが次第に色褪せていくことを意味してもいた。そのことを象徴するのが、十一月の今村均軍司令官の更迭であった。今村は第八方面軍司令官としてラバウルに転進となったが、ジャワ軍政の自由放任主義が軍中央に嫌われたためとする風説が、まことしやかに流れた。

戦局にもまた、変化が生じていた。一九四二年の六月、ミッドウェー海戦に敗れたことが、破竹の勢いを誇った日本軍の勢いを止め、やがては太平洋戦争の趨勢を逆転させることになった。

戦争の似合わない一兵士にも、変化は訪れた。

奥田耕天は所属する部隊の移転に伴い、年内には東部ジャワのスラバヤに移ることになった。敬愛するリリー・クラウスと別れなければならないのは、奥田にとって断腸の思いだったが、一兵卒の身であれば、従うしかなかった。

半年ほど続いたリリーのピアノ・レッスン、こうして終止符が打たれることになった。

*

*

飯田のオーケストラは、「ジャカルタ放送管弦楽団」と改称された。

宣伝部の他の面々が帰国をしても、飯田は、従来通りの仕事を続けた。軍政上の使命を遂行する義務もあったが、飯田個人としても、放送オーケストラの常任指揮者の立場には音楽家として充実を感じていた。リリーの存在も、大きかった。

オーケストラのタクトにもだいたい慣れた頃、飯田は思いきってリリーに提案をした。

「マダム・クラウス、何かコンチエルトをやりましょう。私のオーケストラに貴女のピアノで、協奏曲をやらせて下さい」――。

十二月に、放送の大きなイベントが予定されていた。ジャカルタからの中継を、日本に向けて生放送するのだが、音楽ものが期待されていた。

八月にも、日本に送る中継放送は経験していた。その時は、対談がベースで、東京のスタジオに菊池寛を招き、こちらは阿部知二に出てもらって、「文人電波対談」を行なった。飯田も出演して、やはり東京のスタジオに招いた音楽評論家の堀内敬三とライブで話を交わした。

今回は、それに勝る華やかな文化行事としなくてはならない。占領初期の試行段階を抜け、ジャワ軍政の整備が進む今だからこそ、輝きに満ちた快挙が欲しい。それには、世界を代表する名花リリー・クラウスと自分の指揮するオーケストラの共演しかない、飯田は考えた。

「そうだ、貴女に出てもらうのだから、やはりモーツァルトがいい。リリー、モーツァルトを弾いて下さい」――。

普段は「マダム・クラウス」と丁重に敬称を使う飯田が、ここぞという時に限ってファーストネームで自分を呼ぶことに、リリーは気づいていた。「リリー」と呼ばれた今、飯田の意気込みは明らかであった。

「南洋の占領地に、文化などないと思込んでいる軍人も日本には多いのです。ジャワ統治は強圧的でなければいけないとする者もいます。でも、私はこのジャワから、最高の文化を送り出したいのです。今のジャワにあるこの価値を、きちんと日本にも分かってもらいたいです」

飯田の眼差しは真剣だった。軍によって送り込まれた人であっても、人間として飯田が持つ質朴な生真面目さは、軍の枠を超えていた。

「阿部は帰りました。奥田も転任します。残った私が守らねばならぬものは、少なくともこの国です。どうか、力を貸して下さい。リリー、モーツァルトを弾いて下さい」――。

リリーは、自分の演奏が占領地発の電波に乗って日本に届けられることを考えた。

飯田の気持はどうあれ、放送は軍の意向に沿うものだろう。日本軍にファンファーレを鳴らすことになってなりかねない。そこに自分のモーツァルトが登場するのは、正しいことだろうか。モーツァルトは喜ぶだろうか。モーツァルトの音楽が、穢^{けが}されてしまうのではないか……。

モーツァルトほど、戦争にふさわしくない音楽はないだろう。憎しみ、対立、殺し合いが、これほど似合わない音楽もない。モーツァルトは、愛の音楽だ。命の賛歌だ。そのモーツァルトが、戦地から届けられて、いいのだろうか……。

だが、ひょっとして……、自分の弾くモーツァルトによって、光を与えられる人もいるのではないだろうか。命の尊さに気づかされる人や、生きる勇氣を受ける人だっているのではないか。

リリーは、ジャワから日本までの長い距離を思い描いてみた。多くの島々、大陸、国々……。いったいどれだけの人々が、この戦争によって苦しんでいることか。

家族や愛する者を亡くし、絶望に打ちひしがれる人もいるだろう。心ならずも戦争に加担し、人間本来の優しさを失いかけている人もいるだろう。家を焼け出された人。自由を奪われた人。生きる意義を見失った人……。

弾かないことは、誰でもできる。弾くことで光を与える、愛を授けるのは、ピアニストにしかできない。それはピアノを弾く者の特権であり、神から与えられた使命なのだ。

リリーの返事は決まった。

「分かりました。やりましょう。でも、どの曲にするかは、私に選ばせて下さい」

そう言って、リリーはしばらく考えた後、返事を待つ飯田に告げた。

「決めました。モーツァルトのピアノ協奏曲なら、『二十四番 ハ短調』にしましょう」

飯田は、即座に承諾した。

「日本の音楽ファンは、貴女がジャワから演奏するのを知って驚くことでしょう。皆、喜ぶに違いありません」――。

本番は十二月十三日だった。

この日の中継放送については、日本でも大きな注目を集め、新聞のラジオ欄でも予告記事が出た。日本の音楽ファンは、かつて日比谷公会堂や日本青年館で新鮮な感動を受けたリリー・クラウスが、久しぶりにラジオ放送に出演して得意のモーツァルトを弾くというので、大いに期待を高めた。太平洋戦争の開戦から一年、戦時色が強まる一方の窮屈な世相にあって、リリー・クラウスの名は、長い沈黙の後に現われた彗星のように燦然とした光明を放った。

ジャカルタ放送局にとっても、この日の中継放送は大事業だった。

スタジオには軍政監部のお歴々や宣伝部の面々も顔を揃えた。副調整室には入りきらないので、数多くの椅子がスタジオに持ち込まれた。

四十人あまりのオーケストラに指揮台、グランド・ピアノと、演奏者たちの占めるスペースだけでもかなりの場所をとる上に、大勢の客のための椅子が並び、大スタジオがいつになく手狭に感じられた。スタジオには、奥田の姿もあった。マンデルと並んで、隅の方に席をとった。奥田は、本人のたつての希望でスラバヤ行きの予定を延ばし、この日の中継に立ち会った。放送がすめば、朝一番の列車に乗って、部隊に合流するはずであった。

放送時間が近づき、スタジオはいやが上にも肅然とした緊張感に包まれた。

東京との間に電波がつながり、「放送中」の赤ランプが点灯した。

飯田は、ピアノの前のリリーと向き合っていると、神経を指揮者に集中させるオーケストラに対し、おもむろにタクトを振り下ろした。

モーツァルト作曲、「ピアノ協奏曲第二十四番 ハ短調（K四九二）」が始まった。

第一楽章は、オーケストラがピアノを描いて先行する。払暁の薄闇のような出だしから、みるみる暗雲が立ち込め、やがて一気に嵐となつて噴き上がる。暗黒の運命が咆哮するハ短調の主題が、フルオーケストラで鳴らされる。怒り、悲しみの爆発である。

ピアノが出る前の、曲の基調を決めるこの出だしの部分を、飯田はリリーとのリハーサルが始まる前に、オーケストラだけで数回合わせた。デモ・ニツシュな感覚を引き立てるよう指示したつもりだったが、リリーが稽古に加わるや、彼女からの注文が出た。もっと迫真に迫って、というのである。

初めは飯田を立てて、指揮者を通して指示を出していたが、やがて奥田のレッスンの時と同じように、身振りも交えて、直接オーケストラに語り始めた。

「もっと大きな悲劇を下さい。ハムレットやリア王のような悲劇を！」

語る言葉はシンプルだが、リリーの熱い言葉に接すると、オーケストラは魔法にかけられたように、違う響きを奏で出す。

それでもリリーは物足らなかつたとみえ、激しさを込めて言葉を重ねた。

「今の世界を思つて！ 戦争の悲劇、これは、私たちのための音楽なのよ！」

次第に、飯田にも分かつてきた。何故、数あるモーツァルトのピアノ協奏曲のなかから、リリーがこの「ハ短調協奏曲」を選んだのか――。

もっと軽快な、朝の散歩にでもふさわしい長調の曲がいくらでもあるのに、リリーはわざわざこの嵐のような短調の曲を選んだ。明らかに、彼女は今の時代の悲劇にこの曲の悲愴感を重ねている。時代の暗黒を嘆き、その先に希望と光明を願っているのだ。

リリーの気持に応えるべく、飯田は力を込めてタクトを振る。オーケストラはリハーサルの時以上に集中力を高め、緊迫した音楽を作り上げる。

厳しい表情のモーツァルトが続く。暗い運命に耐え、必死に歯をくいしばるモーツァルト……。

やがて、リリーのピアノ・ソロが入ってくる。
嘆き、憂えるピアノの調べだ。これほど澄みきった悲しみがあるだろうか。どこまでも透明で、深い悲哀。リリーの演奏はあくまでも端然としている。悲しみに打ちひしがれながらも、尊厳や誇りを捨てていない。苦しみも、それゆえに美しい。

ピアノとオーケストラが微妙に絡み合いながら、曲は進む。漆黒の闇に、赤や黄や橙の色模様がちらちらと夢幻のようによぎる。

色の幻影に導かれるように、ピアノが安らぎに満ちたメロディーを奏でる。花園に薫る愛の思い出が麗らかに流れ出し、潑刺とした生気が蘇る。リリーの手からこぼれ落ちる珠のようなピアノの音が、生命の息吹となって躍動し、光と戯れ、きらきらと輝く。

ピアノとオーケストラは、時に拮抗し、時に唱和しながら、光と闇を激しく交差させる。この世を闇に塗り込めようと暴威を振るう暗黒の運命に、命ある者が光を希求して立ち向かう。死と生のせめぎ合いが、緊張を高めながら突き進んでいく。

やがて、ピアノ独奏によるカデンツァに入る。この部分を即興で弾いたモーツァルトはピアノ譜を残していないので、リリーは自作のカデンツァを弾く。激しいタッチで、怒りと絶望を鍵盤に叩きつけた。カデンツァを経て、ピアノからバトンを渡されたオーケストラが、ふたたび大きく鳴り響く。緊張を緩めることなく、埋めようのない不安の穴をぽっかりと覗かせたまま、第一楽章は卒然と終わった。

第二楽章は、がらりと趣を変えた、静謐と平安の世界である。

短調から長調に転じ、秋の日溜りのような、穏やかなメロディーのピアノ・ソロから曲が始まる。この上なく単純な音の作りに、慈愛に満ちた深々とした情感が溢れる。モーツァルトの緩徐楽章のなかでも、とびきり美しい音楽だ。

やがて、オーケストラの響きがふくよかに重なる。リハーサルの時に、リリーが、「ソフトに。もっと、ソフトに」と叫び続けたところだ。飯田のタクトも、繊細な表情を映して柔らかに動く。

天上の美に輝くメロディーをピアノが歌い、オーケストラは寄り添うように和していく。

時には、悲しみの記憶を思い返すように管楽器が憂愁の風を送る。ピアノは風を受け、流しながらも、悲しみを乗り越え、安らぎに向かおうとする。唇を噛みしめ、雲の彼方に澄んだ青空を探そうとする健気なモーツァルトがいる。

中ほどからは、幸福な平和の思い出を慈しみ合うかのように、ピアノとオーケストラが囁き合い、唱和する。愛し合う恋人のように、息までも重なり合って離れない。

その時であった。

飯田は、管楽器の奏者たちの頬に、涙が伝わるのを見た。ひとりではなかった。オーボエが、クラリネットが、ファゴットが、フルートが、何かが伝染したように、一様に涙を流している。

演奏に支障の出るような号泣ではない。肩を震わせて噎び泣くものでもない。彼らはリリーのモーツァルトと一緒に歌うことで、感動のあまり、静かに泣いているのだ。神々しい感情の高まりに、涙が溢れるのを抑えることができないのだ。

奇跡のような瞬間であった。

モーツァルトにしかあり得ない、尊い命の和がそこにあった。オランダ人、日本人、ハンガリー人、人種や国籍などは関係なかった。いっさいの差を超越して、人間の魂がひとつに溶け合った。その調和の宇宙の中心に、リリーがいた。

リリーは毅然としてピアノに向かい、確信に満ちた澁みない音を紡いで行く。その侵しがたい気品に包まれた。

その凜然たる輝きの極まりのなかに、静謐の第二章は無限の余韻を残して閉じられた。

第三章は、短調に戻り、ふたたび疾風怒濤の音楽となる。

しかし、もはや暗黒の運命が吼えたつ第一章とは違う。ここに脈打つのは、悲劇を克服しようとする剛毅な生の精神だ。悲しみを乗り越えて進むとする意志が、疾風に乘って駆けて行く。

リリーが奥田に語っていた、乗馬用のズボンとブーツを穿いた人間モーツァルトの叫びが聞こえてくる。

短調の厳しさが曲全体を覆うなかにも、ふと春のそよ風を頬に感じるような優しさが漂う。それはすぐ庭先にまで来ている春ではなく、去年の春、いやもつと遙かな過去の春なのかもしれない。だが、たとえそうだとしても、春を忘れるようではいけないのだ。

顎を上げ、胸を張ろう。恐れずに、足を踏み出して進むのだ。どれほど厳しい冬でも、その後には必ず春が訪れる。それは、モーツァルトの確信であり、覚悟である。リリーの信念であり、祈りである。

タクトを振りながら、飯田は気がついた。ここでは音楽が全てを凌駕し、超越している。音楽の真実だけが、スタジオの宇宙なのだ。ジャワ軍政も、戦局も、放送局の思惑も、利に働く全ての現実、この真実の前には色を失い、跪くしかない。

飯田は、リリーの声なき声を聞く。モーツァルトの福音を伝えることを天職と心得る使徒の訴えである。

——憎しみのほびこる病んだ世に、宇宙の真実よ、響け。命を軽んじる軍国主義の時代に、人間の魂よ、声となって広がれ。電波に乗って、ジャワ中に、太平洋に、日本に、全世界に、どこまでも届け……。

その願いを込めて、リリーはピアノを弾く。曲は、コーダ（終結部）を前にした短いピアノ・ソロに入った。

その後からは、一気呵成に終わりへと突き進む。オーケストラがふたたびフルで鳴り、ピアノとともに走りきる。最後の和音が、力強く鳴らされ、曲は悲愴のうちに閉じられた。

「ハ短調協奏曲」は、終わった。

スタジオの壁にオーケストラの残響が染み込まれ、後は沈黙が支配した。放送中の拍手は控えるように言われていたが、そうでなくても、誰もすぐに拍手などできなかったろう。皆一様に、厳粛な感動に胸を塞がれ、すぐには現実に戻ることができなかった。

「放送中」の赤ランプが消えた。

「放送終了です。お疲れ様でした！」

副調整室から声がかかった。その声をきっかけに、拍手の嵐が湧き起こった。リリーと飯田は、固く

握手を交わした。多くの人々が二人を取り巻き、賛辞を送った。

奥田も駆け寄って来た。その目は真っ赤だった。演奏中にずいぶんと泣き腫らしたに違いなかった。「リリー・クラウス、素晴らしい演奏でした。ありがとう、リリー・クラウス。今日の感動を、私はどこに行こうと忘れはしません」

明日には旅立つ兵士の胸にも、リリーのモーツァルトは永遠に刻まれた。

シャンペンにビールが運び込まれた。南洋の戦地から、これだけの内容の中継放送を成功させたことは、放送史に残る快挙であるとされた。

祝辞に続き、乾杯が交わされた。誰もが、顔を輝かせていた。オーケストラのメンバーも、この時ばかりは時局への憂いを忘れて、祝杯に加わった。

何人もの人々——飯田とも、奥田とも、その他の日本人とも、オーケストラのメンバーとも、杯を重ねて、リリーは酔った。ステージの後の独特の昂揚感を、久しぶりに味わった。

マンデルと連れ立って、リリーは宴の終わりそうにないスタジオを後にした。副調整室を経て、出口に向かう廊下に出たところで、オランダ人技術者のデ・フリースとすれ違った。彼は、周囲に日本人のいないことを確かめると、リリーの耳元に素早く囁いた。

「リリー、危ないよ。貴女は無防備すぎる。気をつけないと、危ない……」
デ・フリースの目は、少しも酔っていないかった。

第八章 慈善演奏会

「ディッキー、お願いよ、見て。どれがいいかしら？ 迷ってしまつて、なかなか決められないの」

リリーが両手に余るほどの衣装を抱えて、立っている。どれも自分がデザインしたドレスだったが、迎えの車がホテルに着く三十分前になつても、ステージ衣装が決められないのだ。

結婚して以来、コンサートの当日になると、何度となく繰り返し返されてきたシーンだった。

マンデルは候補となつたドレスのひとつひとつに感想を言う。リリーは、そのアドバイスをもどかしそうに聞くのだが、いつも最後には自分の意志で決定する。

そのリリー流が、今日はどこか懐かしい……。二時間に及ぶような本格的なコンサートは久しぶりであった。リリーの気の張りようが明らかに感じられる。しかも、単なるコンサートではなかった。抑留されたオランダ婦人や子供たちのための演奏会なのだ。

「リリー、相手は不自由を強いられている人たちだ。服装にも配慮が必要かもしれないよ」
「だからこそ、迷っているのよ。でもね、私は、みんなの元気が出るよう、普段以上に華やかな衣装に

したいの。抑留所の中だからこそ、一流のコンサート・ホールに負けない演奏会にしたいの。分かって？ 自由を奪われた人たちみんなを、トップ・ステージに招待するのよ。だから、今日の演奏会にはいっさいの妥協も省略もなし。演奏時間も、弾く曲目も、それに衣装だって、ウィーンの楽友協会ホールに負けないようにするの。いえ、それ以上でなければいけないわ」

「ハ短調協奏曲」の生放送から二週間がたった、一九四二年十二月二十六日――。

この日、ジャカルタ市内で最も多くの婦女子を収容するチデン抑留所で、リリーの慈善演奏会が予定されている。

コンサートは、抑留者へのクリスマス・プレゼントとして企画された。今村軍司令官との約束を果たすことでもあり、クリスマスに合わせたのは、リリーの発案でもあった。飯田に相談し、軍政監部の許可を得て、今日の運びになった。

普段のリサイタルには黒系統の色しか着ないリリーが、今日は結局、珍しくストラップなしの真紅のドレスに、その上から羽織る純白のケープを選んだ。胸元には、ダイヤを散らした大きなペンダントを下げた。

裾長のケープは、背丈に余る長いもので、結婚式の花嫁のように、介添え役が裾を持って従わねばならなかった。言うまでもなく、その役はマンデルであった。

ホテルに來た迎えの車には、飯田ともうひとりの日本人が乗っていた。青木正と名乗った。日本放送協会から派遣された音楽ディレクターだという。麻地の白いスーツにネクタイを締め、眼鏡をかけている。ジャワに着いて、まだ一週間なのだそうだ。

「日比谷でも、青山でも、貴女の演奏を聴きました。そればかりではありません。放送局のスタジオか

らのラジオ放送の際には、私も立ち会いました。お懐かしい限りです」

リリーには当人が思い出せなかったが、ゴールドベルクとの二重奏で、二日にわたって放送局で演奏したことは記憶に残っている。そのスタジオにいた人が、新たにジャワに來た。何だか、東京の縁が次々とジャワで復活するようだ。

「今後、ニロム放送局の音楽番組は私が担当します。今日の演奏会が終わり、落ち着かれましたら、折り入ってお話したいこともあります。何卒よろしくお願いいたします」

「イイダさん、貴方はもう放送局では仕事をしないの？」

リリーは、思わず飯田に尋ねていた。

「ご安心下さい。オーケストラの指揮はこれからも私がします。放送局にも参与として残ります。貴女とは、ずっと一緒ですよ」

車はほどなくして、抑留所の正門に着いた。門番の哨兵に飯田が趣旨を告げ、車のまま中に入った。

チデン抑留所は、ガンビル広場から、西に一・五キロほど行ったところにあるジャカルタ最大の婦女子用抑留所であった。官吏や軍人の夫を俘虜収容所に拘引されたオランダ婦人とその家族のために、一九四二年十月に開所され、民家が並ぶ地区を特別制限居住区と定めて、周囲に塀をめぐらし、まずは二千六百人あまりの婦女子が移された。

リリーは、市の中心からこれほど近くに大規模の抑留所が出來たことに驚いた。門をくぐって以來、車内の会話は途切れた。道の両側に続く家並みに目が釘付けとなった。

どの家も、瓦屋根の軒下に、洗濯物が風に靡靡いている。子供たちが、その傍らで遊んでいた。瀟洒な住宅ではなかったが、とりあえず、人間の暮らしがそこにあることで、リリーは少し安堵した。

コンサートが行なわれるのは、居住区の中のユリアナ学校の講堂であった。オランダ時代からずっと続く学校で、今でも様々な行事に使われるという。講堂には、グランド・ピアノが置かれていた。

夕闇の訪れるのを待ち兼ねるように、人々は学校に集まって来た。病気で臥せている者を除き、抑留者全員がリリーの演奏会に出向いた。身の回りの品だけをトランクに詰め、抑留所に移って来た人々だが、皆、演奏会にはこぞっぱりとした外出着に着替えて現われた。

講堂は、満員となった。入口にも、中にも、銃剣を持った日本人衛兵が警戒に当たった。武器を携行した兵士に見守られて演奏するのは初めてだったが、リリーは努めて気にしないことにした。

抑留者たちが着席を終えた後から、軍服を着た日本人高官の一行が入場し、あらかじめ押さえてあった中央の席についた。抑留所長と、軍政監部や地区を代表する日本人たちであった。最後に、飯田と青木が一行の後ろに腰かけた。

舞台上に照明が当てられ、リリーが登場した。

すぐ後ろから、リリーのケープの裾を持って、マンデルがつき従う。ピアノの前まで来たところで、マンデルはやおらケープを取り払った。燃えるような真紅のドレスが現われ、人々から溜め息が洩れたところで、リリーは深々とお辞儀をした。拍手が講堂を包んだ。

プログラムの前半は、ベートーヴェンの「ピアノ・ソナタ第二十一番ワルトシュタイン」と、モーツァルトの「ピアノ・ソナタ第八番イ短調（K三一〇）」であった。

「ワルトシュタイン・ソナタ」の冒頭の、重厚な和音のリズミカルな連続を、リリーは力強く弾き始めた。演奏が始まるや、リリーの頭には音楽のことしかなかった。衛兵のことなど、意識の隅にもなかった。世界を代表するコンサート・ホールで弾く時と同じ没入感を得ることができた。

聴く方もまた、音楽の流れる間は、不自由の身を束の間忘れて、一流の演奏を堪能することができた。芝居じみたリリーの登場には眉をひそめる思いをした人もいたが、演奏が始まると同時に、そうした違和感は霧消した。音楽が圧倒的な存在として、大きな波のように迫ってきた。

目を瞑って聴く人たちも多かった。音に専念すれば、銃剣の兵士も見ずにすむ。抑留の憂き身も自覚せずにすむ。リリーの音楽と自分の間に、何ら夾雑物を置きたくないという風だった。

「ワルトシュタイン・ソナタ」から、モーツァルトの「イ短調ソナタ」に移った。出だしから激しい悲しみが爆発し、乗馬用のズボンとブーツを穿いたモーツァルトが疾駆した。

曲が進むに連れて、聴衆の間に、独特の熱気が広がっていった。音楽に向かうひとりひとりのひたむきさが、重なり合って、大きな渦をなした。会場全体が不思議な熱の高まりに包まれるなか、演奏会の前半が終了した。

休憩となり、飯田は楽屋へ向かった。青木はその場に残って、刷り上がったばかりの名刺を渡しながら、周辺の日本人と挨拶を交わした。

リリーは上気し、頬を染めていた。汗を押さえながら、冷たい飲料を口にしていった。夜会かファッション・ショーの似合う艶やかなドレス姿なのだが、どこか競技途中のスポーツ選手のような感じがした。このような場所の演奏会でも、こうして全力投球なのは、いかにもリリーらしかった。

「ハ短調協奏曲」に劣らず、「イ短調ソナタ」のモーツァルトも名演でした。抑留者のなかに坐っていると、彼女たちの感動がじかに伝わってきます。やはり、この慈善演奏会はやってよかった」

「私も、物凄い熱気を感じるわ。ちょっと普通にはないコンサートね。世界の一流のステージに負けないものを届けたいと思ってきたけど、ここではない白熱した雰囲気があるの。初めて体験すること

よ」

後半のプログラムは、バルトークの「ハンガリー農民の歌」で始め、ドビュッシーの「前奏曲」を挟んで、最後はシューベルトの「さすらい人幻想曲」で締める構成だった。

演奏が進むにつれて、ふたたび聴衆の熱意がひしひしと伝わってきた。単なる真剣さを超えて、蛍光体が妖しい光を滲ませるように、内側から発せられる強烈な熱を帯びている。

音楽に没頭したい。音楽の魂に肉迫したい。音楽を我が物としたいとする希求が、聴衆全体の意志となつてリリーに忍び寄る。それは、生きることそのもののように真摯であり、必死であった。ぬきさしならないほどに、逼迫し、切羽詰まったものだった。

それほどの渴きをもたらすものが何であるのか、リリーには正体が見える気がする。

人は愛し合うべく生まれついているのに、殺し合いが行なわれている。人は愛する人ともにいるべきなのに、無理矢理引き離されている。人の顔には笑いが似合うものの、怒りに目を吊り上げ、悲しみに泣き腫らしている……。

音楽は、それら諸々の理不尽の対極に奏でられるものだ。だからこそ、理不尽に苛まれ、打ちひしがれた人々が、泉に渴きを癒すように、自分の音楽を求めてやまないのだ。

リリーはそう思い、自分の演奏が抑留者の人々の泉となったことを願いながら、最後の曲のシューベルト「さすらい人幻想曲」を弾き終えた。

音が静まり、ひと呼吸を置いた後に、割れるような拍手となった。

音楽の余韻は消えたが、人々の熱気は醒めなかった。拍手のやまぬうちから、人々は次々と舞台の方に押し寄せた。衛兵が銃剣を突きつけて制しようとしたが、抑留所長が立ち上がって、まあまあという

風に手で合図を送り、納めさせた。

人々はリリーの前に群がった。まるで、リリーが自由な世界の女王でもあるかのように、皆、彼女のそばに寄り、そのオーラに直接触れなくてはいられなかった。

野の花を摘んだ花束を渡す人もいて、リリーの両手はたちまち花でいっぱいになった。

「マダム・クラウス、素晴らしかった」

「リリー、ありがとう」

人々の賛辞や感謝の言葉が続き、握手攻めとなった。

そのうち、誰からともなく、握手の際に、掌の中に小さく折り畳んだ紙がねじ込まれた。言葉もなく手渡されたところから、監視の目を盗む必要があることは明白であった。リリーは、すかさず、花束で隠すようにして、胸元に押し込んだ。そのような紙片が、次から次へ渡され、リリーはその都度、人目を盗んで胸の下着の内側にしまった。

人々の群の最後に、クリステインがいるのを見つけて、リリーは驚いた。前総督夫人も、今は囚われの身なのである。まさか今日、この演奏会場で会うとは予想もしていなかった。

近寄って来たクリステインと、リリーは抱き合い、頬に口づけを交わした。

「素晴らしい演奏会だったわ。オランダ時代の貴女のリサイタルを思い出した。貴女は変わらない。統治者がオランダでも日本でも、貴女は貴女なのね。貴女の音楽は、政治の壁を越えて、人の心に訴える。普通の人に行き届くことなくってよ」

そこまで言うと、前総督夫人は声を潜めて囁いた。

「リリー、お願い。この人たちを、助けてあげて。貴女ならできる、貴女ならきっと」――。

飯田と青木とは、ホテルの前で別れた。食事でも一緒にどうかと飯田から誘われたが、疲れたからと断った。胸元にしまった紙片が気になって、それどころではなかった。

部屋に入るなり、リリーは紙片を取り出してテーブルの上に広げてみた。三十点近くも出てきたが、どれも、煙草ケースほどの大きさの紙に、びっしりと小さな文字が連ねてある。なかには、細かく折った紙幣が挟まれていることもあった。裏側には住所が記してあった。

惹き込まれるように、リリーはそれらの文字を追った。私信には違いなかったが、事情が分からねば対処のしようがないので、次々に目を通した。だが、四、五通読み進んだところで、文字を追うことができなくなってしまうた。溢れる涙に目が曇ってしまったのである。

それらは、抑留所に拘引された人々から、市内に残る親戚や友人に宛てて書かれたメッセージだった。夫との別れを嘆き、抑留生活の不自由や物不足をかこちながらも、何とか無事で暮らしている旨を伝え、愛する人たちの息災を願う気持ちが切々と綴られている。

抑留所から外との通信のやり取りは許されないので、人手に託すとも添え書きがあった。自由な日々の楽しかった思い出を、綿々と書き連ねたものもあった。

今日、演奏会に来てくれた人たちは、このような思いを抱えながら毎日を生き、自分の音楽を聴いたのだった……。

「ディッキー、ディッキー！」

洗面所で花束を花瓶に移していた夫を、大声で呼んだ。驚いて、すぐに夫は駆け寄って来た。

「これを見て、ディッキー。演奏会場で渡されたの」

マンデルは、いくつかの紙片を手に取り、目を走らせた。

「ディッキー、何としても、私たちの手でその手紙を届けましょう。お願い、貴方も力を貸して……」

そこまで言うのがやっとだった。後は号泣になった。大粒の涙がぼたぼたと垂れ、真紅のドレスに染みを作った。

泣きじゃくり、肩を激しく震わせながら、リリーはマンデルの腕の中に飛び込んだ。

「ディッキー、貴方と一緒に、本当によかった。貴方がいなかったらと思うと、私、気が狂いそうよ……」

嗚咽を繰り返すリリーを、マンデルは無言で抱きしめた。勝気なリリーが、珍しく、いつまでも涙の収まることなくあった。

*

*

リリー夫妻をホテルに降ろした飯田と青木は、そのまま車を北に走らせ、下町のコタ地区にある中華料理屋に寄った。華僑が経営し、美味い料理を出すことで知られていた。

飯田と青木は、一九〇三年生まれの同い年で、ともに山田耕筈の弟子であった。仕事の時には互いに敬語を使うが、このような席になれば、昔ながらの気の置けない関係がすぐにも復活する。

東京での縁がジャワで蘇る不思議さを思いながら、二人は紹興酒で乾杯した。運命の糸が縊り出す妙縁の縁には、リリー・クラウドとの「再会」も含まれていた。

「六年半ぶりに、リリー・クラウドの生演奏を聴いたよ。思い出すなあ。彼女の演奏会は、日比谷も青山も、僕はほとんど全部出かけたもの。スタジオで弾いてもらうことになっていたからね。スタジオも

まだ、愛宕山でねえ。内幸町の今のスタジオでも、早く弾いてもらいたいものだよ」

青木は興奮してよく喋った。料理が運ばれるたびに、その美味さに感嘆の声をあげ、杯を重ねた。自然と、新任の青木を、古参の飯田が歓迎の宴に誘ったようになった。

「飯田さんは、クラウスとモーツァルトのピアノ協奏曲をやったんでしょう。いいなあ。相手は世界一のモーツァルト弾きだ。近衛秀磨さんが羨みますよ。ジャワだからこそ、できるんだねえ」

「クラシックだけでなく、軽音楽の方でも、ジャズはここならまだ許される。日本じゃ、もう放送は難しいだろう。ありがたいことに、ジャワはその点、まだ緩い」

「全く、軍のなかには、頭の固い連中がいるからねえ。僕はここへ来る前、対外放送の仕事をしていたんだ。日本人の作曲したものも含めて、洋楽演奏を日本から海外へ発信するわけさ。ところが、情報局の石頭どもは、西洋の音楽なんかいらんと言いつつ始末だ。これだけは抵抗して、国威発揚として大事だということを納得してもらったけどね」

飯田が日本を離れて一年になる。この間、日本国内では言論統制が進み、音楽に対する取り締まりも、ずいぶんと厳しくなったはずだった。青木の口調からも、その事情は充分に察せられた。

「南方派遣を命じられて、行く先がジャワだと決まった時、僕は真つ先にリリー・クラウスのことを思った。飯田さんもあるし、いい仕事ができそうな気がした。クラウスの演奏を、どんどん日本向けに放送すべきだと思うね。世界に向けてもだよ。このジャワから、発信するんだ」

飯田には、青木の意欲が眩しく感じられた。

あと数日でジャワ軍政の最初の年が暮れる。この九カ月の間にも、ずいぶんジャワの雰囲気は変化した。いきなり内地から放り込まれれば南国の陽射しのように光に溢れて見えるだろうが、最初から付き

合ってきた人間には、どうしたって影の部分も目に入る。

「ところで、飯田さん、ゴールドベルクはどうしているんです？ クラウス同様、ジャワに残留しているそうじゃない。クラウスはゴールドベルクの黄金のデュオが、ジャワで聴けるなんて、夢みたいだ。世界の音楽ファンも羨ましがるね。どうして、ゴールドベルクに放送に出てもらわないわけ？」

「リリー・クラウスほど、積極的でないんだ。同じバンドンにいるけど、今では、お互い、ほとんど会うことがないらしい。日本の占領までは、ジャワでもデュオのコンサートをしていたそうだけどね。まあ、いろいろな立場があるから……」

青木の表情が曇った。不服そうに見えた。

「僕を含め、多くの職員がNHKから派遣されて来た。ジャカルタ放送局も陣容が整い、いよいよこれからだよ。クラウスとゴールドベルクが、ジャワの洋楽放送の看板になればと思うね」

「確かにそうだが、強制するわけにもいかないしね」

「飯田さんは、宣伝部の音楽方面を一手引き受けたから、忙しすぎるんだよ。こちらでも、インドネシア向けの国民歌謡の作曲があるんですよ。安心なさい。洋楽放送は、僕が引き受けますよ。飯田さんは、放送局では、オーケストラの指揮だけしてくれればいい」

何だか、態よくお払い箱になったような気がしなくてもなかったが、宣伝部本来のインドネシア向けの宣撫工作が忙しいのも事実だった。ただ、それだけだと、音楽家として淋しい。リリー・クラウスは、自分にとって、業務を超えた宝なのだ。その微妙な心の襞は、新任の青木にはまだ分からないだろうと、飯田は思った。

「そうそう、驚いたことがあったよ。今日の抑留所の所長さん。近藤さんっていったけど、実はクラシ

ツク・ファンなんだそうさ。日比谷でリリー・クラウスも聴いたっていうし、レコードも相当コレクションしたらしい。何ともインテリじゃあないの。ジャワは面白そうところだね。つまるところに徴兵で引つ張られるより、よっぽどよかった……」

店を出たのはだいぶ夜も更けていた。

日中の暑気もさすがに引いて、海から吹き渡る風が心地よかった。太い幹から広がる枝の先に、老人の鬚のような気根を長く垂らしたガジュマルの樹が、海風を受けて、優雅に揺れていた。戦争の気分などどこにもない、南国の静かな夜だった。

飯田はふと、命からがら重油にまみれて夜の海を漂流したバタヴィア沖海戦のことを思い出した。自分はそのようにして、戦火のなかをジャワ入りした。青木は、平定後のジャワに、長期出張のようにして訪れた。

ともに山田耕筈に学び、同じ年の自分たちだが、このジャワでは、抜きがたい微妙な「世代差」があるのかもしれないと、飯田は思った。

*

*

年が改まり、一九四三年が明けた。

新年初めてのラジオ放送の演奏のため、リリーはジャカルタに出向いた。チデン抑留所での慈善演奏会から半月ほどがたっている。飯田から連絡があつて、いつもの時間より早く入ってくれと言われた。放送局も組織の立て直しが進み、だいぶ様変わりしたとのことだった。

放送局の建物に入るなり、リリーの目にも変化は明らかだった。ロビーを歩き来するのは、圧倒的に

日本人が目立った。なかには、インドネシア人の若く美しい女性の姿もあった。訊けば、新たに採用されたアナウンサーだという。

飯田と青木が、リリー夫妻を出迎えた。青木が、前に出て挨拶をした。

「新年になり、正式発令が出ました。飯田さんに代わって、洋楽の放送番組は、私が担当します。改めて、よろしく願います」

青木の先導によって、そのまま応接室に案内された。途中の廊下でも、すれ違うのは日本人スタッフばかりだった。

「日本放送協会から三十五人の職員がジャワに派遣されました。ジャワでも、本格的な放送の開始です」

リリーは気にかかつて仕方のない質問を、飯田にぶつけた。

「オランダ人スタッフはどうしたんです？ 技術担当を中心に、大勢の人たちが働いていたではありませんか」

「残念ですが、多くの者が解雇になりました。これからも順次、解雇は進んでいく見込みです」飯田は、そこまで言うのが精一杯だった。その実、単なる解雇ではなかった。敵性国民で行政に通じる仕事をしていた者は、特殊業務として日本軍に協力する仕事がなくなれば、そのまま俘虜収容所に送られることになるのだ。

この間まで放送局で一緒に働いていた「同僚」が、そうして収容所送りとなった。なかには、「ハ短調協奏曲」の放送に関わったスタッフもいた。その事実を、ストレートにリリーに伝えることが、飯田には憚られた。

導かれるままに応接室に入って、リリーは驚いた。ゴールドベルクとマリア夫人が、ソファに腰かけていた。予定を早めて来るように言われたのは、このためだったのだと、リリーは悟った。

青木が口を切った。

「ジャワ軍政も二年目に入り、放送局もますますの充実が求められています。日本から多くのスタッフも到着しました。そこで、改めてお願いがあります。クラウスⅡゴールドベルクの黄金のデュオの演奏を、今後、ジャワからの放送番組の目玉にさせていただきますたいのです」

リリーはゴールドベルクの表情を窺った。だが、淡々として聴くのみで、胸の内は窺い知れなかった。「私は、お二人の初来日の時にも、東京のスタジオで演奏に立ち会いました。瑞々しい演奏に感動しながら放送したことを、昨日のことのように思い出します。今ふたたび、ジャワでお二人にお目にかかれるのは、この上ない喜びです。運命のようにすら感じます。どうでしょう、お二人の演奏を定期的に日本へ放送させていただきませんか。手始めに、ベートーヴェンの『クロイツェル・ソナタ』からお願いしたいと思います。七年前の春に、東京のスタジオから放送した、まさにその曲です」

リリーは視線を飯田の方に移した。静かに青木の提言を聴くばかりだった。デュオ復活への意志に、何の異存もあるようには見えなかった。

リリーが日本統治下の放送局でピアノを弾くようになって八カ月になる。飯田のたつての頼みで、モーツァルトの「ハ短調協奏曲」を弾いたのは、一カ月前の話だ。これまで、演奏を請う日本側の要請には、いつだって応じてきたリリーであった。自分はピアニストだ、自分の音楽を欲する聴衆がいるならどこでも弾くという信念のままに、協力してきたのだった。

だが、この時は、理屈を考えるより前に、瞬間的に「ノー」という返事が頭に浮かんだ。直観的な、

ほとんど本能的といってもよい反応だった。返事を渋っていると、青木は苛立ちを見せ始めた。

「あなた方二人の演奏は、大変な人気でした。レコードは、いつもベストセラーだったではありませんか。何とかして、これだけは実現させて下さい。月に一回、クラウスⅡゴールドベルクの演奏を、ジャワから出したいのです」

確かに、二重奏のデュオとして、自分たちの人気は空前絶後のものだった。青木の言う通り、レコードは世界中で愛された。リリー・クラウスの名も、モーツァルト弾きとしての名声も、ソリストとしての活動だけだったなら、こう鰻登りには上がらなかったろう。黄金のデュオは、自分にとって、何物にも代えがたい財産だ。

だが、それはあくまで平和な世界での、音楽家が音楽を演奏することだけを考えればよい時の話だ。黄金のデュオがいかに世界の音楽ファンに愛されたからといって、それをそのままに、戦時下の、この半抑留の日々に復してしまつてよいのだろうか……。

飯田の指揮で「ハ短調協奏曲」を弾くことは次元が違う。慈善演奏会で抑留者を前に弾くこととも違う。それらの演奏は、敢えて言うなら、戦時下だからこそ行なうのだ。だが、ゴールドベルクとの演奏を、戦争に与^{くみ}せてはいけない。軍靴の音と硝煙の臭いに、まみれさせてはいけない。

ナチスの暴力を逃れて始めたデュオなのだ。軍国主義とは無縁のところに咲いた理想の花なのだ。モーツァルトの解釈も新鮮だったろうが、二人のデュオそのものも、穢^{けが}れなく、爽やかだったはずなのだ。ナチスの息のかからないところでしか演奏してこなかった。そのために、地球を半周するような大変な旅も覚悟せざるを得なかったのだ……。

自分ひとりならば、ラジオでの演奏は自己責任において果たせましょう。だが、ゴールドベルクとの

黄金のデュオをここで復活させるとなると、意味は違ってしまう。シモンを、そのようなものに巻き込むことはできない。

返事が急がれていた。その場を取り繕うために出てきた言葉は、自分でも驚くほどの不器用極まりないものであった。

「ゴールドベルクさんとの二重奏は、レコード会社の勝手な企画で決まったことです。私はもう、やりたくありません……」

青木は、明らかに動揺していた。予想もしない返事に違いなかった。

リリー自身としても、何とも後味の悪い言い訳だった。デュオがレコード会社の勝手な企画で始まったなど、事実関係としても、本当のことではなかった。

気まずい沈黙の後で、青木が矛先を変えた。

「ゴールドベルクさんは、どうなんです？」

物静かなこの合奏の天才は、今回もリリーに合わせるかのように、発言を控えた。リリーは、まともにゴールドベルクの顔が見られなかった。

会話は物別れに終わった。ゴールドベルク夫妻は、そのまま退室した。リリーとは、ほとんど言葉を交わさぬままだった。廊下を出口へと去って行くゴールドベルクの後姿に、リリーは胸の内言葉をかけた。

「シモン、ごめんなさい。貴方を傷つけてしまったなら、許して……」

桜の美しかった日本の春、リリーとゴールドベルクは、夫婦と間違われるほど親密だった。夫に物言うより先に、リリーはシモンに口をきかずにはいられなかった。単なる音楽のパートナーを超えて、ど

のような感動をもとにしないではいられなかった。その二人が、ほかならぬ日本の遂行する戦争によって仲を割かれることになるとは、何という運命の皮肉だろう。

その後、リリーは翌日の放送に備えてスタジオのピアノで練習したが、とても集中するどころではなかった。気分転換に手洗いに立つと、廊下で青木がマリア夫人と立ち話をしている様子が見えた。話を詰めるために、彼女だけ戻って来たようだった。

リリーは声をかけようかと迷ったが、ちらりとこちらを窺ったマリアの目が冷厳な拒否の光を湛えていたので、そのまま引き返した。旅公演となればいつも一緒だったマリアとも、しこりの残る別れになってしまった。

後で青木の口を通して語られたところでは、ゴールドベルクはそのまま引き揚げるつもりだったが、マリア夫人が引き留め、彼女ひとり放送局に戻って、直訴するように青木にかけ合っただという。

「リリー・クラウスとは別に、ソリストとして弾かせてほしい、そうでないと、生活費の当てすら^{めど}が立たない……」

世界を代表するヴァイオリニストの妻にとつて、それがどれほど屈辱的な行為だったか、リリーには充分に察しがつく。廊下のマリア夫人の氷のような視線を思い出しながら、自分にも責任の一端があるような気がして、リリーは心痛んだ。

結局、リリーもゴールドベルクも、それぞれのソリストとしての演奏を、島内放送向けに行なうということで妥協が図られた。リリーの出番は、これまでの週に一度から半月に一度ほどに減らされたが、ゴールドベルクにも出番が与えられるならば、むしろ喜ばしいことだとリリーは思った。

*

*

放送局の組織整備に見られた変化は、社会の隅々にまで通じるものだった。今村時代の緩やかな方針は明らかに変化し、厳しい管理を強めていた。

リリー自身の身に変化はなかったが、周辺の西洋人社会には動揺が続いていた。

民間人の抑留が、日増しに進んでいった。今や、オランダ人やイギリス人などの敵性外国人は、それだけの理由で抑留所に収容された。男女別が基本なので、夫婦や家族は無理矢理に引き離され、子供は母親と一緒に収容された。

いつ再会がかなうかはもとより、自分の収容先さえも分からぬまま、人々は愛する人と別れ、集団移送のトラックに載せられて行った。別離の悲しみのあまり、トラックを前にして妻や子が夫や父にしがみつき、泣き叫んで離れようとしないうちに愁嘆場が、日常の光景になった。

だが、どれほど泣き喚^{わめ}こうとも、日本兵の銃剣に脅され、最後には仕方なく拘引されて行った。ひどい場合には、銃剣の尻で殴られ、倒れ、血を流す者も出た。

バンドン北郊の住宅街からも、そのようにして次々と人々が抑留所に送られて行った。リリーの顔馴染も含まれていた。だが、その日に拘引を免れた者は、明日の我が身を恐れながら、手を拱^{こまね}いているしかないのだった。

ジャワでは、年の半分、十一月から三月までは雨季になる。空を覆う黒雲から、大粒の雨を叩きつけるように降らすスコールが、自由を奪われた人々の慟哭^{どうこく}のように地を濡らした。

リリーは、練習の合間に漠然と窓外の景色を眺めることが多くなった。篠つく雨に庭全体が煙り、

花々がうな垂れている様子は、悲しみを塗り込めたようで、恨めしくさえ感じさせた。

町に買い物に出かけていたマンデルが、予想外にも奥田を伴って帰宅した時、リリーは驚きを超えて、明るい椿事が訪れたように思った。少年のような奥田の笑顔に接すると、胸を塞いでいた雨雲が払われ、からりと晴れ上がったような気がした。

買い物を終えて北郊に向かう乗合馬車にマンデルが乗っていると、偶然、通りを歩く奥田を見かけたのだという。互いに驚いて声をあげ、奥田はその場にいたベチャを雇って追いかけて来たのだそうだ。

「オクダ……、まるで夢を見ているようよ。こんなに嬉しいことはないわ」

愛弟子との突然の再会に、リリーは奥田を力強く抱きしめた。

「リリー・クラウス、私も嬉しい。仕事でバンドンに来たのですが、せっかく貴女の住む町にいながら、住所は分からないし、途方に暮れていたんです。そこに、マンデルさんが馬車で通りかかって……、天の導きとはこのことです」

引つ張り込むようにして奥田を客間のソファに坐らせると、リリーは矢継ぎ早に質問を重ねた。
「スラバヤに行つてからどうしていたのか、ピアノは練習できているのか……」

「スラバヤの司令部に所属していますが、地図班にいます。今はマラン方面の地図を作成しています。音楽の方は、幸い近くにピアノを所持している家があるので、時々借りて弾かせてもらっています。リリー・クラウスから教わったことを忘れないよう、いつもレッスンのことを思い出しています」

地図作成の仕事と聞いて、リリーはホッとする思いがした。奥田には、ふさわしい仕事に思えた。兵隊であることは承知の上で弟子にした奥田だったが、音楽をともにすべき自分の弟子が銃を敵に向ける戦場の現場に立つことには、やはり心理的な抵抗があった。

「で、バンドンには、どういう用件でやって来たの？」

「ティモールの捕虜がバンドン近郊の収容所に収監されることになり、スラバヤからの護送に駆り出されたのです。任務を終え、町をぶらついていたら、ご主人をお見かけしたというわけです」

捕虜の護送と聞いて、リリーの胸はふたたび重く塞がれた。泣き叫ぶ家族を無理矢理引き離し、トラックに載せて行く兵士を思い描いた。この奥田までが、そのような任務についている……。

戦争とは、自分が考えていたよりもずっと苛酷で、逃れようがなく、情け容赦のないものなのかもしれない。何とか戦闘を外れたところで、日常と化した暴力の渦には否応なく巻き込まれてしまう……。

深い溜め息をついた後に、リリーは沈んだ声で尋ねた。

「オクダ、日本はこの戦争をどうしようとしているの。日本軍は、インドネシアを解放しにやって来たのではないの。でも、独立は認めようとしてない。戦争の行方も、ジャワの将来も、皆目見当がつかないわ。私自身の明日すら、見えないのよ。放送局も変わったわ。オランダ人スタッフは、次々となくなつてしまつて。みんな、収容所送りになつたという噂だわ。オクダ、私は日本を信じていたのよ」

「……」

「私は、本当は、一日だって早く戦争が終わつて、シュナールのもとに帰りたいのよ」

「私も、そうなつてほしいと思います。早く戦争が終わつてほしいと……」

個人としての気持と、自分の置かれた状況の差はあまりにも大きく、奥田はうな垂れるしかなかった。リリーの目に、その奥田の姿が、スコールに叩かれてうち萎れる花のように映った。

「ごめんなさい、オクダ、貴方を責めたいのではないの」

リリーは気分を変えなければいけないと思つた。せっかく、奥田と再会できたのだ。今この時間だけ

は、自分の努力と差配で、放送局のスタジオの時と同じく「別天地」を作り出さなければいけない。

「オクダ、貴方は何をしたくつて？ 久しぶりの再会だもの。レッスンをする？ 何か、楽しみに連弾をする？ 夕食には、まだ早いでしょう」

奥田の顔に、ぱつと喜びが広がった。純朴を絵に描いたような性格は、少しも変わっていないが、次の瞬間には、喜びを覆うように、諦念の影が射した。

「実は、自由時間は二時間しか与えられていないんです。残念ですが、じきにお暇いさましないとなりません」

奥田も自分も、蜘蛛の巣のように張りめぐらされた理不尽の糸に絡めとられて、身動きがとれない。

リリーは、戦時下の非情の現実を、改めて思い知らされた。

結局、奥田は小一時間ほどでリリーの家を退去した。互いに再会を約して、玄関で別れた。

家を出ると、道の反対側に立つ哨兵がこちらを窺い、睨むような視線を向けた。日本の兵隊でありながら西洋人と馴れ馴れしくしてと、非難の感情を抱えているようだった。

刺すような視線を背に感じながら、奥田は町への道を戻り始めた。それでも奥田は、敬愛してやまないリリー・クラウスの家を訪問できてよかったと思つた。

飯田や阿部からバンドン詣での話を聞かされるたびに、羨望の念に捉われたものだった。いつの日かは自分もと、奥田はリリー宅訪問を夢のように思い続けてきたのだった。

わずかな時間ではあったが、その願いがかなつたことを、奥田はしみじみと嬉しく思つた。神様のお恵みだと、子供の頃からのクリスチャンらしく、そう解釈した。

ふたたび訪れる日がいつ来るかは分からなかった。軍務が続く限り、再訪のチャンスがそうあるとも

思えなかった。だが、戦争が終われば、リリーはヨーロッパへ戻り、自分と会うどころではなくなる。ふと、自分はもうリリーと会うことがないのではないかという漠然とした予感が奥田を襲い、たじろがせた。

いや、と、奥田は思い返した。自分との再会がどうあろうと、敬愛する師リリー・クラウスは一日も早くシュナーベルのもとに戻らなければならない――。

純朴の弟子は、火炎樹の並木が続くバンドンの住宅街をひとり歩きながら、そう思った。自分でも訳の分からない涙が、ひと筋、頬を伝って流れた。

*

*

飯田は以前にも増して、忙しくなった。

ミッドウエー海戦以降の戦局の変化のなかで、大東亜の団結は必至とされ、日本人とインドネシア人が一丸となって鬼畜米英に対抗する結束強化が求められた。オランダの影響を徹底的に排し、日本の指導のもと、大東亜共栄圏の一翼を担うにふさわしいインドネシアとして、その国民意識を醸成することが焦眉の急となった。

一九四三年四月には、啓民文化指導所が設立された。文学、音楽、美術、工芸、演劇演芸の五つの部が置かれて、日本文化の紹介、普及に努めるとともに、インドネシア人の芸術家を育てることが図られた。

各部の部長にはインドネシア人のその道の代表者が据えられ、インドネシア人スタッフが働き、宣伝部からは指導委員の名で分野ごとに日本人教官が派遣された。音楽部の指導委員は、言うまでもなく飯

田信夫だった。

放送局の参与の役職はそのままだったし、放送管弦楽団の指揮もあるのだが、啓民文化指導所の仕事は、日々の業務の大きな割合を占めるようになってきた。

指導所の発足にあたり、飯田信夫は他の指導委員に倣って、声明文を書いた。その結語に曰く、「諸君は、諸君の血で作曲しなければならぬ。諸君の歌う声は諸君の血の叫びでなくてはならぬ」――。

オーケストラを指揮してモーツァルトやベートーヴェンを演奏することと、民族の「血の叫び」とが論理的にどう整合性を持つのか、徹底して突き詰められると、飯田自身にも危ういところがあるのは否めなかった。

自分の気持としてはつきりしていることは、軍部の唱導する公式の理屈はどうあれ、自分ではできる限りオーケストラの指揮者に留まり、何としてもリリー・クラウスを護るということであった。

だが、その誓いを不安にさせる新たな動きが、憲兵隊の方からちらちらと見え出していた。

現地の日本語紙「ジャワ新聞」に、この二月下旬以来、「ユダヤ人に警戒せよ。ジャワ憲兵隊が警告」「ジャワを狙うユダヤ人」などという見出しが立て続けに躍って、新たな政治キャンペーンの展開に驚きを感じた。

「敵性の最も濃厚なるユダヤ人に関する一般の警戒心が案外に薄いのは残念至極である。ユダヤ人こそは防諜の第一目標であり、米英以上に憎つき敵はユダヤ人である」――。

このような主張は、元来日本では見られぬものであった。ジャワで忽然と始まった反ユダヤ・キャンペーンが、同盟国ドイツの意を受けていることは明白だが、「米英以上の敵」と断罪するような強い調子を憲兵隊が見せ始めたのは、危険な兆候であった。

マンデルはユダヤ人だ。ゴールドベルクもユダヤ人だ。ピアノの師匠シュナーベルもユダヤ系だった。リリーの周囲には、あまりにも多くのユダヤ人がいる。

ジャワでも、リリーとマンデルをユダヤ人夫婦だとするような噂があった。音楽に詳しくない者ほど、そのような噂を信じたがるようだった。飯田はそうした噂を耳にするたびに、それはユダヤ人ヴァイオリニストとデュオを組んでいたことなどから類推されたことであって、事実とは言えないと正した。

妙な噂が機に乗じて力を得れば、黒い髪と黒い瞳を誇るリリーの容貌が、マジヤールのものではなく、ユダヤゆえのものだと疑われることにもなりかねなかった。

放送局のオーケストラにも、ユダヤ系の人間はいる。ただでさえ、西洋音楽の雲行きが怪しいのに、ユダヤということとでさらなる難癖がつけられるかと思うと、飯田は辟易した。が、リリーやその家族、ゴールドベルクなどの運命を思えば、事態の深刻さは、うんざりするなどと言っている場合ではなかった。

啓民文化指導所開設に伴う仕事は多忙を極めたが、そのなかでも、何か手を打てることはないかと、飯田は思案を重ねた。

変わりゆくジャワの軍政下、改めてリリーの存在がきちんと位置づけられ、身分が保証されるような方策はないだろうか。リリー・クラウスという稀代のピアニストがジャワで不安なく生活し、公に活動できる雰囲気、社会の側から醸成することはできないものだろうか……。

放送局でのリリーの演奏も、新体制のもと、今では月に一、二度程度になってしまっている。リリーの登場が少ないのは、それだけ不安を増す。軍首脳にも、憲兵隊にも、一般のインドネシア人にとっても、リリーの存在が好ましく、ジャワになくしてはならないものとして印象を強める必要がある。

飯田の頭に、あるアイディアが閃いた。

慈善演奏会——。昨年のクリスマスに、リリーはチデン抑留所で慈善演奏会を行なっている。だが、「慈善」とは、抑留された西洋人のためだけにあってはならない。日本軍政下のジャワ自身にとって利益になるような「慈善」もあり得るはずだ。軍そのものを利することであればリリーが反対し兼ねないが、インドネシア人の福祉向上になることなら、両者の合意は可能はずだ。

例えば、貧民救済だ。演奏会の収益金を、軍当局の手を通してジャワの貧しい民衆に寄付することであれば、その意義に疑問を呈することなどどこからもうできない。

しかも演奏者は、あくまでも親枢軸国ハンガリーのピアニストだ。こういう活動を目立つ形で続けていけば、リリーは安泰でいられる。積極的に動かない限り、このままでは、いつ危険が迫ってこないとも限らない……。

それは、飯田の賭けであった。自分自身、軍政の一翼を担う立場にしながら、獐犢さを増す軍政の牙からリリーを護る、起死回生の秘策だった。

まずはリリーとマンデルに相談し、快諾を得た。期日は六月二十六日とし、会場はチキニー街のラテンサレ閣というホールを押さえた。バタヴィア時代から続く、一流の演奏会場だった。軍のお偉方にも声をかけ、インドネシアの有力者にも切符を渡した。

公演が近づくと、宣伝部のツテを頼って、ジャワ新聞にも予告記事を書かせた。日本軍の戦功やジャワ軍政の業績ばかりが紙面を埋めるなかにあつて、西洋人のピアノ演奏会の予告は極めて異例であった。しかも、映画興行の宣伝のように紙面下段に設けられた広告欄ではなく、あくまでも記事の扱いだった。

「ピアノ独奏会。クラウス嬢。二十六日午後八時半から、ジャカルタ特別市チキニー街ラテンサレ閣で

ハンガリー人リリー・クラウス嬢のピアノ独奏会が開かれ、純益は貧民救済にあてられる。入園料一円五十銭」

小さな記事ではあったが、「ハンガリー」「貧民救済」という大事な要素は、きちんと収めていた。記事が出ると、思いがけぬところから飯田に電話が入った。憲兵隊からであった。

慈善演奏会には、どのような人が集まるのかと質問された。すでにチケットを渡してある軍政監部の首脳やインドネシア人の実力者などについては答えることができたが、入場券は一般にも販売されているので、来場する客全体を把握することは難しいと答えた。西洋人は誰が来るのかと、重ねて訊かれたが、飯田は分かりかねるとしか返事のしようがなかった。

「リリー・クラウスに確認しなければならぬことができるかもしれない。ジャカルタには、いつ出て来るのか？」

憲兵の質問に、冷や汗が額に滲んだ。確認したいことは何かと飯田からも質したが、内容に踏み込むような答えは期すべくもなかった。今はまだ、事情聴取させてもらいたいことが生じるかもしれないとしか答えられないと言われた。飯田は、演奏会に合わせて上京する予定を告げるしかなかった。

電話を切っても、冷や汗は退かなかった。いかにも、剣呑な動きだった。飯田は、放送部長の島浦精二に相談し、二人してこちらから憲兵隊に出かけて行った。

実は、リリーは一年近く前に、ほんのわずかの時間、憲兵隊に拘束されたことがあった。

ガンビル広場周辺の土木作業に駆り出されたオーストラリア兵の捕虜が、放送局を出てマンデルと歩いていたりリリーに、からかうように口笛を吹いた。長く垂らしたお下げ髪がキュートな「別嬪さん」に向けた、彼ら流の挨拶であった。一見したところ、若い女がかなり年上の中年男と肩を並べて歩いてい

るので、揶揄する気分も混じっていた。

リリーは彼らに向けて、そのお下げ髪をくるくると振り回して、挨拶を送り返した。元氣を出して頑張つて、というリリー一流のエールだった。

それだけのことだったが、たまたま様子を目撃した憲兵は、暗号による秘密の通信を交わしたとして、リリーをその場で拘束した。マンデルは困惑し、放送局に戻って奥田に訴え、奥田は宣伝班にかけ合つて、憲兵隊からリリーを引き取ってもらった。

その時の拘束はほんの数時間だったし、言うなれば、「事故」のようなものだった。その後に尾を引くものでもなかった。だが、今回憲兵隊が気にしていることが、そのような軽い性格のものかどうか、事態は全く呑み込めなかった。

飯田は島浦放送部長の応援を得て、日本軍のニロム放送局接收以来、いかにリリーが自分らに協力してきたか、また今般の慈善演奏会では、インドネシアの貧しい人々のために収益金を全額寄付するなど、いかに大きな社会的な意義を果たしているかなど、リリーを弁護して言葉を尽くした。

応対した憲兵の側は、何ら自分らの手の内を明かすことがないので、暖簾に腕押しのような感じは否めなかった。最後には、軍政監部の首脳陣も臨席し、慈善事業でもある大切な演奏会の前なので、とにかく今はリリーをそつとしておいてほしいという懇願になった。

憲兵は話を聞けばかりだったが、二十六日の演奏会は予定通り行なつてよいとした。だが、リリーの連絡先はきちんと押さえておくこと、また、もし何か不審な動きがわずかでも見られたらただちに通報するようにと念を押された。約束はしたが、妙な動きなど、あるはずもなかった。

とにかく、演奏会の開催は保証された。それだけでも、飯田はホッとする思いだった。この慈善演奏

会が成功すれば、リリーの存在意義は再評価されることになり、それは間違いなく身の安全につながる。このリサイタルの後には、放送管弦楽団の公開演奏会でも、協奏曲で登場してもらおう。一曲ではなく、モーツァルトとベートーヴェンの協奏曲を前後半に二曲やるような、リリーを主役とする特別演奏会を開くことしよう。もちろん、それも慈善演奏会とするのだ。

憲兵隊の動きは不気味極まりないが、次から次へとリリーの慈善演奏会を行なうことで、彼らの手を封じてしまえばよい。リリーに対して粗雑な扱いはできない雰囲気、社会の側から作り上げてしまうのだ。

リリーをバンドンの自宅に引き籠らせてはならない。社会の注目を浴び、賞賛を集めるような華々しい活動を立て続けに行なうことで、リリー・クラウスを不滅のアイコンとしてジャワ軍政の特別貴賓席に安座させるのだ……。

飯田は憲兵隊からの帰り道、早速島浦にリリーと放送管弦楽団の新たな慈善演奏会の計画を相談し、賛同を得た。

この賭けは絶対に勝つ——。晴れぬ不安を拭い去るようにして、飯田は自らに誓った。

*

*

リサイタルは盛況だった。切符は全て売り切れ、関係者のために補助椅子が出るほどだった。

軍政監部の首脳ほか、軍服姿の客も多かった。インドネシア人の有力者たちも、夫人同伴で訪れた。色鮮やかなジャワ更紗の民族衣装を着た女性たちが揃うと、華やかさが増した。抑留を免れているドイツ人やスイス人などを中心に西洋人もいたが、全体からすると、目立つほどではなかった。

飯田は、島浦や青木とともに、最前列中央に陣取った。音響的にはピアノから近すぎる嫌いがあるが、リリーの晴れ姿を、間近で見えていたかった。客席の隅に、憲兵隊の男の姿を認めた時にはどきりとしたが、私服なので、騒ぎにはなるまいと思った。

飯田は、憲兵隊の動きについて、リリーにもマンデルにも、いっさい知らせなかった。知らせたところで本人のプラスになることなどないし、演奏を前に精神的な打撃を与えたくなかった。

きちんとしたホールでのリサイタルなど、久しぶりなのだ。チデン抑留所での演奏会からでも、ちょうど半年がたつ。今宵ばかりは、華やぎと賞賛に包まれて晴れ舞台に輝く名ピアノリスト本来の姿であってほしい——。飯田はそう願わざるを得なかった。

プログラムは多彩な構成であった。シューベルトの「即興曲」から「第二番」と「第三番」で幕を開け、ブラームスの「ラプソディー第二番 短調」に続けた後、ショパンの「スケルツォ第二番 変ロ短調」で前半を締め、休憩を挟んで、後半にモーツァルトの「幻想曲 ハ短調 (K四七五)」とベートーヴェンの「ワルトシュタイン・ソナタ」を置いた。

演奏を前に、司会者がステージに現われ、今夜のリサイタルの収益金は貧民救済のために寄付される旨を、日本語、インドネシア語、英語の三カ国語で改めて述べた。その上で、司会者によってリリーが招じ入れられ、満場の拍手で迎えられた。この段取りも、飯田が演出したことだった。

世界を代表するピアノリストが、慈善演奏会という仕掛けを装うことでしか、きちんとしたリサイタルを開けない状況にあることを、飯田は悲しく思った。だが、今はそのような後ろ向きの感情に浸っている場合ではなかった。

リリーはピアノリストだ。ピアノを弾くために生まれてきたのだ。コンサート・ホールで聴衆を前に弾

くことが、本来の然るべき姿なのである。慈善公演であるかどうかは、二の次だ。

黒いステージ衣装に身を包んだリリーは、端然とピアノに向かうと、詩情豊かにシューベルトの「即興曲」を弾き始めた。演奏が始まるや、聴衆はリリーの音楽への集中力を高め、会場は電気を流したように神秘的な熱波に包まれた。

リリー・マジックが、今日も遺憾なく効果を発揮し出したことを飯田は感知した。

日本人、インドネシア人、西洋人ということを超えて、リリーの音楽はあまねく人の心に響く。現実世界を司る政治や軍事とは異なる次元に、純然たる美として横たわる真実に、聴衆はリリーのピアノによつて導かれる。それは、芸術のみが持つ、人間にとつて最も高貴な思念、情緒であると同時に、それがなければ生きていくことができないパンと水のようなものである。

演奏会後半のモーツァルトとベートーヴェンに至つて、人々はますますリリー・マジックの虜となり、熱波の緊張を高めていった。

飯田自身、リリー・クラウスというピアノリストの比類なき価値に、改めて思い至らざるを得なかった。リリーの身を案じ、仕組んだ賭けだったが、気づいてみれば、飯田自身、言いようのない感動に胸を熱くしていた。起死回生の反攻作戦のはずが、そのような次元を遥かに超えて、淨福の気を呼吸していた。おのずから、目頭が熱くなってくる。音楽を生業とする人間にも、音楽に対してこのように純粹に感動することが、稀にはあるのだ。その感動の頂点に、ひよつとして、という想いが掠めて、飯田を驚愕させた。

これほどに素晴らしいリリーの演奏は、今回が最後になるのではないか。予想もしなかった出会いの僥倖に恵まれたリリー・クラウスの音楽に、我々はもはや、ふたたび接することができなくなるのでは

ないか……。

賭けの必勝を誓った人間にしては情けないくらいに弱気な発想だったが、いくら否定しても、ベシミズムが角を突き上げて追いかけてくる。その心理的な動揺が、目前のリリーの演奏の貴さをいやが上にも高めさせる。この世にまたあるとは思えぬ美の真髄、圧倒的なヒューマニズムの気高さに、感動の嵐が、身も心もさらうのだ。

最後の曲の「ワルトシュタイン・ソナタ」が終わると、熱烈な拍手が会場を包んだ。「ブラヴォー」の声がいくつもかかった。拍手はいつまでも鳴りやまず、アンコールを求める声が続いた。

飯田は、興奮を抑えきれぬままに、ステージのリリーに向かって叫んだ。

「リリー、モーツァルトを弾いて下さい」――。

拍手の大きさにかき消されてしまうので、二度、三度と立て続けに、飯田は同じことを口にした。リリーが、ちらりとこちらを向いて、軽く肯き、分かったという風にウィンクを送ってきた。

ふたたびピアノに向かうと、リリーはモーツァルトの「ロンドニ長調（K四八五）」を弾き始めた。

世界一のモーツァルト弾きの手から、珠玉の音楽が溢れた。熱波に覆われた会場は、ふたたびリリーの魔法によって、馥郁たる陶酔に導かれた。

日本のジャワ占領後、最大の音楽イベントとも言えるリリー・クラウスの公演は、大成功のうちに終わった。軍政監部のお歴々も、賛辞を交わしながら会場を後にした。

これほどの演奏を日本の軍政下にジャワで聴くことができるのは、世界への誇りだという軍首脳の感想を洩れ聞いた時、飯田は音楽を超えた演奏会の意義に確信を持った。

心配していた憲兵隊からは、翌日になつても、何の音沙汰もなかった。翌々日も、平穩無事だった。

飯田は、自分の賭けの勝利を信じた。間髪を置かずに次の作戦に出るため、演奏会から三日後、リリー夫妻を放送局に招いた。放送管弦楽団の特別演奏会に弾いてもらうピアノ協奏曲の打ち合わせのためであった。

一晩に二曲の協奏曲をやりたいという飯田の申し出に、リリーは興奮を隠さなかった。飯田のやる気が嬉しいと喜んだ。リサイタルの成功の後だけに、リリーはとても弾んで見えた。

「モーツァルトなら『九番』か『十八番』、『二十番』。ベートーヴェンなら『三番』や『四番』なら、今すぐになくてできるわ。貴方とオーケストラが準備できるなら、私はロマン派以降の曲だって嫌でなくってよ。なんなら、チャイコフスキーでもやってみる？　リリー・クラウスのチャイコフスキー！　前代未聞ね。そんなことになったら、イイダさん、貴方、世界の指揮者から、どうやって口説き落としかかって、噂になるわ！」

リリーの愉快そうな笑い声が、応接室にはじけた。飯田も、マンデルも、屈託なく笑った。

「申し訳ありませんが、今回も慈善公演となります。実入りはいっさい、期待できません」

飯田がそう言うのと、マンデルはさも落胆したように、顔をしかめて天を仰いだ。両手を広げたその大仰な仕草に、ふたたび笑いの渦が起きた。

そこに、押し入るようにして入って来た男があった。軍服を着て、腕に憲兵の腕章を巻いている。例の男だった。部下を数人連れてくる。

「ジャワ憲兵隊だ。リリー・クラウスに用がある」

男は言い放つと、リリーを引き連れようとする。

飯田は慌てた。咄嗟に、憲兵とリリーの間に割り込んだ。

「待って下さい。今は打ち合わせ中です。話を聞きたいのなら、その後にして下さい。打ち合わせさえすれば、聴取はここでもできます」

憲兵は、飯田を睨むと、どすのきいた声で重ねて言った。

「訳あって、クラウスを憲兵隊に拘束する。単なる聴取ではない。逮捕、拘禁である」

リリー・クラウスを逮捕……。飯田は、目の前が真つ暗になる思いがした。

リリーはマンデルと目を合わせた。事態の深刻さを咄嗟に呑み込んだようだった。顔からみるみる血の気が退いていく。

憲兵は部下に合図をし、たちまちリリーは男たちに腕をとられるようにして、引き立てられて行った。抗弁したり、悲鳴をあげたりする暇すらも与えないという、容赦のない拘束だった。マンデルはどうしてよいか分からぬまま、リリーと男たちの後を追った。

飯田は動けなかった。へなへなとその場に倒れ込んだ。

賭けは負けだ……。飯田は、自分の敗北を認めざるを得なかった。

第九章 生き地獄

ガシャンという太い金属音を背後に残して、重い鉄の扉が閉められた。

白昼の眩い光に慣れた目には、しばらくの間、暗闇に沈むその場所がどのようなところか、見分けることが難しかった。闇に目が慣れるにつれ、鉄格子の中の狭い空間に、幾人もの女たちの顔が幽霊のように浮き上がってきた。

寄宿舎の一室ほどの場所に、自分を含め、十五人の女たちがいる。

まるで犬小屋だと、瞬間的にリリーは思った。女たちは一様に虚ろな表情をして、力なく床に坐り込み、膝を抱えて顔を埋めている。リリーは無言のまま、空いたスペースに腰を下ろした。

ついさきほどまで、放送局で笑い声の弾むなかにいたことが嘘のように思える。逮捕と言われたまま、問答無用で憲兵隊本部に連行され、地下牢に放り込まれたのであった。

暑気といきそれで息苦しく感じるほどだが、時に悪寒が走るような寒気を覚える。壁も床も、粗い地が剥き出しのままだったが、うっすらと湿っているのが、気持ち悪かった。

「リリー、リリーではなくって？」

外に洩れぬよう声を落としながら、誰かが鋭く自分の名を口にした。振り向くと、前総督夫人のクリステーンであった。

「クリステーン、どうしてここにいるの？」

「分からないわ。夫が総督だったということ以外、理由など見当もつかない。連中のすることは、理屈抜きだもの。でも、貴女こそ、どうしてここに来たの？」

「自分でも分からないの。リサイクルが終わって、放送局で打ち合わせをしていたら、いきなり……」
短い会話を交わしたところで、看守の男が駆け寄り、

「黙れ！」

と叫び、檻の鉄格子を激しく警棒で叩いた。リリーもクリステーンも、恐怖に縮み上がった。獄房内での私語は厳しく禁じられていた。

暴力は至るところにあった。同じ地下に取調室があり、そこからは、苦痛に耐えかねた悲鳴や叫び声がたびたび聞こえてきた。耳を覆っても、その声は防ぎようもなく耳内に忍び込み、氷のような恐怖を植えた。当人に自白を強要するためだけでなく、収監者全員を威嚇するために、ことさらに効果を狙って行なっているかのようにだった。

誰もが、自分がそのような目に遭うことを怖れた。それは、尋問の際に、無言の圧力となって胸を締めつけた。取調室に入る前から、足が震えた。口を割るまいと覚悟していても、憲兵が机を叩くなどの恫喝に及べば、決意は容易に揺らぎ、崩れた。

地下全体を、暴力と恐怖が暗く覆っていた。悲嘆と苦悶が溢れていた。ダンテの「地獄篇」も、この

悲惨さに較べればティー・パーティーのようなものと、リリーは思った。

リリーの尋問が始まった。だが、数日の間は、名前と職業を訊かれたところで、いつも頓挫した。リリー・クラウスと知って逮捕したことは明らかであるのに、その名前を何度も言わせる。職業についても、ピアニストであるという答えには、何度繰り返しても満足しない。まるで、リリー・クラウスという人間には、別の名前と仕事があつて、自分らはその正体を知っていると云わんばかりだった。

自分が何故捕まり、尋問を受けなければならないのか、しばらくの間は、リリーにはまるで見えなかった。名前と職業を確認する儀式めいた繰り返しの後、憲兵が「謀略」という言葉を使うようになって、初めてその手の疑いを持たれているのだと漠然と知った。全くの事実無根なので馬鹿馬鹿しい限りだったが、刀で机を叩きつけるような暴力が目の前で炸裂すると、恐怖が走り、馬鹿馬鹿しいどころではなくなった。

やがて、憲兵が「ユダヤ」を口に始めたので、疑惑の方向性が見え始めた。だが、そうなれば、自分以上に夫のことが気がかりだった。

リリー自身にもユダヤの血がいくぶんかは混じっていたが、少なくとも、その事実が公に明らかにされたことはない。問われたこともない。それに較べ、夫マンデルがユダヤ人であることは、天下晴れての公然とした事実なのだ。

マンデルがユダヤ人であり、デュオのパートナーのゴールドベルクがユダヤ人であるからこそ、自分らはナチスの手を逃れてジャワまでやって来たのだった。

夫を心配するあまり、マンデルはどうしているのかと尋ねると、憲兵からは予想もしない答えが返ってきた。この憲兵隊本部の地下室に収監されているのだという。

マンデルは妻を心配するあまり、四日続けて憲兵隊を訪ね、妻の代わりに自分を拘束しろと要求して動かず、ついには実際に収監されてしまったのだった。それでリリーが釈放されることなどなかった。マンデルは同じ憲兵隊の地下にある男性用の獄房に収容され、互いに確かな場所は分からないながら、数十メートルしか離れていないところに寝起きすることとなった。

リリーは、近くにいるに違いない夫と、何とかして連絡を取りたいと思った。先方からのメッセージは期待できないにしても、せめて自分の無事を、夫に伝えたいと願った。

ある時、意を決して、リリーは歌を歌い始めた。ハンガリーの民謡だった。バルトークがそのメロディーを用いてピアノ曲を作曲しているので、夫にも分かるはずだった。歌がマンデルの耳に届けば、それが誰によって歌われているかは、火を見るよりも明らかに違いなかった。

歌い始めて間もなく、看守が飛んで来て、「静かにしろ」と命じた。看守が離れてしばらくすると、リリーはまた始めた。ふたたび看守が駆けて来て、怒鳴り散らした。その繰り返しであった。

リリーは殴られるかと思つたが、幸い、威嚇だけですんだ。そのうちに、気が違つたとも思つたのか、看守の注意も散漫になった。こうしてリリーは、拘留中、日に何度かは必ず夫のために歌った。

その間も、尋問は続いた。請われるままに、ブダペストに生まれて以来の半生をリリーは語った。問はず語りに話を進める時もあったし、憲兵が念押し of 質問を重ねて、答えながら進めていくこともあった。書記が全てを記録にとつた。日に数時間ずつ、一日の休みもなく尋問は続けられた。憲兵は、尋問が進み出すと、机を叩くような暴力は振るわなくなった。

やがて、リリーに関して何を疑っているのか、憲兵も手の内を見せ始めた。彼らの問う「謀略」の根拠が、次第に輪郭を露わにしてきた。

チデン抑留所内で、厳禁のはずのラジオが発見された。所持していた女性はただちに憲兵隊に送られ、背後関係がないか、厳しい追及に遭った。

その女性は、拷問への恐怖から、前総督夫人クリスティーンとリリーとは以前から親しく、慈善演奏会の際にも密かに連絡を取り合い、抑留所内で反乱を起こし、衛兵を殺害して抑留者を解放する謀議をめぐらしたと語った。クリスティーンはユダヤ人であり、リリーも夫がユダヤ人で、親ユダヤであることはもとより、本人もユダヤの血が混じっている可能性が高いと、推測も交えて告げ口に及んだらしい。憲兵が執拗に、リリーを国際ユダヤ機関の送り込んだスパイだと断定したがった訳はようやく呑み込めた。クリスティーンが収監されている理由も、腑に落ちた。

反乱の謀議など全くの荒唐無稽、とばかりいいところだったが、リリーは、ありもせぬ密事を告げ口した女性を責める気にはなれなかった。このような場所に押し込められて、拷問の悲鳴に日夜晒されていれば、恐怖のあまり口はどうにでも滑るに違いなかった。

容疑が呑み込めてからは、リリーの気分はむしろ楽になった。密謀の事実など皆無なのだから、自信を持って供述することができた。

「密告」がリリーのユダヤの血にまで言及したことにはヒヤリとさせられたが、憲兵はナチスのように人種問題そのものを問おうとしていたのではなく、あくまでユダヤ機関が絡む謀略や諜報活動に嫌疑を向けているので、白黒をはっきりさせることが可能だった。

二週間が過ぎ、いつものように看守によって獄房から連れ出された時、リリーは、向かう先は取調室だと思つて疑いもしなかった。だが、看守が違う方向に歩き出したので、吃驚した。看守に従つて階段を上がつて行くが、次第に明るさが増して、地下の闇の中に暮らしてきた目にはくらくらとした。

玄関近くまで来た時には、外から射し込む強烈な光に、全てが白くハレーションを起こしたようになった。

白い光の中の影が、リリーを迎えた。

「リリー・クラウス、スパイ容疑は晴れた。お前を釈放する」

憲兵にそう言われて、頭の中までがくらくらとした。白光の中の影はもうひとつあった。

「リリー、私たちは釈放されるのだよ」

マンデルの声であつた。リリーは、第二の影の方に向かって近寄つて行つた。目が慣れるにつれて、乳色の光の海の中から、無精髭を伸ばし、やつれた様子の夫の姿が露わになった。リリーは、無言で夫と抱き合つた。

そのまま、リリーとマンデルは、車に乗せられた。尋問をした憲兵は玄関で別れ、護送は若い部下二人が付き添つた。車が発進すると、リリーは堪えかねたように夫に質問を浴びせかけた。

「ディッキー、子供たちはどうしているの？」

「君が拘束された日に、バンドンに連絡を取つて、とりあえず、ヴィトリングガ夫妻に事情を話し、しばらくの間、子供たちを引き取つてもらうように頼んでおいた。娘さんが、ルースとダンスと一緒に習っている、あの親切なご夫妻だ。今頃は、ルースもマイケルも、そこにいるはずだ」

「そうなの。少し、安心したわ。貴方も一緒に収監されていると知った時から、子供たちのことが気になつて仕方なかったの」

リリーは、憲兵から聞いた自分の容疑についてマンデルに話した。夫は、全く事情を知らされていないかつた。

「スパイ容疑なんて、出鱈目もいいところでしょう。でも、そのことが分かってから、むしろ気は楽になったわ。罪になることなんて、あり得ないもの」

「そうだね、それなら大丈夫だ」

車は駅の方に向かっていった。リリーもマンデルも、そこからともに汽車に乗り、パンドンに帰るのだと信じてやまなかった。

ようやく釈放されたのだ。一刻も早く、家に帰りたいかった。すぐにも、子供たちに会いたかった。

家に着いたら、身体を洗って、二週間の垢を落とそう。着替えもして、きれいさっぱりとなったところで、久しぶりにピアノを弾こう。いつもの生活に戻るのだ。平穩無事がどれほど貴重なことか、恐怖の体験をした後では、そのありがたさが身に染みる。

車が停まった。

「降りろ」

若い憲兵のひとりが、先に車を降りて、マンデルを促した。命じられるままに、マンデルは車を降りた。続いてリリーが腰を浮かして降りようとすると、

「ノー、男だけだ」

と、制された。

何が何だか分からぬままに、ドアが閉められ、車はそのまま発進してしまった。あつと言う間の出来事だった。呆然とたたずむマンデルの姿が、みるみるうちに小さくなっていく。悪い夢を見ているかと思えなかった。

「何故です？ どうして私は降りることが許されないんです？」

必死になって、リリーは叫んだ。

「私たちは釈放されたんです。私は、夫と一緒に家に帰ります。お願い、私を降ろして！」

何を言っても無駄だった。リリーと車に残った若い憲兵は、表情ひとつ変えなかった。リリーの英語が、分かっているのかいないのか、それすら窺い知ることができなかった。

リリーの目から大粒の涙がこぼれ落ちた。恐怖の支配する憲兵隊の地下牢でさえ、涙を流すことのないリリーだったが、今は抑えることができなかった。

悲しみが怒濤のように襲った。苦しみに胸が張り裂けそうだった。束の間の夫との再会と解放の喜びは、シャボン玉のように消えてしまった。リリーはうな垂れたまま、肩を揺すってしゃくりあげた。

ジャカルタの町を突っ切り、郊外へと向かっていた車が、ふたたび停まった。

世間との交渉を拒絶するように、高いレンガ塀がぐるりと周囲を囲んだ、堅牢な建物の前だった。南国の陽光に似合わぬ、陰気で威圧的なその建物が、どのような用途のために造られたものか、事情を知らないリリーにも察しはついた。

若い憲兵は、顎でしゃくるようにして、車から降りるよう命じた。外に出たリリーは、憲兵に引き立てられて、涙の退かぬまま、門の方へと歩いて行った。

大きな二重の鉄の門をくぐる時、頭上に埋め込まれたオランダ語のプレートが目に入った。「ストラスウェイク監獄」という文字が、地獄の入口のようにリリーを睨んでいた。

*

*

釈放されたはずであった。スパイ容疑は晴れたはずであった。だが、自由は戻ってこなかった……。

前総督夫人と一緒に抑留所内の反乱を画策したという謀略説は、根拠のないものであることが明らかになった。だが、イギリス外務省の後ろ楯を得て身分証明書を発行してもらい、さらにニュージールランド国籍を取得しようとしていたことが明らかになったことから、枢軸側の人間であるとの「建前」が揺らぐことになった。リリー・クラウスは、ハンガリー人であることを主張しているが、限りなくイギリス人に近い「敵性外国人」であると判断されたのである。

憲兵隊の拘束は免れたが、一九四三年半ばのこの時期になると、敵性外国人であれば、軍政に必要な特殊業務に就く者を例外として、民間人抑留所に收容されることは免れなくなっていた。飯田が望んだような、慈善演奏会でピアノを弾くことが抑留を免れる「特殊業務」として認められるという奇跡は、起こらなかったのである。

同様に、マンデルもまた、民間人抑留所に收容されることになった。リリーとの短い再会の後、彼はバンドン近郊のチマヒにある男性用抑留所に移送された。

リリーの子供たち、ルースとマイケルは、知人のヴァイトリンガ夫妻のもとに引き取られていたが、夫妻がオランダ人であったため、間もなく、夫人とともにバンドンのチハピット抑留所に入った。

家族間の連絡は認められず、またその所在先が教えられるわけでもないで、誰がどこでどうしているか、リリーもマンデルも子供たちも、互いの消息を知らぬまま、抑留生活を送ることになった。いつ再会がかなうのか、全く目処^{めど}の立たぬなかを、家族はそれぞれ、不安の日々を重ねていった。

リリーが収監されたストラスウエイク抑留所は、オランダ時代にバタヴィア地区最大の刑務所として建てられたものだが、日本の占領後、俘虜收容所として使われることとなった。占領直後から戦争捕虜

として男ばかりを三千五百人ほど收容したが、一九四二年十月からは施設の一部を民間人婦女子のための抑留所としても使用するところとなった。

リリーが入所した頃には、英米人捕虜の妻子を中心に、英語圏の婦女子、百名ほどが抑留されていた。限りなくイギリス人に近い存在として、リリーはこの抑留所に收容されたのだった。

民家の並ぶ住宅街を区切って抑留所としたチデンとは違い、ストラスウエイクは、建物の造りからして、いかにも監獄、收容所の印象が強かった。憲兵隊の地下牢から移された時には、憲兵の語った釈放という言葉が嘘で、いよいよ刑務所送りになったのだとリリーは信じてやまなかった。

前年从此こに暮らす女性たちの話をリリーが聞いて、監獄の建物を利用した民間人抑留所であることを知ったのは、入所して数日がたってからだだった。

「でも、同じことよ。自由はないし、夫もない。きつい労働に粗末な食事。刑務所と、ちっとも変わらないじゃない。刑期がはっきりしている分、刑務所の方がましかもしれないよ」

その場に居合わせたひとりの女性が、吐き捨てるように言った。希望のかけらもない、そんな言い方だった。

確かに、狭い監房に何人もの女性たちがプライバシーもなく共同で寝起きをする様子は、罪なき者の暮らしとは信じがたかった。竹を組み合わせただけの長い寝台が置かれ、人々は数珠つなぎになって、その上に寝た。床に直接寝ないのがましだというだけであつた。

しかも、リリーの入られた監房は地下にあつたため、気分としては憲兵隊の地下牢の時と変わりなかった。

日中でもほの暗く、光を感じなかった。通気が悪く、蒸し暑かった。ゴキブリがそこかしこに這い、

初めのうち、リリーは気色悪くて仕方なかったが、払ったり叩いたりして逃れることができるような代物ではなく、慣れるしかなかった。

夜中には、突然、ギヤアという鋭い叫び声が聞こえ、吃驚して起きることがあった。憲兵隊での経験から、咄嗟に誰かが拷問にかけられたのかと思ったが、悪夢にうなされた人の悲鳴なのであった。家族との別離や日本兵に暴力を振るわれた経験がトラウマとなつて、恐ろしい夢を見させるのであった。

悲鳴は夜のしじまを切り裂き、地下房全体に響き渡つた。身の毛のよだつ恐怖が声とともに伝播し、姿の見えぬ怨霊の叫びを聴く気がして、生きた心地がしなかった。

朝になると、全員が中庭に整列させられた。「テンコ」という儀式の始まりであつた。誰も正確な意味を知らないのだが、抑留者全員を揃えて、人数が確かめられた。

その間、抑留者たちは腰を屈め、頭を低くして、不動の姿勢を保持しなくてはならなかった。「ケイレイ」という、日本軍人への敬意を示す独特の仕草だと、同じ監房の抑留者が教えてくれた。いつ、どのようなところであれ、日本の衛兵と出会う際には、この姿勢が強要されるのだつた。

リリーは、日本でも、ジャカルタの放送局でも、日本人同士が腰を折り、美しく挨拶を交わすさまを、何度となく見てきた。それは気品に満ち、着物を着た女性によつて示されれば、優雅この上なかった。

だが今、抑留所という異常な場所でも、憎悪に塗られた人々の心を恐怖によつて抑えつけ、形だけは守られている日本式の儀礼が、なんと醜怪であるか、リリーはその落差に愕然とする思いがした。

「野蛮人の風習」「猿の掟」――、陰に回れば悪口がいくつも聞こえてきた。違う、そうではないのだと、リリーは抗弁しようかと思つたが、抑留者たちの胸を埋めるあまりの敵意の激しさに、口にするのが憚られた。

朝の儀式には、国旗掲揚も含まれていた。日章旗がポストに掲げられ、その間、レコードで「君が代」がかけられた。オリエンタル調の動きの少ない曲が、抑留所に鳴る唯一の音楽であつた。

抑留者たちは、ふたたび国旗に向かって、頭を低くして「ケイレイ」の姿勢をとらなくてはならなかった。怠れば、怒鳴られ、銃剣で脅された。それでも従わなければ、容赦なく殴られた。

「ケイレイ」は、「ナオレ」の号令が出るまで続けなければならなかった。国歌が終わつたと思つて、自分の判断で頭を上げると、すかさず罵声とともに鉄拳が飛んできた。相手が女であろうと、容赦はなかった。

そのような目に遭つた女性は、血を噴き出して、その場で昏倒した。抑留所の中には、そうした鉄拳制裁の跡を腫れ上がった青痣に留めている女性が、常時、何人かはいた。

「点呼」「敬礼」「直れ」――、抑留所では、所内だけに通じる特殊な方言のように、日本語がいくつか、そのまま使われていた。だが、その響きは、リリーが慣れ親しんだ日本語とは全く異なるものだった。人が人と話を交わすための言葉とはとても思えない、怒号や罵声に類するものだった。

「こんにちは」「ありがとう」「きれい」「やさしい」――、リリーが飯田らとの会話を通して知つた日本語の表現は、その響きの美しさを愛さずにはいられないものだった。この言葉で、桜の国の人々は歌い、愛を囁き合うのだと、うっとりさせられたものだった。

だが、そのような日本語は、抑留所には必要とされていない。所を管轄する日本側がその必要を認めていない上に、抑留者の側からすれば、ひたすら鬼のような存在でしかない日本人が、歌つたり、花や音楽を愛でたり、人を愛したりすることなど、想像の埒外に属することなのであつた。

抑留所の生活が必要とする「家事」に当たるものは、清掃や調理など、悉くを抑留者自身の手で行なわなければならなかった。日本人の衛兵は監視はしても、自分らが手を出すことはなかった。

抑留者は、細かく分かれた役務を分担し、当番としてこなした。植民地育ちの西洋婦人にとってみれば、昨日までは現地人の召使にさせていた肉体労働を自らしなければならぬわけで、不慣れの上なく、不愉快を募らせる原因ともなった。

リリーにも労働が課せられた。割り当てられたのは、下水溝の掃除であった。汚物の詰まった下水溝を浚って流れをよくする作業で、これを怠ると、たちまち所内に悪臭がたちこめる。抑留所内の雑役のなかでも、最も嫌われている仕事であった。

作業中の悪臭は、頭がくらくらするほどだった。しかも、作業はゴム手袋もなしに、素手のまま簡単な道具を使つてするので、悪臭はいつまでも手から消えなかった。だが、真の敵は悪臭ではなかった。作業について数日たつと、指先が裂け、爪がひび割れてきた。

その手を見て、リリーは意気消沈した。ピアノストの手ではなかった。泣き出した気持になった。「これで、あんたも一端の抑留者^{じりり}というわけね」

血の滲むリリーの手を見て、声をかけてきた女性がいた。同情心より、リリーの痛手に満足しているような後味の悪い響きを感じた。

「ここではね、貴女だつて特別じゃないのよ」

追い討ちのような声も聞こえた。日本のラジオ放送で演奏し、日本人と親交を重ねてきたことが、敵愾心を買っていたに違いなかった。

熱帯なので、傷は放っておけば、化膿したり、しつこい潰瘍となつたりする危険性が高い。まともな

薬などないが、各人に配給される紅茶の葉を湿布して消毒薬の代用とした。その後に、やはり配給品の食用パームオイルを塗って、傷口の塞がるのを待った。抑留者の間に広がる知恵だったが、この「治療」のおかげで、リリーの傷は何とか悪化せずにすんだ。

半月ほどして、役務替えになった。今度は、井戸の水汲みであった。ストラスウェイク抑留所には水道がないので、朝昼晩と日に三回、井戸からバケツ四十杯ずつの水を汲まねばならない。下水溝の掃除に次いで、敬遠される重労働であった。

鉄の鎖につながれたバケツを深い井戸に落とし、水を溜めて引き揚げるのは、予想した以上に力のいる仕事であった。一、二杯ならともかく、十杯を超すと、たちまち肩が痛んできた。一日の仕事が終わった時には、肩も腕も石のように重く凝り、指の関節は腫れ上がって、まともに掌を広げることもできなかった。

鍵盤の上をしなやかに動いた指は、今やほとんど感覚の麻痺したまま、醜く膨れている。どぶ浚いの傷も癒えきらぬのに、傷の上に傷を重ねていくのである。すっかり荒れてしまった手は、ピアノが遠く去って行く証のように思われ、リリーは惨めこの上ない気持に襲われた。

抑留者たちは皆、惨めさに打ちひしがれた表情をしていた。リリーよりも長く収容されている分、惨めさが顔にも精神にも滲み出て、存在そのものと不可分に溶け合っていた。

本来はひとりひとり、顔立ちも異なり、個性を際立たせていたはずが、そうした差は一樣の嘆きに埋もれて磨滅し、ぼんやりとした憂い顔が揃うばかりとなった。生気が失せ、動作も緩慢で、何事にも反応が鈍かった。それでいて、他人の粗相や不始末には過敏で、反発や非難の牙を向くことばかり盛んだった。

何故、自分がこんな目に遭わなければならないのかという煩悶の繰り返しで、隣人を襲ったより大きな不幸や苦しみを見ても、何故、自分ではなかったのだらうとは考えられない。悲嘆の底に自ら腐ってしまつて、他者への思いやりや、優しい眼差しが消えてしまつていた。

抑留者同士のいがみ合いも絶えなかった。アメリカ人はイギリス人といがみ合い、イギリス人同士でも、イングリランドの人間はスコットランドやウェールズの人間とは反りが合わず、対立の理由さえあれば、個人同士でも鎧迫り合いを繰り返した。

時には、抑留者同士の間で、物盗りまで起きた。何かがなくなると、盗まれたといつて大騒ぎになるが、犯人は決して出てこなかった。

日本人衛兵の多くは横柄かつ粗野で、しばしば、いとも簡単に暴力に訴えた。抑留者たちは、悲嘆の果てに誇りを失い、精神が自壊しかけていた。抑留所全体で、人間性が風前の灯火と化してしまつていたのである。

肉体的苦痛を超えて、リリーにとって何より辛かったのは、家族の安否が知れぬことと、ピアノを奪われたことであつた。行方の知れぬ家族を思う気持は他の抑留者と等しいものであつたが、ピアノへの飢餓感、他の抑留者には理解の及ばぬものだった。

とにかく、ピアノが弾きたくてたまらない。弾きたい、弾きたいという欲望に、身も心も焼き尽くされそうだった。

憲兵隊に拘束されて以来、ピアノに接する機会は全くなかつた。鍵盤に触れずに半月がたち、一カ月が過ぎ、なすすべもないまま、二カ月になった。

私はピアノリストだ。ピアノリストにピアノがなければ、手足をもぎ取られたも同然だ。ピアノを弾かな

いリリー・クラウドがあり得ようか。モーツアルトの光は、抑留所にはどこにもない。音楽は、死んだのだ。

リリーは、生きる屍だった。

ピアノは忘れなければいけないと思ひながら、ピアノを弾きたいという願いが影法師のように離れなかつた。その空しさを悟ると、鉛の海の水底に沈んで行くような感じに襲われた。惨めさを固めた他の抑留者と同じく、こうして自分も堕ちて行くのだと、リリーは思った。

悲嘆に暮れ、絶望に打ちひしがれるためにあるような毎日が過ぎていった。

その日も、いつに変わらぬ、心模様の晴れない日であつた。空までが、気分を映したように厚い雲に覆われていた。

リリーは、日課となつた井戸の水汲みの労働に従事していた。

汲み上げたバケツの中の水面に、自分の顔が映つていた。眼窩が窪み、恐ろしいほどに陰気な顔つきだった。目に光がない。顔のどの部分にも、生きている張りがなく、虚ろな憂いが広がるばかりだった。抑留者に特有の惨めさが、滲み、漂つていた。自分の悲惨な表情を知つて、不幸の上に不幸を重ねた。

その時であつた。雲間に隠れていた太陽がにわかに姿を現わし、水の上にきらきりと光の波を描いた。光は星屑を散らしたように水面に跳ね、その瞬きが水に映るリリーの顔に重なつた。

目に光が宿つた。口元に覗く歯が白く輝いた。顔全体に、生気が蘇つた。気がつくつと、水の中の自分が、笑つていた。

近くの椰子の木の高みから、美しく鳴く鳥の声が降つてきた。そよ風に椰子の葉は揺れ、地に落とし

た影が、トレモロのように震え、踊った。水面の光もまた、波に揺れていた。

光に水、鳥に風、木に私……。この世にある命が、脈を交わして響き合い、ハーモニを奏でている。ああ、これはモーツァルトだと、その時、リリーは思った。モーツァルトの音楽そのものだと感じた。音楽を忘れかけていた自分に、モーツァルトが語りかけているのだと信じた。

歌いなさい。弾きなさい。音楽によって、生きなさい……。

リリーは、その場で、モーツァルトのソナタの一節を口ずさんだ。不思議な力が湧いてきた。続いて、「ロンド」を歌った。「幻想曲」も歌った。二カ月間封じ込めていたモーツァルトの音楽が、次から次へと溢れ出てきた。

すると、私はピアノストだ——、その実感が、不動の確信とともに、胸にせり上がってきた。手足をもぎ取られた、嘆きかこつだけのか弱きヒロインとしてではなく、真つ直ぐに延びた道を堂々と行く、生の行者としてのピアノストの確信であった。

ピアノがなければ、ピアノストはあり得ないと思い込んでいた。だが、鍵盤を叩いて音を出すだけが、ピアノストなのだろうか。ピアノがない環境に放り込まれた途端、ピアノストはその肩書きを剝奪されるのみならず、人としても、死に態同様の価値なきものに成り下がってしまうのだろうか。

音楽とは人の魂に生まれ、人の魂に届くものだ。機械のような演奏に接すると、「魂がない」と、けなしてきたではないか。音楽によって魂を極めたピアノストなら、地獄のようなこの抑留所でも、自壊の坂を死に向けて堕ちて行くのではなく、光に満ちた生の道を厳の彼方に模索し得るのではないか——。

それは、心の音楽を信じることだ。暗黒の奈落にあっても、音楽という光を信じ、その使徒として、最後の最後まで、命の歌を歌うことだ。

モーツァルトが鳴らないことを嘆くのではない。モーツァルトを鳴らすのだ。ピアノ・ソナタも、ピアノ協奏曲も、交響曲も、オペラも、心の中に、響けとばかりに鳴らすのだ。その雄弁な音楽の中に、私は生きるのだ。それでこそ、私は本当のピアノストだ。

リリーは、毎日、心の中でピアノを弾いた。これまでのレパートリーを、連日、さらい直した。実際にメロディーを口ずさみ、指を宙に動かした。すると、かつて鍵盤の上では気がつかなかった曲のニュアンスや作曲家の意図に、新たに気づくことがあった。

重労働を嘆くばかりだった水汲みも、指を鍛えるためのトレーニングだと思えるようになってきた。打鍵の力が増し、迫力ある演奏が可能になると、前向きに考えることができるようになった。

抑留所での体験によって、自分の音楽は、より強く、より深くなる。リリーは、そう信じた。地獄のような抑留生活を、自分の力で、掛け替えのない天の恵みに変えるのだ。

そう考えた時に、リリーの心は軽くなった。笑顔が戻り、生気が蘇った。人に優しくできる自分を取り戻した。いつだって、私は音楽と一緒にいるのだ。

水を張った重いバケツを井戸から引き揚げながら、鼻歌を歌うリリーを見て、抑留者仲間が不思議そうに尋ねた。

「どうして、貴女はそんなに陽気でいられるの？」

リリーの答えは、明確だった。

「それはね、私がピアノストだからよ」——。

*

*

日本は、収監した人々を、抑留所から抑留所へと、折々に移転させた。民間人の収監は増える一方なので、整理が必要になることもあったが、ひとところに長く置くと、抑留者同士、よからぬ企みや動きを始めせぬかと恐れるようでもあった。

一九四三年十一月下旬、ストラスウェイク抑留所の婦女子全員が、移送されることになった。百人ほどがトラックに分乗して、新たな抑留先に移動する。

幌のない剥き出しの荷台に、乗れるだけの人数が詰め込まれた。

「まるで牛か豚のようね」

ひとりの女性がこぼした。皆の気持を代弁していた。途端に、日本人兵士が銃剣を突き立て、「静かにしろ」と怒鳴りたてた。

確かに、家畜も同然であった。熱帯の炎天下、日除けのない荷台に、すし詰めとなつて運ばれるのだ。とても人間に対する扱いとは思えなかった。行き先も告げられず、自分の運命がどうなるか、誰も分らないのだ。

走り出してしばらくすると、暑さと息苦しさで絶望のため、皆がうち萎れた。日本兵が止めずとも、もはや私語を交わす者など、誰もいなかった。

トラックは、西へ向かった。

リリーは、トラックの上から街を眺めた。街には、人の匂いがした。生活の息吹が伝わってきた。半年前までは、自分もそのなかの一員であったことが、信じられない思いだった。

誰かが声もなく泣き始め、やがて伝染したように啜り泣きが広がっていった。ストラスウェイク抑留所に連れて来られた時、自分も泣きながら門をくぐったことを、リリーは思い出した。

だが、もう私は泣かない。どこに連れて行かれようと、どのような場所に押し込められようと、決して泣くことはない。私は必ず、生き抜いてみせる。抑留所に、潰されてなどなるものか。たとえ受ける扱いは家畜のようでも、私は、人間であることを最後までやめない……。

ジャカルタの町を抜けて、トラックは西を目指す。後ろ髪を引かれる思いで、人々は小さくなつていく町に遠い眼差しを送り続ける。

だが、リリーは前を向いた。行く先は知らないが、必ず生き抜くという覚悟に、リリーは唇を固く結んだ。

生きる誓いを秘めたリリーの胸には、モーツァルトが高らかに鳴っていた。

第十章 ピアノ

車は、西へ向かっていた。

ジャカルタの町を抜けると、青々とした水田が広がった。椰子の木の下に、水牛がのんびりと草を食んでいる。千年一日のような景色は、とても戦地であるとは思えない。

田園風景は長くは続かなかった。国道を二十分も走ると、次の町に出た。タンゲランという、ジャカルタ周辺に散在する衛星都市のひとつであった。

車は、国道を外れてしばらく街中を走り、やがて田舎道に抜けて進んだ。

その車——軍用ジープには、軍服を着た二人の日本人が乗っていた。運転は若い兵士が受け持った。助手席には、まだ若さを残しているが、明らかに身分の違う日本人が、きりりとした面差しを真っ直ぐ前に向けていた。

車は、ほどなくして、星型に棟を広げた堅牢なレンガ造りの建物に近づいた。タナティンギ抑留所——。タンゲラン郊外にあり、もとはオランダ時代に少年院として建てられた施設であったが、一九四

三年の九月から、民間人婦女子用の抑留所として使用されることとなった。

助手席の男は、車を降り、迎えの兵士たちの敬礼を受けながら、所長室へと入った。

近藤利朗。チデンを始め、ジャカルタ地区にある抑留所の長を務める。この時、三十二歳。

平素は、いまや五千人を超す人々を収監するジャカルタ最大のチデン抑留所の所長として、勤務を続けている。が、こうして週に一度は、周辺にある中小の抑留所にも、責任者として回らなければならない。

この日、近藤がタナティンギ抑留所を訪れたのは、数日前に迎えた新たな収監者たちの受け入れ状況の確認のためであった。

開所以来三カ月近く、これまでは七百二十人の抑留者を収監していたが、このたび、ストラスウェイ抑留所からの移送者百人が加わることになったのだ。間もなく、スマランやスラバヤなどジャワ各地から移送者を迎える予定も控えており、タナティンギ抑留所は急速に規模を膨らましつづけた。

現場管理者に全般状況を聞いた後で、近藤はストラスウェイからの移送者リストを検分した。

英米人など、百人の婦女子の名前が並んでいる。だが、その最後の方に、信じられない名前を発見して、近藤は身震いした。

リリー・クラウス。出身国、ハンガリー。

その人の名に、どれほど親しんできたことか。日比谷公会堂の演奏を感動とともに聴いたのは七年前のことだ。それ以来、彼女のレコードは洩れなく集めてきた。台湾の警察に勤務することになってからも、コレクションは続けてきた。とりわけ、評判のモーツァルトの演奏には、和まされ、癒され、励まされもしてきたのだった。

台湾からジャワに赴任して、リリー・クラウスがこの地に残留していることを耳に挟んだ時には、大いに驚いた。ラジオ放送で演奏を聴き、達者でいることを知ったが、クリスマスの慈善演奏会でチデン抑留所に現われた時には、不思議な縁のめぐり合わせに唖然するような気分を襲われた。

久しぶりに生で聴く彼女の演奏は、東京に劣らず素晴らしいものだった。抑留所長という立場を超えて、心からの感動を受けた。抑留者たちが励まされ、胸を熱くしている様子に、どのようなところにも音楽によって福音をもたらすことのできる芸術家の功德を、目の当たりにするように思った。

そのリリー・クラウスが、いまやひとりの抑留者として、収監されている。しかも、自分の管轄する抑留所においてだ。近藤は、運命の皮肉を感じた。

普段は所内の細々したことは現場の人間に任せているが、所長という立場上、抑留者たちの生活の場を覗くこともある。戦時下であれば仕方がないとはいえ、自由を奪われた集団生活は哀れなものだった。ジャワから出ることは不可能だとしても、リリー・クラウスは高名な芸術家として、放送局や軍政監部の人たちから一目置かれ、きちんと護られているのだと思っていた。それが当然の待遇であると信じて疑わなかった。

華やかなステージに立つ女流ピアニストにとって、監獄のような場所がふさわしいわけではない。軍の方針には口出しできるはずもないが、モーツァルトやベートーヴェンを弾くピアニストまで収監しなければならぬとは、近藤にはどうしても腑に落ちなかった。

机の上に置かれた呼び鈴を慌しく鳴らし、衛兵を呼んだ。

「今すぐ、案内してもらいたい。今回の移送者のなかの、リリー・クラウスに用がある」
近藤は、駆け出すように所長室を出た。

軍靴とサーベルの音をけたたましく鳴らしながら日本人たちがやって来た時、リリーは何事があったかと思った。監房のどこかで、持込みを禁じられているラジオでも見つかつて、騒動が起きるのかと案じた。

通路の両側に身を寄せた抑留者が慌てて頭を下げ、「ケイレイ」の姿勢をとる。波を左右に分けて船が進むように、男たちは脇目も振らず近づいて来る。彼らの目当てがほかならぬ自分であることを知った時、リリーは不測の事態に見舞われるのではないかと、恐怖に立ちすくんだ。

だが、一行の中心人物で、驚いたように自分を見つめる男の口から出た言葉は、意外なものだった。「マダム・クラウス。所長の近藤といひます。貴女の演奏を東京で聴き、感動した者です。今日、抑留者のリストのなかに貴女の名前を見つけて、驚きました。抑留生活はお辛いでしょうが、戦争中なので致し方ありません。それでも、何か私の手で、してさし上げられることはありませんか。お助けしたいのです」

桜の花が、久しぶりに目の前に舞った。静かな熱気に満ちた東京の聴衆のひとり、時を超え、このような場所にまで現われた……。

リリーは深く息を吸うと、真っ直ぐに近藤を見ながら答えた。

「お願いしたいものが二つあります。ひとつは、ピアノです。もうひとつは、家族との再会です」

その言葉で、リリーがピアノすらも奪われていたという事実、近藤は改めて気づかされた。リリー・クラウスにピアノがないなどは、その音楽の価値を知る者にとってみれば、言語道断であった。「分かりました。ご家族との再会は、一朝には片がつくと思えませんが、ピアノに関しては私が責任を

持ちます。何とか手配させますので、少々お待ち下さい」――。

近藤の言葉に嘘はなかった。彼はただちに、チデンの慈善演奏会で知り合った放送局の青木に相談した。青木は、飯田に声をかけた。啓民文化指導所の仕事の一環として、ジャワ各地の学校にピアノを寄贈しているのを知っていたので、手配がしやすかろうと踏んだのだった。

飯田は、リリーの消息に接して喜んだ。

リリー逮捕の後、何度か憲兵隊に出向いても、面会は許されなかった。しばらくすると、もうここにはいないと言われた。自宅には帰されず、抑留されたらしかったが、機密保持を理由に、所在は頑として明らかにしなかった。

早速、飯田はピアノを手配し、数日後には、タナティンギ抑留所に届けさせた。ただし、ジャワの学校に贈るのと同じく、中古品のアップライト・ピアノだった。

*

*

一週間後、リリーは所長室へ呼ばれた。

衛兵に案内されて所長室に入ると、近藤が迎えた。近藤の指差す方向に、黒塗りのアップライト・ピアノが置かれていた。

さぞかし年代物であろう、表面は光沢を失い、角や脚には剥げかけて生木が覗く箇所もある。鍵盤から上の箱型の部分がいやに大きく、厚くがつしりとして、蹲る象を思わせた。令嬢の部屋を飾る小粋なスマートさとは無縁の、武骨で不器量で、重苦しさを黒に塗り込めた代物だった。

それでも、久しぶりに目の当たりにするピアノは、晴れ晴れとして見えた。

近藤が、笑顔でリリーを促した。吸い寄せられるように、リリーはピアノに向かった。

ピアノに近づく一歩一歩が、やけに長く、遠い。ようやく黒い箱に手が届き、重い蓋を開けると、窓から射し込む光が、滑らかに輝く白鍵を浮かび上がらせた。白の広がりには節を作る黒鍵は、白哲の顔に墨を引く眉や切れ長の目のように見えた。光に触れ、明るみに現われたことを喜ぶように、鍵盤全体が、微笑みながら自分を招いていた。

リリーは、そっと鍵盤に手を置く。小さな音が出た。次には、和音を鳴らしてみた。意外に深みのある澄んだ音が出た。砂漠でオアシスに出会うとは、このようなことを言うのだろうか。

後は、留まることを知らなかった。

半年間、ピアノに触れていなかった指が、滑るように鍵盤の上を泳いだ。指は、音楽を忘れていなかった。宙を空しく打ち続けてきた指が、今は叩くべき鍵を得て喜んでいようであった。心なしか、打鍵の力が強くなったような気さえた。

グランド・ピアノのような艶のある音は望むべくもなかったが、古いアップライト・ピアノの渋みのある硬めの音が、リリーの指の動くにつれ、奔流となって溢れ出た。

まずは、シューベルトの「さすらい人幻想曲」から、触りを弾いた。続いて、モーツァルトを、たて続けに弾いた。

楽譜などなくても、いくらでも弾けた。運指に不自由を感じることもなく、まるでなかった。半年間のブランクは、ピアノに触れる喜びを至上のものに押し上げることがあっても、不都合や問題を生じるネガティブな要因にはならなかった。

鍵盤以外、目には何も入らなかった。自分の弾く音楽以外、耳には何も聞こえなかった。胸は弾み、

血が全身に通って、天にも昇るような気持になった。恍惚として、リリーはピアノを弾き続けた。

そのまま三十分近くも弾いたろうか、ひとつの曲が終わり、次に移ろうとしたところで、椅子の背をこつこつと叩かれた。近藤が、窓の方を示している。

窓から望む庭に、たくさんさんの抑留者が立っていた。突然に始まった美しいピアノの調べに惹かれて、集まった人たちだった。ある者は仕事の手を休めて近寄り、ある者は監房から出て来た。魔法にでもかけられたように、皆、神妙な面持ちをしていた。

「ピアノが必要だったのは、貴女だけではなかったようです」

近藤が呟いた。

次々に抑留者が集まって来るので、衛兵たちはどうしたものか、処置に困っていた。銃剣が上を向くかと思うと横を向き、動揺は隠しようもなかった。近藤は窓越しに合図して、そのままにさせた。

リリーは弾き続けた。やはり、ピアノに触れている自分が、最も自分らしい。我ながら、水を得た魚のようだと思った。この半年で、今のこの時間ほど楽しい時があったろうか。生きている自分を、これほど強く実感することがあったろうか……。

一時間が過ぎたところで、近藤が立った。

「すみませんが、私もこの部屋にばかりはいられません。今日のところは、このくらいでお引き取り下さい」

もつと、もつと、リリーは弾き止めた。哀願するような目で、近藤を見た。

だが、近藤は、慎重さを崩さなかった。

「週に一度、私がここを訪れる間は、自由にピアノをお弾き下さい。私としても、もつと貴女に弾いて

いただきたいが、しばらくは、私が責任を持てる時に限らせて下さい」

近藤の慎重な態度から、自分の受けている待遇がいかに特別のものか、リリーにも察しがついた。近藤の英断と勇氣に、素直に感謝しなければいけないと思った。

所長室から外に出ると、演奏を聴いていた抑留者たちに迎えられた。演奏が終わっても、人々はリリーが現われるのを、その場で待っていたのだった。

人々はリリーを取り囲んで、口々に賛辞を述べた。皆の表情が、驚くほど活き活きとしていた。顔に貼り付いていた抑留者特有の惨めさが、見違えるほど後退していた。

長い抑留生活のなかで、このような音楽に接する機会は一度もなかったのだ。砂漠でオアシスに会ったのは、リリーだけではなく、抑留者たちも同じ思いであった。

一週間が、待ち遠しくてならなかった。その日が近づくと、そわそわして落ち着かなかった。当日となり、衛兵が呼びに来ると、リリーは飛ぶようにして所長室へ出かけた。

この日からは、きちんとした練習を始めた。何度となくシミュレーションを重ねてきたモーツァルトのピアノ・ソナタを、イメージ通り弾くことができるか、確認していった。

練習の間、近藤は部屋の片隅で、静かに耳を傾けていた。窓外では、抑留者たちがやはり熱心に耳を傾けていた。練習が終わると、近藤が言った。

「今年も、まもなくクリスマスが来ます。どうでしょう、抑留所の中で演奏会を開く気はありませんか。チデンの時のような立派なピアノはないし、皆が一堂に会する場所としては倉庫しかありません。それでも、抑留者には大きなプレゼントとなるはずですよ」

リリーは、窓外の人々に視線を移した。

皆、受け持ちの仕事を早く終えるなりして、ここに来てゐる。椅子もなしに、立ちながらも、自分の音楽を聴いている。通しの演奏ではなく、練習であつても、熱心に耳を傾けている。音楽を聴きに來たくても、都合がつかず、來られなかった人たちがいることも知っている……。

「ええ、喜んでお引き受けしたく思います」

「では、去年と同じ十二月二十六日の晩に、演奏会を開くことにしましょう。一時間程度として、プログラムをお考え下さい。途中の休憩はなしです。抑留者全員に聴いてもらいましょう。もちろん、私も聴かせていただきます。何だか、楽しみになってきました」

次の週からは、クリスマス・コンサート用の練習に入った。一時間をどの曲で構成するか、弾きながら確認していかうと思つた。

最初は、モーツァルトの「イ短調ソナタ」で幕を開けることにしよう。モーツァルトが旅先のパリで同行の母を亡くし、その悲嘆を曲にしたとも言われている。悲しみが嵐となつて炸裂し、モーツァルトのピアノ・ソナタのなかでも、とりわけドラマティックな悲劇性に富む作品だ。

言うまでもなく、その悲劇性は、自分たち抑留者の置かれた状況に重なる。慟哭の果てのカタルシスに聴衆を誘ひ、雷雨の後の晴れ間のような浄福を感じてもらふことができれば、生きがたさのなかにも光が見えてくることだろう……。一年前にチデンでも弾いた曲だが、リリー自身が抑留の憂き目に遭う今、曲にかける切実さが以前とは格段に違つた。

演奏会が決まつてから、近藤は週に二度三度と、足しげくタニンギ抑留所を訪れるようになった。ちようと、スマランやスラバヤから新たな抑留者が到着したこともあつたが、その手の用向きがなくな

も、リリーのために訪問を増やした。昼に都合がつかなければ、他所での勤務を終えた後に立ち寄つた。

そのたびに、リリーは一時間あまりの練習が許された。これは、リリーにとつてありがたかつた。

どのような場所、どのような機会であれ、演奏会の名のもとに人前で弾くとなれば、ピアノリストにとつては真剣勝負である。粗末なアップライト・ピアノだからといって、手を抜いてよいとする考えは、リリーには皆無だつた。

目標ができると、リリーの生きる張りが全く違つた。ストラスウエイク抑留所に収監された当初の、生きる屍のような無気力のリリーとは別人であつた。

音楽が、これほどに人間を強くし、快活にする、それは、音楽家の自分にとつても驚きであつた。このエネルギーを、どうかして他の抑留者たちにも感得してもらいたい、自分の演奏によって何がしかの希望を見出してほしいと、リリーは願わずにはいられなかつた。

*

*

所長室での練習が続いた。

その日も、練習を終え、リリーは近藤に挨拶をして、監房に引き返した。中庭を過ぎ、自分の起居する監房棟へ入りかけた時であつた。いきなり、リリーは髪の毛を後ろからつかまれ、力任せに引つ張られた。

「痛い！」

次の瞬間には、バランスを失い、仰向きに転倒していた。横たわる自分を上から睨みつけ、今にも噛みつきそうなほどの怒りを漲らせて、女が立っていた。

「あそこで何をしていた。日本人におべつか使って、ちやはやされて、恥ずかしいのか。お前のやっていることは、対敵協力だ。連合国への裏切りだ。恥を知れ！」

見知らぬ女だった。オランダ人のように見えた。憤怒に燃えた目の下には濃い隈が淵となって沈み、幾度とない悲嘆の涙の跡を固めていた。

「私の夫は、家族を庇おうとして日本兵から殴られ、半殺しにされたんだ。血を噴き出して気絶した夫を、奴らは引きずるようにしてトラックに載せた……。お前みたいな奴は、女の風上にも置けない。日本のラジオでも弾いた。今度は、所長さまと懇ろだ。所長室で何をしていたか、知れたもんじゃない。お前は、売女だ。この恥知らず！」

剣幕は収まるところを知らなかった。悪態の果てに、女はたぎる憎しみを込めてリリーに唾を吐きかけ、立ち去った。

リリーは、起き上がることができなかった。顔についた唾を拭う気にもならなかった。途方に暮れ、どのようにして自分の監房に辿り着いたか、後から思い返しても、全く記憶になかった。

裏切りだ、売女だ……。オランダ女性の非難が、胸に舒いして、離れなかった。ストラスウエイク抑留所にいた時にも、ここまで激しいものではなかったにせよ、同じ色を帯びた面当てに遭ったことがあった。日本のラジオで演奏したことがそれほどいけないことなのか。所長室のピアノで練習することが、とんでもない疑いや反発を招くことなのか……。

鳥が鳴くように、ピアノストはピアノを弾くことが天命だと心してきた。聴く人があればどこでも弾きたいと思った。しかし、それは同時に、自分の演奏が人々に安らぎや励ましを与えることができればと願ったからだ。自分の天命を貫くことが、人々のためにもなると信じたからだ。そのピアノストの

信念が、根元からぐらぐらと揺らいだ。

リリーは、塞ぎ込んだ。何もする気が起こらず、監房で横になっていることが多くなった。近藤が来所し、ピアノ練習の誘いがあった時にも、体調不良を理由に断った。

練習の誘いを二度続けて固辞した時、心配した近藤はじきじき監房まで訪ねて来た。所長自らが監房に現われたので、周囲の抑留者たちは緊張した。

さすがに、リリーは病気のせいにはできなかった。

「いったんはご好意に甘えましたが、ピアノを弾くことが難しくなりました。クリスマス・コンサートも辞退させていただきたく思います」

「貴女が弾かないと、抑留者の人たちが悲しみますよ」

自分が弾くことを悲しく思う人もいるらしいと、険のある言葉が鸚鵡返しに出かけたが、咽喉もとで呑み込んだ。

「私たちは自由ではありません。自由のないところに、音楽を奏することはできません」

「……」

近藤は黙って踵を返した。怒ったようには見えなかった。自分の差配の及ばぬところにリリーが引きずり込んだので、対応のしようがなかったのだろう。折角の好意に泥を塗ったような気がして、リリーは棘の刺さったような痛みを覚えた。

近藤は数日を空けずにふたたびタナティンギ抑留所を訪ね、リリーを見舞った。リリーの返事は変わらなかった。

「私は弾けません。もうピアノを、弾きたくないのです」

最もふさわしくない人の口からその言葉を聞かねばならぬことを、近藤は辛く思った。久しぶりにピアノに触れた時の、リリーの晴れ晴れとした表情を知るだけに、残念でならなかった。だが、所長の権限で無理強いできる類のことではなかった。近藤はふたたび、無言で踵を返した。

近藤が引き揚げると同時に、抑留者仲間のエヴァがリリーを訪ねて来た。前の抑留所にいる時から身体を悪くし、壁を伝うようにしてリリーの監房までやって来た。

「リリー、もうピアノを弾かないって本当なの？　クリスマスのコンサートを取りやめたっていう噂を聞いて、いても立ってもいられず、やって来たのよ」

「……」

エヴァは痩せ、骨張って見えた。生気を失い、土色に変色した顔は、頬がこけ、眼窩が著しく窪んでいた。その奥から、訴えるような熱い眼差しがリリーに注がれた。

「リリー、貴女のピアノが聞こえてきた時、私がどんなに嬉しかったことか……。昔、バタヴィアで貴女のコンサートを聴いたの。夫も一緒だった。美しい南国の夜、私たちは音楽に酔ったわ。祖国から遠く離れている私たちにも、貴女は一流の音楽を届けてくれた。とりわけ貴女のモーツァルトに私は感動して、とても心が豊かになった気がした。演奏が終わった時、熱心に拍手をする私に、夫はキスしてきただわ。彼も、感動を抑えられないでいたのよ。忘れられない思い出だわ」

いつしか、リリーはその話に惹き込まれていた。ステージからは窺い知ることのできない、客席の人生模様に触れるように思った。エヴァは、荒れた息をしばらく整えてから、話を継いだ。

「貴女のピアノがこの抑留所に鳴った時、昔の思い出がありありと蘇る気がした。夫との日々は思い出してはいけない、思い出すと辛くなるばかりだと、心に蓋をしてきたの。でも、貴女の音楽が、それを

可能にした。するとね、リリー、こんな私でも、生きる力が身体の中から湧いてきたの。人生を諦めない、希望の光がほの見えてきたの。貴女の音楽は命の泉よ。貴女のモーツァルトが生きる望みなの。リリーお願い、クリスマスのコンサートをやって下さらない。私のため、私と同じような思いを持つ抑留者のために、どうぞピアノに向かって下さい」

エヴァの目に涙が光っていた。話を聞いているリリーの目からも涙が溢れ、頬を伝った。

そのリリーの顔を見て、エヴァは微笑みながら言った。

「リリー、モーツァルトを弾いて下さい」――。

リリーは走った。一目散に、大腿で駆けた。

エヴァの言葉は、飯田がいつも口にしていた言葉とそっくり同じだった。これは、単なる偶然を超えている。何か、大きな真理に至る鍵がここに秘められている。自分が弾かねばならない、弾くことを許される、天下晴れての道理がある。

音楽は、対立し合う両者に届き得るのだ。言語では主張をぶつけ合うばかりで和するところのない対立も、音楽ならばその溝を埋め得るのだ。

モーツァルトは、垣根を越え、あらゆる人の心に浄福をもたらす。その感動が、ひいては対立の垣根、そのものを氷解させるに違いない。私は、人の世に横たわるあらゆる垣根を越えた調和の美を謳って、ピアノを弾くのだ……。

リリーは走り続けた。監房棟を抜け、中庭を突っ切り、所長室を目指した。足に絡む突っかけサンダルがもどかしく、途中で放り飛ばし、後は裸足で走り続けた。

所長室のドアを押し開け、近藤の前に姿を現わしたリリーは、髪は乱れ、額からは玉の汗を流し、ハアハアと息を弾ませ、おまけに裸足だった。近藤は、リリーの切迫した様子に、息を呑んだ。

「所長さん、やらせて下さい。駄々をこねて、すみませんでした。活路が開けました。もう、迷いはありません。私は弾きます。全抑留者のために、クリスマス・コンサートでピアノを弾かせて下さい」

近藤は、大きく肯いた。

「サンタクロースが予定通り来てくれるようで、私も安心しました」

「ひとつお願いがあります。できれば、放送管弦楽団のイイダさんをコンサートに呼んで下さい。イイダさんには、こう、言付けしてほしいのです。『リリーが、モーツァルトを弾きます』と」――。

*

*

ピアノが、大倉庫に運び込まれた。

平素は食糧の保管庫として使われ、木箱や麻袋が積み上げられているが、それらは可能な限り隅に寄せられ、スペースが確保された。納まりきらぬものは事務所に運ばれ、廊下に積み上げられた。

作業には抑留者も駆り出されたが、女手に余る力仕事は、衛兵も手伝った。西洋人抑留者と日本人兵士が手を携えて事に当たるのは、ついぞないことだった。

剥き出しのタイル地の床が、平方形に広がった。千人近くの聴衆が集まる場所であった。会場作りに関わった者は、汗を拭いながら、労働の後の心地よさを実感した。これも、抑留所では初めてのことであつた。

夕方からは、音もなく小糠雨が降り始めた。

監房棟も、中庭の椰子の木も、櫓^{やぐら}の上の見張り小屋も、霧雨に濡れ、日が沈むにつれて形を臙にし、闇に溶けていった。後は、南国らしからぬ、肌寒い夜となった。

大倉庫だけが、赤々と灯に輝き、光の輪を夜霧に滲ませていた。その中には、千人もの抑留者たちが暮き、外の寒さが嘘のように、熱気に満たされた。椅子は数えるほどしかないので、身体の悪い者を除いては、全員が床に腰かけた。

中央奥には、黒のアップライト・ピアノが置かれていた。ピアノの両側にはキャンドル・ライトが灯され、箱型の巨大な影を壁に揺らした。

抑留者たちを囲み、平方形の辺に沿って、兵士たちが直立不動の姿勢で守備を固めた。しかし、いつものように銃剣は構えず、足元に置いた。近藤の指示であつた。

近藤は舞台下手の端、木箱を積み上げた壁を背に、腰かけた。その隣りには、飯田も顔を揃えた。飯田は、小半時前に到着し、慌しくリリーとの再会を果たしたのだった。

もつとも、言葉らしい言葉を交わすことはできなかった。飯田の胸に巢食う無念が、再会の喜びに水を差した。自分が「賭け」に負けたために、リリーをこのような目に遭わせている……。落魄の様子を目の当たりにすると、どうしても、自責の念から抜けることができなかった。

「ピアノを手配して下さったのも、実は、飯田さんのお蔭なのです。私ひとりでは、何もできなかったに違いありません」

近藤が気を利かせて、飯田に花を持たせた。飯田は照れ笑いを浮かべながら、ばつの悪そうな表情を崩さなかった。

むしろ、リリーの方が、屈託がなかった。演奏会を前にした気力の充実が、^{はため}傍目にも明らかであつた。

久しぶりに会う飯田に対し、終始、快活な笑顔を向けた。

一流のコンサート・ホールであろうと、抑留所であろうと、演奏に臨むリリーの姿勢に変わりのないことは去年のクリスマス・コンサートで知っていたが、アップライトの粗末なピアノであっても、いささかもテンションを緩めることがないというのは、飯田にとっても驚きであった。

ピアノを弾くということ、聴衆を前に自分の音楽を奏でることが、リリー・クラウスという人にとっては、業のようなものなのだろう。音楽を演奏するためにこそ、生まれてきたに違いないのだ。

その、時に凄まじい執念とも感じられる沸騰するエネルギーは、同じ音楽家でありながら、飯田には逆立ちしても敵うはずのないものだった。

リリーが登場した。たちまち、拍手が会場を包んだ。

こざっぱりとした服を着ているが、ステージ用のドレスではなく、平服であった。憲兵隊に拘束されて以来、演奏会用に所持していたイブニング・ドレスの類いは、没収されたままであった。もっともリリー自身、ステージ衣装などに頓着する次元を超えて、ピアノを弾きたい気持ちになっていた。

拍手で迎える人々に一礼し、リリーはピアノに向かった。

曲目は、オール・モーツァルトであった。エヴァに懇願されてコンサートの開催を決めた時から、リリーはモーツァルトで通すことを決めていた。

一曲目の「イ短調ソナタ（K三二〇）」が始まった。

嵐のようなバツセージが、砂塵を巻き上げて疾走する。乗馬ズボンにブーツを穿いたモーツァルトが、悲劇の運命に抗いつつ、歯をくいしばって懸命に駆けて行く。

リリーのモーツァルトの激情が、たちまち人々の心を鷲づかみにした。抑留の身を揺さぶり、痛んだ胸を熱くした。火花を散らす悲運との相克は、激しさの果てに光を模索しながら、疾風怒濤の勢いで荆の道を駆け抜けた。

続いて、曲は「幻想曲ハ短調（K四七五）」に移った。

一曲目とは打って変わった、ゆったりした曲調が、人々を瞑想的な気分誘う。短調が奏でる灰色の冬空に長調の春風がそよぎ、幸せの日の郷愁が夢のように薫る。悲しみと喜びは互いに絡まりながら、やがて溶け合って、大きな情の海に流れ込んだ。柔らかな光が波間に揺れ、人々の胸を塞いでいた怒りや嘆きが静かに洗われていく。

聴衆の間に広がる感情の波のうねりは、やがてリリーの胸をも浸す。大きな情の海に聴き手とともに漂いながら、音楽をめぐるリリーの想いはおのずと深まっていく……。

抑留者たちが音楽を聴く時の気持は、特別なものだ。一般社会の演奏会なら、どれほど聴衆が熱心でも、ここまでの濃密さはない。ここでは、皆が真剣そのもので、渴望するように音楽を求めている。

通常の人生を送っていれば、人は美しい景色を見たり、絵を見たり、本に感動したりと、心を潤すものがいくつもある。人が皆、クラシック音楽ファンということなどないだろう。だが、抑留所では、普段はモーツァルトやベートーヴェンに縁のない人まで、押しなべて、音楽に熱心に耳を傾ける。音楽を求める気持が、必死なのだ。

自分の弾く音楽が、日照り続きの砂地に降った雨のように人々の心を潤していくのが、リリーには手に取るように分かる。

音楽は、ここでは生きることそのもののなのだ。家族や愛や夢など、人生の大事なものをあらかた剝奪されながら、最後のひと皮のところまで何とか残っている人間性に、抛り、縋り、再生を願う、その祈りなのだ。

改めて、リリーは思う。音楽とは、何だろう……。

優れた作曲家は、音楽で命の詩を歌った。モーツァルトは、その代表格だ。音楽の持つこの最も本質的なものが、装いや飾りを排して、ここではストレートに聴く者の心に届く。ここでの音楽ほど、その本質を理解された音楽もないだろう。

演奏家にとっても、それは然りだ。自分も抑留者であつてみれば、なおさらだ。人間にとって音楽が根源的に必要であることを、人が生きる上でなくてはならぬものであることを、ピアノリストの自分も、本当にはここで初めて知ったのだ。

ピアノは粗末なアップライトだ。しかし、スタインウェイなどのコンサート・グランドが世界の檜舞台で奏でる音楽と、今、自分がこの抑留所の倉庫で弾く音楽と、どちらが尊いと言えるだろうか。もし、音楽の価値が、聴き手を感動させ、人に何がしかの力を与えることにあるとしたら、どのような一流のステージも、ここでの純度、密度には敵わない……。

音楽を職業とする者は、世界中にいる。だが、音楽の意味を、ここまで考えたものは、決して多くないはずだ。身をもつて、音楽の真の価値に思い至った者は、稀なはずだ。

だとするなら、ジャワでの抑留体験は、音楽の最も深い意味を知る貴重な機会ではないのか。ピアノリスト、リリー・クラウスに与えられた、天の恵みなのではないか……。

プログラムは、三曲目に移る。この日の演奏会の最後となる曲に、リリーは、有名な「イ長調ソナタトルコ行進曲付き（K三三二）」を置いた。

第一楽章の冒頭、誰もが知っている美しいメロディーが始まると、人々から溜め息が洩れた。童心そのものの、純化された旋律には、憎しみや争いのかけらもない。人はもともとこのように穢れなく生まれつき、愛を育んで生きるべきものなのだ。

純心無垢な主題は、変奏によって成長、発展していく。憎しみと争いに疲れ、傷ついた人々の心に、リリーの弾く愛の音楽が清純な生気を吹き込んでいく。餓え、乾き、死に瀕していた命は、岩清水の潤いを得たように、ゆつくりと蘇生する。

愛らしいメヌエットの第二楽章を挟んで、第三楽章はお馴染みのトルコ行進曲となる。

好奇心に満ちたモーツァルトが、ふたたび、乗馬ズボンにブーツを穿いて駆け出して行く。悲しみは去らず、苦しみはなおも寄せる。だが、悲劇を乗り越え、唇を噛みしめて、進むのだ。

それでも私は行く——。前を向くモーツァルトの叫びが聞こえてくる。光り輝く、あの空の高みへと、自分に鞭打って昇り行くのだ。

曲は最後のコーダに突き進む。生への執念は、いよいよ白熱して疾駆する。風に舞って飛翔し、この世ならぬ勢いで空の高みを天駆ける。宇宙に飡する生の賛歌を謳いながら、音楽は力強く、長調の和音で閉じられる……。

一時間にわたる演奏は終わった。

入魂の演奏のあまり、その余韻が引いて、リリーは、ピアノから立ち上がることができなかった。抑

留所の演奏会に、このような次元の高い音楽を出し得たことは、奇跡のようだと思った。しばらくは鍵盤を見つめたまま、放心状態が続いた。

リリーのモーツァルトを聴いた抑留者たちも、拍手を送ることなどできなかった。魂に響くあまりに強い感激に満たされると、人は、喝采を送るところではなくなるのだ。

張りつめた沈黙に波を揺らす、かすかな音の広がりを感じて、リリーは初めて、人々の方を見た。抑留者たちが、泣いていた。悉く皆が、滂沱たる涙を、誰憚ることなく流していた。

病にやつれたエヴァも泣いていた。売女だと自分を非難した例のオランダ女性も、顔をグジャグジャにして号泣していた。

二十年以上に及ぶリリーのコンサート・キャリアのなかでも、前代未聞のことだった。その光景を前に、今この時ほど、自分はピアノリストでよかったと、心の底から思えたことはなかった。

鳴咽を殺した男の太い声が背後に聞こえて、リリーは驚いた。

近藤も、飯田も、涙に潤んだ目頭を押さえていた。だが、泣き声は違うところからだった。

抑留者たちを監視して、直立不動の姿勢で演奏会に立ち会っていた若い兵士が、肩を揺らして泣いていた。

普段は荒々しく抑留者たちを吐り飛ばす日本兵が、今は、母の胸に抱かれた子供のように泣きじゃくっていた。

第十一章 抑留所長

午前十一時半、緊急の「テンコ」がかかった。何を措いても、すぐに集合しなくてはならない。朝の「テンコ」でなく、こうして時間外に招集がかかるのは、何らかの異常事態が起きた証拠だ。

緊張した面持ちの抑留者たちが、早足で裏庭のグラウンドを目指す。周りの抑留者に遅れぬよう、リリーも慌てて監房を出た。

一九四四年四月初旬、タンゲラン抑留所――。

リリーたちが四カ月を暮らしたタナティンギ抑留所からここに移って来て、一週間ほどになる。タンゲランの町から北東一キロに位置するこの抑留所は、もともと教護院として建てられ、後にはオランダ軍部隊の駐屯施設として使われてきたというが、レンガ造りの建物は暗鬱で重苦しく、監獄のような印象が強いことではタナティンギと変わりない。

巢穴から這い出てきた蟻の群のように、各監房から庭に集まった抑留者たちは、総勢千五百五十人にものぼる。英米、オランダなどの女とその子供たちが、陽炎の立つ庭にけだるい身体を晒してたがずん

だ。

灼熱の太陽が燦々たる陽射しを降り注ぎ、乾いた大地は遠慮なしに熱気を照り返す。監房の暗さに慣れた目には、立ち眩みを覚えるほどであった。

勢揃いをした抑留者たちを前に、幹部らしい軍人たちが登場した。高い身分の象徴のように、軍靴のブーツを黒光りさせて、炎天下の庭に横一列に並んだ。

リリーは、そのなかに近藤の姿を認めた。タンゲランへの移送直後に一度会ったものの、それ以来、姿を見かけなかった。本来ならば先頭に立つべき近藤が、列の端の方に力なく立つのを見て、何かが違う予感をリリーは覚えた。

やがて、列の先頭にいた軍人が、中央の台に上がった。険しい顔つきだった。

「今日から、当抑留所は、我々軍が直接に管理する。それに伴い、所長も所員の多くも、交替になる。私は、新しい所長の曾根である。軍が管理する以上、これまでのように生温くはいかない。日本は聖戦を遂行している。ここは、その最前線であると心得る。お前たち抑留者も、そのことを弁えなければならぬ。規律に違反した者、日本に歯向かう言動を行なった者は、ただちに厳罰に処す」

演説する男の獣のような視線が、さつと泳ぐのを、リリーは見た。二十メートルほど前にいた女性が、あまりの暑さに、竹の水筒から水を飲んだのだった。

「貴様、何をしている。真面目に聞かんか！」

男は演台を降りて、女の方につかつかと歩み寄った。女は、自分の行為が咎められたことを充分に理解できていないようだった。蛇に睨まれたカエルのように、おどおどと立ち尽くすばかりだった。

いきなり、男の鉄拳が飛んだ。顔を思いきり殴られて、金切り声とともに女は倒れた。男はなおも、

顔といい、腹といい、無抵抗の女を、力任せに蹴った。黒光りするブーツに、女の血が散った。転がり落ちた水筒から流れ出た水が、悲しみの跡のように、地に染みを残した。

皆、無言だった。恐怖に、全抑留者が縮み上がった。

許せない、リリーは思った。しかし、自分のできることなど何もないのだ。手を拱こまねいているしかない居心地の悪さを埋めるように、リリーは近藤の方を見た。

近藤も、蒼ざめた顔をしていた。新所長の暴行を目の当たりにして、民間人である抑留者への接し方がまるで違うことに、衝撃を受けているようだった。

「これは、単なる脅しではないぞ。我々は前任者のような温情は持ち合わせない。不屈き者が出れば、お前らの共同責任だ。懲罰として、全員、このままそこに立っている！」

曾根は、ひたすら暴君として君臨するつもりだった。

抑留者はそのまま、炎天下に二時間ほど立たされた。その間、私語を交わすことも、トイレに行くことも、許されなかった。誰もが理不尽極まりなく思ったが、服従以外に生き延びる道はなかった。

じりじりと肌を焼く炎熱の直射日光に晒されながら、千五百五十人の罪なき人々は、白日夢の如き「洗礼」が終わるのを、無言の行者のようにじっと待つばかりだった。

一九四四年三月、ジャワ全土の民間人抑留所が、軍政監部から軍の直接管理に移されることになった。それまでも、軍人や官吏を拘束した俘虜収容所は軍の手によって管理運営されてきたが、ここに来て、民間人にも厳しい処遇がとられることとなったのである。

この頃には、西洋人とあれば、枢軸国のドイツ人や永世中立国のスイス人といった例外を除くと、連

合国の人間であろうがなからうが、見境なしに抑留所に引つ張られた。背景には、戦局の悪化があることは公然の秘密であった。

軍が管理を継承した時点で、ジャワの抑留者の数は十一万人に膨れ上がっていた。その先も、さらに増え続ける見込みであった。抑留者数は鰻登りに増大し、しかし施設の拡充をする余裕はないので、既存の抑留所に詰め込めるだけ詰め込む方針がとられた。

例えば、ジャカルタ最大の民間人婦女子用施設であるチデン抑留所の場合、軍に管理が移行した段階での抑留者の数は五千人であったが、その後、収容者を加え続けて、終戦時には一万人を超える人々を抱えることになった。しかも、膨大な数の抑留者を限られたスタッフで管理するため、抑留所の敷地は以前に較べてかえって狭められた。当初は一軒の家屋に四、五人が生活する状態であったものが、最終的には二十人もの抑留者がともに寝起きすることとなる。

軍の直接管理と期を合わせて、抑留所の環境は、劣化の一途を辿っていった。リリーのいるタンゲラ抑留所でも、変化はたちどころに現われた。

朝の「テンコ」や仕事の規律は、以前に増して厳しくなった。整列の際に欠けている者がいると、大騒ぎになった。よほどの重病人でないと、欠席は許されなかった。

日本兵にすれ違う時には、「ケイレイ」をして腰を屈め、頭を下げなければならぬが、お辞儀はより深く、また長く要求された。敬意を示すという建前を超え、奴隷の服従が強いられた。

前触れもなく、監房が搜索されることもしばしばだった。そうになると、所持品の悉くがひっくり返され、強盗にでも押し入られたようになった。

些細な不始末が生じれば、該当者がその場で殴打されるだけでなく、周囲の者全員に懲罰がかけられ

た。裏庭に何時間も立たされ、水さえ与えられなかった。雨季から乾季に移り、勢いを増した太陽は容赦なく抑留者を炙り、昏倒する者も出た。

兵士の抑留者に対する態度は、公然と強圧的になった。銃剣と鉄拳が、規律の代名詞となり、暴力は日常と化した。

*

*

タナティンギ抑留所から移動する際、リリーのピアノは、近藤の指示によって、抑留者とともにタンゲラン抑留所に移され、大きな古い納屋に運び込まれた。リリーはそこで、好きな時に自由に練習をしてよいと言われた。

抑留所が軍の手に渡ったことで、リリーが最も怖れたのは、いったんは手にしたピアノがふたたび奪われてしまうのではないかという危惧だった。

ところが、不思議なことに、軍に管理が移されて以降、近藤が毎日のようにタンゲラン抑留所に現われるようになったのである。リリーの練習は引き続き許され、練習が始まると、近藤は納屋にやって来て、静かに腰を下ろして聴いているのだった。

新所長の曾根は、近藤から引き継ぐ形でジャカルタ地区の全抑留所の責任を担うことになったが、最も大きなチデン抑留所に詰めることが多く、幸いにも、中小の施設に足を向けることは少なかった。もっとも、その分、曾根が陣頭指揮をとったチデンでは、抑留者への残虐行為が繰り返され、恐怖が支配することとなった。

近藤は引継ぎの期間としてしばらくはなおも抑留所の運営に関わることとなったが、曾根はいち早く

自分流を貫きたい思いから近藤を避け、タンゲランに追いやってしまったのだった。

抑留所全体の雰囲気としては厳しさを増しているのに、リリーは、ピアノだけは連日弾くことができた。もちろん、他の抑留者同様、割り当ての労働は日課としてこなさなければいけないが、それ以外の時間をピアノに向かうことができるのはありがたかった。

日課の労働が始まる前の朝と、その後の夕方、リリーはピアノに向かった。いつも、抑留者数人が練習に立ち会った。ピアノの横で聴く者もいたし、遠慮をして納屋の陰から聴く者もあった。軍服姿の近藤がいると、初めは怖がって近寄らなかった抑留者も、日が重なるにつれ、同席を臆することがなくなっていた。

リリーは決まって、肩袖なしのシャツにショートパンツを穿き、お下げ髪を長く背に垂らした姿であった。サンダルを脱ぎ、裸足のままベダルを踏んだ。優雅な貴婦人がエチケツトや教養としてピアノに向かう姿とは、およそかけ離れた、野人のような恰好だった。

美しいピアノの調べが流れ出てくるまま、事情を知らずに中を覗いて、ジブシーに似た女がピアノと四つに組み、格闘でもするような激しさで鍵盤を叩く姿に、思わず尻込みする人もいた。リリーとピアノとは、狼か虎か、まるで生きもの同士が組み合っているように見えた。

リリー自身、なりふり構わずピアノを弾いていると、太平洋戦争勃発の直前、電気も通じないバリ島の村に籠って音楽に没頭した日々の、不思議な野性の力が蘇ってくるのを感じた。裸足で弾くのが、心地よいくらいだった。

その気持は、練習に立ち会う近藤にも、伝わってきた。リリー・クラウスというピアニストが持つ生の力に、圧倒される気がした。生い茂る熱帯の原生林が溜め込む濃密な空気のために、息をするようにう

あった。

日比谷の演奏会では、人生の岐路に立つ自分に勇気を授けてくれた。抑留所の演奏会では、チデンでも、タナテイングでも、沈みがちな抑留者を鼓舞し、生きる力を与えてくれた。

それは、リリー自身の中に、生を燃え立たせるエネルギーが、音楽と不可分になってたぎっているからなのだと、近藤は納得した。

練習が終わると、リリーはびつしりと汗をかいた。ある時、夕方の練習が終わった後で、近藤が椰子の実を割って、リリーに差し出した。ほんのりと甘い乳色の汁を、リリーは貪るように吸った。

軍の管理する新体制となつて以来、リリーの練習に立ち会っている近藤は、軍服は着ていても、ふと私人の顔を覗かせることがあった。この日は、ことさら、そのような雰囲気濃く滲ませていた。

「今お弾きになっていたのは、モーツァルトの『ピアノソナタ第十四番 ハ短調』でした。パロフォン社から出ていたレコードを持っていました。同じモーツァルトの『幻想曲 ハ短調』と一緒にレコードです。ハ短調同士の組み合わせなので、興味を惹かれたものです」

リリーは、近藤の知識の正確さに舌を巻いた。かなりのレコードをコレクションしているに違いなかったが、そのようなことを自慢げに語るなど、一度もなかった。

「日比谷の演奏会ですっかり感激してしまつて、それ以来、貴女とゴールドベルクさんのレコードは、できる限り揃えることにしたんです。お二人一緒のものも、ソロ演奏のものも、全てです」

「それほど、東京の演奏会が印象的でしたか？」

「演奏も素晴らしかったですが、私のような当時の若者にとってみれば、青春の思い出なんです。その

後、日本はどんな戦時色一色に塗られていましたから。あの年の桜は格別にきれいでした。モーツァルトの似合う桜でした。私は、妻となる女性とともに、桜を愛でながら、日比谷に通ったのです」

日がな一日、大地を照らし、炙り続けた太陽が、ようやく傾きかけていた。どこからともなく吹き通う柔らかな風が、涼しさとともに甘い花の香りを運んできた。黄昏の影のなかに俯く近藤の面差しは、どこか淋しげに見えた。

「所長さん、日比谷には、大切な思い出があるのですね」

「私は、もう所長ではありません。『所長さん』は、ご遠慮願いまししょう。近藤さんと呼び下さい」

「分かりました。コンドウさん、ロマンスの話、もう少し伺ってもよいですか」

近藤は、はにかんで微笑んだ。含羞の美しい人だと、リリーは思った。

「日本の男は、そのような告白に慣れておりません。ただ、人生の岐路に貴女の演奏に出会って、大いに励まされたのは事実です。私は東京の大学を出て、北海道の函館という町で英語教師をしていたのです。音楽が好きで、よく町の名曲喫茶に通っていたのですが、夏の間、店の主人の親戚の娘が、勤め先の東京から帰省して店を手伝っていました。本人も音楽が好きで、レコード係りとして働いていたのです。私はその娘に恋心を覚えるようになって、結局、教師の職を捨て、後を追うように上京しました。一九三六年三月のことです」

「私たちが東京を訪れたその頃に……」

「そうです。音楽が結びつけた縁ですし、クラウス＝ゴールドベルクの演奏会があるというので、早速一緒に出かけたのです。二人で行く、初めての演奏会でした。私は大学時代に父を亡くし、経済的には楽ではありませんでした。娘の家庭はしっかりした家柄でしたから、経済的な後ろ楯のない私は旗色が

悪かった。相思相愛の仲ながら、諦めるしかないかと思っただけのこともあります。でも、活き活きとした輝きに溢れる貴女のモーツァルトを聴いていたら、勇気が出てきたんです。愛を信じて、生きていく力が、身体の下から湧いてきたのです。私だけではありません、その娘も、愛に生きる勇気をもったのです」

リリーは、すっかり近藤の話に惹き込まれてしまった。

抑留者のエヴァが、バタヴィアの演奏会の思い出を語った時と同様、ステージからは察しようのない聴き手の人生模様に触れたように思った。自分の演奏が、聴く者の人生の節目で大事な役割を果たしたことに、奇跡を見るような気になるのだった。しかも、それが愛に関わることとなれば、リリーは小躍りしたくなるような興奮に駆られた。

「貴女とゴールドベルクさんの弾くレコードを集め出したのも、日比谷の体験に端を発しているのだと思います。特に、モーツァルトのヴァイオリン・ソナタは、擦り減るほどに聴きました。東京の下宿で、妻と決めた女性と一緒に聴きながら、将来を誓い合ったものです。それから一年して、私は新天地を求めて台湾に渡り、警察の仕事につきました。芙美は——、芙美というのがその女の名ですが、単身、後から追いかけて来て、私たちは台湾で夫婦になりました。若い日の情熱は、一途なものです。貴女の弾くモーツァルトと同じように……」

自分らの家族が、イタリアのコモ湖畔で最後の平和な暮らしを送っていた頃、この人は愛を信じて、芙美という女性と新天地で暮らし始めた。二人の愛だけが、頼りだったはずだ。その愛を、ほかならぬクラウス＝ゴールドベルクのモーツァルトが支えていたというのだ。

「台湾でも、レコード蒐集は続けました。勤務地が田舎町だったので、演奏会に行く機会のない分、レ

コードは取り寄せてでも集めました。妻と二人してレコードを聴くのが、身寄りのない土地での唯一の楽しみでした。日比谷の思い出を、よく話し合ったものです」

演奏家にとって、リサイタルは純粋に音楽を提供する場だ。だが、客席を埋める聴衆は、それぞれの人生のページにおいて、音楽を享受する。演奏の輝きが人生の輝きに重なった時、そのコンサートは永遠となる。近藤の場合も、そうだったに違いない。

「それでも、自分らのささやかな幸せに、いつまでも浸っているわけにはいかなりました。一年足らずのうちに私は召集され、中国の戦地に二年近く送られました。戦地から戻って一年あまりすると、今度は太平洋戦争が始まりました。そして蘭印平定後に、台湾の警察からの募集に応じて、ジャワに赴任することになったのです。警察関係で英語ができる者は多くはいませんから、期待されました。私としても、内地から母や妹たちを引き取っていましたし、子供も生まれましたので、少しでも収入のいい勤め口が必要だったという事情もありました」

自分らがコモ湖畔の家を追われた頃、この人は中国に戦争に行った。日本軍の蘭印進駐によって、自分らが外に出られなくなった時、この人は台湾からジャワに渡って来た。南の島から、さらに南の島へと、渡り鳥のように海を越えて来た。

「コンドウさん、貴方も旅の多い人生を送ってきたんですね……」

「そうかもしれません。生まれたのは、秋田という本州の北にある町です。秋田、東京、函館、台湾、ジャワ——、思えば、ずいぶんと流転を重ねました。どこへ行っても、音楽だけはいつも一緒でしたけれど……」

「ご家族の方々は……?」

「主のいない家を守って、そのまま台湾に暮らしています。妻と子供が二人。上が女の子で三歳、下の子は男の子ですが、私がこちらに赴任してから生まれました。まだ、一歳です。それに、母と、妹が二人。皆、私の帰りを待っているはずですよ」

「では、これでご家族のもとに帰れるんですね」

「そうもいけません。日本は総力戦を戦っています。抑留所の仕事は離れても、警察官の私に勝手な真似はできません。戦争が終わるまでは、息子の顔を見ることもできません」

家族の話が出て、リリーは夫や子供たちのことを思い出した。ディッキー、ルース、マイケル——。彼らの消息は、いまだに全く分からぬままだった。

「私の子供も、上が女の子、下が男の子です。娘は十三歳、息子は十二歳になるはずですよ。は、はずとしか、申し上げることができませんが……」

近藤の表情が変わるのが、夕闇のなかにも手に取るように分かった。

「申し訳ありません。ご家族と一緒にになりたいという貴女の願い、忘れたわけではありません。いま少し、時間を下さい。ただ、これだけは申し上げられます。ご家族は、お元気です。バンドン方面の抑留所に、ご主人と、お子さんたちと、別々にいらっしゃるようです」

今度は、リリーの表情が変わる番であった。

「本当ですか？ 皆、元気なのですね。ああ、よかった。こればかりは、神様に祈るしか仕方のないことだったんです。自分の努力や心がけでは、どうしようもない。病気になるっていいないか、苦しい思いをしていないか、ちゃんとご飯は食べているか……、どれほど思ったか知れませんが、でも、元気なのですね。そうですか、バンドンで……。ここよりは、涼しいですね、よかった。コンドウさん、ありがと

感謝されることが、かえって辛いこともある。リリーの喜びようが明らかであればあるほど、心中に抱えてきた苦悩が偲ばれる。近藤は痛みに苛まれた。リリーの苦悩は、抑留者ひとりひとりが抱える苦悩でもあるのだ。

リリーは、しばらくは夫や子供たちへの思いに浸っていたが、俯いたまま口を噤んでいる近藤に気づいて、ふたたび声をかけた。

「奥様——フミさん、でしたね。フミさんも、音楽がお好きなのですね」

近藤は、話の向きが変わったので、ホッとするように表情を和らげた。

「ええ、音楽がとりもったような縁ですから。先日、久しぶりに妻に手紙を書きました。リリー・クラウスの演奏を、毎日聴いている。レコードではない、生演奏だと。去年のクリスマス・コンサートの後にも、手紙を出しました。モーツァルトの素晴らしい演奏を聴いたと。その時は、妻から返事が来しました。クラウスの演奏が聴ける貴方が羨ましい。手紙を見て、モーツァルトのヴァイオリン・ソナタのレコードを聴きました。日比谷でも聴いた思い出の曲です。貴方と一緒に、ジャワで生演奏を聴いているような気になりました。女子供ばかりの家を守っていくのは楽ではないけれど、日比谷の感動を思い出しながら、頑張っています——。そうありました。我が妻ながら、健気な女性です」

リリーは、じいんとしてしまった。胸の底から、切ないような、懐かしいような、曰く言いたい熱い感情が湧き上がってきた。目の奥は、早くも潤み始めていた。

「フミさんは、着物をお召しですか」

おかしい質問に違いなかった。案の定、近藤はリリーの顔を見て、相好を崩した。

「日本の女ですから、普段は着物です」

リリーの脳裏に、ひとつのイメージが浮かんでくる。

瓦屋根を抱く木の家がある。生垣に囲まれて庭があり、奥には畳の部屋が覗いている。その隅に、でんと居座る箱型の蓄音機がある。やがて着物を着たひとりの女性が現われる。花をあしらった着物が、楚々とした面立ちによく似合う。女は、レコードをかける。クラウス・ゴールドベルクの弾くモーツァルトが流れ出す。レコードを聴きながら、女は蓄音機の横に置いた写真立てを手に取る。若い男女が並び、微笑んでいる。女の隣りにいる男は、ずいぶんと長い間、家を空けたままだ。

女は立つて縁側に向かう。板敷きを踏む白足袋が陽射しに映える。女は、遠くに思いを馳せるように庭を眺めてたえずむ。黒髪が風に流れ、額にかかる。はらはらと、薄桃色の花びらが舞う……。

そこで、リリーのイメージがいったんストップした。

「コンドウさん、台湾というところにも、桜は咲きますか？」

唐突な質問に、ふたたび近藤の目尻が緩む。

「台湾桜という桜があります。内地のものより花は小ぶりですが、色はかえって濃く、鮮やかです」

これで、決まった。

着物を着たフミさんという日本女性と、桜の花と、クラウス・ゴールドベルクの弾くモーツァルトと……。歳月を超え、日比谷からジャワに続く、永遠を思わせる光景が、今、絵になった。

「コンドウさん、モーツァルトのヴァイオリン・ソナタのなかでは、どれがお好きですか？」

「やはり日比谷の思い出が原点にありますので、そこで聴いた『ハ長調』と『変ホ長調』でしょうか。レコードで美美と繰り返し聴いたのも、これらの曲でした」

また、決まった。絵に、特定の音が付いた……。

日比谷のモーツァルトを聴いて、愛を誓い合ったカップルがいる。日比谷の感動を今も大事にし、生きる支えにしている人たちである。クラウス・ゴールドベルクの演奏を、まるで自分らの人生の宝物のようにずっと大切にしているのである。「ハ長調ソナタ」も、「変ホ長調ソナタ」も、彼らの胸の中には永遠に鳴り続けるのだ。

音楽家にとって、これほど嬉しいことがあるだろうか。音楽評論家が何を言おうが、新聞がどのような演奏評を載せようが、こうして聴き手の人生に自分の演奏が生きていることこそ、音楽を天職と決めた者にとって最大の醍醐味である。

だが……と、リリーは一瞬、躊躇する。

だが、この人は抑留所長だ。多くの抑留者に不自由を強い、悲嘆に陥れた責任を担う人なのだ。抑留者の多くは、この人を「敵」だと言うだろう。日本が自分たちに強い悲運を、全てこの人にぶつけようとするかもしれない。

私がこの人の来し方や家族について、関心を持ったり、共感を覚えたりすることは、いけないことだろうか。間違っていることだろうか……。

しかし、とリリーは思う。少なくとも、この人はこのような環境に身を置いても、人間性を失っていない。新任の曾根と較べた時、そのことははっきりする。それはおそらく、音楽への愛がこの人を支えているからだ。桜の舞う演奏会の思い出を、今も大事にしているからだ。その愛と思い出を、美美さんという女性とともに、どのような人生の局面においても、繰り返し噛みしめ、慈しんでいるからだ……。リリー・クラウスとシモン・ゴールドベルク——。世界の音楽ファンに愛されたデュオは、地球の裏

側に位置する桜の国の人の心にも、このような美しい軌跡を残した。二人の演奏するモーツァルトは、その後の困難な時代を超えて、今も人の心に光を照らし、生き続けているのだ。

言葉の次元なら、この人と私は、どこまで行っても敵味方かもしれない。戦争の続く限り、対立は解けぬことだろう。でも、音楽の次元なら、この人とも和解はあり得る。音楽は、壁を越えるものだ。憎しみを溶かし、赦し合うものだ。

そうだ、モーツァルトは「赦し」だ……。

オペラ「フィガロの結婚」のクライマックスは、伯爵夫人から不実の伯爵への「赦し」だ。「後宮からの誘拐」のラストは、太守セリムの愛を拒んで祖国に逃走するコンスタンツェとその恋人への「赦し」だ。最晩年のオペラ、「皇帝テイトの慈悲」は、タイトルからして、慈悲Ⅱ「赦し」だ。

突然、ある閃きがリリーを襲った。自分でも、あつと驚くアイディアだった。が、さすがにそれを即座に口にするのは憚られた。

「コンドウさん、ゴールドベルクは、今、どこにいるんです？」

「貴女が抑留されて数カ月後には、やはり抑留所に収監されました。今は、バンドン近郊のチマヒ抑留所にいると聞いています」——。

その日は、そこまだった。

ひと晩中、リリーは思慮を重ねた。板敷きの寝台の固さには慣れたはずなのに、その夜は眠れず、輾転反側を繰り返した。

シモンも、やはり囚われの生活を送っている。彼と一緒に長い旅を続けてきたストラディヴァリウスの名器は、どうしたのだろう。抑留所でも、ヴァイオリンを練習することは許されているのだろうか。

眠れぬ夜に、自分とのデュオ演奏の記憶を蘇らすことはあるだろうか……。

ジャカルタの放送局で、気まずく別れてしまった時のシモンの顔を思い出した。臍を噛むような苦々しさが、眠れぬ枕頭にいつまでも揺れる。

ああ、シモンに知らせたい。東京で弾いた自分たちの音楽が、愛と希望の支えとなった男女がいたのだ。貴方とのデュオは、それほどまでに、気高いものだった。近藤と芙美さんが、その感動をずっと忘れないでいるように、桜の国の二重奏の思い出は、私とシモンにとっても、永遠の誇りなのだ……。

翌日、夕方の練習の後に、リリーは近藤に告げた。

「コンドウさん、お願いがあります。このタンゲラン抑留所でも、演奏会をさせてもらえないでしょうか。クリスマスの時と同じように、音楽が聴き手の心を癒してくれるようお願いのです。ただし……、是非とも、コンドウさんがこちらにいらっしやるうちにやらせて下さい。お願いします」

リリーの物言いには、微妙な含みがあった。

「それはもちろん、抑留者の皆さんに聴いてもらうためのものですね……」

リリーは黙って肯いた。

近藤は、咄嗟に思案した。抑留所の運営から言えば、音楽会は、慰安事業に含まれる。クリスマスのような、誰にも納得のできる名目があれば認めやすいのだが……。そうだ、間もなく天長節（天皇誕生日）がやってくる。この日に合わせれば、慶祝行事として通りはよくなるだろう。だが、曾根はこのような抑留者への「慰安」を認めるだろうか。ここは、自分の時代にすでに決まっていたことを装う方が無難であろう。何としても、自分の責任において、事を進めるしかあるまい……。

「四月二十九日は、日本の今上陛下の生誕記念日です。この日なら、演奏会を開くことも可能だと思います。ただ、あくまでも、私の責任において開催することにしませう。こちらに移って来る前から、決まっていたことにさせて下さい」

リリーには、近藤が慎重な上にも慎重を期する気持がよく分かった。自分は今「所長」ではないと言った時の、淋しげな表情を思い出した。だが、今、目の前にいる男は、所長時代の凛々しさを蘇らせている。その剛毅な気分（すが）に絶る（た）ように、リリーは話を継いだ。

「もうひとつ、お願いがあります。これがいかに大変なお願いかは、承知しているつもりです。でも、私の気持も必死です。コンドウさん、ゴールドベルクと一緒に演奏させてもらえませんか」

「……」

「日本がジャワを占領して以来、私はゴールドベルクとのデュオをやめたんです。ラジオ放送と一緒に弾くよう説得された時にも、首を振りました。私が、嫌だと言ったんです。でも、もう一度だけ、彼と弾いてみたいと思うようになりました。桜が美しかった東京の二重奏を思い出しながら、この抑留所で、演奏してみたいんです」

「しかし……、ゴールドベルクさんは、承知するでしょうか」

「相談したわけではありませんから、正確には私にも分かりません。でも、おそらく、承諾してくれると思います。リリー・クラウスのたつての願いだと、伝えて下さい。シモンは、来てくれるはずですよ」

近藤は頭を抱えた。ダメだというのは、やさしい。だが、この女は、難しさを承知の上で懇願している。何かしら、胸中に切羽詰まったものがあることは間違いない。音楽家としても、人間としても、どうして必要なことなのであろう。

しかも、自分のいる間に演奏したいと言い、東京の二重奏を思い出しながらと言うなど、言葉の端々から、昨日の会話が関連しているニュアンスが嗅ぎ取れる。自分としても、これがリリー・クラウスとの最後の音楽会になることは間違いない……。

「ご希望は、分かりました。どうしたらいいか、考えさせて下さい。飯田さんにも相談してみましよう。できる限り、努力はしてみます」――。

近藤は、早速、飯田に連絡を取った。

その夜、ジャカルタの小さなバーで、二人は会った。密談にはふさわしい場所だった。互いに顔を合
わすのは、クリスマスコンサート以来であった。

ゴールドベルクとふたたび弾きたいというリリーの希望に、飯田は驚いた。青木が言葉を尽くして説得しても、首を縦に振らなかったリリーである。かなりの心境の変化があったに違いなかった。しかし、生きる意欲はむしろ前向きなように感じられた。

近藤は併せて、抑留所の管理が軍に移行されたこと、自分はほどなくして抑留所の仕事から手を引くことなども説明した。また、リリーから依頼された家族との再会、同居の懸案についても、手は尽くしているが、宙に浮いたままなかなか進まないことを、率直に話した。

西洋人への風当たりが厳しさを増し、民間人抑留者の管理に軍が乗り出してきた息苦しいご時世のなか、リリーのために何ができるか、飯田と近藤はともに頭をひねった。

「ゴールドベルクのいるチマヒ抑留所の所長はどういう人なんですか？」

「軍が引き継いで、ほんの短い間は高木という人が所長でしたが、つい最近、笠原源吾という人に替わ

りました。ジャカルタの会議で、一度会ったことがありますが、曾根さんのような強面^{こわもて}には見えませんでした」

「先方の責任者が、そのようにくると替わったのは、この場合、好都合だったかもしれませんがね。ところで、家族との再会の方ですが、男女別になっている抑留所で、夫婦や家族と一緒に暮らせるような可能性はあるのですか？」

「ジャカルタ市内にあるクラマート抑留所に、そのような特別待遇の抑留者を入れる施設が出来ています。チデンと同じように、民家の集まる街区を、塙で仕切って抑留所になっているのですが、一般抑留者とは別に、特別待遇者用の区域を設け、家族には一軒ずつ家を与えて住まわせています。私も、家族一緒に暮らせるのはこじかかないと思いい、当たって見たのですが、すでに満杯で、入れる家がない状態なのです。もちろん、それ以前に、クラウスさん一家が、そうした特別待遇に値するかどうか、そのハー
ドルは別にあるわけですが……」

飯田は、かつて一度敗れた「賭け」に、ふたたび出番が回ってきたように感じた。第一ラウンドは、自分の負けだったが、この第二ラウンドには、捲土重来を期して勝負をかけたい。可能性がある限り、リリーのため、何とかせずにはいられないのだ……。

その夜の密談は、深夜に及んだ。結果として、次のような基本趣旨を確認した。

軍政監部は、ジャワ占領以来、クラウス・ゴールドベルクの演奏を兩人に一貫して要請してきた。しかし、リリー・クラウスは頑として承諾せず、演奏会のみならず、ラジオ放送でも、要請に応えることはなかった。ところが昨今、クラウス本人が恭順の姿勢を見せ、日本国への感謝を一般抑留者とともにすべく、天長節の慶祝演奏会を催し、往年の名コンビ、ゴールドベルクとの演奏をもって、奉祝の念を

あまねく広めたいと一念発起するに至った。軍政監部及び現在クラウスを収監するタンゲラン抑留所は、この改悛を諒とし、その実現に向けて関係諸部署の善処を請う。なお、当事業はもとも年初に企画されたものだが、抑留所の管理が新体制になるに伴い、再度の要請を行なうものである――。

趣旨の内容が、リリー本人の気持とかけ離れていることは、百も承知であった。しかし、リリーの願いを実現するには、このような公式見解が、どうしても必要だった。

これは、賭けだ――。ふたたび、飯田は強く自分に言い聞かせた。

宙に浮いていた家族との再会同居問題も、今回の共演を踏み台として、一気に事を前進させる。リリー・クラウスを、日本がないがしろにできない重要人物として、ステータスを復権させる好機に変じてしまふのだ。

早速、チマヒ抑留所の笠原所長宛てに、ゴールドベルクを借り受ける依頼書が作成された。飯田、近藤の連名で書かれた文書は、曾根の頭越しに送られた。

*

*

笠原源吾は、音楽とは無縁に生きてきた男だった。リリー・クラウスも、シモン・ゴールドベルクも、名前すら知らなかった。

抑留者の演奏家をジャカルタ郊外まで出張させたいとする依頼書が届いた時、それほど大事な人物が自分の管轄するチマヒ抑留所にいることに、意外な事実を知る思いがした。前任者の高木整吾は音楽好きだったから、そのような相談がジャカルタの方となされていたのだろうと判断した。

とりあえず、その世界的なヴァイオリン弾きという男を、所長室に呼び出した。何とはなしに、ギリ

シャ彫刻風の、偉大さを絵に描いたような人物を想像していたのだったが、現われた男は小柄で、控え目な感じであった。髪の毛も目も黒いので、日本人の自分とそう変わらないように見えた。

「貴方が、シモン・ゴールドベルクさんですか……。リリー・クラウスという女性をご存知ですね。現在はジャカルタ郊外に抑留されていますが、貴方を呼んで、一緒に演奏会をやりたいと言ってきています。先方の抑留所も、軍政監部のお偉方も、了承しています。いかがですか？ 行きますか？」

「……………」

いかにも、降って湧いたような話だった。ゴールドベルクは、即答を避けた。

「演奏会といっても、抑留所で行なうのです。抑留者に対する、一種の慰安ですな。もちろん、演奏料など、派生する話ではない。どうします。貴方が嫌なら、断ります。行きたければ、私としては、温情を示してもよいかと考えます」

「それは、日本軍の命令なのでしょいか……」

「いや、そうではない。どうも、このリリー・クラウスというピアノ弾きの女性が、是非とも貴方に来てほしいと言っているらしい。天長節の祝いに、貴方との演奏を披露したいとのことなのです。どうも女性というのは、どこの国であれ、少々わがままなところがあるようですね」

ゴールドベルクは、笠原の冗談に笑った。

確かに、わがままには違いなかった。二重奏をやってくれとの青木の願いを断っておきながら、今度は自分から共演したいと言ってくる。いつだって、自分を中心に世界は回る。彼女自身の思いが、終始、先行する。

だが、その思いの中では、リリーはいつも必死なのだ。懸命で、一途で、他人のためにひと肌脱ぐな

ど朝飯前で、同情心のあまりに純な涙を流し、損得勘定などいっさい抜きで、脇目も振らずに突っ走る。今回のことも、きつと、リリーの胸の中では、大変な「発見」があったのだろう。何を措いても自分と演奏しなければならぬ天下の大真理を見つけたに違いないのだ。思いあぐねて眠れぬ夜を過ごすこともあったろうが、ひとたび自分の中で決断がつくや、もはや後戻りはきかなくなる。周囲を巻き込んで、彼女の「わがまま」を押し通すのだ。

しかも、リリーは知っている。ゴールドベルクが必ず来ることを知って、呼びかけている。

リリーと出会って十年、いつも彼女が前を走り、自分は後からつき従った。演奏でもそうだし、人間としても、決まってそうだった。それは、黄金のデュオの宿命のように感じてきた。その宿命は、今だって変わらない……。

「行きます。行つて、リリー・クラウスと共演します！」

*

*

一九四四年四月二十九日、天長節（天皇誕生日）――。

笠原自らが引率して、ゴールドベルクを乗せた車がバンドンを発つたのは朝のうちだった。部下に調達を命じておいたヴァイオリンは、ゴールドベルクが試し弾きすると、弓に松脂をたつぷりと塗らなければ、とてもではないが人前で鳴らすには忍びないという代物だった。ところが、その松脂がなかった。松脂とは何か、何のために必要なものか、笠原に知識はなかったが、途中のジャカルタで何軒か店を当たつて、松脂の購入に奔走した。そのため、タンゲラン到着がだいぶ遅れた。

リリーとゴールドベルクが再会を果たした時には、演奏会の開始まで一時間あまりに迫っていた。

互いの近況を確かめ合う時間もなかった。リリーが何故、ゴールドベルクとの共演を決意するに至ったのか、説明をしている時間もなかった。

会うやいなや、二人の対話は、音楽のことに終始した。まるで、昨日もともに演奏した同士が、旅先でその夜の公演の打ち合わせをするようであった。

リリーは、演奏する曲目を告げた。

最初に、モーツァルトの「ヴァイオリン・ソナタ ハ長調（K二九六）」。次に、ベートーヴェンの「ヴァイオリン・ソナタ第五番 スプリング」。最後に、ふたたびモーツァルトの「ヴァイオリン・ソナタ変ホ長調（K四八二）」――。

「シモン、弾けるわよね。念のため、楽譜はイイダさんに持って来てもらったけど……」

「大丈夫。楽譜は必要ない。ヴァイオリンでの練習はできていないけど、いつも頭の中で弾いている」ピアノに触れることができなかったストラスウェイク抑留所で、リリーもイメージのなかで練習を繰り返したものだ。シモンもそのようにして、音楽を忘れずに生きてきたのだろう。

抑留生活も半年を超えたはずだが、着ているものがくたびれていて、前には違いない知性と気品に溢れた濃厚な紳士だ。音楽を支えにしてこなければ、容易に自壊してしまつたに違いない人間性が、今もシモン・ゴールドベルクという人の全身を温かく包んでいる。

再会して以降の短い時間のなかで、リリーはそのことをはつきりと理解した。自分自身、いつ人間性が瓦解してもおかしくない状況に身を置いてきただけに、シモンが昔のままの清々しきで登場したことは、とても嬉しかった。

「楽器は？」

リリーは、シモンの目を窺うように尋ねた。あの名器はどうしたのかという含みを持たせたつもりだった。

「今朝与えられたヴァイオリンだから、どういう音色が出るか、自分でもよくは分からない。『女房』とは、別々さ。収監される時、隣人のスイス人夫婦に『握手』して別れてきた……」

名器ストラディヴァリウスは、密かに隣りのスイス人に渡され、守られている！ リリーは、快哉をあげたい気持ちを必死で堪えた。

「私の方も、中古のアップライトなの。でも、このような場所で必要なのは、魂の音楽よ。抑留者に必要な音楽は、小奇麗に上辺を飾ったものではないわ。生きることそのものに関わる、魂に訴える音楽が求められるの。普通の演奏会とは違うけれど、音楽の本質がそこにあることは間違いないわ」――。

*

*

煌々と照る月が、抑留所の建物を白銀の光で柔らかに包んだ。雨季が明け、乾季が訪れたことを示す、爽やかな夜であった。

演奏会が行なわれるのはいつもリリーが練習する納屋だったが、この夜はピアノを戸口の間際まで移し、戸を開け外して、納屋に面した庭に抑留者たちを集めた。納屋には電燈が灯されているので、庭からだと、ピアノはステージに置かれたように見えた。

月の雫を浴びた土の庭に、人々は銘々に腰を下ろした。クッションやデッキチェアを持ち込む者もいた。ヨーロッパの夏によく見られる、野外コンサートの趣であった。

近藤は笠原と並んで最前列に陣取った。飯田は、聴衆の背後に立って、万が一にも邪魔が入ることの

ないよう、周囲の様子を窺った。

もし曾根が突然訪ねて来るようなことがあったら、混乱は避けられない。そのような場合、近藤は演奏を止め、自分が抑留者の前に立って、天長節に当たったの調話に切り替える算段であった。飯田は、緊張しながら、見張りを続けた。

リリーとゴールドベルクが連れ立って登場したので、人々は驚き、沸いた。演奏会の内容については、発表されないままだったのである。音楽ファンは、かつて一世を風靡した黄金のデュオの名声を周りの者に吹聴した。

演奏する当の二人にとってみれば、実情はぶつつけ本番に変わらなかった。曲目が告げられて以降、ゴールドベルクは慣れないヴァイオリンを弾き込むことに夢中で、リリーとは合わせる余裕などなかった。

「シモン、東京で弾いた頃を思い出して。あの時のような演奏をしてほしいの」
本番を前に、リリーが曲目についてゴールドベルクに語ることができたのは、それだけだった。

一曲目が始まった。モーツァルトの「ハ長調ソナタ（K二九六）」――。クラウドスⅡゴールドベルクの名を不動のものとした不滅の金字塔となる曲だ。第一楽章、アレグロの快活なモーツァルトが、テンポよく流れ出した。青春の輝きが、清流を泳ぐ魚のように、ぴちぴちと跳ね、躍る。

ゴールドベルクは、弾き始めてすぐに、リリーのただならぬ熱気を感じた。前のめりに駆けて行く疾走感、昔に変わらない。だが、何度となく共演してきたなかでも、演奏にかける意気込みが図抜けて懸命なのである。渾身の技と力で鍵盤を叩き、息もつかせぬほどの緊迫感のなかに音楽を走らせる。

年代物の粗末なアップライト・ピアノは、艶や輝きという点にかけては、グランド・ピアノの足元にも及ばない。それでいながら、リリーのピアノの雄弁さはどうだろう。このような楽器で真剣勝負をかけてくるピアニストは、世界広しといえども、そうはいない。そのひたむきさに、ゴールドベルクは共感を覚えた。

かつては速すぎるように感じたテンポも、今は小気味よい。初めて練習をともにした時、ハンガリーの奔馬を感じたことを思い出す。自由を奪われたこのような環境にあつて、闊達さを失わないリリー・クラウスという女性は、よくよく生のエネルギーに満ち溢れた人なのだろう。

リリー・クラウスのピアノが走り、シモン・ゴールドベルクのヴァイオリンが従う……。それでよいのかもしれない。

モーツアルトのヴァイオリン・ソナタとは、もともとそのような構成で書かれている。黄金のデュオがモーツアルトを最大の看板としたのは、当然のことだった。今は、舵取りをリリーに任せつつ、その向かう先を見極める快感に身を委ねたい……。

リリーもまた、演奏が始まってすぐに、共演者のただならぬ力量を思い知るところとなった。

とても久しぶりに楽器を手にした人の演奏であるとは思えない。音程に、いささかの狂いもない。音楽に、迷いや乱れが全くない。

もちろん、ストラディヴァリウスが奏でる、芳醇のワインが薫り立つようなふくやかな響きであるとか、魔術を思わせるほどの艶冶な蠱惑であるとかは、望むべくもない。だが、楽器の良し悪しを超え、確信に満ちた音楽がしっかりと鳴っている。真摯な魂が、真善美に溢れた音楽を歌っている。

しかも、この人の凄さは、自分が前面に出て、音楽を支配しようとするのではなく、相手の音楽に耳

を澄ませ、ともに和すことによって、深い歌を歌い上げていくことだ。その、^が私の立ちすぎぬところに個性を光り輝かす類い稀な妙技が、共演者を唸らさずにはおかないのだ。

シモンのヴァイオリンを得て、リリーは舞う。その温かな抱擁のなかに、翼を得て飛翔する。どこまでも高く、自由に、蒼穹に鳴くヒバリののように、リリーは歌い、飛ぶ。

二楽章のアンダンテになれば、薄絹をそよ風に靡かせ、ゆつたりと舞う天女になる。三楽章のアレグロになれば、青雲を縫って、疾風のよう^{はやて}に駆ける天馬となる。

身体の底から、欲びが溢れてくる。おそらくは太古の昔、人間が初めて歌を覚え、音の出る道具を手にして以来、ずっと続いてきた欲びである。音楽が本然的に持つ欲び。生きる欲び。この世を生きる全ての命あるものと呼吸を通わせ、ともに歌うことの欲び――。

独奏の時とは全く違う欲びと魅力に、リリーは痺れそうになる。シモンとの二重奏は、生きとし生けるものとの合唱なのだ。モーツアルトは、ピアノとヴァイオリンの対話のなかに、命の^{こゝろ}を高らかに歌い上げたのだ……。

曲が変わり、ベートーヴェンの「スプリング・ソナタ」が、春の思い出を紡ぎ始める。

冒頭に奏でられるヴァイオリンの主旋律の、なんと清らで、優しく、愛らしいことだろう。このメロディーを、これほど清潔に、瑞々しい抒情に溢れて弾くヴァイオリニストを、リリーは知らない。

桜の花が、はらはらと舞い始める。汚れない、清純そのものの花。世の中が、どのように醜く吼え立てようと、決して穢^{けが}されることのない永遠の春の思い出……。リリーの胸に、日本の春がまざまざと蘇ってくる。

デュオとしてデビューをして、まだ一年数カ月だった。リリーもシモンも、充分に若かった。何を見ても、何を聞いても、リリーはシモンと感激を共有しなければ気がすまなかった。夫に語る前に、シモンに話をしていた。夫に訊く前に、シモンに尋ねた。シモンと自分の間に、何の溝もなかった……。

近藤と美美さんがその年の桜を、クラウス・ゴールドベルクの演奏と結びつけ、不滅の愛の思い出としているように、自分らにとってもまた、花盛りの日本での日々は、音楽の上でも、生身の人生においても、黄金のデュオの最も充実した輝ける記憶なのだ。

美しい花の思い出。平和の思い出。愛と友情の思い出――。

桜の花は、はかなさの象徴であるとも聞く。爛漫と咲き誇る日々は短く、長かれと望む人々の声も空しく、雨風にあたり散ってしまう。美しき思い出は、束の間の輝きゆえに、なお一層美しく匂い立つものののだろうか。

時代は移る。人生も移る。平和は戦乱に変わり、自分とシモンには、曰く言いがたい溝が出来てしまった。あれほど美しく咲き誇っていた桜の花は、もはや散ってしまった……。

しかし、今、この抑留所という特殊な場所でも、自分とシモンは、永遠の夢をふたたび見るのだ。桜の花を、いま一度、満開にしてみせるのだ。他のどの奏者たちにも敵わない、黄金のデュオの真髓を、ふたたび我が手に取り戻してみせるのだ。

コンサート・ホールでのリサイタルなら、もはや共演はあり得なかっただろう。しかし、粗末な楽器を相手に、音楽をパンと水のように欲する抑留者たちを前にしたこの演奏会でなら、往年の蜜月の栄光と充実を、復活させることが許されるに違いない。

その逆説に、リリーはかけたいのだ。荒れ狂う時代を、時計の針を逆転させるように、穢れなき春に

戻したいのだ。クラウス・ゴールドベルク神話の不滅を、信じたいのだ。

その意志に応え、支持するように、ベートーヴェンは力強く、信念を固めた高みへと駆け上がって行く。「スプリング・ソナタ」の謳歌する春が、絢爛と輝いて歓喜の光を照らし出す……。

そして、ふたたびのモーツァルト。「変ホ長調ソナタ（K四八二）」が、快活に流れ出す。

しばしば、ピアノが主でヴァイオリンは伴奏と言われるモーツァルトのヴァイオリン・ソナタのなかでも、この曲の第一楽章ほど、そうした印象の濃い音楽はない。冒頭から、真珠を転がしたような輝きを煌めかせてピアノが縦横に走り、寄り添うヴァイオリンの唱和を得て、音楽をぐいぐいと牽引して行く。

リリーがこの曲をフィナーレに持ってきたのは、ピアノとヴァイオリンの駆け引きに、モーツァルトが用意した、とっておきの仕掛けがあるからだった。

それまで、悉くピアノによるリードで展開してきた第一楽章の途中で、くるりと背中を向けるようにピアノが陰に回り、ヴァイオリンによるメロディーが現われる。そのメロディーが、「交響曲第四十一番ジュピター」の第四楽章、音楽がいよいよ宇宙的に展開するフーガの主旋律と同じなのだ。

十代の頃、ウィーンでワインガルトナーの指揮による演奏を聴いて以来、リリーがモーツァルトの真髓と信じてやまない「ジュピター交響曲」の至高の世界に、ヴァイオリンが導く。それまでずっと陰に留まっていただけに、いきなり光のもとに姿を晒したヴァイオリンの晴れ姿は、輝く騎士のように神々しい。

リリーのピアノは、駆け足を続ける。乗馬用のズボンとブーツを穿いたモーツァルトが、ひたすら光

を目がけて疾走して行く。第一周を、リリーが軽やかに先頭で走りきる。やがて、バトンを渡すタイミングが近づいて来る。

さあ、ここからよ、シモン。貴方のヴァイオリンが、「ジュピター」の宇宙に私を導く。愛と平和の宇宙に、さあ、私を連れて行つて……。

はたと、リリーのピアノが裏に回る。そこに、絶妙の呼吸で、ゴールドベルクのヴァイオリンが入つて来る。「ジュピター」の旋律が、ベルベットの光沢を秘めた無限の柔らかさで鳴らされる。全てを超越した魂の音楽が、崇高な祈りを奏でる。

そうよ、シモン。凄いわ……。

ごくごくする快感が腰から突き上げ、リリーは思わず身を震わせる。

それよ、シモン。それでこそ、シモン・ゴールドベルクだわ。貴方は天才よ。間違ひなく、貴方は世界一のヴァイオリニストだわ。私が選んだパートナーは、間違ひていなかった……。

「ジュピター」の旋律は終わり、ふたたび、ピアノが前面に躍り出る。ひとたび調和の世界に導かれた音楽は、揺るぎない至福の緊張を保ったまま、第二楽章のアダージオに、そして第三楽章のアレグレットへと進んで行く。

ふわりと、身体が宙に浮く。そのままリリーは飛翔して、抑留所の扉を、やすやすと越える。憎しみの壁を越え、戦争に狂奔する穢れた世界を振り捨て、清浄な気が包む天空へと昇りつめる。

リリーは、夜空を浮遊する。星の瞬きを、笑顔の挨拶と見、愛の囁きと聴く。モーツアルトの音楽が満ちる星の海に、諍ひは無縁だ。ここでは、人は互いを赦し合い、そして皆、限りなく自由なのだ。シモンも、ディッキーマ、ルースやマイケル、近藤に飯田、全ての抑留者たち、皆が、モーツアルトに浸

され、その音楽に溶けて、やがて大きな生命の環に連なっていく。

リリーは、その星空の海を泳ぐ。生命を信じ、光を歌って、リリーは、自由の大海を進む。どこまでも前を向いて、ピアノとともに、リリーは生きる……。

「変ホ長調ソナタ」が終わった。この日の演奏会の曲は、全て終了した。

抑留者は皆、音楽に魂を奪われて呆然となり、ただ涙を流していた。リリーもまた、演奏が終わってもなお、魂はまだ星空を泳ぎ続けたままだった。

真つ先に拍手をしたのは、笠原だった。それが礼儀と思い、手を打ったのだが、誰も続く者がいないので、拍手の手を止め、周囲を見回した。

それに気づいて、最後列から、飯田が力強い拍手を送った。魂の音楽としか言いようがない演奏に、飯田は心から感銘した。普通の環境なら、おそらくはあり得ない質の音楽が鳴っていた。

近藤の拍手が加わった。笠原もふたたび拍手した。

三人の拍手に、抑留者も我に返った。初めは静かに、しかし次第に波のように拍手が広がり、リリーとゴールドベルクの熱演が讃えられた。

拍手の渦に、リリーは現実に戻った。すぐ横に、ゴールドベルクが、どうしていいか分からぬというように立っていた。奇跡を奏でたのは、この人だ。永遠の私のパートナーだ。そう思った瞬間、リリーはゴールドベルクに抱きついていった。

「シモン、シモン……」

後は、言葉にならなかった。リリーの目から涙が止めどなく溢れ、ゴールドベルクの肩を濡らした。

満場の拍手を浴びて、二人は抱き合ったまま、彫像のように動かなかった。

*

*

ゴールドベルクと笠原が引き揚げ、リリーも監房に下がり、飯田と近藤の二人だけになった。夜もだいぶ更けていたが、飯田は何故か、いままじ近藤と話したい気がして、所長代理の執務室に席を暖め続けた。

「いい演奏会でした。心配したような邪魔も入らず、ホッとしました」

「見張り役、ご苦勞様でした。飯田さんに相談したお蔭で、このような演奏会が可能となり、感謝しています」

「ゴールドベルクもさすがでした。久しぶりだというのに、あのように息の合った名演奏を聴かせるのですから。二人の実力のほどを、私も改めて知らされました」

「家族再会に向けても、きつと弾みがつくでしょう。笠原さんも、満足していたようです。抑留者の慰安に、音楽もいいものだ、感想を洩らしていましたから」

よい兆候だと、飯田は感じた。賭けの第二ラウンドは、充分に脈があるように思えてきた。

「飯田さん、お気づきでしたか？ 今日のプログラムは、皆、東京で演奏したものでしたね……。はつきりとは言いませんでしたが、どうやら私への送別^{はなむけ}の饞^{はなむけ}という意味も多少はあったようです」

「ここには、いつまでお勤めですか」

「あとひと月あまり……。その間、クラウドさんのもうひとつの願いがかなうよう、最善を尽くすつもりです」

「近藤さんも、淋しくなりますね」

確かに、抑留所の所長という立場だったからこそ、近藤はリリーの演奏を間近に聴く機会を得たのだ。自分が抑留所を離れるか、リリーが収監を解かれれば、たちどころに解消してしまう関係なのである。

リリーの演奏に接してきた自分の僥倖は、土台のところが歪んでいる——近藤はそう思うと、木枯らしに吹かれたような寂寥感を覚えた。

「そう、淋しくなります……」

近藤は、視線を遠く窓外に泳がせた。

消灯時間が過ぎ、灯りを落とした監房棟が、月光を浴びて、闇の中に無言のシルエットを浮かばせている。

「でも、本当に淋しくなるのは抑留者たちです。リリー・クラウドがここを出て、抑留者が音楽を聴く機会をなくした時、彼女たちが心の張りを失うことを危惧します。抑留所長だった私をよく思わない者もいるでしょうが、それでも、抑留者のことを見続け、最もよく考えてきたのは、私なのです」——。

ひと月前まで抑留所長だった男は、飯田に向けた背に孤影を滲ませながら、呟くように語った。

第十二章 鳩の家

ルースは料理を作り、洗濯をした。マイケルは、木をノミで削り、^{ひつき}柩を作った。それが、十三歳の少女と、十二歳の少年の日課だった。

栄養失調や病氣から、亡くなる人は絶えなかった。ゲットーのように塀で囲った街区に、一万一千人を超す婦女子が暮らしている。満足な薬もなく、ひとたび病を得た者は、みるみるうちに衰弱していった。

バンドン、チハピット抑留所――。

一九四三年六月、ジャカルタでの慈善演奏会に出演するためにバンドンの家を出たリリーとマンデルは、そのまま何日たっても帰って来なかった。事情の分からぬまま、ルースとマイケルは、知り合いのオランダ人、ヴィトリング夫妻に引き取られ、数カ月後には、夫人とその子供たちが収監されるのに伴い、ともにチハピット抑留所の門をくぐったのだった。

その間、ジャカルタの父から「心配するな」という葉書が一枚来たきり、いつさいの連絡はなかった。

両親の消息について全く情報のないまま、孤児同然の姉弟は、大人に命じられるまま行動するしかなかった。命令は、ヴィトリング夫人からのこともあり、日本軍からのこともあり、抑留者の大人たちからのこともあった。

一九四四年六月初旬、抑留所の所員がやって来て、翌朝六時、着替えなどの携行品を持って、門のところで待つようにと命令した。二人の子供だけだとヴィトリング夫人に念を押して、男は帰って行った。マイケルが衛兵の目を盗んで配給品のジャムを貯蔵庫からくすねた直後だったので、姉弟は、懲罰にかけられるのではないかと怖れた。保護者であるヴィトリング一家から離され、とんでもない遠い場所に送還されるのではないかと危惧した。いや、ひょっとして、自分たち二人が別々に引き裂かれたらどうしよう……子供は不安に締め上げられ、眠れぬ夜を過ごした。

翌朝、恐る恐る門のところに行くと、日本兵の歩哨からゲート脇の衛所に案内された。そこで、温かいスープが振る舞われた。恐怖は退いていったが、不安は尾を引いた。

やがて、町の方から、一台のトラックが抑留所の門に近づいてきた。

荷台に立つ男を見て、姉弟はびっくりした。ヤギ鬚を生やした背の高い中年男――、紛れもなく、父、オットー・マンデルの姿であった。

子供たちはトラックに駆け寄り、日本兵が阻止しない様子を確認するや、荷台に駆け上^{のぼ}って、父に飛びついた。一年ぶりの再会に、しばらくは言葉も出なかった。

トラックはすぐに動き出した。向かう先は、バンドンの駅だと知らされた。銃剣を手にして、荷台の隅から自分らを監視する日本兵を気にしながら、ルースは父に尋ねた。

「ディッキー、リリーは？」

「私にも、分らない。憲兵隊の拘禁を解かれた直後に、ほんのわずかの間会ったきりで、すぐまた別々になってしまった。その後は、どこでどうしているのか、全く分らない……」

バンドンからは、汽車に乗せられた。ジャカルタ方面に向かう列車だったが、自分らの行き先は知れぬままだった。車中でも兵士が向かい合って坐り、ずっと監視を続けているのだが、終始無言で、何を訊いても暖簾に腕押しという感じだった。

それでも、兵士は車中で弁当を買ってくれた。ナシゴレンという卵入りの焼き飯だったが、三人は貪るように食べた。ルースもマイケルも、これほど美味なものが世の中にあるとは、信じられない気がした。抑留所で自分が料理するものなど、これに較べれば家畜のエサだと、ルースは思った。

汽車がジャカルタに着くと、三人は降りるよう言われた。駅の外に出ると、ふたたびトラックの荷台に乗せられた。

その頃になると、三人の胸には、明らかな期待が広がってきた。だが、その期待があまりに大きすぎて、裏切られることが恐ろしく、誰も口に出すことができないでいた。

トラックはジャカルタの町をひた走り、塀で囲まれたゲッターの門に近づいた。歩哨が門を開け、トラックはそのまま中へ入った。

しばらくは、徐行しながら、左右に民家の並ぶ街路を進んだ。すると、遙か前方から、お下げ髪を揺らし、大股で駆けて来る女の姿が目に入った。どんと、女はこちらに近づいて来る。

もう、間違いはなかった。

「リリー！」

三人が同時に声を上げた。

リリーは立ち止まり、大きく手を振りながら、何やら大声で叫んだ。家族の名前だか、喜びの感嘆詞だか、三人の耳には聞き取れなかった。そんなことは、どうでもよかった。トラックが停まると同時に、三人は荷台から飛び降り、リリーに抱きついた。

家族四人が輪の形にしっかりと抱き合い、一本の太い幹のようになった。

長い間、夢に見るほどに願ひ、今朝方までは予想もしなかった家族再会は、こうして実現した。

*

*

リリーたちが入所したのは、ジャカルタ市内のクラマート抑留所であった。

一般抑留者の施設に並んで、家族用の区域が特別に囲われていた。リリーらが入所した時点で、八百人近くの家族たちがいた。国籍はオランダを中心にばらばらだったが、その多くは、「ニッポン・ワーカー」と呼ばれる専門の職能によって日本の軍政に協力する人と、その家族たちであった。

到着当初、リリーたちは他のオランダ人たちと同居を強いられ、窮屈な思いをしたが、ほどなくして、自分たちだけの住居を与えられた。ただし、一軒家には空気がなかったとみえ、本来はガレージだったところを、仮の住まいとしたものだった。

ガレージの家に落ち着くとともに、リリーのピアノが運ばれてきた。象の蹲うずまつまのような不恰好な形のアップライト・ピアノが、ふたたびリリーの友となった。タナティンギ、タンゲランの抑留所を経て、クラマートまで来たのである。ピアノが届いた日には、もうひとつの「家族再会」を果たしたような気がした。

リリーは家族たちにも、自分がどうしてこのピアノを手にすることができたかを、熱っぽく語った。

東京のコンサートを聴いた親切な抑留所長が現われたこと。その人から、手助けしたいが何か望みはないかと尋ねられたこと……。

「そこで、私は言ったの。はい、望みがあります。一にピアノ、二に家族再会です——。そのお蔭で、こうして皆一緒に暮らせるようになったのよ」

マンデルは興味深そうに聞いていた。だが、ルースとマイケルは、腑に落ちない表情をした。特にルースは、あからさまに口を失らせて、母親に言葉を返した。

「リリー、ピアノが第一で、私たちとの再会は二番目だったの？」

「……………」

リリーは、予想もしなかった娘の抗弁に言葉を失った。ルースから指摘されるまで、そのことは非を問う気持はかけらもなかったのだ。確かに、自分はそう言った。第一にピアノを、そして二番目には家族との再会を……。

しかし、それが自然の感情だった。もちろん、家族のことを思わぬ日など、一日とてなかった。夫や子供と会いたさに、枕を涙で濡らした日も、数えきれない。だが、何がほしいと訊かれて初めに浮かび上がってくるのは、どうしたってピアノなのだ。

もし、同じことを同じ状況でふたたび尋ねられたら、きっと同じように答えることだろう。まずはピアノ、そして家族……。

「ルース、ピアノストにとって、ピアノは自分の手足と同じなんだよ。ピアノがないリリーは、リリーじゃない。だから、リリーが『第二に家族』と言ったのは、実質的には一番の願いということだ」

マンデルのとりなしで、その場はルースも矛^へを収めた。だが、以後、何か不満があると、ルースはこ

の問題を蒸し返し、そのたびに、気まずさが家族の間に広まった。

離れ離れに過ごした一年の間に、子供たちは微妙に変化していた。

とりわけ、リリーが驚いたのは、マイケルに盗み癖がついていたことだった。抑留所の管理するものだけでなく、身の回りの抑留者の所持品からもたびたび失敬した。盗まなければ、生きてはこれなかったのだらうと察しはついても、何とかやめさせねばならないと、リリーは案じた。

ピアノが入ったこともあって、ガレージの家は、四人が暮らすには手狭だった。家財道具の類いを外に出さねば、食事をするスペースもままならなかった。雨が降り出すと、大慌てで外に出したものをしまわなければならないかった。

夜になると、家はネズミの巣窟と化した。どこからか、夥しい数のゴキブリも這い出てきた。初めてのうちは追い払うことに懸命になったが、じきに、慣れるしかないと悟った。

不便も不都合も、数えればいくらかもあった。それでも、間違いないそこには、家族一緒の生活があった。

料理、洗濯は、ルースの役目だった。マイケルは樞作りで磨いた腕を活かし、木を削って下駄のような履物を作った。リリーは、毎日ピアノを練習した。マンデルは、家族のまとめ役に徹し、四人で演じることのできる劇を創作して、家族の結束に努めた。

憲兵隊による逮捕以来、リリーが収容されていた抑留所は、もともと監獄や教護院として建てられたところばかりだったので、石造りの密閉された監房に起居を重ねてきた。たとえ、ガレージを改造した粗末な家であっても、民家の並ぶ街区に移り住むことができたことは、リリーには大きな喜びだった。

樹木が茂り、花が咲き、鳥が歌い、蝶が舞う。それだけで、リリーはこの世の息吹に触れ、命の光を

直接浴びるように思うのだった。

*

*

大きな驚きもあった。ガレージの家のすぐ近くに、ゴールドベルクがマリア夫人とともに移って来たのである。

その姿を見た時、タンゲラン抑留所での共演がこのような事態の好転の引き金になったことを、リリーは直感した。自分の知らないところで、きつと近藤や飯田がずいぶん骨を折ってくれたに違いない。

「シモン！」

リリーは、ゴールドベルクに駆け寄り、頬にキスの挨拶をした。続いて、マリア夫人にも同様のキスをしたが、夫人の表情は強張り、棘のある感情を隠せないでいた。

ゴールドベルクはヴァイオリンを所持していた。彼本来のストラディヴァリウスではなかったが、タンゲランでの共演の際にあてがわれたヴァイオリンが、そのまま手元に置くことを許されているらしかった。

リリーは、ゴールドベルクとふたたび練習をしたかった。ようやくにして、光が注ぎ、木や鳥など自然の生命に囲まれた環境に戻って来たのだ。自由と平和には遠くとも、二人で心を合わせて音楽に専念することで、何ものによっても侵しがたい「別天地」を創出することができるように思った。

戦争が終わるまで、全てを放擲する覚悟で、ここでシモンと音楽三昧に耽りたい。黄金のデュオならではの息の合った演奏に没頭することで、不自由のなかにも自由の王国を打ち立てたい……。

ある日、リリーはその想いを告げに、ゴールドベルクの家を訪ねた。

「シモン、貴方との音楽を、ここでの生き甲斐にしたいの。これまで演奏したレパートリーも、新しい曲も、日に数時間ずつ、合わせることにしましょう。お願い。午前でも午後でも、都合のよい時に、ピアノのある私の家に通って来て」

ゴールドベルクは即答を避け、近くにいたマリア夫人の顔色を窺った。夫人の表情が、みるみるうちに険しくなった。感情の高ぶりに顔が紅潮し、「ひい」というような呻き声を洩らした後、今度は蒼白になった。

ゴールドベルクは、マリア夫人に駆け寄り、その身体を支えた。支えなければ、その場に崩れてしまいうようなほど、夫人はショックを受けていた。リリーは、そのまま退散するしかなかった。

やがて、近隣の人々の目にも明らかほど、マリア夫人はリリーを避けるようになった。リリーが夫に近づくことを、何よりも嫌った。何かの拍子にリリーと目が合うと、一分の隙もないような拒絶の視線を向けた。ニロム放送局の廊下で受けた視線と同じだった。

女としての嫉妬が根本にあることは疑いようもなかった。だが、それを超えて、精神が軋み、悲鳴をあげているようなところがあった。戦争と抑留という異常事態が、マリア夫人を痛めつけているに違いなかった。

リリーはやりきれない思いだった。隣り同士と言えるほどの距離に暮らしながら、シモンと会うこともままならない。二重奏の練習をするどころではなかった。

こうしてせっかく、それぞれの家族ともども、再会を果たしたのだ。自由の身には遠いにせよ、一般抑留者にしてみれば夢のまた夢という待遇である。やっかみのあまり、対敵協力者として非難を買いそ

うなくらいだ。

だが、タンゲランでの二重奏で感じたシモンとの一体感は、掬い取った水が掌からこぼれ落ちるようには、またしても逃げてしまわなかった。

石の壁が光を塞ぎ、家族の消息も分からぬ牢獄のようなところだからこそ、ほんの束の間、昔日の夢に酔うことができたのだろうか。こうして少しでも光の当たる場所に出てきた途端、シモンとの間は、たちまち埋めようのない溝に隔てられる運命なのだろうか……。

結局、ゴールドベルク夫妻は、三カ月ほどクラマートにいただけで、立ち退いて行った。おそらくは、本人たちが他所に移してもらえよう頼み込んだのだと思われた。

トラックの荷台に乗って、クラマートを去って行くゴールドベルク夫妻を、リリーは物陰に身を隠すようにして見送った。身も心も憔悴しきったマリア夫人を庇うように、ゴールドベルクは糟糠の妻にぴたりと寄り添っていた。

クラウスⅡゴールドベルクのデュオは、リリーが先を走り、シモンが巧みに合わせながら後に従うものだった。演奏でも、人生の上でも、それが二人の間の不文律だった。しかし、今、シモンは自分の判断で、初めて彼が先に立つ形で、リリーのもとを離れて行く。

シモンとの二重奏は、もう永遠に訪れない——。その予感に、そして予感を支える確信の強さに、リリーは怯え、震えた。

運命とは、なんと皮肉なものだろう……。小さくなっていくトラックを目で追いながら、リリーはひとり、唇を噛みしめた。

何か大きな皮肉のなかに、自分はある——。ゴールドベルクが去って以来、そのような気持が日増しにリリーの胸に広がっていった。

気持に張りが無い。毎日が同じ繰り返しで、これだと、鉦脈に行き届いた確かさをつかむことができない。永遠に日曜日が続いている感じで、しかもその日曜日は、押しつけられたものである。

無聊を慰め、心の隙を埋めるように、リリーは絵をよくする近くの夫人から、水彩画を習った。習うばかりでなく、身の回りの風景や近隣者を描いてはプレゼントした。子供用のサンデー・スクールにも顔を出し、そこでも積極的に活動に参加した。

しばしば、ホーム・コンサートも開いた。近隣者をガレージの家に集めて、サロン・コンサートのようにして演奏した。

リリーのオープンな性格と活発な行動力は、隣人たちから歓迎された。人々の輪の中に立ち、花と咲く生来の能力は、このような場所でも遺憾なく発揮された。

だが、リリー自身の中では、何かがなかった。どのように人と交わろうと、決定的に何かが欠けていた。

何をして、膝を打つ感じや、鉦脈に届いた感じがしない。真の充実感が、ついぞ湧いてこない。雨や嵐はないが、からりと晴れ上がるでもなく、ぼんやりとした曇天が続くばかり。要するに、永遠の蛇の生殺しなのだ。

ある日、タナティンギやタンゲランの抑留所を懐かしく感じる自分に気づいて、リリーは腰を抜かしそうになった。いけない妄想に捉われているのだと、自戒するのに必死だった。家族と離れ離れに暮らしたあの辛い日々が、今に勝っているわけなどないではないか……。

だが、久しぶりにピアノを与えられた時の喜びやら、音楽に飢えた千人もの抑留者を前に演奏した時の感動やらは、ここクラマートではもはや訪れ得ぬものに違いなかった。

ニッポン・ワーカーとして初めから家族と同居が保証されている者と、身内の安否すら分からぬまま、人間性の瓦解するぎりぎり一步手前のところで音楽を求めてやまない者とは、自分の演奏に向かう態度もおのずと違ってくる。同じ曲を演奏していても、生きる糧そのものとして必死の思いで聴く抑留者たちから伝わってくるあの独特の熱気は、ここでは望みようもなかった。

家庭人としては夫や子供たちとの再会に満足を覚えつつも、ピアニストの本能が、タナティンギやタンゲランの聴衆が放つ一種異様な熱気と、それに応えて弾く自分の充実感に、ノスタルジアを感じてならないのだ。

それが、リリーが正直に見つめた「大きな皮肉」の正体だった。だが、それは家族には言ってはならないことのように思えた。快活を装いつつ、ピアニストの本音としては、リリーは孤独で、虚ろだった。

*

*

衛兵がリリーを呼び出しに来了。面会者が来たという。衛兵につき従ってゲート近くの執務室まで行くと、飯田が待っていた。タンゲラン抑留所での演奏会以来だった。

「もっと早く来たかったのですが、いくつもの仕事为重なり、ともかく忙しくて……。どうです、落ち着きましたか？」

飯田は、そう言うなり、持参した大きな袋をテーブルの上に置いた。中には、卵や果物、食料品が入っていた。

「土産です。たいしたものではありませんが……」

「いろいろとありがとうございます。育ち盛りの子供が一緒なので、助かります」

「本当は、シャンペンでも持ち込んで、乾杯したいくらいです。憲兵隊に逮捕されて以来、ここまでの待遇を確保するのに、時間がかかりました。ようやく、という感じです。ピアノとご家族と、これだけは何とかと思い、奔走しました」

賭けによりやく勝ったのだと、飯田は言いたかったが、思い留まった。今もなお、ゲッターの中の抑留生活を強いられている当人を前にしては、さすがにそれは言いかねた。

「イイダさん、今もオーケストラの指揮はなさっているのですか？」

「ラジオ放送での演奏や、宣伝映画用の音楽録音などもあって、それなりに忙しくはしています。定期演奏会も、形だけは何とか続けています。でも、メンバーのうち何人もが抑留所に入れられてしまい、人数がだいぶ減りました。楽器編成をめぐってしょっちゅう編曲に追われています。メンバーの身柄のことで、憲兵隊や軍にかけ合わねばならないことも出てきます」

飯田が開口一番に語った忙しさには、そうした方面のことも含まれているに違いなかった。

「『ハ短調協奏曲』の頃が、懐かしい……」

リリーが洩らした呟きの力ない響きが、飯田には気になった。前を向いて走ることを身上とするリリーが、現実から逃れるようにぼんやりと過去を慕っている。

「マダム・クラウス、何か問題でもあるのですか？」

「シモン・ゴルドベルクがいなくなりました」

風の便りに、飯田もその噂は耳にしていた。タンゲランの演奏会の後、しっかりと抱擁した二人を見

て、和解はなったと思っていただけに、ふたたび別々の道を選んだと聞いて、不思議にも残念にも感じた。ただ、事の微妙さを知るだけに、こちらから踏み込むべき話題ではないように思って、この件に関しては口を噤んだままでいた。

「せっかくお骨折りいただいたのに、すみません……」

飯田はなお、ゴールドベルクに関しては、質問することも、感想を洩らすことも控えた。

黙ってリリーを見つめる飯田の目に、いたわりが滲んでいた。リリーは、家族には言えぬことも、この人には告白できる気になった。

「イイダさん、貴方だから正直に言います。実は、不思議な気分なのです。ピアノもあります。家族も一緒です。でも、何もないかもしれないのです。分かってもらえますか。恩知らずのように聞こえたら、ごめんなさい。貴方には本当に感謝しているんです。でも、やはり何かがないんです……」

そう語りながら、リリーの瞳がみるみるうちに潤んだ。涙を落としてはいけないと思って、リリーは唇を噛んで俯いた。

飯田は、賭けに勝ったと思い、凱旋するような気分でクラマートを訪ねたことを恥じた。

扉に開かれた、その内と外とでは、やはり天地ほどの差があるのだ。真の自由は、ここにはない。自分の力では、これ以上どうすることもできないが、その歴然たる事実、目を瞑るわけにはいかない……。

リリーは、襟を正すようにして、言った。

「イイダさん、私は待ちます。冬が過ぎ、春が来るのを待つように、戦争が終わるのを、ここでじっと待ちます。その日が来たら、ピアノスト、リリー・クラウドスは、本当の意味で生き返るのです」――。

悄然とした気持を抱えながら、飯田は抑留所を後にした。

リリーのためにと思い、自分なりに尽くしてきたつもりだった。だが、善意に酔うようなところがあったかと問われれば、自信はなかった。偽善的であったとは思いたくないが、リリーの痛みにどこかで理解が及んでいたか、怪しいものだという気がした。

慈善演奏会を開くことで憲兵隊の追及をかわそうという「賭け」を意識した時からだけでなく、実は、最初に放送局で出演を依頼した時から、それは変わらなかったのではなからうか……。

スタジオでのピアノ演奏に覚えた高揚感も、協奏曲を指揮して感じた一体感も、自分の胸はその感動ではち切れそうなくらいにいっぱいだった。リリーは常に自分の理解が及ばない影を抱えていたに違いないのだ。

車に乗っても、すぐには啓民文化指導所の執務に戻る気がしなかった。特に目的があるわけではなかったが、港に向かった。海が見たいと思った。

そのような気分は、ジャワでは初めてだった。自分自身のセンチメンタルな感情に、飯田は驚いた。普段は役人だか教員だか軍人だか、よく分からぬ顔をして澄ましている。だが、それでも音楽家の端くれなのだ。時には、おセンチにだってなる……。

港は潮風に満ちていた。海はどこまでも続いているように見えた。その途中に人が境を設けることなど馬鹿らしく思えた。茫洋と広がる海原を渡ってくる風を、飯田は深々と吸い込んだ。

その時、港の隅に停泊した貨物船に、日本兵に命令されて大勢のインドネシア人が乗り込んで行く光景が目に入った。百人近くはいるだろう、男に交じって女の姿もある。皆、一様に不安に怯えた表情で、

船に渡された梯子板を上^のって行く。

「ロームシャ（労務者）」と、日本語がそのまま現地語に定着した徴用労働者たちに違いなかった。ボルネオやシンガポール、タイなど、日本が必要とする各地の労働現場で働くために、家族と離れ、海を越えて行くのだ。海を渡ったが最後、異郷に果てる者も多いと聞く。

大東亜戦争の完遂という大義名分によって、ジャワの村からこうして素朴な民衆までが駆り出されている。啓民文化指導所の現地人スタッフにも、「ロームシャ」の徴用は圧倒的に評判が悪い。解放軍と信じた日本への信頼感を、足元から揺るがせている。

飯田は、魚雷攻撃を受けた輸送船から海に投げ出され、重油にまみれて泳ぎ、命からがらジャワに上陸した。それでも、植民地解放の気概に溢れ、意気揚々としていたものだ。ジャカルタに入城した時の人々の歓迎は今も忘れがたい。

だが、いまや何かが違う。決定的に、違う。

何かがない、何もなし、と語ったリリーの言葉が蘇ってくる。これだけは、塙のあるなしに関わりがないのかもしれない。全てが違い、狂ってしまったている。

いったい、この戦争はどこまで行くのだ……。

リリーを慰問したこの日、飯田の胸は、いつまでも晴れなかった。

*

*

単調な抑留の日々に、ささやかな変化が現われた。それは、新たな命が身の回りに増えたことによってもたらされた。

リリーが有名なピアノリストであると聞いて好奇心を持った若い日本兵が、マイケルに、家の隅で演奏を聴かせてほしいと頼み込んだ。大ピアノリストに直接かけ合うより、子供の方が頼みやすかったのだろう。口利きの札に、兵士は番いの鳩をマイケルにプレゼントした。

食糧の配給が満足にないなか、日本兵としては、食用のつもりだったかもしれない。だが、クウクウと咽喉を鳴らす鳩を両手に包んで、その身体の内くもりをじかに感じて以来、マイケルにとって、鳩は抑留所での数少ない友だちになった。

木を組み立てて鳩小屋を作り、家のすぐ外に置いた。充分ではない配給の食糧のなかから、必ず、米粒かパン屑を鳩のために分け与えた。日に何時間でも、鳩の様子を見て、飽きることがなかった。

リリーは、自分が少女の頃、ブダペストの動物園に毎日通ったことを思い出した。雨の日も風の日も、ピアノに向かう時間以外は、動物たちと過ごして飽きなかった。命に触れていることが、不仲の両親との家庭生活に倦む少女に、生きる力を与えた。

マイケルも、いつ終わるとも知れない抑留生活のなかで、鳩に触れることで生きる支えを見出したようだった。鳩を飼うようになってから、盗み癖はピタリとやんだ。

やがて鳩は卵を産み、雛が孵^{かえ}って、数を増やし始めた。マイケルは自分の兄弟が増えたように喜び、甲斐甲斐しく世話を焼いた。

マイケルが世話をする鳩の声を聴きながらモーツァルトを弾くのは、なかなか心地よかった。リリーのピアノが鳴り出すと、鳩がまるで音を合わせるように鳴き声を返してくることがあった。命の唱和する感じに、リリーはひとり微笑んだ。

全てがどんよりとした薄曇りのようなクラマート抑留所にあつて、それは穏やかな日溜りのような時

間であった。闇と光のコントラストのなかに、生きることそのものが炙り出されたドラマティックな真実の瞬間には乏しくとも、そこには花曇りのようなたゆたう安らぎがあった。乗馬用のズボンとブーツを穿いたモーツアルトはいなくとも、アンダンテやアダージオに憩うモーツアルトを感じることはできた。

鳩と少年の交感が核となって、リリーたち家族の生活が回っていった。鳩のいるお蔭で、家族は空中分解もせず、人間性が瓦解することもなく、日に日を継ぎ、生き延びていった。

一九四五年になった。

抑留所内の食糧事情は、日を追って悪化していった。配給の量が、目立って減っていった。誰もが、腹をすかしていた。ルースは、路傍や空き地の草をいりて料理してみたが、多少の補填にはなっても、本質的な解決にはまるで遠かった。

リリーも、家族も、他の抑留者たちも、次第に痩せ始めた。皆一様に、頬がこけ、眼窩が窪んだ。栄養失調がもとで病を得、死亡する者も増えた。マイケルは、ふたたび棺桶作りに加勢することになった。ある日、皆が寝静まってから大分たった頃、夜の静寂を裂いて、鳩が狂ったように激しく羽をばたつかせ、鋭い鳴き声を立てた。マイケルが飛び起きて様子を見に行くと、鳩小屋の錠がはずされ、八羽いたうちの三羽がいなくなっていた。あたり一面に、多くの羽が乱れ散っている。

誰が盗んだかは、すぐに分かった。

次の日の夕食時、マイケルが近所の家を回ると、配給の途絶えていた肉を食べている家族があった。マイケルの前で悪びれもせず肉を頬張る少年を殴りつけてやろうと思ったが、睨んだだけで帰って来た。

涙を目にいっぱい溜めた息子に、リリーは何があったのか、尋ねた。マイケルは、事の顛末を説明した。

「実を言うとね、リリー、僕は、そいつをとちめてやろうと思っていたながら、肉を食べている姿を見たら、羨ましくて、涎が出てきたんだ。美味しそうで、お腹がぐうっと鳴ったんだ。リリー、情けないよね」

リリーを見つめる濡れた瞳から、悔し涙がひとしずく頬を伝った。リリーは、息子を抱きしめた。

「マイケル、お腹が鳴ったのは、あなたが悪いせいじゃない。あなたは知っているでしょう、どんなにお腹がすいても、この鳩だけは手をつけてはいけないわ。これはお友だちだもの。頭を撫でたり、羽に触ったり、鳴き声を聴いたりして、毎日一緒に生きていくお友だち……。マイケル、人間は動物や植物を食べなければ生きていけないのも事実だわ。でも、動物や植物を愛する心をなくしてしまったら、人間ではなくなってしまうの。分かるわね……」

リリーも必死だった。息子にこう語ることでできる理性や人間性が自分自身の中に残っているうちに、何としても戦争が終わってほしい——、リリーは心の底から願わずにはいられなかった。

忘れた頃になると、飯田は差し入れの食料を携えて、面会にやって来た。そのたびに、忙しくて思うように訪問できないことを、リリーに詫言った。飯田から頼まれたといって、青木や放送局の同僚が訪ねて来ることもあった。必ず、卵などの食料品が届けられた。どのようなものであれ、差し入れの品々は咽喉から手が出るほどほしいものばかりだった。

リリーは、待った。どのような冬も、時がたてば必ず過ぎ、春が訪れる。祈るように、リリーは、待ち続けた。

毎日が同じことの繰り返しで、しかし確実に、全てが坂を転がり落ちていた。坂の下に待ち受ける、ぼつかりと黒い口を開けた闇の奈落に嵌り込んだら、二度と這い上がってはこれない。その坂下まで落ちきってしまう前に、何とか、光ある世界が戻ってきてほしい……。

世の中がどうなっているのか、戦局がどのように進んでいるのか、外部の情報は塀の内側には全く届かなかった。家族四人に与えられる米は、ついには日にカップ半分となった。スープは白湯のように薄く、具など浮いていることはほとんどなかった。

それでも、リリーは耐えた。耐えて、ひたすら待った。その日が訪れるのを、リリーは、じっと待ち続けた……。

*

*

その日がいったいいつ訪れたのか、リリーにはよく分からなかった。

ある夜、若い兵士が泥酔して、抑留所内を千鳥足で回りながら喚き散らした。日本兵ではあっても、朝鮮半島の出身であるという噂だった。

「終わりだ。何もかも、もう終わりだ……」

顔はだらしなく笑っているが、喜びなのか、自虐の生んだ卑屈な笑いなのか、表情からは窺い知ることができなかった。両方が交じり合って、自分でもどうしてよいか分からないようにも見えた。何が終わりなのか、確認することができなかった。

次の日、配給の食糧がにわかに多くなった。何の獣肉かは不明ながら、食肉が大量に配られた。硬くて臭く、とてもではないが、普通に料理したのでは噛めたものではなかった。無理をして飲み込んだ者

は、あらかたが腹痛を起こした。

そして、三日目、日本人衛兵の姿が急になくなってしまった。どこへ消えたのか、抑留所の内部は、がらんとしたようになった。

そこに、数人の英人兵士が現われた。日本はすでに八月十五日をもって無条件降伏したが、今はなお、政情不安なので、無闇に外に出ない方が安全だと言われた。

日本の敗戦をインドネシア独立の好機と捉えた人々がオランダへの蜂起を唱え、市内は一触即発だという。とてもではないが、西洋人が自由に歩ける状態ではなかった。残った日本人兵士に、自分らの身の安全を保つよう抑留者たちが懇願するという、皮肉としか言いようのない事態が現出した。

だが、リリーはひとり、歩き出した。英人兵士の忠告も、日本人衛兵の掣肘も振りきり、ゲートから外に出た。

町は騒然としていた。独立旗がそこかしこに翻り、人々が何かに憑かれたような顔つきをして路上に集まっていた。プラカードを手に、シュプレヒコールをあげて行進する人たちもいた。独立を意味するインドネシア語「ムルデカ」が飢し、ジャカルタの町全体がその熱気に竈のようになっていた。

リリーは、人々を縫うようにして足を早めた。いつしか、早足は駆け足になった。

ようやくに出て、塀の外である。混然としてはいても、遮るものない光が四方八方に溢れている。青空に浮く雲も、熱帯樹の緑も、民家の瓦屋根も、道も大地も、眩いばかりの光に映え、輝いている。

その光の中を、リリーは駆けた。自由の風を受けて、リリーは走った。

ガンビル広場が近づくと、独立を訴える人々の群に挟まれ、身動きがとれなくなった。「ムルデカ」

の大合唱が広場を包み、何万もの熱狂した人々で押し合いへし合いしていた。リリーはその中を、もがくようにして前に進んだ。

肩が人に当たる。髪の毛を引っ張られる。足がよろけそうになる……。

それでも、リリーは進んだ。人々を掻き分け、群を抜けて、ようやく目的地——ニロム放送局の前に立った。

放送局は、なおも日本人職員たちによって運営されていた。インドネシア独立派による襲撃の噂が絶えず、屋上には独立旗が掲げられ、警備を強固にした。

リリー・クラウスが来たというのでロビーに迎えた飯田と島浦放送部長は、その凄絶な姿に驚いた。

荒い息に肩を揺らし、髪は乱れ、服装もしどけなく、全身、びっしょりと汗だくであった。炎天下を一目散に駆けて来たことは、明らかだった。

「ピアノを……」

リリーの言葉を聞くまでもなく、飯田は訪問の目的をすぐに理解した。島浦とともに、そのままリリーをスタジオに案内した。

スタジオには、グラランド・ピアノが置かれていた。憲兵隊に逮捕される前には何度となく弾いた、ジヤカルタでも一、二を争うコンサート・グラランドである。

リリーはピアノに駆け寄り、しばらくは愛しいものでも撫でるように鍵盤に触れていたが、やがて腰をかけ、蹴るようにしてサンダルを脱ぎ飛ばすと、猛烈な勢いで弾き始めた。

モーツァルトが流れた。曲の終わるのが待ちきれないというように、途中からベートーヴェンに変わ

った。その後にはシューベルトが、ブラームスが、バルトークが、その他、様々な曲が、押し寄せる鉄砲水のように、次から次へと溢れ出た。二年二カ月の空白を埋め戻すように、リリーは身体全体をぶつけて鍵盤を叩き、狂ったようにグラランド・ピアノを弾き続けた。

「私はピアノストよ。私はピアノストなのよ……」

弾きながら、何度も、リリーはそう叫んだ。涙と汗で、顔はグシヨグシヨだった。魂を吸い取られたように、リリーは一心不乱にピアノを弾き続けた。

「リリー・クラウス、一世一代の名演奏だね」

島浦は飯田にそう言っ、その場を離れた。飯田は黙って肯いたものの、軽口めいて印象を語ることができなかった。飯田がリリーに対して抱えるものは、遥かに重く、濃密だった。今は、そこに痛みが加わっていた。

島浦の計らいで、冷たい飲料が運ばれてきた。リリーは、ようやく手を止め、一気に飲み乾した。

「マダム・クラウス、何と申し上げたらよいか……。本当に、ご苦勞をおかけしました。申し訳ありません。もっともとお力になれたのではないかと、後悔する思いもあります。日本人を代表して、お詫びしたい気もあります。何を語っても、今は言葉では尽くせません」

「……………」

「自由を奪われたなかで演奏をお願いしてきた私は、本当には貴女の気持を理解できていなかった。そのことが、遅まきながら、ようやく今になって分かりました」

リリーは、額や首筋に滲んだ汗をハンカチで拭った。抑留所を出てから、ようやく一息ついた恰好になった。

「イイダさん、このスタジオ、このピアノ。私にも、思い出が詰まっています。ジャワの五年間の後半は、確かに辛いことが多かった。でも、そればかりではありません。ラジオ放送のために弾いたり、オクダさんにレッスンをしたり、このスタジオも、このピアノも、私には懐かしい思い出なのです。貴方のタクトで弾いた『ハ短調協奏曲』は、そうしたい思い出の頂点に立つものです」

日本への中継放送の目玉番組として、このスタジオでモーツァルトの「ピアノ協奏曲第二十四番ハ短調」を共演したのは、一九四二年十二月十三日のことだった。飯田の耳に、あの時の熱いモーツァルトの響きがふと蘇り、やがて泡のように消えた。

あれから、二年八カ月もの月日がたつ――。

「モーツァルトは愛です。モーツァルトは救いです。そう信じてきました。そう語ることでできる信念が死の淵に沈んでしまう前に、何とか戦争は終わりました。それを嬉しく感じます。ありがたく思います。神様のお蔭です。モーツァルトのお蔭です。そしてイイダさん、貴方のお蔭です……」

リリーの言葉に、飯田は少しホッとした。この女の抱える生のエネルギーにはたびたび驚嘆させられたものだが、三年に及ぶ縁の最後に、その心の広さを知らされることとなった。

「英蘭軍の部隊が到着次第、放送局は引き渡されます。今度は、私たちが収容される番です」

「では、今度は私がお慰めしなければいけませんね」

リリーは静かに微笑んだ。

が、次の瞬間、真っ直ぐに飯田の方に向き直すと、きっぱりと言った。

「私は待ちました。冬が過ぎ、春の訪れるのを、じっと待ちました。貴方も、モーツァルトを忘れないで。『ハ短調協奏曲』を忘れないで。必ず、光は訪れます。そう信じて、生きるのです」

リリーは、ふたたび鍵盤に向かった。

今度は落ち着いて、モーツァルトのソナタを順次、弾いていった。グランド・ピアノの繊細な音色――その輝きや艶、強弱のダイナミズムなどを逐一確かめるように、リリーは、集中力を高めて、丁寧に弾き込んでいく。

飯田が抑留所を慰問した際、リリーは、戦争が終わればピアニストの自分は本当の意味で生き返ると語った。グランド・ピアノに向かうリリーは、早くも、本来のピアニストに戻ったようであった。

閃きのように、ある感慨が飯田を襲った。

この世界的なピアニストとは、もう二度と会うことはない――。

その確信が胸に突き上げると同時に、堪らない淋しさが込み上げてきた。掌中に大事にしてきた宝物が遠くに連れ去られてしまう、その無念と痛恨と孤独であった。

時間のたつのを忘れて、リリーはピアノを弾き続けた。

飯田はその傍らに立って、いつまでも動くことができなかった。

第十三章 モーツァルトふたたび

そして、十八年が過ぎた……。

赤ん坊が若者になり、子供が父や母となるだけの歳月が流れた。

戦争の記憶は、遠くなったようでもあり、つい昨日のことのようでもある。この間、いくつかの地域紛争はあっても、地球が丸ごと戦火に包まれるような世界大戦は、辛うじて避けられてきた。

「戦後」という言葉が使われて、すでに久しい。

この言葉だけを聞けば、人類の歴史が、その年を境に幕を下ろすようにして断ち切られ、全く新たに生まれ変わったような印象を受ける。だが実際には、歴史とは、朝に日が上り夕べに日が沈む、その一日の連続である。

久しぶりに眺めるこの町は、すっかり「戦後」の顔をしている。

玄関口となるのは、今や空港である。近代的なビルが建ち並び、建設中のものも多い。どこもかしこも、ずいぶんと忙しげだ。高速幹線鉄道の敷設工事も、急ピッチで進められている。

それでも、過ぎゆく車窓の風景に高く聳える木が現われると、その木は、何十年にもわたる月日の移ろいを、ずっとそこで眺め続けてきたのだらうと思う。古い寺が戴く^{いづか}薨^{いづか}を見ても、同じような感慨が浮かぶ。

木や寺だけではない。この町に暮らす人もまた、時の移ろいととも^{とも}に^{とも}に齢^{いざな}を重ねてきたのだ。「戦後」の前にも、人は懸命に生き、喜怒哀楽を抱えながら、それぞれの人生のページを重ねてきたに違いない。青春の思い出は、「戦後」となった今も、この町に染みつき、人々の胸に焼きついてはいるはずであった。「マダム・クラウス、東京もずいぶん変わりましたでしょう。来年にはオリンピックが開かれますし、建設ラッシュなんです」

招聘元の音楽事務所の青年社員が、助手席から振り返って、後部座席のリリーに話しかける。その声はいかにも屈託がない。若いこの人には、自分らの世代が抱える痛みは、無縁なのだらう。

若者の言うように、自分の記憶の中の東京と重なるものは、今のところは見えてこない。何しろ、四半世紀を超す年月がたっている。当時は船で訪ねたこの国に、今回は飛行機で降り立った。

一九六三年一月——。冬の日が注ぐ柔らかな斜光の中を、リリーは羽田空港から赤坂のホテルに向かっている。

空港では、多くのカメラのフラッシュに出迎えられた。欧米から著名人が来日すると、そのような「歓迎」が慣わしになっているのかもしれない。しかし、やはり日本と自分との特殊な関係が、一層の注目を集めている気がする。演奏旅行で世界中を周っている自分にとっても、この国を訪れることは、他の国と同じではあり得ない……。

思えば、その後、慌しい歳月を過ごしてきた。

ジャワからオーストラリアに出て、終戦から三カ月後にはそこでコンサートを開いていた。収入がなければ一家四人が食べていけないという事情もあったが、とにかく聴衆の前でピアノが弾きたくてたまらなかったのだ。

その後、ニュージーランドに渡り、そこで正式に国籍を取得した。一九四八年にはヨーロッパに戻り、以来、ロンドンを拠点に活発な演奏活動を繰り広げてきた。

その間、この国とこの国の人々を忘れたことなどなかった。しかし、この国を訪問することが遅くなったのは、やはり、自分にとって特別な国だという意識があったからだだった。心のどこかに、しこりというか、柵や壁として立ちをはだかるものがあつたからに違いなかった。

数年前、移動中の飛行機の中で、日本人と隣り合わせになった。キリスト教関係の人のようだった。

ひよっと思ひ、「オクダという音楽家を知りませんか」と尋ねてみた。幸運にも、その人は奥田を知っていた。教会オルガニスト、宗教合唱団の指揮者として活躍しているという。

思わず、リリーは叫んでいた。

「その人は、私の弟子です」――。

懐かしさが込み上げてきた。滾々と水が溢れ、升からこぼれるようだった。日本に行かなければいけない。いつまでも、臆してはいけない……。

リリーは、日本訪問を決めた。不思議なもので、こちらが心の垣根を払うと、日本は向こうから近づいてきた。

ロンドンのテムズ川沿いに建つロイヤル・フェスティヴァル・ホールでのリサイタルのことだった。霧の深い日で、バスやタクシーが止まるなど、市内の交通に著しい不便が出た。苦勞して集まった人た

ちの熱意に応えようと、リリーは一生懸命に弾いた。

その気持が通じたのか、休憩時間になると、多くの人たちが楽屋を訪ねて来た。そのなかに、五十代くらいのひとりの東洋人がいた。

それが誰かは、すぐには分からなかった。年輪に品德を重ねた紳士が、その名を告げるまで、ただの音楽ファンだと思っていた。名乗られたその瞬間さえ、あの小柄な兵隊と目の前の紳士が同一人物であるとは、にわかには信じられなかった。

「ヨーロッパを周る研修旅行の途中なんです。ロンドンに着いて、街でリサイタルのポスターを見かけ、何としてもお会いしたいと思って……。感無量です」

リリーは、その人――奥田耕天を抱きしめた。

他の客たちの手前もあり、面談は五分にも満たなかった。だが、熱い抱擁は、日本に向かう気持をかき立てた。後は一瀉千里に、心に翼が生えたように、想いは日本へと飛んだ。

そしてついに、リリーは日本に来た。一九三六年以来、実に二十七年ぶりの来日であった。

一月二十四日の東京でのリサイタルを皮切りに、大阪、福岡、京都、札幌と周り、全国で六公演が予定されていた。

*

*

宿舎は、赤坂のプリンス・ホテルだった。かつては李王家の持ち物だったという由緒ある建物は、英国テューダー朝様式をベースに和風の要素も取り入れた落ち着きのある西洋館で、リリーはその前に立つて、ようやく自分の知る東京と出会うことができた。桜の花の似合いそうな風雅な趣が、好ましかっ

た。

チェックインをすませてエレベーターに向かおうとすると、眼鏡をかけた初老の男が近づいて来て、流暢な英語で尋ねた。

「マダム・クラウス、お届けしておいた手紙を読んでいたでしょうか」

レセプションではいくつかの書類を渡されたが、着いたばかりで目を通すどころではなかった。まだだと言ひ、適当な挨拶を交わしたまま、部屋に入った。

荷物を解いて、改めて手紙に目を通した。格調高い英語の文章で、報道班の一員としてニロム放送局での生演奏を感動して聴いたことや、バンドンの家を訪ねて楽しく過ごした思い出などが綴られていた。差出人は、阿部知二とあった。

「アベさん……」

ジャワの日本人のなかでも、とびきり英語の上手^{うま}かった文学者。夫と気の合った教養人。オランダ人の植物学者を救った勇氣ある人……。

手紙をつかんだまま、リリーは廊下に出た。エレベーターが到着するまでの時間が、ひどくもどかしかった。ジャワにいた頃の若ささえあれば、駆けるようにして大股で階段を下りて行くだろうに……。

ロビーに降りて見渡すと、初老の紳士はすぐにリリーに気づいて、手を上げた。

「アベさん、すみません。咄嗟に貴方だと分からなくって」

「ご記憶ですか。私はジャワから引き揚げるのが早かったから、あるいは憶えておられないかと思って……」

「よく憶えています。貴方は世界の教養に通じていて、私以上に夫と話が合いましたね。戦争が終わっ

たら、一緒にインドに行つて、東洋の平和思想を研究するんだって、確かそんなことを話されていたでしょう」

阿部は、世界的なピアニストの記憶に自分の存在が刻まれているのを、素直に嬉しく感じた。

「ご主人、ドクター・マンデルは？」

「六年前に亡くなりました。今では、音楽が夫です。ひよつとしたら、昔から、そうだったかしら？」
リリーは静かに微笑んだ。

二十年もの歳月は、どうしたって、移ろいや変化を強いる。何もかも昔のままというわけにはいかない。もつとも、夫の死をリリーが微笑みとともに話すことができるのも、やはり歳月のなせる業には違いなかった。

阿部は心からのお悔やみを述べた。温厚さを湛えたヤギ鬚の奥に、氣遣いを感じさせぬ気配りを忍ばせ、時に馬鹿がつくほどに正直で、一途だった学究の人——。マンデルは阿部にとって、初めて親しく心を通わせた西洋の知識人だった。

「あの時はまだ少女だった娘のルースも結婚して、子供もいます。私は、とくにお婆ちゃんなんですよ」

確かに、当時に較べると、さすがに寄る年波は隠せない。だいぶ恰幅がよくなったし、トレードマークだった腰まで届くお下げ髪を、今では束ねて結い上げているので、いかにも「マダム・クラウス」と呼ぶにふさわしい年恰好に見える。それでも、瞳をきらきらと輝かせて話す闊達な感じは、昔と少しも変わらなかった。

「皆、揃っているんですよ」

阿部の案内で、リリーは、ロビーの奥に集まった人々に引き合わされた。

まず初めに紹介されたのは、二人の女性——奥田の妻と娘だった。奥田自身は、アメリカに留学中だという。

「ジャワでは主人がお世話になりました、ありがとうございます。音楽家として履歴を尋ねられると、決まってリリー・クラウスに師事したと申します。音楽の歓び、感動こそが人々の心を豊かにすると申しまして、合唱の指揮などもやっておりますが、それも、音楽の心をクラウスさんから教わった、その影響のようでございます。お蔭様で、娘も音楽の道に進み、今では父を助けております」

美也子という娘は、父譲りの純朴そうな顔を恥じらいにポツと染めながら、リリーに深々とお辞儀した。

その背後から、洒脱な装いの初老の紳士が名乗り出た。

「ようこそ日本にいらっしゃいました。放送局の青木です。初来日の時にディレクターとしてゴールドベルクさんとの二重奏を放送させていただきました。ジャワでも、放送でお世話になりました。引き続き放送局に勤務はしていますが、現場は若い者に譲って、今は、放送文化研究所に勤めています。昔、クラウスさんに弾いていただいた愛宕山のスタジオがあったところです。そのほか、オペラや童謡の訳詞や作詞の仕事などいたしております」

初来日の時には、この人の立会いのもと、ラジオ放送のために「クロイツェル・ソナタ」を弾いた。ジャワでも、この人の仕切りで、多くの曲を放送用に弾いた。二十世紀、演奏家はコンサート以外に、放送という新たな活動の場を得るところとなったが、この人との縁も、そうした大きな時の流れのなかで、生まれるべくして生まれたものののだろう。

最後に控えていた瘦身の男が誰か、リリーは予感を抱きながら、近づいた。俯き加減に、どこかぼつ
の悪そうな感じにも見えるはにかみの微笑を浮かべているその顔は、めっきり皺も増え、髪はすっかり
薄くなって、白いものが目立つ。それでもそれは、生きている限り忘れることのできない人の懐かしい
顔だった。

「イイダさん……？」

飯田は、そのまま無言で肯いた。何から話せばよいのか、想いが溢れすぎて、うまく言葉にならなかつた。

それは、リリーも同じだった。固く握手をして、しばらくは互いに見つめ合った。

日本がジャワを占領してから終戦までの三年あまり、最初から最後までずっと一緒だった日本人は
の人だけだった。賞賛と喝采に彩られた華やかな舞台から、生き地獄のような抑留所まで、光と影を縫
ってリリー・クラウスと関わり、護り続けたのは、ほかでもないこの人だった……。

ようやく、飯田が口を開いた。

「まるで、夢のようです。レコードなどで、その後のご活躍ぶりは存じ上げていましたが、ふたたびお
目にかかるとは、思っていませんでした。日本に来て下さったことを、本当に嬉しく思います。私の
方は、ずっと、映画音楽の作曲の仕事をしております。大したものではありませんが、一応は今も音楽
家の端くれです……」

「オーケストラの指揮の方は？」

リリーの質問に、飯田は頓狂な声をあげた。

「あ、あれは——、ジャワだけでの特権です」

飯田が笑ったので、皆もつられて笑い、一気に座が和んだ。それをきっかけにして、思い出話が次々に花と咲いた。

日本に着いたその日から、懐かしい人々との友情が自分を待ち受ける……。もっと早く日本を訪れるべきだったと、リリーは思った。心の中の柵や壁は、跡形もなく消え失せていた。

*

*

リリー・クラウスは、今や押しも押されぬ、世界を代表する女流ピアニストだった。

戦後は特に、レパートリーの中心を以前に増してモーツァルトに据えるとともに、意識してモーツァルト弾きとしての発言を重ねた。自分がモーツァルトを選んだのではなく、モーツァルトが自分を選んだとまで、言いきった。

リリー・クラウスと言えば、誰もがモーツァルトを思い浮かべた。世界一のモーツァルト弾きと称えられ、ピアニストとしての地位は不動のものとなった。

一九五六年のモーツァルト生誕二百年に際しては、フランスの著名な録音技師兼プロデューサーのアンドレ・シャルランが特にリリー・クラウスに白羽の矢を立ててピアノ・ソナタ全集を吹きこみ、そのレコードは世界のベストセラーとなった。

各地で行なう演奏会に伴う記者会見や取材となれば、いつもモーツァルトへの想いに質問が集中し、リリーも持論を展開した。だが、日本での取材は、モーツァルト一色というわけにはいかなかった。

戦争中、この著名なピアニストがジャワで日本軍によって収容され、不自由を強いられたことは、無視するわけにはいかない重い事実だった。音楽とは別に、メディアの関心は、リリーの戦時中の不幸な

体験に、否応なく向けられた。

リリー・クラウスがかつて日本軍から受けた蛮行を洗いざらいぶちまけたらどうなるのか、怖れていたような節もあった。日本人自身にとっても、戦争の記憶はまだ消えていなかった。世論は、戦争の悲惨さについて、まだなお、真摯な問いかけや反省を失っていないかった。

リリーは、そうした取材や記者会見において、自らの戦争体験について語ることをタブーとはしなかったものの、決して日本への恨み言としては述べなかった。

「戦争の悲惨な体験によって地獄を知った分、天国の素晴らしさを音楽で歌えるようになりました」

「抑留を強いられたなかでも、親切にしてくれた日本人がいました。私は日本人に悪感情を持ったことなど、一度もありません」

「人間は誰でも同じような願いを持ち、感情を持つのです。人類は皆、必ず仲よくできるはずだと信じています」

「初来日以来、抱き続けてきた日本への愛と友情は、永遠に変わることはありません——」。

音楽は壁を越えるものだ。あらゆる対立を超え、人の心をつなぐものだ。生きとし生けるものの全ての命を光で包み、輝かすものだ。モーツァルトは、愛を謳っても、憎しみを煽るようなことなど、絶対にない……。

ジャワの抑留所でつかんだ音楽への信念は、その後も揺らぐことがない。モーツァルト弾き、リリー・クラウスの存在の核として、不滅の光を放ち続ける。その光をあまねく伝えるためにこそ、自分は生き、ピアノを弾き、世界を旅するのだ。

日本公演に先立ち、プログラムに載せる挨拶文として用意した文章のなかでも、リリーは、そうした

氣持を正直に綴った。

「日本国民である皆様も、ハンガリー生まれにしてニュージーランド市民である私も、音楽という同じ言葉を話します。音楽への愛情と熱心な探求は、私たちの間に不滅の友情の環を形作っています。一九三六年の私の最初の日本訪問中に芽生えた友情は、第二次世界大戦の辛く苦しい試練に耐えました。今、神の恵みにより、過去の暗い雲は取り払われ、私はあなた方の国にふたたび戻る期待で、深く、喜ばしい感動に満たされております。生命溢れる音楽は、いま一度、私たちを永久の友情に結び合わせることでしよう」――。

*

*

一月二十四日、二十七年ぶりとなるリリー・クラウスの日本公演が、いよいよ東京文化会館で幕を開ける。

上野の森に出来たこのコンサート・ホールを、リリーはたちまち気に入った。

緑の多い周辺の落ち着いた雰囲気もいい。音響的にも、ウィーンの楽友協会大ホールやアムステルダムコンサート・ヘボールなどに引けをとらないと感じた。舞台の使い勝手から言えば、こちらの方が上なくらいだ。

敗戦の痛手から立ち直って、このような音楽ホールが出来るまでには、国民ひとりひとりの懸命な努力があったことだろう。昔も今も、この国の人たちは勤勉だ。しかも、音楽を大切にしている。

世界を戦火と硝煙に巻き込んだ軍国主義の砦だったこの町が、来年にはオリンピックという平和の祭典を開く。そのことを嬉しく思うのは、決して日本人だけではない。

自分は戻るべくして、この国に戻って来た。この先も、日本訪問を続けるだろう。今宵は、日本の聴衆との永遠の絆を確かめ合う大事な日だ。愛と友情の物語の第二幕を開く厳粛なオープニングだ……。リハールを終えたリリーは、興奮と感動の予感を秘めてひっそりと静まりかえる空の客席を見渡し、胸を熱くした。

切符はとうに売り切れだった。開演の七時が近づく、音楽ファンが続々と上野の森に集まって来た。一階から五階まで、二千三百人を収容する東京文化会館の客席が、びっしりと埋まった。

そのなかには、ジャワでの縁につながれた人たちもいた。宣伝班として日本による占領の初期にジャワに赴いたジャーナリストや文化人がいた。軍政が本格化するに伴い、後からジャワに赴任した放送、新聞、映画などの関係者もいた。

そしてもちろん、阿部知二、飯田信夫、青木正、奥田夫人と娘の美也子の姿もあった。

この日の曲目は、前半がバッハの「半音階的幻想曲とフーガ」、モーツァルトの「ピアノ・ソナタ第十三番 変ロ長調（K三三三）」、シューベルトの「三つの即興曲」。休憩を挟んで後半が、バルトークの「十五のハンガリー農民の歌」、シューマンの「謝肉祭」という多彩なプログラムであった。

満場の拍手に迎えられて、リリーが登場した。

淡いピンクのロングドレス姿が、華やかであった。そのドレスを見た途端、飯田は、リリーの心を理解したように思った。それはほかでもない、日本の春を象徴する桜の花の色だった。

初来日の思い出を、リリーはいつも、桜の花の美しさとともに語っていた。穢れなき愛と平和の証のように信じ、愛でていた。二十七年ぶりの来日は桜の季節にはまだ早い、桜色のドレスは、歳月を超

えてつながるリリーの日本への愛情の現われであるに違いなかった。

演奏が始まった。

歯切れのいい澄んだ音の連なりに、香り高い気品が漂う。ピアノから溢れる音を聴いた瞬間、ああこの音だと、飯田は肯いた。

二ロム放送局のスタジオで、ラテンサレ閣のホールで、ユリアナ学校の講堂で……、ジャワで何度となく聴いたリリーのピアノは、まさにこの響きだった。この音に接するたびに、まるで七色の宝石が目の前に散り敷くような陶醉に浸ったものだった。

演奏曲目の方も、皆、ジャワで聴いたものばかりだった。会場を占める二千三百人の聴衆のうち、リリー・クラウスの生演奏を最も数多く聴いたのは、間違いなく自分のはずであった。

思えば、何という僥倖だったことだろう。生演奏を聴き、その人と交友し、挙句の果てには、自分の指揮で世界一のモーツァルト弾きと協奏曲まで共演したのだ……。音楽家としての自分の人生を考えた時、最も充実し、豊かな経験を得たのは、ほかならぬジャワであった。

その幸福は、リリー・クラウスという稀代のピアニストがジャワにいたからこそもたらされた。ピアノの技量は言うまでもないが、人と人の間に垣根を認めず、音楽による心の和を信じてやまない人だったからこそ、ジャワの自分はあるような音楽の輝きを知るところとなったのだった……。

曲は、バツハからモーツァルトに移る。

世界一のモーツァルト弾きの手から溢れ出る潑刺とした「変ロ長調ソナタ」に、聴衆は固唾を呑むように聴き入っている。静かな熱気が、会場を包み込む。いつものリリー・マジックが浸透してきたのだ。

飯田もまた、魔法にかけられたように、現実と夢の間を彷徨い続ける。奏でられている曲は、ジャワで聴いたのと同じものなのだ。同じ曲、同じ音色、同じ弾き手……、長く眠っていたジャワの記憶が、時を超えて、沸々と湧き起こってくる。

自分がリリーと出会ったのは、戦争があったからだだった。日本がジャワを占領し、西洋人が外に出られなくなったから、リリーとの縁が出来た。

リリーが半抑留の身にあることを知りながら、自分は演奏を依頼した。それは、軍の力を背景にした強制的なものだったろうか。いや、そうだったとしたなら、リリーの演奏は、あれほどの輝きに満ちた音楽にはならなかったはずだ。

リリーは音楽によって、壁を越えようとした。対立や憎しみを溶かそうとした。命令によって嫌々弾くのではなく、あらゆる人々の前で積極的に弾いた。それは、リリー自身が抑留所に収容されてからも変わらなかった。

世界一のモーツァルト弾きの世界一である所以は、このような信念をモーツァルトに重ねて、音楽への愛に生きたことだった。モーツァルトの精神を自ら体現するかのように、悲しみの彼方に光を信じ、前を向いて歩き続けたことだった……。

プログラムの後半に入っても、飯田の「夢心地」は続いた。寄せては返す波のように、現実の演奏とジャワの夢想が交差した。

目も耳も、ステージの上のリリーの演奏に集中しているのだが、胸にはジャワの思い出が、走馬灯のように現われては消えていく。放送局のこと、バンドンの家でのこと、いくつかの抑留所のこと

……。

ジャワで語ったりリリーの言葉、仕種、表情が、断片的に、しかしありありと蘇ってくる。

——音楽には天国か地獄しかありません。……歌のない音楽など、音楽ではありません。

——私の信じるモーツァルトは、乗馬用のズボンとブーツを穿いた、男らしい男よ。血も涙もある、生きている人間の。モーツァルトには、息もつかない感じで馬を走らせる疾駆する精神があるのよ。

——もっと大きな悲劇を下さい。ハムレットやリア王のような悲劇を……。今の世界を思つて！ 戦争の悲劇、これは、私たちのための音楽なのよ！

——私も、この慈善演奏会には物凄い熱気を感じるわ。世界の一流のステージに負けないものを届けたいと思つてきたけど、ここではない白熱した雰囲気があるの。初めて体験することよ。

——私は待ちます。冬が過ぎ、春が来るのを待つように、戦争が終わるのを、じっと待ちます。その日が来たら、ピアノスト、リリー・クラウスは、本当の意味で生き返るのです。

——モーツァルトは愛です。モーツァルトは赦しです。そう語ることのできる信念が死の淵に沈んでしまふ前に、何とか戦争は終わりました。イイダさん、貴方のお蔭です。

——私はピアノストよ。私はピアノストなのよ……。
——貴方も、モーツァルトを忘れないで。必ず、光は訪れます。そう信じて、生きるのです……。

最後の曲、シューマンの「謝肉祭」が終わった。

「ブラヴォー！」

絶賛の嵐が湧き起こった。満座の聴衆が、皆、感動に胸を熱くしていた。若者たちは、立ち上がつて拍手をしていた。

飯田は、興奮に沸く客席から、そっとひとり離れた。「夢心地」がなおも続いていた。吸い寄せられるようにして通路に出、舞台袖に回った。

鳴りやまぬ拍手に、何度もお辞儀をしていたリリーが、舞台袖に引き揚げて来た。額に玉の汗が光っている。スタッフから手渡されたタオルで、慌しく汗を拭いた。

その時、飯田と目が合った。天地に二人だけがたたずむように、リリーと飯田はじつと向き合った。気づいた時には、飯田は声をかけていた。

「リリー、モーツァルトを弾いて下さい」——。

その言葉の響きに、リリーは懐かしいものを久しぶりに耳にしたように、目を瞠り、瞳を輝かせた。次の瞬間、飯田に向かって大きく肯くと、リリーはふたたびステージに向かった。

一段と大きな拍手がリリーを迎えた。リリーがピアノに着くや拍手はびたりとやみ、全聴衆が次に始まる音楽を待った。

アンコールは、モーツァルトだった。「幻想曲 二短調（K三九七）」が静かに始まった。

短調の奏でる、冬の木枯らしのような悲哀が続く。だが、曲はやがて、長調の奏でる春の日の喜びへと誘われる。揺るぎない信念が磨く、生きとし生けるものの命の賛歌が、力強く響く。

飯田は、一心に弾くリリーの後姿を、舞台袖から見守り続けた。

リリーのモーツァルトが流れる。会場を埋める聴衆のひとりひとりに、モーツァルトの愛が伝わっていく。

初来日の思い出を持つ者もいる。ジャワの縁を持つ者もいる。戦争を知らぬ若い人たちもいる。モーツァルトの光には、垣根などない……。

飯田の目に、涙が溢れていた。

エピソード

二十七年ぶりという来日公演は大成功に終わった。

日本との「和解」を果たし、固い絆を確認したリリーは、翌一九六四年の暮には早くも再来日、その後、六七年、七一年、七四年、七八年と日本公演を繰り返した。

戦前の初来日を入れると、生涯に七度の来日を経験したことになるが、日本への愛情は終生変わらず、日本は第二の故郷とまで言いきる親日ぶりを発揮した。

ジャワで関わりを持った日本人たちは、来日のたびに、リリーを温かく迎えた。リリーもまた、クリスマス・カードを出すなどして、交流が続いた。

そのなかで、ただひとり、ジャワでの縁を反芻し、その思い出を宝物のように慈しみながら、なかなかリリーとの再会に踏みきれないでいる日本人がいた。抑留所長だった近藤利朗である。

近藤は抑留所を離れてもなおジャワに留まり、結局、終戦後に日本に引き揚げて来た。東京に暮らし、リリー・クラウスの来日については知ってはいたものの、コンサートには出向いた形跡がない。抑留所

の所長だったというかつての立場が、二の足を踏ませたようである。

近藤の後を継いでジャカルタ地区の抑留所長になった曾根は、戦後、抑留者への残虐行為が問われて、バタヴィア軍事法廷で死刑を宣告され、処刑されている。

近藤自身はそのような罪に問われることなどなかったが、「抑留所長」という職務がそこまでの憎しみを買うものであることを知って、内心穏やかではなかったはずだ。引き揚げて以降も、近藤はジャワ関係の集まりなどには参加することを控え、ひっそりと地味に暮らした。

引き揚げて半年ほどで、愛妻美美が病没したことも、孤影を深める原因となった。戦後まもない混乱と物不足の時代、満足な治療を受けさせることができなかった。近藤は二重の意味で、戦争の影を引きずるようにして、戦後の日々を過ごしたのである。

一九六三年、戦後初めて来日したリリーは、記者会見や取材の際に、「コンドウ」の名前を口にしていく。ジャワでの日本人とのエピソードを語るなかで、「プリズン」でもピアノを与えてくれた「いい人」として言及した。

ただ、「抑留所長」を表す英語「Commander」は、軍隊の方では「司令官」にもなるため、事情に通じない通訳が「コンドウ司令官」と訳し、そのまま雑誌に載るなどして、正確にはその人がいかなる立場の人物か、事情を曖昧にさせてしまった。

東京文化会館の演奏会の客席に、ジャワの縁につながる「主役」のひとりが欠けた恰好となったが、リリー本人の意識においては、近藤の思い出はずっと生き続けていたのである。

飯田らとの再会に較べるとだいぶ後になったが、やがてリリーは、この元抑留所長とも再会を果たすことになる。

戦後三度目の来日となった一九六七年六月——。近藤の亡妻美美の兄が、当時毎日新聞の芸能部長をしており、その後押しで再会が実現することになった。

おそらく、六三年の取材記事なども見て、リリーが近藤を記憶しているらしいこと、しかも日本人に恨みなどない又何度も公言していることなどから、再会を仕掛けても大丈夫と踏んだのだろう。

近藤本人には、最後の最後まで躊躇いがあったらしい。義理の兄に言われて、ようやく重い腰を上げ、東京文化会館に向かったというのが実情だったようだ。六月二十六日のことである。

モーツァルトを始め、シューベルト、バルトークなど、リリー得意のプログラムが続いた。いずれも、近藤がジャワで耳にした曲だった。

近藤は、根っからの音楽好きだった。戦後も、子供たちを音楽に親しませようと、しばしば名曲喫茶に連れて行くような人だった。

久しぶりに耳にしたリリーの生演奏に、近藤の感激はひとしおだったことだろう。ジャワの抑留所で

の記憶が蘇り、感無量だったに違いない。
演奏が終わり、近藤は舞台から降りて来たリリーと面会した。記者やカメラマンも一緒だった。近藤は用意した花束を渡し、リリーと固い握手を交わした。フラッシュが焚かれ、その瞬間がカメラに収められた。

翌日の毎日新聞に、記事が出た。

「再会の調べ美しく、二十三年ぶり、クラウドス女史と元抑留所長」

美談調の見出しが付けられ、握手する二人の写真が記事とともに大きく載った。当然ながら、毎日新聞だけの「スクープ」記事であった。

写真のなかのリリーと近藤は、再会の挨拶にふさわしく、互いに腰を折り加減に握手を交わし、微笑みながら向き合っている。もともと、リリーが真っ直ぐに近藤を見つめているのに対して、近藤は明らかに含羞を浮かべて視線をカメラ向きに逸らしている。肝心のその瞬間に、長い間近藤の胸に揺れてきた躊躇いが、含羞となって現われたようにも見える。

元抑留所長の人のよさ、温厚な性格は、その一枚の写真からだけでも、充分に窺い知れる。同時にまた、元抑留所長として背負ったものの重さも、そこにはおのずから滲み出ている。

出ることを決めた近藤だったが、結果としては、リリーとの再会をことのほか喜んだ。記事を宝物のように大切にし、思い出してはよく眺めていたという。そのような折には、ジャワではリリー・クラウドの練習を毎日のように聴いたのだと、子供に嬉しそうに語った。

記事は、再会の時の二人の言葉を伝えている。

「貴方の名はピアノとともに私の心に焼きついています」

リリーは、握手をしながら、近藤にそう語った。

近藤の言葉は、リリーとの再会を果たした後、記者に語ったものである。

「会うまでは、抑留所長という戦争の特殊な地位にいたので、クラウドさんがどう考えているか心配でした。クラウドさんにとって、ジャカルタが一生でいちばん不幸なときだったのですが、音楽がすべてを氷解してくれました」

ピアノとともに近藤の思い出を胸に刻み続けたリリー。音楽によって、すべてが氷解したと感じた近藤……。

南の戦地を舞台にしたリリーと日本人をめぐる運命の物語は、二十三年ぶりに東京で再会した二人の

この言葉に、とどめを刺すもののように思えるのである。

あとがき

以下、資料的な事柄を中心に、後書き風に付記しようと思う。

リリー・クラウスの生年については、大きく言うところ三つの説が流布している。一九〇三年、一九〇五年、一九〇八年とあって、CD解説や音楽事典の類いでも数字が一致せず、混乱を見せている。

とかく女優や芸能人など、世の中の注目を集める女性のなかには、実年齢を隠して少しでも若く見せようとする人がいるが、リリーが生きた時代、大女優、大歌手、大ピアニストなど、およそ「大」のつく女性とあれば、そのようなことは当たり前とされたものらしい。

リリーの年齢を解く鍵と思われるエピソードとして、面白い逸話が伝わっている。

戦乱のヨーロッパを逃れ、ニュージーランドに向けて旅立つに当たり、イギリス外務省から身分証明書を発行してもらった際に、係官が生年を一九〇三年から一九〇八年に書き誤り（3と8は手書きだと誤りやすい）、以来、リリーはこれ幸いとばかりに、一九〇八年生まれだと自ら吹聴したというのである。

私はこのエピソードに信憑性を感じ、自作の中では一九〇三年説をとった。

年齢に絡む本人の言葉としてしばしば語られたものに、名門ウィーン音楽院の教授に若干二十歳で就任したという「伝説」がある。若くして開花した才能を証言するエピソードとして、リリー・クラウスというピアノリストを解説する文章には必ずと言ってよいほど引用されるものだが、ウィーンで確認したところによれば、リリーがその職にあったのは、一九二五年から二九年までであったという。

一九〇五年誕生説の根拠は、おそらくこのウィーン音楽院教授就任からの逆算によるかと思われるが、「二十歳」をどこまで正確な年齢ととるか、リリー自身が切りのいい数字でさばを読んだ可能性もあり、何とも言えない。

私は二十二歳でウィーン音楽院教授に就任としたが、すでにいくつかの文献でこのような記述がなされている。おそらくは、私と同じような思考回路を辿って、行き着いた推定であろう。

ひよっとすると、リリーはピアノリストとしてデビューした頃から、二歳ほど、すでに年をさば読んでいたのかもしれない。早熟の天才を強調するには、少しでも若いことが望まれたのであろう。そして後に、イギリス外務省発行の身分証明書の手続きに際し、さらに三歳ほど若返ってしまった。

もうひとつ、事実関係がはっきりとせず、後世の人間を悩ませるのは、出自をめぐるユダヤ性の問題である。

最近、リリー・クラウスをユダヤ人であったとする文章がネット上などで少しずつ増えてきており、拙見では、全ては二〇〇〇年にアメリカで出版されたステイヴ・ロバーソン (Steve Roberson) 氏による唯一のリリー・クラウスの伝記本 ("Lili Kraus: Hungarian pianist, Texas teacher, and personality extraordinaire") の影響であろうかと思われる。

ロバーソン氏は晩年のリリーの教え子のひとりで、ピアノやピアノ教授法を大学で教えながら音楽関係の著述もするという人物だが、惜しむらくは、著書のなかでリリーの両親とともにユダヤ人であったとする「新説」をさりとってのけるだけで、その根拠が全く記されていない。

氏に問い合わせたところによれば、生前リリーは、自分がユダヤの血を引く事実を、ロバーソン氏を含め、誰にも明かさなかったが、晩年になって、娘のルースだけに「告白」したのだという。

ロバーソン氏の著書に記されたリリー・クラウス・ユダヤ人説は、このルースからの伝聞が根拠となっている。それ以外に、独自の調査をもって証拠立てたわけではない。

アメリカ、ノース・カロライナに住むルース・ポーブさんにも、確認の連絡を入れた。何度かのメールのやり取りでも、基本的にはロバーソン氏の著書に描かれた内容をなぞるばかりであった。

リリーの死後、大分たつてから明らかにされたルースの「証言」を一応は信じるとして、ユダヤ人としての血の濃さがどの程度のものであったかということについては、なおも判然としない点が残る。

少なくとも、両親ともに純潔のユダヤ人であったとするには、よほどの証拠でも示されない限り、私には躊躇いがある。

ルースさんも、その意を受けたロバーソン氏も、リリーと結婚したマンデルが、ナチスの台頭に伴う反ユダヤ主義の広まりを見て、その出自を隠すように勧めたとする。

だが、ウィーン音楽院の教授を勤め、ピアノリストとしてすでに活躍もしている社会的な名士が、人生の途中から、ユダヤ人でなくなってしまうようなことは、二十世紀のヨーロッパの常識ではあり得ないように思うのである。

ユダヤ人作曲家のマーラーの例を見るまでもなく、ユダヤ教からキリスト教に改宗することで、ヨ

ロツパ社会でのより広範な活躍を可能にする「パスポート」を手にするケースはあった。しかし、だからといって、ユダヤ人であることが、きれいさっぱり消えてなくなってしまうようなことはあり得ない。「ユダヤ人とは、他の人々が、ユダヤ人と考える人間である」と述べたのはサルトルであったが、ナチスの反ユダヤ政策は、ユダヤ教から改宗するくらいですむような生温いものではなかったのである。

リリーの両親、一族がユダヤ人であったとした場合に、大きな疑問が湧くのは、一九四八年に戦後初めてリリーがブダペストを訪問し、母や、父と先妻との間に生まれた姉と再会を果たしている点である（父はすでに一九三〇年代半ばに死亡している）。

第二次大戦末期、ハンガリーではアドルフ・アイヒマンの指揮下に徹底したユダヤ人狩りが行なわれ、ユダヤ人は次々とアウシュヴィッツなどの絶滅収容所に送られて行つた。その徹底ぶりは、ヨーロッパで行なわれたユダヤ人狩りのなかでも群を抜き、ナチス当局すらその「効率」のよさに驚いたというほどであった。

もしリリーの両親がユダヤ人であったなら、母と異母姉は揃って収容所から「奇跡の生還」を果たしたことになる。そのような奇跡が本当に可能だったのか。リリーの一族にナチスの収容所で犠牲となつた人々の影が全くないのはどういうことなのか、疑問は解けないままである。

例えば、リリーとデュオを組んだシモン・ゴールドベルクは、ポーランド生まれのユダヤ人であったが、母と兄二人が、絶滅収容所で命を落としている。この苛酷さが、暴力と狂気が欧州を覆う時代を生きたユダヤ人にとつての「現実」なのであった。

おそらく、リリーはユダヤ人の血をいくぶんかは引いていたのだろう。だが、母や異母姉が収容所送りとならずにすむ程度のものであったのではないか。

夫を含め、身の回りにはユダヤ人が多かったといえ、リリーはユダヤの枠に掬われたような生き方をする人ではなかった。音楽的にも、ユダヤ人特有の憂愁を帯びた粘着質な感じからはほど遠い。あくまでも歯切れのよい、リズム感のよさを身上とする人であった。どこまでも、ハンガリーの大地を駆け抜ける奔馬だったのである。

生前のインタビュで、リリーはマンデルとの結婚について語るなかで、自分は幼い時からカトリック信徒として育ったが、ユダヤ人のマンデルとの結婚に障害などなかったと述べている。違いを乗り越え、愛による人の結びつきを誇らしげに語るさまはいかにもリリーらしい。

その人間性も、音楽も、リリー・クラウスという人は、どこまでも開かれて、障害を前に立ちすくみ、囲いの中に縮こまることを知らなかったように見える。

ただ、その開かれ方の奥というか底の部分には、深い闇を抱えていたことは間違いない。貧しい出自であるとか、ナチスの台頭と戦争による流浪、日本軍による抑留など、折り重なる負の堆積には、自身のユダヤの血の問題も影を落としていたということなのだろう。

その血の濃淡についての事実関係はなかなか明らかにならないが、リリー本人の精神の本質は、血を超えて広く開かれていたと、私は信じてやまないのである。

晩年のリリーについて少し語っておく。

リリーが戦後初めて日本を訪れた頃には、イギリス・ロンドンに居住していたが、一九六七年にはアメリカへ移り、テキサス州フォートワースのTCU（テキサス・クリスチャン大学）のアーティスト・イン・レジデンスの地位を得た。その地に居住し大学で教えるものの、コンサート・ツアーやレコード録音な

どの活動には制限を設けないという条件であった。

アメリカでの活躍のピークは、一九六六年から六七年のシーズンにニューヨークで行なったモーツァルトのピアノ協奏曲の全曲演奏会で、リリーは九夜にわたって二十五曲全てを弾くという離れ業をやったのけた。

世界一のモーツァルト弾きが残した最も華やかな伝説であるが、彼女特有のエネルギーな精神は、戦前からジャワ、そして戦後と、生涯を通して変わることがなかった。

コンサート・ピアニストとして最後のステージとなったのは、一九八二年、ペンシルヴァニアのスワースモア・カレッジで行なわれた演奏会であったが、この時リリーは、モーツァルトの「二短調協奏曲（K四六六）」を演奏している。

自分がモーツァルトを選んだのではなく、モーツァルトが自分を選んだとまで言ったりリリー・クラウスのキャリアは、モーツァルトに始まり、モーツァルトに終わったのである。

亡くなったのは、一九八六年十一月六日。新聞各紙に載った死亡記事でも、生年にはばらつきがあったが、最も多くが一九〇三年を生年としていた。それに従えば、八十三年の生涯ということになる。

*

*

私自身は、生前のリリーの生演奏に接する機会は持たなかった。会うこともなかった。

音楽ファンとしてリリー・クラウスの名は早くから知り、レコードでその演奏に親しんでいたが、日本との特別な関係については知る由もなかった。

一九八五年の夏、「悲劇喜劇」という雑誌が終戦の日の放送局の特集を組み、ジャワ放送管理局の放

送部長だった島浦精二氏の回想文が載った。玉音放送の扱いをめぐる騒動を中心とするその文章の最後に、戦争が終わって抑留所から駆けつけたリリー・クラウスがスタジオのピアノを狂ったように弾いたというエピソードが短く綴られており、私はたいそう驚いた。

戦時中のジャワでリリー・クラウスの身に何があったのか、私はさらに知りたいと思った。資料を集め、徐々に事実の輪郭が明らかになるにつれ、私は、世界的ピアニストと日本人をめぐる数奇な運命の物語にぐいぐいと惹き込まれた。また直観として、抑留所で演奏されたという音楽に、通常では考えも及ばぬような音楽と人間との深遠を覗くことができるに違いないとの確信を持った。

抑留されたピアニストが世界一のモーツァルト弾きであるという事実も、十分に刺激的だった。あらゆる作曲家のうち、モーツァルトこそは壁を越えてあまねく人類に光をもたらすものであることを、私は漠然とではあっても理解していたつもりである。壁と囲いに閉じ込められた中で、モーツァルトはどのように響くのか、そこに物語の真実の鍵が潜んでいるように感じたのだった。

できればリリー本人とも連絡を取りたいと思い、私なりにその所在を探した。だが、後で分かったことではあったが、当時リリーはすでに入院を繰り返していたこともあって、こちらが消息をつきとめる前に、彼女の計報の方が先に飛び込んできてしまった。

本人の口を通しての事実確認の道は永遠に閉ざされたが、一九九三年に、娘のルース・ポープさんに、人を介してインタビュしてもらい、その書き起こしによって、間接的ながら、多くの貴重な情報を得ることができた。

リリーと関わりを持った日本人のうち、阿部知二氏是一九七三年に、青木正氏是一九八〇年に没していたが、存命中であった何人かの「主役」たちからは直接、話を聞く機会を得た。

飯田信夫、島浦精二の両氏には、一九八六年、NHKから戦時中南方に派遣された人々の親睦会「南方会」の集まりの後で話を聞いた。NHKの西口玄関近くに置かれた応接コーナーの椅子に腰かけて、二時間近く話を伺ったのだが、ご両人ともだいぶ酒の入った後で、そのせいだろうか、島浦氏はよく喋り、飯田氏は控え目で、口が重かった。

リリーとの思い出が多い飯田氏には、いずれ単独できちんと話を伺おうと思いながら、忙しさにまかして果たせぬまま、氏は一九九一年に亡くなった。

奥田耕天氏には、一九九三年にご自宅を訪ねて、二、三時間、みっちり話を伺った。ジャカルタでリリーにピアノのレッスンを受けた日々を語る奥田氏は、実に活き活きとしていた。氏は長生で、合唱指揮などの音楽活動を最晩年まで続けたが、二〇〇一年に九十三歳で亡くなっている。

関係者への取材やオランダを含む資料調査は、一九八五、六年と、一九九三年に集中している。私は当時、NHKのディレクターとして働いていたので、この物語をドラマ・スペシャルのような形で作品化したいと願ったのだが、大組織のなかで、企画はGOになったり、振り出しに戻ったりと、それについて、どうしても事に当たる時期が集中することになった。

企画をめぐってこのような揺れが生じたのは、NHKが予算的にも相当規模となることが見込まれるこの企画を、単独ではなく、国際共同制作として打ち出そうとしたからで、相手側の都合により、必然的に浮き沈みに遭うこととなった。結果としては、ドラマ化の企画は、ついに日の目を見ぬままに終わってしまった。

リリー・クラウスとデュオを組んだヴァイオリニスト、シモン・ゴールドベルクは、晩年、ピアノリストの山根美代子氏と結婚し、日本に移り住んだ。

一九九三年にゴールドベルクが突然亡くなってしまった後に、私はE.T.V特集「日本への長い道——流転のヴァイオリニスト、シモン・ゴールドベルク——」という四十五分の番組を作った。この番組取材のためにジャワやオランダにも取材したことで、リリーの関連で明らかになった事実も多い。

私は二〇〇二年にNHKを退職し、イギリスに生活しながら、執筆の世界に入った。これまでに、英国留学した夏目漱石に関する著作を二冊出したが、今回は初めて、イギリスとも縁のない話をまとめた。

もつとも、ノンフィクション小説という、取材やリサーチによってできる限りの事実（「ファクト」）を押さえ、その構造のなかで想像（「フィクション」）を膨らませるスタイルは、前二作にも部分的には見られた手法を、進化発展させたものである。

NHKを辞めて書く道に入った時から、リリーの物語は、いずれ自分の手で書かねばならないと思ってきた。二〇〇六年になってようやく執筆に手を染めたのは、ヨーロッパ暮らしも七年になり、ようやくリリーの胸中に自然に入っていける気がしたのと、モーツアルト生誕二百五十年という記念の年に、何とかして上梓に漕ぎつけたいと願ったからである。

日本人にとって忘れてはならないモーツアルトの「もうひとつの舞台」が、戦時中のジャワにある。モーツアルト・イヤーということで、リリー・クラウスが弾くモーツアルトの復刻版CDなども出ていますが、ほかならぬその人が、戦時中に日本人との運命的な体験をした人であり、苦衷を越えて愛に生きた人であることを、いま一度思い出してもらいたいと願わずにはいられなかったのである。

組織を離れて調査を行なうのは、やさしいことではなかったが、思いがけず、二〇〇六年の調査で新たに分かったこともある。その最大の成果は、これまでずっとその消息がつかめなかった近藤利朗抑留

所長の遺族に出会えたことだった。

かつて、「爪俘会」という戦時中にジャワで抑留所勤めをした人たちのOB会を取材し、その名簿を入手して片っ端から電話をしてみた時にも、近藤氏の消息だけは見えてこなかった。長い間、私には、毎日新聞に載ったリリーとの再会の記事だけが、近藤氏に絡む唯一の情報だったのである。

それが、記事に記されていた古い町名の住所をもとに、いくつかの偶然や幸運が重なって、近藤利朗氏の弟の妻、近藤たまさんに行き着き、さらに利朗氏の長女である鈴木芙蓉さんを知ることができたのである。利朗氏は一九七二年には亡くなっており、抑留所での事実のディテールを確認するには至らなかったものの、生前の写真やエピソードなどによって、かなりの具体的な肉付けをすることが可能となった。

著者としては、まるでリリーと日本人との運命の物語が、天から降り、向こうから近づいてくるような気がしてならなかった。まさに、書くべくして書いているような想いに、たびたび襲われたものである。おそらく、モーツァルト・イヤール最大の思い出として、リリーを書いた日々のことは、長く私の記憶に留まるに違いない。

その二十年來の企画に、今、筆をおく。

この間、話を伺い、取材に協力していただいた方々は、夥しい数にのぼる。それらの方々のお名前を逐一記すわけにもいかないが、旧恩への感謝を新たにしつつ、ここでは、特に二〇〇六年の取材で多大な協力を賜った関係者、機関に限って、名前を挙げたいと思う。

ルース・ポープ氏、ステイヴ・ロバーソン氏、フランク・シュレーダー氏、鈴木芙蓉氏、古海建氏・美智子氏、近藤信之氏、小笠原正佳氏、オランダ戦争資料研究所、日本近代音楽館、日比谷公会堂など、

リサーチでお世話になったこれらの方々や諸機関には、心からの謝辞を呈したい。

また、企画の実現に力を貸して下さったアッブルシード・エージェンシーの鬼塚忠氏、執筆途中にサポートや励ましをいただいた同社の深澤晴彦氏、清水浩史氏、そして編集の労をとって下さった河出書房新社の山本濱賜氏、村田佳奈美氏に対しても、感謝を申し述べたいと思う。

そして最後に、ほかならぬリリー・クラウスその人と、モーツァルトに対しても、ありがとうと言いたい。

私のような凡夫は、このような先人の不滅の輝きによって、生きがたい世を生きる勇氣や氣概を得ることができるよう思うのである。

二〇〇六年夏 イギリスの飯寓にて

多胡吉郎

主要参考文献

新聞、雑誌等に単発的に載ったものは省き、単行本やまとまって読める主な資料に限って、以下列記する。

- Sleve Roberson "Lili Kraus: Hungarian pianist, Texas teacher, and personality extraordinaire" (TCU Press・Fort Worth)
- エリス・マック『ピアニストは語る』(井口百合香訳 音楽之友社)
- 小石忠男『世界の名ピアニスト』(音楽之友社)
- 千歳八郎『20世紀の大ピアニストたち』(音楽之友社)
- 阿部知二『火の島——ジャワ・バリ島の記』(中公文庫)
- 阿部知二作品集より『高原にて』(河出書房新社)
- 北原武夫『ジャワ従軍記 雨期来る』(文芸社)
- 町田敬二『戦う文化部隊』(原書房)
- 今村均『今村均回顧録』(芙蓉書房)
- 木村一信『昭和作家の〈南洋行〉』(世界思想社)
- 倉沢愛子『日本占領下のジャワ農村の変容』(草思社)
- インドネシア日本占領期史料フォーラム編『証言集——日本占領下のインドネシア』(龍溪書舎)
- ヘレン・コレイン『歌の力 日本軍女性収容所を生きる』(西村由美訳・木犀社)

Daphne Jackson "Java Nightmare" (Tabb House)

Clara Olink Kelly "The Flamboyant Tree: A Family's War-time Courage" (arrow books)

北山節郎『全記録 ラジオ・トウキョウ——戦時体制下日本の対外放送』IⅡⅢ(田畑書店)

増井敬二・三善清達・後藤和彦『洋楽放送五十年』「音楽の友」所収(音楽之友社) 一九七四年一月—一九七五年十二月

佐藤勝造『爪哇(ジャワ)放送管理局のあゆみ 一、二』「文研月報」所収(NHK総合放送文化研究所・放送世論調査所) 一九七四年十一月、一九七五年二月

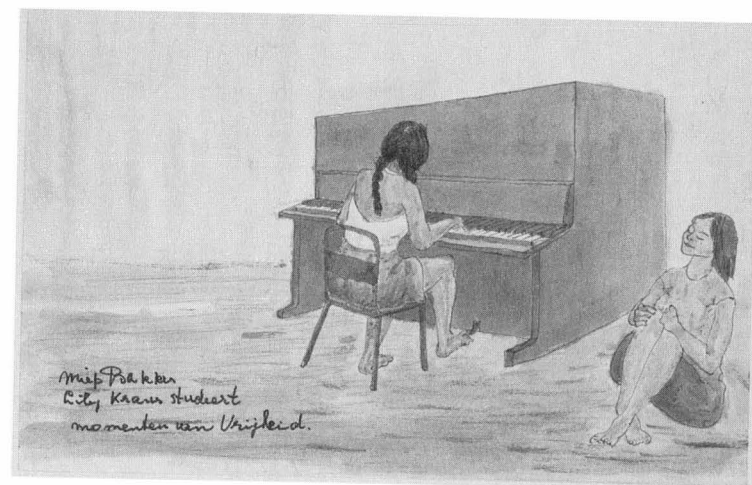


1936年、初来日時の公演プログラムから、リリー・クラウスとシモン・ゴールドベルク。(日本近代音楽館蔵)

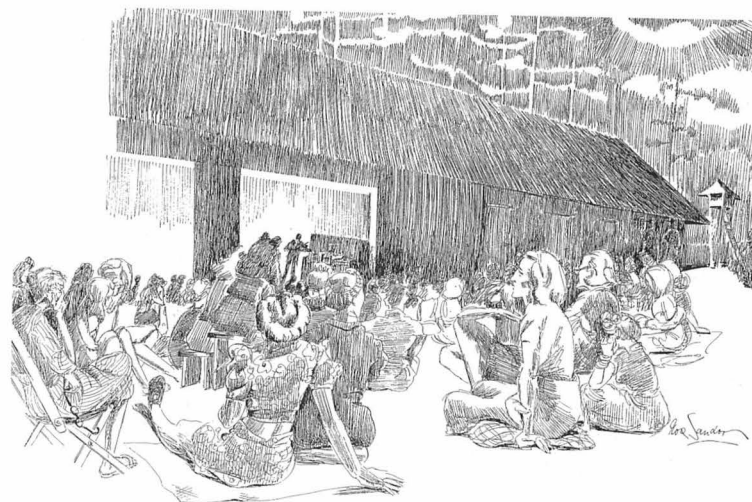
From Documentation



1963年、27年ぶりに来日した時の公演プログラムにおけるリリー・クラウス。(日本近代音楽館蔵)



タンゲラン抑留所で練習をするリリー・クラウス。
抑留者の描いたスケッチ。(Photo Museon - The Hague)



タンゲラン抑留所でのシモン・ゴールドベルクとの演奏会。
抑留者の描いたスケッチ。(オランダ戦争資料研究所蔵)

リリー、モーツァルトを弾いて下さい

二〇〇六年二月二〇日初版印刷
二〇〇六年二月三〇日初版発行

多胡吉郎 たごきちろう 著者

(株)アップルシード・エージェンシー 企画・構成
<http://www.appleseed.co.jp>

若森繁男 発行者

株式会社河出書房新社 発行所

東京都渋谷区千駄ヶ谷2-32-12

03-3404-1201 [営業] 電話

03-3404-8611 [編集]
<http://www.kawade.co.jp/>

KAWADE DTP WORKS 組版

三松堂印刷株式会社 印刷所

小高製本工業株式会社 製本所

保田薫 装丁者

定価はカバー・帯に表示してあります。
落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

ISBN 4-1309-01794-0

©2006 Kawade Shobo Shinsha, Publishers
Printed in Japan